金沢城史料叢書37
金沢城公園整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書13

金　沢　城　跡

―いもり堀―

2020

石川県金沢城調査研究所

例　　言

１．本書は、石川県金沢市丸の内地内に所在する史跡金沢城跡の埋蔵文化財確認調査報告書である。

２．調査原因は公園整備事業であり、事業を所管する石川県土木部公園緑地課から石川県教育委員会事務局文化財課への依頼に基づき、財団法人石川県埋蔵文化財センター（平成 10・12 年度）および石川県金沢城調査研究所（平成 15・16、18 ～ 21 年度）が調査を実施した。

３．調査期間と担当職員は次のとおりである。

平成 10 年度 (1998)

期　間　　平成 10 年７月 21 日～ 10 月 30 日

担当者　　三浦ゆかり（主任主事）、端　猛（主事）

平成 12 年度 (2000) 第２次

期　間　　平成 12 年５月 16 日～ 6 月 21 日

担当者　　冨田和気夫（課主査）、滝川重徳（主任主事）、湊屋玲美（主事）、土田友信（講師）

平成 12 年度 (2000) 第３次

期　間　　平成 12 年８月 10 日～ 11 月 22 日

担当者　　冨田和気夫（課主査）、滝川重徳（主任主事）、湊屋玲美（主事）、土田友信（講師）

平成 15 年度 (2003)

期　間　　平成 15 年９月１日～ 12 月 21 日

担当者　　冨田和気夫（調査専門員）、滝川重徳（係主査）、熊谷葉月（主任主事）、加藤克郎（主事）

平成 16 年度 (2004)

期　間　　平成 16 年８月 17 日～ 12 月 22 日

担当者　　冨田和気夫（調査専門員）、滝川重徳（係主査）、熊谷葉月（主任主事）、加藤克郎（主事）

平成 18 年度 (2006)

期　間　　平成 18 年９月 15 日～ 11 月１日

担当者　　滝川重徳（専門員）、加藤克郎（主任主事）

平成 19 年度 (2007)

期　間　　平成 19 年８月 17 日～９月 27 日

担当者　　滝川重徳（調査研究専門員）

平成 20 年度 (2008)

期　間　　平成 20 年７月８日～９月 22 日

担当者　　滝川重徳（調査研究専門員）、丹野修太（嘱託）、吉田千沙子（嘱託）

平成 21 年度 (2009)

期　間　　平成 21 年５月 11 日～７月６日

担当者　　滝川重徳（調査研究専門員）

４．出土品整理は、平成 14 ～ 22 年度に財団法人石川県埋蔵文化財センター（平成 25 年度から公益財団法人）に委託して実施した。

５．報告書の作成は、滝川重徳（担当課長）、安中玲美（調査研究専門員）、荒木麻理子（調査研究専門員）が担当した。なお、第６章第１～３節は、株式会社パレオ･ラボ（小林克也、伊藤　茂、佐藤正教、廣田正史、山形秀樹、Zaur Lomtatidze、竹原弘展、藤根　久、米田恭子）による分析報告である。執筆分担は目次に記した。

６．調査に関する記録・遺物は石川県金沢城調査研究所で保管している。

７．調査・報告にあたり、以下の機関・個人の指導・助言、協力を得た。
文化庁文化財第二課　石川県立歴史博物館　金沢市立玉川図書館　公益財団法人前田育徳会
東京大学総合図書館
市川浩文　金森安孝　金田明大　河村健史　北浦 勝　北垣聰一郎　北島俊朗　北野博司
楠　正勝　久保智康　齋藤慎一　嶋崎 丞（故人）　千田嘉博　中村利則　成瀬晃司　新谷洋二
西形達明　飛田範夫　平井 聖　麓 和善　堀 大介　堀内秀樹　宮里 学　森島康雄　横山隆昭
吉岡康暢　脇田 修（故人）（敬称略）

凡　　例

1．本書の水平基準は海抜高を表し、東京湾平均海面標高（T.P）である。
2．方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の日本測地系第Ⅶ系に準拠した。
3．石垣の ID 番号や呼称は、『金沢城跡石垣保存実態調査報告書Ⅰ』（金沢城調査研究所 2016）の記載に拠っている。
4．本報告書中の調査番号 ID は次の通りである。

平成 10 年度：199803（鯉喉櫓台調査区、北岸調査区、土橋調査区）
平成 12 年度（第２次）：200002（稲荷屋敷下調査区）
平成 12 年度（第３次）：200004（鯉喉櫓台調査区、土橋調査区）
平成 15 年度：200302（鯉喉櫓台調査区、北岸調査区）
平成 16 年度：200402（北岸調査区）
平成 18 年度：200605（南岸調査区）
平成 19 年度：200705（南岸調査区）
平成 20 年度：200805（南岸調査区）
平成 21 年度：200905（鯉喉櫓台調査区）

5．遺構測量図中のケバ種や線種は下記の「平面図線種表」の通りである。
6．遺構断面図中に使用した塗り部分については、次の通りである。

瓦　石垣　コンクリ、アスファルト　戸室石（赤）
戸室石（青）　戸室石（中間色）　戸室石（色調不明）

7．遺構図や遺物実測図の縮尺は、各図中に示した。
8．本文中に使用される石垣用語は、「石垣用語表」及び「石垣名称凡例図」の通りである。
9．遺物名は次の略号を使用した。

Ｐ：土器・陶磁器・土製品　Ｔ：瓦　Ｓ：石製品　Ｍ：金属製品　Ｗ：木製品

10．遺物図版中の遺物番号はゴシック体が本書報告番号、明朝体が遺物 ID（調査 ID 番号－実測番号）を示す。
11．陶磁器類の胎土表記は「磁器胎土表記」、「陶器胎土表記」に、瓦についての計測方法等は「瓦計測部位凡例」に示した通りである。
12．引用参考文献は、原則的に一括して巻末に掲載しているが、第６章については節毎に記載している。

平面図線種表

	ケバ種	上端線／下端線
トレンチ		崖ケバ
		実線
近代以後		短・短ケバ
		実線
近世以前		長・短ケバ
		実線

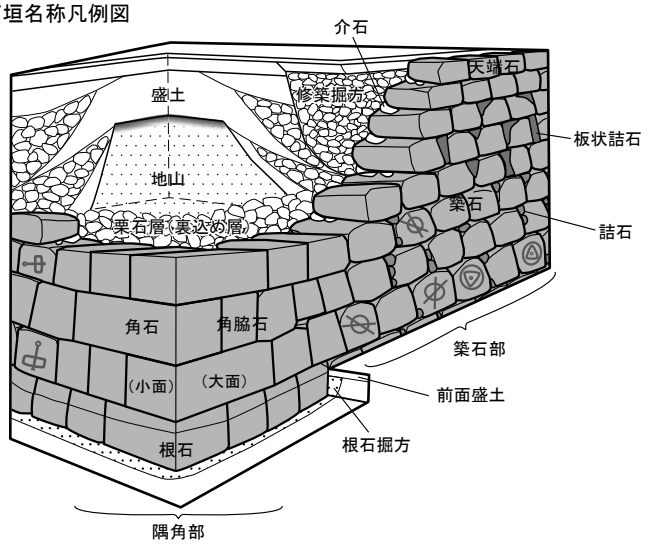
	ケバ種	上端線／下端線
遺構（未完掘）		長・短ケバ
		一点鎖線
遺構（検出のみ）		長・短ケバ（下端線なし）
（壁のみで確認された遺構）		長・短ケバ（下端線なし）

	ケバ種	上端線／下端線
遺構壁の傾斜変換線		長・短ケバ（下端線なし）
遺構以外（土質境）		実線・ケバなし
石（埋没部分）		一点鎖線

石垣用語表

用　語	読　み	解　説
築石部	つきいしぶ	石垣の面部分
隅角部	ぐうかくぶ	石垣の折れ部分、外側に折れるものを出角(ですみ) 、内側に折れるものを入角(いりすみ)と呼ぶ
シノギ角	しのぎすみ	出角の一つで、鈍角状に組まれる
輪どり	わどり	石垣の壁面を弧状に湾曲させる構築方法
天端	てんば	石垣の上面
天端石	てんばいし	石垣の最上部の石材
裾部	すそぶ	石垣が地面と接する部分
根石	ねいし	石垣の最下部の石
築石	つきいし	石垣を構築する石材、平石（ひらいし）とも言う
詰石	つめいし	築石の隙間に詰める小振りの石
板状詰石	いたじょうつめいし	石垣面を平滑に見せるため、石材の隙間に合わせて加工された板状の石材を詰石とする技法
角石	すみいし	隅角部に使用する石材
角脇石	すみわきいし	角石の側に位置する石材
栗石	ぐりいし	築石の裏込めなどに用いられる円礫
押さえ石	おさえいし	石垣を補強するために裏込めに入れた石材
介石	かいいし	石材の固定及び角度調整のため据え置く石材
捨石	すていし	栗石の内部に押さえ石・介石に適さない状態で置かれた石材
盛土	もりど	本来の地面の上に盛られた土
目地	めじ	石材同士の隙間
勾配	こうばい	石垣の角度。直線のノリと曲線のソリからなる
丁張	ちょうはり	石垣普請時に石積の通りや勾配を示すために張る水糸や板
鉢巻き石垣	はちまきいしがき	斜面上部だけに鉢巻状に石垣を築いたもの。斜面裾部だけに築いた石垣を腰巻石垣という
面	つら	石材の表面のうち、石垣の表面に位置する部分
大面	おおづら	角石の算木積みで使用した石材の表面のうち、控が大きい面
小面	こづら	角石の算木積みで使用した石材の表面のうち、控が小さい面
控	ひかえ	石材の奥行き
石尻	いしじり	石材の後ろ側
胴	どう	石材の面と尻の間
合端	あいば	石同士の接点
自然石	しぜんいし	加工していない石。野面石・河川転石とも言う
割石	わりいし	割って、大きさを整えたり、面を作ったもの
粗加工石	あらかこういし	割石をノミ等で粗く加工した石材
切石	きりいし	面や合端までを加工した石材
周囲加工	しゅういかこう	切石の石面の四方を一定幅で平滑にならす加工。周囲はつりとも言う
練積み	ねりづみ	コンクリート等を石積みの接合面や裏込めに使用して固めた工法
空積み	からづみ	石材を緊結・接着しないで積んだ工法
布積み	ぬのづみ	石材を横方向に並べながら積む積み方
乱積み	らんづみ	横目地が通らず、不規則に積む積み方
谷積み	たにづみ	石材の長軸を交互に斜めにして積む積み方
落とし積み	おとしづみ	下の石の谷(くぼみ)へ石を落していく積み方
算木積み	さんぎづみ	出隅を構成する２面に長い石材の長辺を交互に向けて積み上げる積み方
孕み出し	はらみだし	変形の一つ。膨らんで張り出した状態
迫出し	せりだし	単体の石材が石垣面から飛び出した状態

石垣名称凡例図



磁器胎土表記

平滑性		光沢		器壁の空洞	
1	極めて平滑	A	強い	a	目立たない
2	平滑	B	弱い	b	目立つ
3	凸凹目立つ				

陶器胎土表記

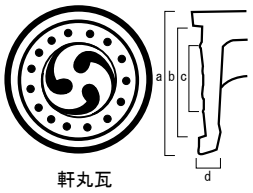
硬さ		平滑性		砂粒		器壁の空洞	
Ⅰ	硬質	1	極めて平滑	A	希少	a	目立たない
Ⅱ	軟質	2	平滑	B	細砂含む	b	目立つ
		3	凸凹目立つ	C	粗砂以上含む		

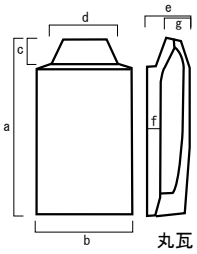
土師器皿胎土分類

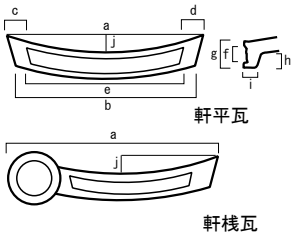
		特　徴
A		中砂多い、粗砂・極粗砂・海綿骨片目立つ
B		砂粒比較的少なく、均質（細分の余地大きい）
C		砂粒ごく少ない、均質
D		細砂多い、均質（粉質）
E	1	礫含み、粗砂・細砂多い（含有量の程度差大きい）
	2	礫無～微、粗砂・細砂少ない （Bよりも粒子大きく、素地が粗い。E1より精良）

［石川県金沢城調査研究所2014d］

瓦計測部位凡例



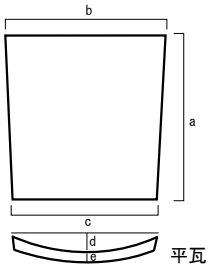


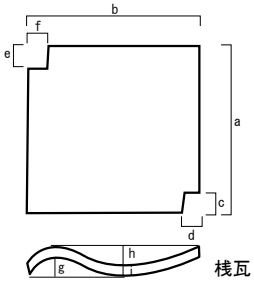


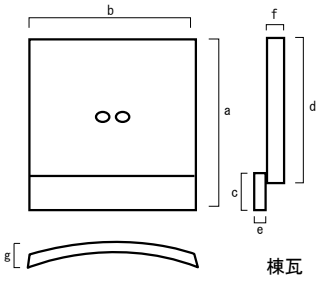
軒丸瓦（軒部）　a 瓦当径　b 文様区径
c 内区径　d 瓦当厚

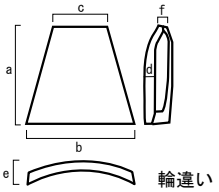
丸瓦　a 全長　b 体部幅　c 玉縁長
d 玉縁幅　e 体部高　f 体部厚
g 玉縁高

軒平瓦・軒桟瓦（軒部・平部）　a 上弧幅　b 下幅　c 右周縁
d 左周縁　e 文様区幅　f 文様区厚
g 瓦当厚　h 顎高　i 顎下部高
j 弧深







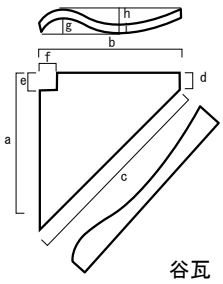


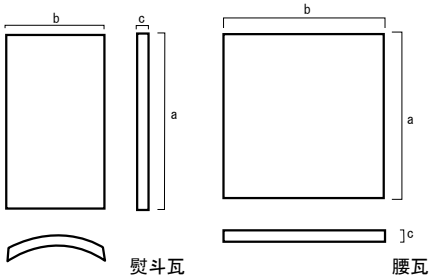
平瓦　a 全長　b 広端幅
c 狭端幅　d 弧深
e 厚

桟瓦　a 全長　b 全幅　c 平部切込長
d 平部切込幅　e 桟部切込長
f 桟部切込幅　g 桟部弧深
h 平部弧深　i 厚

棟瓦　a 全長　b 全幅　c 桟部長
d 体部長　e 桟部厚　f 体部厚
g 高さ

輪違い　a 全長　b 広端幅
c 狭端幅　d 厚
e 高さ　f 高さ





谷瓦　a 全長　b 全幅
c 谷部長　d 平部長
e 桟部切込長　f 桟部切込幅
g 桟部弧深　h 平部弧深
i 厚

熨斗瓦・腰瓦　a 全長　b 全幅　c 厚

腰瓦側辺中央凹部分類表

タイプ	平面	側辺（断面）
円形凹A		
円形凹B		
円形凹C		
方形凹		

タイプ	特徴
円形凹A	底が平らに調整されている
円形凹B	Aのような調整なし
円形凹C	小型で断面は浅い皿状を呈する
方形凹	底が平らに調整されている

目　次

第１章　経緯と経過 ……（滝川）…… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の経過 …… 3
第２章　位置と環境 ……（滝川）…… 8
　第１節　金沢城跡と周辺の歴史的環境 …… 8
　第２節　金沢城の沿革 …… 13
　第３節　いもり堀の沿革 …… 15
　第４節　既往の調査成果 …… 19
第３章　調査の概要 ……（荒木）…… 24
　第１節　調査の目的と対象区域 …… 24
　第２節　調査の方法 …… 24
第４章　遺構 ……（荒木）…… 27
　第１節　いもり堀北部の調査 …… 27
　第２節　いもり堀南部の調査 …… 134
第５章　出土遺物 ……（滝川・安中）…… 169
　第１節　土器・陶磁器 …… 169
　第２節　瓦 …… 171
　第３節　金属製品 …… 175
　第４節　石製品 …… 176
　第５節　木製品 …… 176
第６章　自然科学的調査 …… 380
　第１節　木製品・加工木の樹種同定 ……（小林）…… 380
　第２節　放射性炭素年代測定 ……（伊藤・佐藤・廣田・山形・Lomtatidze・小林）…… 385
　第３節　塗膜分析 …… 390
　　１．漆器椀の塗膜分析 ……（竹原・藤根・米田・小林）…… 390
　　２．本丸南堀出土大型部材の塗膜分析 ……（竹原・小林・米田）…… 394
第７章　地質調査 ……（荒木）…… 396
　第１節　調査の経緯 …… 396
　第２節　調査の方法 …… 396
　第３節　基本土層 …… 396
　第４節　調査の結果 …… 397
　第５節　小結 …… 398
第８章　総括 ……（荒木）…… 423
引用・参考文献 …… 429
報告書抄録 …… 434
写真図版 …… 435

図版目次 ……頁

第１図　調査区・調査地点位置図 …… 7
第２図　金沢城跡の位置と周辺の近世遺跡 …… 9
第３図　近世後期の金沢城全体図 …… 12
第４図　近世初期の金沢城 …… 13
第５図　いもり堀絵図１ …… 17
第６図　いもり堀絵図２ …… 18
第７図　金沢城跡発掘調査位置図（～令和元年度） …… 20
第８図　既往の調査区 …… 23
第９図　調査区・調査地点位置図 …… 26
第10図　いもり堀北部　調査区位置図 …… 28
第11図　いもり堀北部　調査区・絵図照合図（近世前期） …… 29
第12図　いもり堀北部　調査区・絵図照合図（近世後期） …… 30
第13図　鯉喉櫓台調査区　全体図 …… 34
第14図　鯉喉櫓台調査区　区割図 …… 35
第15図　鯉喉櫓台調査区　平面図１ …… 36
第16図　鯉喉櫓台調査区　平面図２ …… 37
第17図　鯉喉櫓台調査区　平面図３ …… 38
第18図　鯉喉櫓台調査区　平面図４ …… 39
第19図　鯉喉櫓台調査区　平面図５ …… 40
第20図　鯉喉櫓台調査区　平面図６（石撤去後） …… 41
第21図　鯉喉櫓台調査区　石垣1930S・土留石垣　立面図 …… 42
第22図　鯉喉櫓台調査区　石垣1930S・土留石垣　垂直断面図 …… 43
第23図　鯉喉櫓台調査区　石垣1930S・土留石垣　石材観察図 …… 44
第24図　鯉喉櫓台調査区　石垣1930S・土留石垣　石材観察状況 …… 45
第25図　鯉喉櫓台調査区　石垣1930W　立面図・垂直断面図 …… 46
第26図　鯉喉櫓台調査区　石垣1930W　石材観察図・写真、1930E　立面図・垂直断面図・石材観察図 …… 47
第27図　鯉喉櫓台調査区　土層断面図　SP1-3 …… 48
第28図　鯉喉櫓台調査区　土層注記　SP1-3 …… 49
第29図　鯉喉櫓台調査区　土層断面図　SP4-7　1 …… 50
第30図　鯉喉櫓台調査区　土層断面図　SP4-7　2 …… 51
第31図　鯉喉櫓台調査区　土層断面図　SP8-9・SP10-11・SP12-13・SP14-15 …… 52
第32図　鯉喉櫓台調査区　土層断面図　SP19-21（SX01） …… 53
第33図　鯉喉櫓台調査区　土層断面図　SP16-18 …… 54
第34図　鯉喉櫓台調査区　石垣1934N・1933N・1800S　立面図、1933N　石材観察図 …… 55
第35図　鯉喉櫓台調査区　土層断面図　SP22-24、石垣1934N・1800S　石材観察図 …… 56
第36図　鯉喉櫓台調査区　土層断面図　SP25-26・SP27-28 …… 57
第37図　鯉喉櫓台調査区　土層断面図　SP29-30 …… 58
第38図　鯉喉櫓台調査区　石垣1931S　立面図・石材観察図 …… 59
第39図　鯉喉櫓台調査区　土層断面図　SP31-32　1 …… 60
第40図　鯉喉櫓台調査区　土層断面図　SP31-32　2 …… 61
第41図　鯉喉櫓台調査区　土層断面図　SP33-34 …… 62
第42図　北岸調査区　全体図 …… 64
第43図　北岸調査区　平面図１ …… 65
第44図　北岸調査区　平面図２ …… 66
第45図　北岸調査区　平面図３ …… 67
第46図　北岸調査区　平面図４ …… 68
第47図　北岸調査区　平面図５ …… 69
第48図　北岸調査区　平面図６ …… 70
第49図　北岸調査区　平面図７ …… 71
第50図　北岸調査区　平面図８ …… 72
第51図　北岸調査区　土層大別図　SP1-3 …… 73
第52図　北岸調査区　土層断面図　SP1-2・SP4-1 …… 74
第53図　北岸調査区　土層断面図　SP2-3 …… 75
第54図　北岸調査区　土層注記　SP1-3・SP4-1 …… 76
第55図　北岸調査区　土層断面図　SP5-6・SP7-8 …… 77
第56図　北岸調査区　土層断面図　SP9-8 …… 78
第57図　北岸調査区　土層断面図　SP10-11 …… 79
第58図　北岸調査区　土層大別図　SP12-16 …… 80
第59図　北岸調査区　土層断面図　SP12-15 …… 81
第60図　北岸調査区　土層断面図　SP15-16 …… 82
第61図　北岸調査区　土層注記　SP12-16 …… 83
第62図　北岸調査区　土層断面図　SP17-18・SP18-19・P20-21（P01） …… 84
第63図　北岸調査区　土層断面図　SP22-23・SP24-25・P26-27 …… 85
第64図　北岸調査区　土層大別図　SP28-32 …… 86
第65図　北岸調査区　土層断面図　SP28-29・SP30-31 …… 87
第66図　北岸調査区　土層断面図　SP31-32 …… 88
第67図　北岸調査区　土層注記　SP28-32 …… 89
第68図　北岸調査区　土層断面図　SP33-34・SP35-36・SP36-37・SP34-38 …… 90
第69図　北岸調査区　土層断面図　SP38-39・SP40-41 …… 91
第70図　北岸調査区　土層断面図　SP42-43・SP48-49 …… 92
第71図　北岸調査区　土層断面図　SP44-45・SP46-47 …… 93
第72図　北岸調査区　土層断面図　SP50-51・SP52-53・SP56-57 …… 94
第73図　北岸調査区　土層断面図　SP54-55・SP58-59 …… 95
第74図　土橋調査区　全体図 …… 98
第75図　土橋調査区　区割図 …… 99
第76図　土橋調査区　平面図１ …… 100
第77図　土橋調査区　平面図２ …… 101
第78図　土橋調査区　平面図３ …… 102
第79図　土橋調査区　石垣1810E・1810W、石列　立面図 …… 103
第80図　土橋調査区　石垣1810E・1810W、石列　石材観察図

…… 104
第81図　土橋調査区　土層断面図　SP1-2・SP13-14 …… 105
第82図　土橋調査区　土層大別図１ …… 106
第83図　土橋調査区　土層断面図　SP3-5 …… 107
第84図　土橋調査区　土層断面図　SP5-6 …… 108
第85図　土橋調査区　土層断面図　SP7-8 …… 109
第86図　土橋調査区　土層断面図　SP9-10 …… 110
第87図　土橋調査区　土層断面図　SP11-12 …… 111
第88図　土橋調査区　土層大別図２ …… 112
第89図　土橋調査区　土層断面図　SP15-16 …… 113
第90図　土橋調査区　土層断面図　SP16-17 …… 114
第91図　土橋調査区　土層断面図　SP18-19 …… 115
第92図　土橋調査区　土層断面図　SP19-20 …… 116
第93図　土橋調査区　土層断面図　SP20-21 …… 117
第94図　土橋調査区　土層断面図　SP22-23 …… 118
第95図　土橋調査区　土層注記　SP22-23、土層断面図 SP24-25 …… 119
第96図　土橋調査区　土層断面図　SP26-27 …… 120
第97図　土橋調査区　土層断面図　SP28-29 …… 121
第98図　土橋調査区　土層注記　SP28-29、土層断面図 SP30-31 …… 122
第99図　稲荷屋敷下調査区　全体図 …… 125
第100図　稲荷屋敷下調査区　平面図１ …… 126
第101図　稲荷屋敷下調査区　平面図２ …… 127
第102図　稲荷屋敷下調査区　石垣1941S　立面図 …… 128
第103図　稲荷屋敷下調査区　石垣1941S　石材観察図 …… 129
第104図　稲荷屋敷下調査区　土層断面図　トレンチ１ …… 130
第105図　稲荷屋敷下調査区　土層断面図　トレンチ４・SP17-18 …… 131
第106図　稲荷屋敷下調査区　土層断面図　トレンチ２ …… 132
第107図　稲荷屋敷下調査区　土層断面図　トレンチ３ …… 133
第108図　南岸調査区　調査区位置図 …… 135
第109図　南岸調査区　絵図照合図（近世前期） …… 136
第110図　南岸調査区　絵図照合図（近世後期） …… 137
第111図　南岸調査区　2007地点　平面図 …… 138
第112図　南岸調査区　2007地点　土層断面図　SP1-2 …… 139
第113図　南岸調査区　2007地点　土層断面図　SP3-4・SP8-9 …… 140
第114図　南岸調査区　2007地点　土層断面図　SP2-5・SP6-7 …… 141
第115図　南岸調査区　2007地点　土層断面図　SP10-11・SP11-12・SP13-14・SP14-15 …… 142
第116図　南岸調査区　2007地点　土層断面図　P01～P03・P05～P07 …… 143
第117図　南岸調査区　2006-2地点　平面図、土層断面図 P02・P03 …… 144
第118図　南岸調査区　2006-2地点　土層断面図　SP1-2・SP3-5・SP5-6 …… 145
第119図　南岸調査区　2006-2地点　土層注記　SP1-2・SP3-5・SP5-6 …… 146
第120図　南岸調査区　2006-1地点　平面図、土層断面図 SP1-2 …… 148
第121図　南岸調査区　2006-1地点　土層断面図　SP3-4・SP4-5、土層注記　SP1-2・SP3-4・SP4-5 …… 149
第122図　南岸調査区　2008地点　平面図１（2a～3b面） …… 152
第123図　南岸調査区　2008地点　平面図２（3c・3d面） …… 153
第124図　南岸調査区　2008地点　平面図３（A･B区1b･1c面） …… 154
第125図　南岸調査区　2008地点　平面図４（H区2b･４面） …… 155
第126図　南岸調査区　2008地点　土層大別図 …… 156
第127図　南岸調査区　2008地点　土層断面図　SP1-2 …… 157
第128図　南岸調査区　2008地点　土層注記　SP1-2 …… 158
第129図　南岸調査区　2008地点　土層断面図　SP2-4 …… 159
第130図　南岸調査区　2008地点　土層断面図　SP4-6 …… 160
第131図　南岸調査区　2008地点　土層断面図　SP6-8・SP16-17 …… 161
第132図　南岸調査区　2008地点　土層断面図　SP8-9 …… 162
第133図　南岸調査区　2008地点　土層断面図　SP9-11 …… 163
第134図　南岸調査区　2008地点　土層断面図　SP11-13、SX01平面図 …… 164
第135図　南岸調査区　2008地点　土層断面図　SP14-15 …… 165
第136図　南岸調査区　2008地点　土層注記　SP14-15 …… 166
第137図　南岸調査区　2008地点　土層断面図　P01・SD02・P02・ SK02 …… 167
第138図　南岸調査区　2008地点　土層断面図　SD06・SX02・P05 …… 168
第139図　陶磁器１　鯉喉櫓台調査区 …… 178
第140図　陶磁器２　鯉喉櫓台調査区 …… 179
第141図　陶磁器３　鯉喉櫓台調査区 …… 180
第142図　陶磁器４　鯉喉櫓台調査区 …… 181
第143図　陶磁器５　鯉喉櫓台調査区 …… 182
第144図　陶磁器６　鯉喉櫓台調査区 …… 183
第145図　陶磁器７　北岸調査区 …… 184
第146図　陶磁器８　北岸調査区 …… 185
第147図　陶磁器９　北岸調査区 …… 186
第148図　陶磁器10　北岸調査区 …… 187
第149図　陶磁器11　北岸調査区 …… 188
第150図　陶磁器12　土橋調査区 …… 189
第151図　陶磁器13　土橋調査区 …… 190

第152図　陶磁器14　土橋調査区 …… 191
第153図　陶磁器15　稲荷屋敷下調査区 …… 192
第154図　陶磁器16　稲荷屋敷下調査区 …… 193
第155図　陶磁器17　稲荷屋敷下調査区 …… 194
第156図　陶磁器18　南岸調査区　2007地点 …… 195
第157図　陶磁器19　南岸調査区　2007地点 …… 196
第158図　陶磁器20　南岸調査区　2008地点 …… 197
第159図　陶磁器21　南岸調査区　2008地点 …… 198
第160図　陶磁器22　南岸調査区　2008地点 …… 199
第161図　軒丸瓦　瓦当文様分類 …… 200
第162図　軒平・軒桟瓦　瓦当文様分類１ …… 201
第163図　軒平・軒桟瓦　瓦当文様分類２ …… 202
第164図　軒平・軒桟瓦　瓦当文様分類３ …… 203
第165図　軒平・軒桟瓦　瓦当文様分類４ …… 204
第166図　瓦　胎土分類 …… 205
第167図　瓦１　鯉喉櫓台調査区 …… 206
第168図　瓦２　鯉喉櫓台調査区 …… 207
第169図　瓦３　鯉喉櫓台調査区 …… 208
第170図　瓦４　鯉喉櫓台調査区 …… 209
第171図　瓦５　鯉喉櫓台調査区 …… 210
第172図　瓦６　鯉喉櫓台調査区 …… 211
第173図　瓦７　鯉喉櫓台調査区 …… 212
第174図　瓦８　鯉喉櫓台調査区 …… 213
第175図　瓦９　鯉喉櫓台調査区 …… 214
第176図　瓦10　鯉喉櫓台調査区 …… 215
第177図　瓦11　鯉喉櫓台調査区 …… 216
第178図　瓦12　鯉喉櫓台調査区 …… 217
第179図　瓦13　鯉喉櫓台調査区 …… 218
第180図　瓦14　鯉喉櫓台調査区 …… 219
第181図　瓦15　鯉喉櫓台調査区 …… 220
第182図　瓦16　鯉喉櫓台調査区 …… 221
第183図　瓦17　鯉喉櫓台調査区 …… 222
第184図　瓦18　鯉喉櫓台調査区 …… 223
第185図　瓦19　鯉喉櫓台調査区 …… 224
第186図　瓦20　鯉喉櫓台調査区 …… 225
第187図　瓦21　鯉喉櫓台調査区 …… 226
第188図　瓦22　鯉喉櫓台調査区 …… 227
第189図　瓦23　鯉喉櫓台調査区 …… 228
第190図　瓦24　鯉喉櫓台調査区 …… 229
第191図　瓦25　鯉喉櫓台調査区 …… 230
第192図　瓦26　鯉喉櫓台調査区 …… 231
第193図　瓦27　鯉喉櫓台調査区 …… 232
第194図　瓦28　鯉喉櫓台調査区 …… 233
第195図　瓦29　鯉喉櫓台調査区 …… 234
第196図　瓦30　鯉喉櫓台調査区 …… 235
第197図　瓦31　鯉喉櫓台調査区 …… 236
第198図　瓦32　鯉喉櫓台調査区 …… 237
第199図　瓦33　鯉喉櫓台調査区 …… 238
第200図　瓦34　鯉喉櫓台調査区 …… 239
第201図　瓦35　鯉喉櫓台調査区 …… 240
第202図　瓦36　鯉喉櫓台調査区 …… 241
第203図　瓦37　鯉喉櫓台調査区 …… 242
第204図　瓦38　鯉喉櫓台調査区 …… 243
第205図　瓦39　鯉喉櫓台調査区 …… 244
第206図　瓦40　北岸調査区 …… 245
第207図　瓦41　北岸調査区 …… 246
第208図　瓦42　北岸調査区 …… 247
第209図　瓦43　北岸調査区 …… 248
第210図　瓦44　北岸調査区 …… 249
第211図　瓦45　北岸調査区 …… 250
第212図　瓦46　北岸調査区 …… 251
第213図　瓦47　北岸調査区 …… 252
第214図　瓦48　北岸調査区 …… 253
第215図　瓦49　北岸調査区 …… 254
第216図　瓦50　北岸調査区 …… 255
第217図　瓦51　北岸調査区 …… 256
第218図　瓦52　北岸調査区 …… 257
第219図　瓦53　北岸調査区 …… 258
第220図　瓦54　北岸調査区 …… 259
第221図　瓦55　北岸調査区 …… 260
第222図　瓦56　北岸調査区 …… 261
第223図　瓦57　北岸調査区 …… 262
第224図　瓦58　北岸調査区 …… 263
第225図　瓦59　北岸調査区 …… 264
第226図　瓦60　北岸調査区 …… 265
第227図　瓦61　北岸調査区 …… 266
第228図　瓦62　北岸調査区 …… 267
第229図　瓦63　北岸調査区 …… 268
第230図　瓦64　北岸調査区 …… 269
第231図　瓦65　北岸調査区 …… 270
第232図　瓦66　北岸調査区 …… 271
第233図　瓦67　北岸調査区 …… 272
第234図　瓦68　北岸調査区 …… 273
第235図　瓦69　北岸調査区 …… 274
第236図　瓦70　北岸調査区 …… 275
第237図　瓦71　北岸調査区 …… 276
第238図　瓦72　北岸調査区 …… 277
第239図　瓦73　北岸調査区 …… 278
第240図　瓦74　北岸調査区 …… 279
第241図　瓦75　北岸調査区 …… 280
第242図　瓦76　北岸調査区 …… 281
第243図　瓦77　北岸調査区 …… 282
第244図　瓦78　北岸調査区 …… 283
第245図　瓦79　北岸調査区 …… 284
第246図　瓦80　土橋調査区 …… 285
第247図　瓦81　土橋調査区 …… 286
第248図　瓦82　土橋調査区 …… 287
第249図　瓦83　土橋調査区 …… 288
第250図　瓦84　土橋調査区 …… 289
第251図　瓦85　土橋調査区 …… 290
第252図　瓦86　土橋調査区 …… 291
第253図　瓦87　土橋調査区 …… 292
第254図　瓦88　土橋調査区 …… 293
第255図　瓦89　土橋調査区 …… 294
第256図　瓦90　土橋調査区 …… 295
第257図　瓦91　土橋調査区 …… 296

第258図　瓦92　土橋調査区 …… 297
第259図　瓦93　土橋調査区 …… 298
第260図　瓦94　稲荷屋敷下調査区 …… 299
第261図　瓦95　南岸調査区 …… 300
第262図　金属製品１　鯉喉櫓台調査区 …… 301
第263図　金属製品２　鯉喉櫓台調査区 …… 302
第264図　金属製品３　鯉喉櫓台調査区 …… 303
第265図　金属製品４　鯉喉櫓台調査区 …… 304
第266図　金属製品５　鯉喉櫓台調査区 …… 305
第267図　金属製品６　鯉喉櫓台調査区 …… 306
第268図　金属製品７　北岸調査区 …… 307
第269図　金属製品８　北岸調査区 …… 308
第270図　金属製品９　北岸調査区 …… 309
第271図　金属製品10　土橋調査区 …… 310
第272図　金属製品11　土橋・稲荷屋敷下・南岸調査区 …… 311
第273図　石製品１　鯉喉櫓台調査区 …… 312
第274図　石製品２　鯉喉櫓台・北岸調査区 …… 313
第275図　石製品３　北岸調査区 …… 314
第276図　石製品４　土橋調査区・堀北部・南岸調査区 …… 315
第277図　木製品１　鯉喉櫓台調査区 …… 316
第278図　木製品２　鯉喉櫓台調査区 …… 317
第279図　木製品３　北岸調査区 …… 318
第280図　木製品４　北岸調査区 …… 319
第281図　木製品５　北岸調査区 …… 320
第282図　木製品６　北岸調査区 …… 321
第283図　木製品７　土橋調査区 …… 322
第284図　木製品８　土橋調査区 …… 323
第285図　木製品９　土橋調査区 …… 324
第286図　木製品10　土橋調査区 …… 325
第287図　木製品11　土橋調査区 …… 326
第288図　木製品12　土橋調査区 …… 327
第289図　木製品13　土橋調査区 …… 328
第290図　木製品14　南岸調査区 …… 329
第291図　木製品15　南岸調査区 …… 330
第292図　俵１　土橋調査区 …… 331
第293図　俵２　土橋調査区 …… 332
第294図　金沢城跡いもり堀出土木製品・加工木の光学顕微鏡写真(1) …… 383
第295図　金沢城跡いもり堀出土木製品・加工木の光学顕微鏡写真(2) …… 384
第296図　単体測定試料の放射性炭素年代測定結果 …… 388
第297図　ウィグルマッチングを行なった試料 …… 389
第298図　塗膜の赤外分光スペクトル …… 392
第299図　漆器椀の試料採取位置(a)、塗膜構造(b)、反射電子像(c) …… 393
第300図　大型部材表面黒色部の採取位置(a)、塗膜構造(b)、反射電子像(c) …… 395
第301図　ボーリング調査地点位置図 …… 399
第302図　ボーリング調査地点　柱状断面配列図１ …… 400
第303図　ボーリング調査地点　柱状断面配列図２ …… 401
第304図　ボーリングコア詳細柱状図１（H8-1地点） …… 402
第305図　ボーリングコア詳細柱状図２（H8-2地点） …… 403
第306図　ボーリングコア詳細柱状図３（H8-3地点） …… 404
第307図　ボーリングコア詳細柱状図４（H8-4地点） …… 405
第308図　ボーリングコア詳細柱状図５（H8-5地点） …… 406
第309図　ボーリングコア詳細柱状図６（8-6地点） …… 407
第310図　ボーリングコア詳細柱状図７（H9-1地点） …… 408
第311図　ボーリングコア詳細柱状図８（H9-2地点） …… 409
第312図　ボーリングコア詳細柱状図９（H9-3・H9-4地点） …… 410
第313図　ボーリングコア詳細柱状図10（H9-5・H9-6地点） …… 411
第314図　ボーリングコア詳細柱状図11（H16-1地点） …… 412
第315図　ボーリングコア詳細柱状図12（H16-2地点） …… 413
第316図　ボーリングコア詳細柱状図13（H16-3地点） …… 414
第317図　ボーリングコア詳細柱状図14（H16-4地点） …… 415
第318図　ボーリングコア詳細柱状図15（H17-1地点） …… 416
第319図　ボーリングコア詳細柱状図16（H17-2地点） …… 417
第320図　ボーリングコア詳細柱状図17（H17-3地点） …… 418
第321図　ボーリングコア詳細柱状図18（H17-4地点） …… 419
第322図　ボーリングコア詳細柱状図19（H18-1地点） …… 420
第323図　ボーリングコア詳細柱状図20（H18-2地点） …… 421
第324図　ボーリングコア詳細柱状図21（H18-3地点） …… 422
第325図　本丸南堀・いもり堀検出ライン（一部推定） …… 425
第326図　本丸南堀（土橋周辺）の景観変化（模式図） …… 426
第327図　いもり堀断面模式図（推定復元） …… 427
第328図　いもり堀～鯉喉櫓台～辰巳櫓台断面模式図 …… 428

表目次 …… 頁

第１表　周辺の近世遺跡地名表 …… 10
第２表　金沢城の沿革 …… 14
第３表　金沢城跡発掘調査一覧（１） …… 21
第４表　金沢城跡発掘調査一覧（２） …… 22
第５表　刻印の種類と数 …… 129
第６表　出土遺物観察表　陶磁器・土器１ …… 333
第７表　出土遺物観察表　陶磁器・土器２ …… 334
第８表　出土遺物観察表　陶磁器・土器３ …… 335
第９表　出土遺物観察表　陶磁器・土器４ …… 336
第10表　出土遺物観察表　陶磁器・土器５ …… 337
第11表　出土遺物観察表　陶磁器・土器６ …… 338
第12表　出土遺物観察表　陶磁器・土器７ …… 339
第13表　出土遺物観察表　陶磁器・土器８ …… 340
第14表　出土遺物観察表　陶磁器・土器９ …… 341
第15表　出土遺物観察表　瓦１ …… 342
第16表　出土遺物観察表　瓦２ …… 343
第17表　出土遺物観察表　瓦３ …… 344
第18表　出土遺物観察表　瓦４ …… 345
第19表　出土遺物観察表　瓦５ …… 346
第20表　出土遺物観察表　瓦６ …… 347
第21表　出土遺物観察表　瓦７ …… 348
第22表　出土遺物観察表　瓦８ …… 349
第23表　出土遺物観察表　瓦９ …… 350
第24表　出土遺物観察表　瓦10 …… 351
第25表　出土遺物観察表　瓦11 …… 352
第26表　出土遺物観察表　瓦12 …… 353
第27表　出土遺物観察表　瓦13 …… 354
第28表　出土遺物観察表　瓦14 …… 355
第29表　出土遺物観察表　瓦15 …… 356
第30表　出土遺物観察表　瓦16 …… 357
第31表　出土遺物観察表　瓦17 …… 358
第32表　出土遺物観察表　瓦18 …… 359
第33表　出土遺物観察表　瓦19 …… 360
第34表　出土遺物観察表　瓦20 …… 361
第35表　出土遺物観察表　瓦21 …… 362
第36表　出土遺物観察表　瓦22 …… 363
第37表　出土遺物観察表　瓦23 …… 364
第38表　出土遺物観察表　瓦24 …… 365
第39表　出土遺物観察表　瓦25 …… 366
第40表　出土遺物観察表　瓦26 …… 367
第41表　出土遺物観察表　瓦27 …… 368
第42表　出土遺物観察表　瓦28 …… 369
第43表　出土遺物観察表　瓦29 …… 370
第44表　出土遺物観察表　瓦30 …… 371
第45表　出土遺物観察表　瓦31 …… 372
第46表　出土遺物観察表　金属製品１ …… 373
第47表　出土遺物観察表　金属製品２ …… 374
第48表　出土遺物観察表　金属製品３ …… 375
第49表　出土遺物観察表　金属製品４ …… 376
第50表　出土遺物観察表　石製品 …… 377
第51表　出土遺物観察表　木製品１ …… 378
第52表　出土遺物観察表　木製品２・俵 …… 379
第53表　いもり堀出土木製品・加工木の樹種集計 …… 380
第54表　いもり堀出土木製品・加工木の樹種同定結果 …… 382
第55表　単体測定試料および処理 …… 385
第56表　ウィグルマッチング測定試料および処理 …… 385
第57表　単体測定試料の放射性炭素年代測定および暦年較正の結果 …… 387
第58表　放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマッチングの結果 …… 387
第59表　分析対象一覧 …… 390
第60表　生漆の赤外吸収位置とその強度 …… 390
第61表　赤色塗膜層等のＸ線分析結果 …… 391
第62表　塗膜分析結果 …… 391
第63表　分析対象 …… 394
第64表　塗膜分析結果 …… 394
第65表　ボーリング地点一覧表 …… 400

写真図版

写真図版１　鯉喉櫓台調査区１
写真図版２　鯉喉櫓台調査区２
写真図版３　鯉喉櫓台調査区３
写真図版４　鯉喉櫓台調査区４
写真図版５　鯉喉櫓台調査区５
写真図版６　鯉喉櫓台調査区６
写真図版７　鯉喉櫓台調査区７
写真図版８　鯉喉櫓台調査区８
写真図版９　鯉喉櫓台調査区９
写真図版10　鯉喉櫓台調査区10
写真図版11　鯉喉櫓台調査区11・北岸調査区１
写真図版12　北岸調査区２
写真図版13　北岸調査区３
写真図版14　北岸調査区４
写真図版15　北岸調査区５
写真図版16　北岸調査区６
写真図版17　北岸調査区７
写真図版18　北岸調査区８
写真図版19　北岸調査区９
写真図版20　北岸調査区10
写真図版21　北岸調査区11
写真図版22　北岸調査区12
写真図版23　北岸調査区13
写真図版24　北岸調査区14
写真図版25　北岸調査区15・土橋調査区１
写真図版26　土橋調査区２
写真図版27　土橋調査区３
写真図版28　土橋調査区４
写真図版29　土橋調査区５
写真図版30　土橋調査区６
写真図版31　土橋調査区７
写真図版32　土橋調査区８・稲荷屋敷下調査区１
写真図版33　稲荷屋敷下調査区２
写真図版34　稲荷屋敷下調査区３
写真図版35　稲荷屋敷下調査区４
写真図版36　稲荷屋敷下調査区５
写真図版37　南岸調査区１
写真図版38　南岸調査区２
写真図版39　南岸調査区３
写真図版40　南岸調査区４
写真図版41　南岸調査区５
写真図版42　南岸調査区６
写真図版43　南岸調査区７
写真図版44　南岸調査区８
写真図版45　南岸調査区９
写真図版46　南岸調査区10
写真図版47　南岸調査区11
写真図版48　南岸調査区12
写真図版49　南岸調査区13
写真図版50　南岸調査区14
写真図版51　南岸調査区15
写真図版52　南岸調査区16
写真図版53　南岸調査区17
写真図版54　南岸調査区18
写真図版55　南岸調査区19
写真図版56　南岸調査区20
写真図版57　南岸調査区21
写真図版58　南岸調査区22
写真図版59　出土瓦写真１
写真図版60　出土瓦写真２

第１章　経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

１．金沢城公園の開設に至る経緯

金沢城は、16 世紀半ばに成立した金沢御堂（金沢坊舎）を前身とし、天正８年（1580）以降、織田政権下の城郭となった。天正 11 年（1583）には前田利家が入城し、これより前田家歴代当主 14 代が約 300 年間にわたり城主となり、江戸幕府成立後最大の大名の居城として機能した。

明治初年から旧金沢城内は兵部省（のちの陸軍省）の所管となり、昭和 20 年（1945）まで第九師団司令部や歩兵第六旅団司令部、歩兵第七連隊の兵舎が立ち並ぶ陸軍の拠点であった。第二次世界大戦後の昭和 24 年（1949）には文部省の所管となり金沢大学が開学し、金沢城跡は大学キャンパスとして利用されてきた。

昭和 53 年（1978）、城内キャンパスは金沢市郊外の角間地区への移転を決定し、平成５年（1993）３月に総合移転を完了した。大学跡地の取り扱いは、平成３年（1991）８月に設置された金沢大学跡地利用懇話会で検討され、平成５年３月の「公園的、文化的利用を基本とする」との提言を受けて、公園化に向けた動きが始まった。

県は、この提言に沿って、平成７年（1995）３月に「金沢城跡整備実施設計報告書」をとりまとめ、平成８年（1996）１月に 28.5ha を都市公園に利用する都市計画を決定し、同年３月に国から大学跡地 21.77ha を取得した。

２．金沢城公園整備（第一期整備から第三期整備）

平成８年度に始まった第一期金沢城公園整備は、平成 16 年度（2004）までを公園としての基盤整備とする 10 カ年計画に基づき、①敷地環境の整備、調査（不要建物の撤去、石垣修景等）、②広場、園地等の整備（二ノ丸等各種広場、幹線園路、便益施設等）、③城郭建造物の復元（菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓、内堀等）を進めることとした。また、保存目的として、石垣の記録化（石垣現況測量）や動態観測にも着手した。

公園の開設は、平成９年度（1997）の本丸等の暫定開園に始まり、平成 13 年（2001）９月の「全国都市緑化いしかわフェア」の開催を期に、公園計画区域のほぼ全域を開園した。

公園整備の実施に先立ち、県教育委員会文化財課と県土木部公園緑地課は、金沢城跡が周知の埋蔵文化財包蔵地であることから、工事に伴い埋蔵文化財に影響が生じる場合は前もって発掘調査等の保護措置を講ずるべく、事前協議を進めていた。

その結果、平成９年度（1997）に県立埋蔵文化財センターが実施した内堀及び菱櫓台石垣上面遺構の確認調査を皮切りに、園地整備に係る工事設計と埋蔵文化財調査がほぼ同時並行状態で急ピッチに進み、平成 10 年（1998）には、新たに設立された財団法人石川県埋蔵文化財センターを調査担当として、いもり堀、本丸附段階段、菱櫓南（五十間長屋折曲部）、三ノ丸北便所の発掘調査、平成 11 年（1999）には、前年度から継続の建物復元整備に伴う内堀・五十間長屋に加えて、新丸広場（湿性植物園）、三ノ丸休憩所、新丸大手門便所、鶴ノ丸便所、二ノ丸園路等の整備に係る発掘調査が行われた。

公園整備に係る調査は以後も引き継がれ、平成 12 年度（2000）には北ノ丸（御宮・藤右衛門丸）、尾坂門、三ノ丸北、鶴ノ丸、いもり堀、平成 13 年度（2001）には風呂屋口門等、橋爪門、尾坂門で、園路整備に伴う遺構確認調査が実施されている。

石川県は、今後の金沢城公園の整備計画を検討するため、平成 16 年（2004）２月に「金沢城復元

基本方針検討委員会」を設置し、金沢城公園の復元整備の基本的な考え方、復元に際しての留意点等について検討を加え、①復元にあたっては史実の十分な調査と検証を行い、史実性の高い整備を行うこと、②復元に際しての時代設定は基本的に江戸時代後期に統一すること、③多様な公園機能にも配慮すること、④復元はゾーン別の保全・整備や活用方針等を踏まえて長期的視点も含めた段階的な取り組みを進めること、等の基本方針を示した。

この基本方針に基づき、平成 26 年（2014）までとする第二期整備計画が策定され、復元整備の拡充をはかった。具体的には、①三御門（河北門・橋爪門・石川門）の整備、②いもり堀の段階的整備、③玉泉院丸庭園整備である。また、保存目的として玉泉院丸南西石垣の保存修理も行っている。

平成 26 年をもって第二期整備が完了となることから、平成 27 年（2015）３月に「金沢城公園第三期整備計画策定懇話会」を設置、同年６月には来園者へのアンケート調査などを実施し、12 月には第三期整備を策定した。①鼠多門の復元整備、②鶴ノ丸休憩所一帯の再整備、③石垣の保全を掲げ、石垣の計画的な「金沢城の石垣の保存管理及び保全対策に係る計画書」を作成、基本計画の策定やそれに基づく保全対策の実施を目指し、現在も事業を進めている。

３．金沢城の調査研究

公園整備を進める一方で、石川県は、平成 13 年（2001）７月、金沢城の調査研究、関連資料の整理・収集、関連城郭の調査研究、調査成果の普及・啓発等を目的として、県教育委員会文化財課内に金沢城研究調査室を設置し、金沢城に係る学術的な調査研究を推進することとした。（平成 19 年（2007）石川県金沢城調査研究所に改組）

平成 14 年度（2002）からは、絵図・文献、埋蔵文化財、建造物、伝統技術（石垣）などを対象に金沢城の総合的な調査研究に着手した。埋蔵文化財では、金沢城跡の変遷と構造を探る目的で平成 14 年度（2002）より国庫補助を得て本丸一帯の確認調査を実施している。平成 24 年度以降は、とくに城郭の庭園に焦点を当て、東ノ丸の庭園遺構の確認や、庭園の構成要素でもある切石積石垣の確認調査を継続している。また、平成 19 年度（2007）から 23 年度（2011）には、石川門の修理に伴う遺構確認調査も実施した。一方、金沢城公園整備事業に伴う埋蔵文化財確認調査も主幹部局である土木部の依頼により実施している。第二期整備事業では平成 10 年（1998）から続くいもり堀の調査を始め、平成 18 年（2006）には河北門（～ H20）、平成 20 年（2008）に玉泉院丸（～ H25）、平成 22 年（2010）に橋爪門（～ H24）を、第三期整備では、鼠多門の整備に係る遺構確認調査を実施している。

４．国史跡指定

こうしたなかで、整備着手から 12 年後の平成 20 年（2008）１月 11 日に、金沢城跡の主要部分 275,155.14 ㎡について、石川県が文部科学大臣に国史跡指定の申請を行い、平成 20 年５月 16 日に国の文化審議会の文部科学大臣への答申を得て、平成 20 年６月 17 日付け文部科学省告示第 100 号で国の史跡に指定された。また、平成 20 年 12 月 24 日には石川県が管理団体に指定された。翌 21 年から『史跡金沢城跡保存管理計画書』に着手し、23 年４月に策定された。

５．いもり堀の調査経緯

上記と一部重複するが、本項では今回報告するいもり堀の状況について補足する。いもり堀については、公園区域内（堀全体の南東部）を対象として、上記１の「金沢城跡整備実施設計報告書」からすでに整備計画が示されており、金沢城公園整備の主要な要素として位置づけられていた。ただし後述する通り、近代に埋め立てられた後、元の堀の大部分は道路用地となっており、整備への大きな課題となっていた。また当初整備計画については、都市公園としての景観・機能が優先され、範囲や形

状に課題があったのが実情であった。平成８・９年度にボーリング調査・試掘調査を行った後、平成13年（2001）９月の「全国都市緑化いしかわフェア」開催までの整備に向け、**平成10年度**から本格的に埋蔵文化財調査が実施されたが､検出遺構と当初整備計画との調整を要する状況が明確になった。一方で二ノ丸菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓の復元整備を優先する計画の変更を受けて、緑化フェア期間中は暫定駐車場として整備する方針が固められ、**平成12年度**の埋蔵文化財調査は、10年度の成果を補足する目的で実施された。

平成13年12月に行った庁内会議（金沢城周辺整備連絡調整会議）の段階では､いもり堀の復元は、近世後期の絵図や埋蔵文化財調査結果を踏まえ、地割・構造等を決定することが基本方針となっており、市道や南岸以南の敷地（堂形）を占める石川県庁の移転（平成14年12月末）後の状況との関係が課題とされていて、以降のいもり堀の整備計画はこの流れにおいて進められることとなった。**平成15・16年度**においては、それまでは確認されていなかった堀底とこれに至る法面・石垣の埋蔵文化財調査を実施し、16・17年度にはこれに関連してボーリング調査も行った。

上記２に示した「金沢城復元基本方針検討委員会報告書」（平成17年３月）では、いもり堀は、その東側部分について、「過半が公園区域内にあり、城外周部の城郭景観の向上を図るうえで効果的な復元の範囲や段階的な復元手法について、具体的に検討を進めることが望ましい」との方針が示されており、これを受けて平成17年度に庁内に「金沢城公園いもり堀復元検討会」を設け、協議を進めることとなった。この検討会では、いもり堀の全体復元を視野に入れながら、金沢城公園区域内での段階的整備計画の策定を目指し、堀・石垣（堀南東の鯉喉櫓台石垣）の復元のみならず、景観や取水排水、水質確保等にわたり実務的・技術的な検討を進めることとした。なお17年度には、鯉喉櫓台石垣の遺存部最上面を露呈させる暫定的な整備が行われた。

以後の埋蔵文化財調査に関しては、全体復元との整合性を図る上で、堀の南岸の範囲確認の必要性が協議され、**平成18・19年度**の公園区域外の調査が具体化することとなった。また堀の湛水化にかかり、兼六園側の辰巳用水から県庁跡地（現・しいのき園地）を経由するルートが検討され、これが**平成20年度**の調査の原因となった。

平成18年度以後は、「金沢城河北門等の復元整備専門委員会」を設置し、第二期整備事業として並行していた河北門の復元整備と併せ、設計・施工上の指針等について検討し、助言を得ることとなった。この検討作業において、いもり堀の暫定的な復元範囲が確定し、平成20年度から整備が進められるに至った。また鯉喉櫓台石垣の復元についても方針が定められ、**平成21年度**には櫓台石垣南面･東面の調査、上面残存部分の積み直し調査を実施した。

以上の経緯・経過を経て、平成21年度の鯉喉櫓台石垣復元整備を以っていもり堀の整備は一段落することとなった。

第２節　調査の経過

１．発掘調査

平成10年度　当該年度の発掘調査については、土木部公園緑地課の依頼を受けた石川県教育委員会が財団法人石川県埋蔵文化財センターに委託し、４月１日付けで業務委託契約を締結した。文化財保護法第57条第１項に基づく発掘調査届出書（金沢城跡いもり堀等）については４月１日付けで提出した。

調査は７月21日に着手し､いもり堀東部（いもり坂口より南東）の北岸全域を対象に実施した（いもり堀第１次)。当初の想定通り、北岸全体が大規模に削平を受けており、絵図にみえる北西部櫓台は基礎部分も失われていた。しかし削平面での北岸ライン、南東の櫓台（鯉喉櫓台）の位置が確認で

きた他、より城内側に先行する堀の存在が認められ、調査区北西にはこの堀に伴う土橋の存在が判明した。ただし整備計画の見直しにより、二ノ丸五十間長屋の調査を早急に進める必要が生じ、本地点の遺構の詳細検討については次年度以降に持ち越しとなった。11 月１日には現地説明会を行った。現地の作業は 10 月 30 日に完了し、調査面積は約 3,300 ㎡である。

平成 12 年度　当初は平成 11 年度に調査を予定していたが、整備計画の見直しにより当該年度の調査となった。土木部公園緑地課の依頼を受けた石川県教育委員会が財団法人石川県埋蔵文化財センターに委託し、４月３日付けで業務委託契約を締結した。文化財保護法第 57 条第１項に基づく発掘調査届出書（金沢城跡いもり堀等）については４月７日付けで提出した。

当該年度は城内全体の整備・計画上、いもり堀については２回に分けて調査を実施した。第１回目（いもり堀第２次）は 10 年度調査の北西側の延長部（稲荷屋敷下）を対象とし、５月 16 日に着手し、いもり堀の築造年代を示唆する元和年間（1615 ～ 24）頃の特徴をもつ堀石垣を確認した。６月 17 日には現地説明会を行い、現地の作業は６月 21 日に完了した。第２回目（いもり堀第３次）は、10 年度調査区北西部の土橋と南東部の鯉喉櫓台の２箇所について、遺構の構造の詳細検討を進めるべく８月 10 日に着手した。この調査では土橋及び鯉喉櫓台石垣の特徴や成立・改修過程が整理され、いもり堀の変遷の大略について知見を得た。10 月 19 日には現地説明会を行い、現地の作業は 11 月 22 日に完了した。当該年度の調査面積は合わせて約 3,950 ㎡である。

平成 15 年度　上記第１節で記述した通り、平成 13 年度以降、いもり堀の整備計画は改めて検討されることとなった。当該年度と 16 年度は、いもり堀東部北岸の堀底までの状況を確認することを目的に、土木部公園緑地課の依頼を受け、石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室が発掘主体となって、埋蔵文化財調査を実施した。文化財保護法第 58 条の２第１項に基づく発掘調査報告については４月 21 日付けで提出した。

当該年度は南東の鯉喉櫓台と北岸中央付近の２箇所を対象とし、それぞれ第１地点・第２地点と呼称した。堀底までは、過年度のボーリング等により 10 ｍを越える深さが予測され、調査地点を鋼矢板で囲んで壁面を保護する措置を採り、第１地点は鯉喉櫓台の南西側２辺を、第２地点は東・西・南の３辺を囲う形状とした。調査は９月１日に着手した。堀の埋土については、上部が明治 40 年（1907）以後の埋立土であるため、この部分については重機で掘削し、およそ２ｍ程度の深さを単位として法面の検出・精査を人力で行うことを繰り返し堀底に至った。一定の深さ以後は、25t クレーンを用いて排土の搬出を行った。これらの作業の結果、鯉喉櫓台石垣の規模や石積の特徴、堀の深さ、法面（土羽）の形状・規模や堆積状況に関する知見を得ることができた。12 月４日に測量、12 月 21 日には現地説明会を行い、現地の作業も同日に完了した。調査面積は 1,280 ㎡である。

平成 16 年度　当該年度は平成 15 年度第２地点の東西に２箇所の調査区を設け（第３・４地点）、いもり堀北岸の構造について所見を補足することとした。前年度同様、土木部公園緑地課の依頼を受け、石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室が埋蔵文化財調査を実施した。文化財保護法第 58 条の２第１項に基づく発掘調査報告については６月 28 日付けで提出した。調査は８月 17 日に着手した。15 年度と同じく調査区を鋼矢板で三方を囲み、堀底まで調査を進めた結果、15 年度調査で得た法面の特徴がおおよそ堀東部全体に及ぶ見通しを得た。12 月２日に測量、12 月 19 日には現地説明会を行い、現地の作業は 12 月 22 日に完了した。調査面積は 1,280 ㎡である。なお本年度と翌年度にいもり堀及び先行する本丸南堀の範囲を対象に地質ボーリングを実施した。

平成 18 年度　当該年度の調査は、平成 17 年度の「金沢城公園いもり堀復元検討会」で協議されたように、いもり堀南岸の位置を確認することを目的とした。調査地点は南岸に２箇所を設定した（第１・２地点）。金沢城公園区域外であり、金沢市の市道の一部に相当している。前年度と同様、土木部公園緑地課の依頼を受け、石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室が埋蔵文化財調査を

実施した。文化財保護法第 99 条第１項に基づく発掘調査報告については９月 11 日付けで提出した。調査は９月 15 日に着手し、堀南岸の肩部に加え、堀の南側に広がる堂形馬場や辰巳用水に関連する遺構も一部検出した。測量については、第１地点は 10 月５日、第２地点は 10 月 30 日に実施した。また 10 月５日には第１地点を対象に報道機関に向けて現地説明を行った。現地の作業は 11 月１日に完了した。調査面積は 50 ㎡である。

平成 19 年度　当該年度の調査は、平成 18 年度調査地点（第２地点）の西側において、いもり堀南岸の屈曲部付近の確認を目的とした。前年度と同じく調査地点は金沢城公園区域外であり、旧金沢市広坂消防出張所敷地に位置する。土木部公園緑地課の依頼を受け、石川県金沢城調査研究所（前年度に改組）が埋蔵文化財調査を実施した。文化財保護法第 99 条第１項に基づく発掘調査報告については７月 18 日付けで提出した。調査は８月 17 日に着手し、やはり堀南岸の肩部や堂形の遺構を検出した。９月 19 日に測量を実施し、９月 21 日には報道機関に向けて現地説明を行った。現地の作業は９月 27 日に完了した。調査面積は 48 ㎡である。

平成 20 年度　当該年度は、復元整備を進めていたいもり堀への取水ルート部分を対象に、緊急発掘調査を実施した。この部分は、金沢市の市道及び県庁跡地東部（広坂東園地、現・しいのき園地）に相当し、財団法人石川県埋蔵文化財センターが平成 15 年度に発掘調査を実施した金沢城跡（堂形）のＩ区と交錯していた。土木部公園緑地課の依頼を受け、石川県金沢城調査研究所が埋蔵文化財調査を実施した。文化財保護法第 99 条第１項に基づく発掘調査報告については７月３日付けで提出した。調査は７月８日に着手し、いもり堀南岸、辰巳用水、石垣基礎・石列・溝・土坑等の遺構を検出した。８月 21 日・９月５日に測量を実施し、９月 22 日に完了した。調査面積は 48 ㎡である。なお、遺構や造成土のうち、最下面で検出したものについてはできる限り保護措置を執った。また調査地点北部で検出した辰巳用水石管については、取水管がその下部を潜るように調整し、保存を図った。

平成 21 年度　当該年度は、前年７月 18 日に現状変更の許可を得た鯉喉櫓台石垣の復元整備の一環として、石垣南面･東面の部分的な検出、上面残存部の石垣の一部積み直しに係る調査を目的とし、土木部公園緑地課の依頼を受け、石川県金沢城調査研究所が実施した。調査は５月 11 日に着手し、鯉喉櫓台石垣の特徴にかかる知見が追加される等の成果を得た。６月 17 日に立面、７月５日に平面の測量を実施し、７月６日に現地作業を完了した。調査面積は 70 ㎡である。

２．出土品整理

出土品整理については、主として財団法人石川県埋蔵文化財センターに委託し、平成 14 ～ 22 年度にかけて実施した。

平成 19 年５月 22 日には、いもり堀北岸調査区出土資料を始めとする越前赤瓦の検討会を行い、下記の方々の指導・協力・助言を得た。

吉岡康暢・久保智康・森島康雄（金沢城調査研究埋蔵文化財専門委員会）
河村健史（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター・当時）
堀　大介（越前町教育委員会）

令和元年６月 17 日には、土橋調査区出土の建築部材について改めて検討し、麓　和善委員（金沢城調査研究建造物専門委員会）の指導・助言を得た。

３．委員会

石川県は平成 18 年 10 月 27 日付で「金沢城河北門等の復元整備専門委員会」を設置し、「河北門」及び「いもり堀」の設計・施工上の指針等について、専門的・技術的視点から検討、助言を得ることとした。委員は以下の６氏で、石川県知事が委嘱した。

金沢城河北門等の復元整備専門委員会委員（敬称略　肩書きは当時）

北浦　　勝　　金沢大学大学院自然科学研究科教授（土木）

北垣聰一郎　　元東大阪短期大学教授（石垣）

北野　博司　　東北芸術工科大学助教授（考古）

中村　利則　　京都造形芸術大学教授（建築）

新谷　洋二　　東京大学名誉教授（城郭・土木）【副委員長】

平井　　聖　　昭和女子大学学長（城郭・建築）【委員長】

会議は以下の日程で計６回開催した。埋蔵文化財の調査状況については、適宜報告し、専門的な指導・助言を得た。下記議題はいもり堀関連について抽出した。

第１回　平成 18 年 11 月 27 日（月）

・復元整備計画等の概要

・復元設計の基礎資料について（埋蔵文化財調査の状況　文献史料の状況）

・設計の基本的事項について

第２回　平成 19 年２月１日（木）

第３回　平成 19 年５月 24 日（木）

・いもり堀の復元計画について（復元の基本的な考え方　埋蔵文化財調査の結果　段階整備に向けた課題）

第４回　平成 19 年 11 月 14 日（水）

・いもり堀の復元計画について

第５回　平成 20 年２月 21 日（木）

・いもり堀の設計（案）について（鯉喉櫓台石垣について　堀の構造について）

第６回　平成 21 年２月 19 日（木）

・いもり堀整備工事現場

・鯉喉櫓台石垣について（埋蔵文化財調査結果による石垣の特性について　石垣の割付けの基本方針について）

平成 13 年度に金沢城研究調査室が設置されて以降は、金沢城調査研究委員会の総括的指導の下、主に金沢城調査研究埋蔵文化財専門委員会・伝統技術（石垣）専門委員会より指導・助言を得た。

金沢城調査研究委員会

平井 聖（委員長）　北垣 聰一郎（平成 18 年度まで）　嶋崎 丞（故人）　中村 利則

飛田 範夫　吉岡 康暢　脇田　修（故人）

金沢城調査研究埋蔵文化財専門委員会

吉岡 康暢（委員長）　久保 智康　千田 嘉博　森島 康雄

金沢城調査研究伝統技術（石垣）専門委員会

［平成 14 ～ 23 年度］

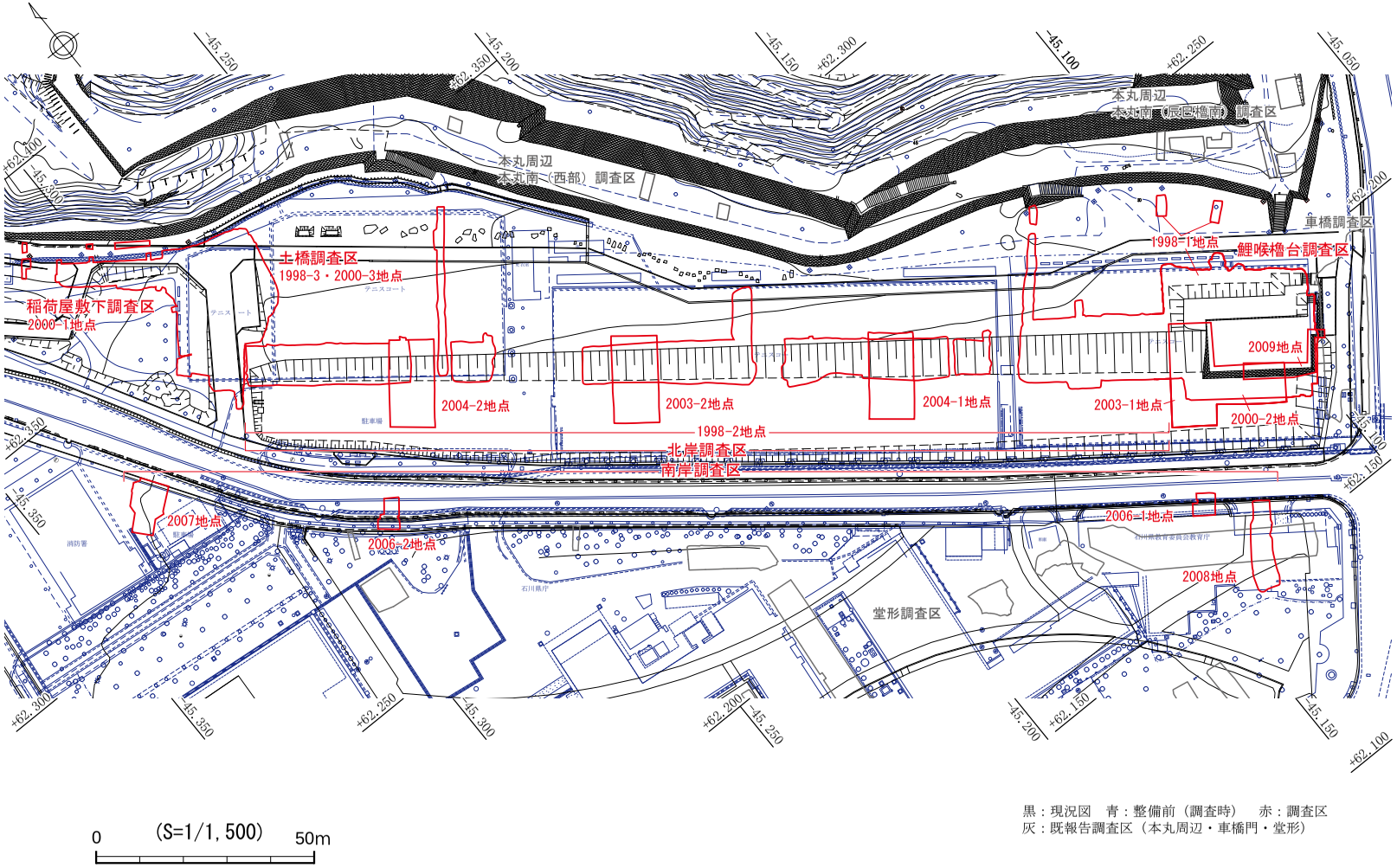
北垣 聰一郎（委員長：平成 18 年度まで）　吉岡 康暢（委員長：平成 19 年度から兼任）

北島 俊朗　北野 博司　齋藤 慎一（平成 15 年度まで）　金森 安孝（平成 16 年度から）

楠 正勝（平成 18 年度から）

［平成 24 年度～ ］

北野 博司（委員長）　市川 浩文　金田 明大　西形 達明　宮里 学



黒：現況図　青：整備前（調査時）　赤：調査区
灰：既報告調査区（本丸周辺・車橋門・堂形）

第１図　調査区・調査地点位置図（S=1/1,500）

第２章　位置と環境

第１節　金沢城と周辺の歴史的環境

金沢市街地のほぼ中央を占める金沢城跡は、南東の山地帯より流れ出す犀川・浅野川によって形成された、細長く伸びる小立野台地の先端部に位置する。城外との比高差は、低所に位置する新丸においては約 10 m、最高所である本丸で 30 m以上を測る。本丸からは、低地の金沢平野のみならず小立野台地方面へも眺望がきく。また、城のある台地先端部とその南東に続く台地本脈との間には、自然谷が形成されていたらしく［藤 1999］、城付近の地形は、人の手が加わる以前から独立丘的な状況を呈していたようであり、城は自然地形を巧みに利用して築かれたことが推察される。

城下町は、金沢城を中心に小立野台地を含む河岸段丘から沖積平野に展開している。外堀としての内惣構堀、外惣構堀が城を遠巻きに二重に囲み、旧北国街道は金沢城を東に迂回するよう城下町を通る。それらを基幹として城下町と各地を繋ぐ街道や街路が整備された。これら城下町の基本的な構造は、現在の市街地に引き継がれ、城下町の町並を色濃く反映している様態は、歴史都市・金沢を特徴づける要素の一つになっている。

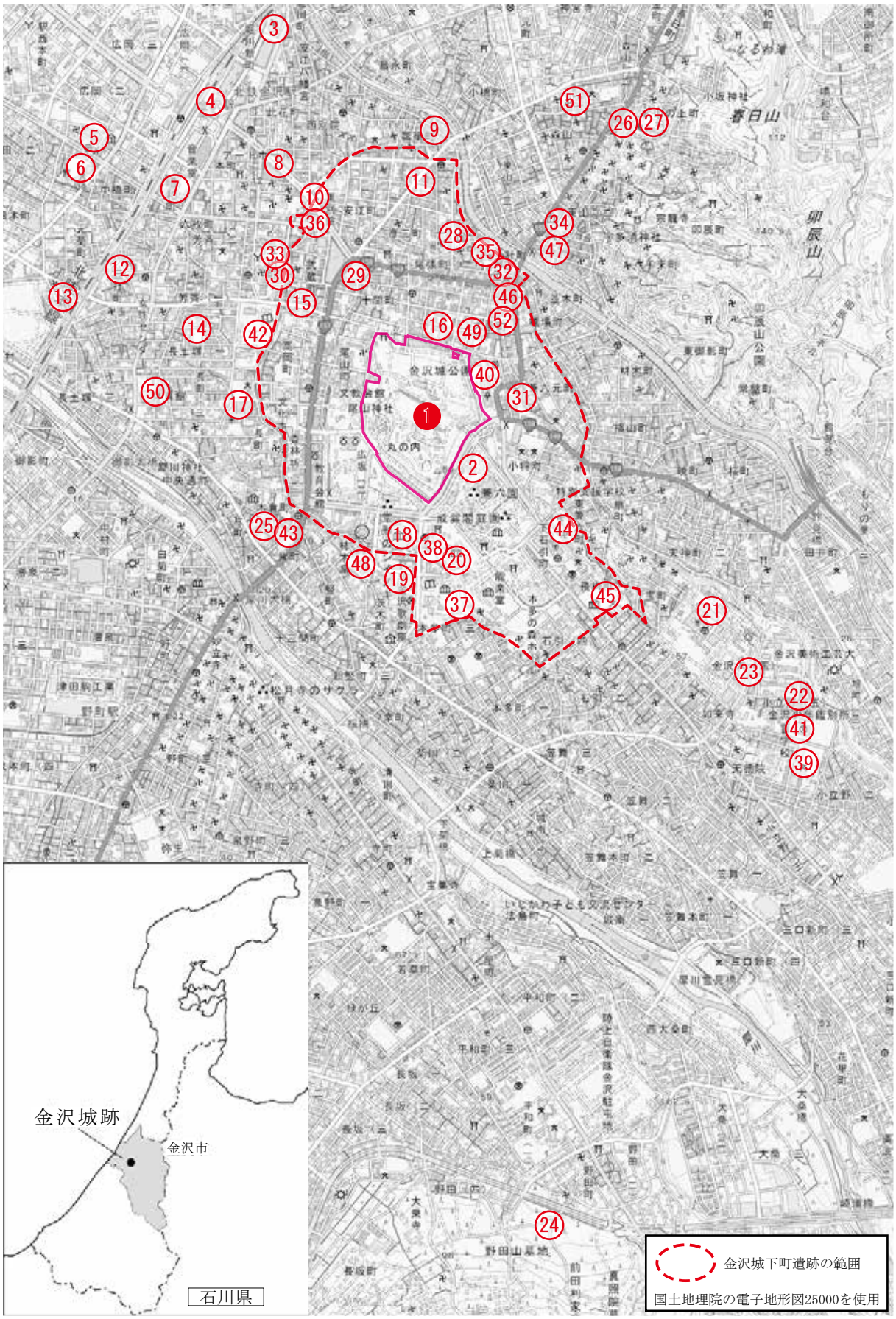
金沢城跡周辺は、絵図等の資料から近世以降の市街化が確認できるものの、それ以前の様相については文献等からの推定にとどまっていたが、城跡自体や城地に隣接する金沢城下町遺跡（前田氏（長種系）屋敷跡地点）［石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター 2002e、金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2019c］・（丸の内７番地点）［石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター 2014a・2015a］、広坂１丁目遺跡［金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2004a・2005c・2006a・2007a・2009a］の発掘調査、惣構堀復元整備に伴う確認調査［金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2008b・2011a・2011b・2012d・2013b・2014b・2018a］や市街地再開発等に伴う諸所の発掘調査等により、その姿を垣間見ることが可能となった。また平成 23 年４月１日には、第２図の赤破線内の範囲が金沢城下町遺跡として周知されている。

旧石器時代の遺跡は、城外縁の車橋、石川門前土橋、丸の内７番地点の調査で数点の石器が出土している。県内において数少ない当該期の遺跡のあり方を示すものとして注目される。

縄文時代の遺跡は、丸の内７番地点で草創期の有舌尖頭器が採取されている他、城内の幾つかの調査区で遺物の出土が確認されるとともに、前田氏（長種系）屋敷跡地点で、後期の陥穴が検出されている。城下町の調査でも、まとまった面積の調査が実施された地点では遺物の出土がみられ、今後その実態が明らかになることを期待したい。

弥生時代は、前田氏（長種系）屋敷跡地点で弥生時代後期後半～終末期の墳丘墓が確認され、広坂１丁目遺跡では中期の土器が出土し、後期後半の竪穴建物等が検出されている。古墳時代は、高岡町地点［石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター 2002d、金沢市教育委員会（金沢市埋蔵文化財センター）2001a、金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2003a］で前期の竪穴建物が確認され、下本多町遺跡［金沢市埋蔵文化財センター 1999］や彦三町一丁目地点［金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2007b］では中期の遺構が、広坂１丁目遺跡では前期、後期の土器の他、車輪石や勾玉等の遺物が出土しており、後に隆盛となる集落の母体が出来上がっていたものと考えられる。

古代では、城内の平成９年度の調査において８～９世紀代の掘立柱建物跡が検出された他、断片的ではあるが、幾つかの調査区で遺構、遺物が確認されている。城下では高岡町地点で７世紀後半の竪穴建物や、半瓦当を含む古式瓦、奈良、平安時代の掘立柱建物と、円面硯、帯金具、奈良三彩等が確認されている。県庁跡地（堂形）［石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター 2010・



第２図　金沢城跡の位置と周辺の近世遺跡　(S=1/25,000)

第１表　周辺の近世遺跡地名表

№.	遺跡名	調査年度	遺跡の特徴		文献
			主要地種	特記事項	
1	金沢城跡	（別掲）	城郭	（別掲）	（別掲）
2	兼六園	（別掲）	庭園	（別掲）	（別掲）
3	木ノ新保遺跡（久昌寺遺跡）	H8(1996)・H9(1997)	寺院（墓地）	近世墓292基	金沢市埋蔵文化財センター2004b
4	木ノ新保遺跡	H5(1993) H6(1994)・H7(1995)	寺院？（墓地）→足軽組地→ 下級武家地、町人地、百姓地	近世墓、水利施設（管井戸・竹樋）、 溝（堰・しがらみ）、建物跡（土蔵基礎、木柱）	(財)石川県埋蔵文化財センター2002b 金沢市埋蔵文化財センター2005b
5	醒ヶ井遺跡	H7(1995)～H10(1998)	百姓地→下級武家地	前田氏（直之系）下屋敷 水路、水利施設（竹樋・溜升）	金沢市埋蔵文化財センター2001c 谷口・増山2004
6	長田町遺跡	H6(1994)	下級武家地		金沢市埋蔵文化財センター1998
7	昭和町遺跡	H5(1993)～H7(1995)	町人地・下級武家地	延宝５年（1677）火災資料出土、近世鞍月用水	金沢市埋蔵文化財センター2001b・2003b・2004c
8	本町一丁目遺跡	H2(1990)・H6(1994)・ H9(1997)・H15(2003)	町人地	廃棄土坑、墨書木製品多数、焼成遺構、 鍛冶関連遺物（鞴羽口、椀型鉄滓）	金沢市教育委員会1995・1997b 金沢市埋蔵文化財センター2003c・2006b
9	瓢箪町遺跡	S61(1986)	上級武家地	前田氏（主膳系）上屋敷、整地層から遺物多数出土	金沢市教育委員会1991
10	金沢城下町遺跡（安江町地区　安江町 １番地点）	H3(1991)～H5(1993) H30(2018)～R1(2019)	町人地・中級武家地	板塀跡（布堀土坑）、墨書木製品多数、「乾山」銘向付出土、道跡、堀、溝、建物跡、井戸、土坑	金沢市教育委員会1997a・2019a
11	金沢城下町遺跡（彦三町地点）	H11(1999)	中級武家地		金沢市埋蔵文化財センター2002
12	三社町遺跡	H3(1991)・H9(1997)	百姓地→町人地	道路・側溝、肥溜め群、操人形かしら	(財)石川県埋蔵文化財センター2001b・2007
13	元菊町遺跡	S62(1987)・H1(1989)	百姓地→町人地		石川県立埋蔵文化財センター1990 (公財)石川県埋蔵文化財センター2014d
14	穴水町遺跡	H8(1996)	下級武家地	長氏下屋敷	金沢市埋蔵文化財センター1998
15	金沢城下町遺跡（高岡町地点）	H8(1996)・H10(1998)～ H11(1999)・H9(1997)	上級町人地、水溜	礎石建物、桶棺墓、廃棄土坑、瓦溜り （鬼瓦を桟瓦で囲む）、石灯篭基壇、椀形鉄滓	金沢市埋蔵文化財センター2001a・2003a (財)石川県埋蔵文化財センター2002d
16	金沢城下町遺跡 （前田氏（長種系）屋敷跡地点）	H8(1996)・H27(2015)	町人地→上級武家地	寛永以前の町屋遺構	(財)石川県埋蔵文化財センター2002e 金沢市埋蔵文化財センター2019c
17	長町遺跡	H8(1996)	中級武家地		金沢市埋蔵文化財センター1998
18	広坂1丁目遺跡	H8(1996)～H12(2000) H14(2002)・H17(2005)	中～上級武家地	寛永の大火火災資料、大型土坑 （廃棄土坑、地下室、池等）、楽焼窯道具、 惣構跡、紀年銘木製品等の基準資料検出	金沢市埋蔵文化財センター 2004a・2005c・2006a・2007a・2009a
19	下本多町遺跡	H4(1992)	下級武家地→上級武家地	宝暦の大火による火災資料	金沢市埋蔵文化財センター1999
20	金沢城下町遺跡（本多氏屋敷跡地区）	S55(1980)・H21(2009)・ H22(2010)・H26(2014)・ H27(2015)・H28(2016)・ H29(2017)	上級武家地、武家地	溝、階段（地下室？） 本多家上屋敷、塀基礎石積、門跡、石垣、道跡	石川県立埋蔵文化財センター1992 金沢市埋蔵文化財センター2012b・2018d (公財)石川県埋蔵文化財センター2016、澤辺2019
21	金沢大学宝町遺跡 （医学部附属病院地点）他16地点	H9(1997)～H14(2002) H23(2011)	下～中級武家地等	地下室多数	金沢大学埋蔵文化財調査センター2000～2003・2017
22	金沢大学宝町遺跡 （医学部保健学科地区）	H10(1998)・H11(1999) H13(2001)	下～中級武家地等		金沢大学埋蔵文化財調査センター2000～2003・2017
23	経王寺遺跡	H9(1997)・H10(1998)	寺院（墓地）・中級武家地	近世初期の灰塚、池状遺構、塀跡	(財)石川県埋蔵文化財センター2002c
24	野田山墓地	H12(2000)～H14(2002) H16(2004)～H19(2007) H20(2008)～H24(2012)	墓地	藩主家の墓所を中核とした近世墓地	金沢市埋蔵文化財センター 2003d・2008a・2012a・2012e・2013a
25	片町二丁目遺跡	H15(2003)・H23(2011)	武家地		金沢市埋蔵文化財センター2005d
26	妙国寺門前遺跡	H15(2003)	寺院、参道		金沢市埋蔵文化財センター2006c
27	三宝寺前遺跡	H16(2004)	寺院、参道		金沢市埋蔵文化財センター2005a
28	金沢城下町遺跡（彦三町一丁目地点）	H16(2004)	武家地	廃棄土坑	金沢市埋蔵文化財センター2007b
29	金沢城下町遺跡（下堤・青草町地点）	H17(2005)	町人地		金沢市埋蔵文化財センター2007c
30	金沢城下町遺跡 （金沢城西外惣構跡武蔵町地点）	H17(2005)・H21(2009)	惣構	築造当初の堀、堀の改変状況　土居盛土	金沢市埋蔵文化財センター2008b・2011b
31	金沢城下町遺跡（兼六元町３番地点 兼六元町７番地点　兼六元町15番地点）	H17(2005)・H23(2011)・ H30(2018)	武家地	井戸、土坑、石組溝、石垣、石列	金沢市埋蔵文化財センター 2007b・2012a・2018b・2019a
32	金沢城下町遺跡 （金沢城東内惣構跡枯木橋北地点）	H18(2006)	惣構	堀の改変状況	金沢市埋蔵文化財センター2008b
33	玉川町遺跡	H18(2006)	武家地	土坑、溝	金沢市埋蔵文化財センター2016
34	東山一丁目遺跡	H20(2008)	町人地	鍛冶関連遺構・遺物（炉跡、鞴羽口、椀形鉄滓等）	金沢市埋蔵文化財センター2010b
35	金沢城下町遺跡 （金沢城西内惣構跡主計町地点）	H20(2008)	惣構	素掘の堀、室町～戦国期の鍛冶関連遺物	金沢市埋蔵文化財センター2011a
36	金沢城下町遺跡 （金沢城西外惣構跡升形地点）	H20(2008)～H22(2010) H30(2018)	惣構	堀、升形遺構、建物跡、石垣	金沢市埋蔵文化財センター2012d・2013b・2018a
37	金沢城下町遺跡（本多町三丁目地点）	H22(2010)	武家地	道路、水路（辰巳用水分流）	金沢市埋蔵文化財センター2012c
38	金沢城下町遺跡 （西外惣構跡本多町三丁目地点）	H21(2009)	惣構（西外惣構起点付近）	堀、土居基部	金沢市埋蔵文化財センター2012b
39	小立野四丁目遺跡 （旧天徳院加賀藩主前田家墓所）	H22(2010)	寺院、墓地	堀	金沢市埋蔵文化財センター2013c
40	金沢城下町遺跡（丸の内７番地点）	H21(2009)～H23(2011)	武家地（公事場、屋敷）	庭園遺構（石組池状遺構、景石等）	(公財)石川県埋蔵文化財センター2014a・2015a
41	小立野ユミノマチ遺跡	H22(2010)～H24(2012)	武家地	階段付大型土坑	(公財)石川県埋蔵文化財センター2014b・2015b
42	金沢城下町遺跡（長氏屋敷跡地区）	H24(2012)～H25(2013) R1(2019)	上級武家地、武家地	長氏上屋敷、柱穴、建物基礎、土塀基礎	金沢市埋蔵文化財センター2015
43	片町二丁目遺跡（５番地点）	H23(2011)	武家地	地下室、井戸、建物跡（石列基壇、礎石）、水路、土坑	金沢市埋蔵文化財センター2014a
44	金沢城下町遺跡（東兼六町５番地点）	H25(2013)～H27(2015)	墓地	土坑（甕棺墓、木棺墓等）、石列（墓石区画）	(公財)石川県埋蔵文化財センター2017
45	金沢城下町遺跡（飛梅町３番地点）	H25(2013)～H27(2015)	武家地	前田氏（長種系）・大音氏下屋敷 土坑（粘土採掘跡、地下室）、井戸	金沢市埋蔵文化財センター2019b
46	金沢城下町遺跡 （金沢城東内惣構跡枯木橋南地点）	H24(2012)	惣構	堀	金沢市埋蔵文化財センター2014b
47	東山南水溜跡	H21(2009)	水溜跡		金沢市埋蔵文化財センター2010a
48	柿木畠遺跡	H28(2016)・H29(2017)	武家地	曲水遺構、建物跡（土台、礎石）、区画溝、 方形石組遺構、石列、池跡、土坑、井戸	金沢市埋蔵文化財センター2017・2018a
49	金沢城下町遺跡（大手町３番地点）	H29(2017)	武家地（人持組津田玄蕃邸跡）	石敷き、井戸、土坑	金沢市埋蔵文化財センター2018c
50	長町三丁目遺跡	H29(2017)	武家地	土塀基礎、井戸、溝、土坑	金沢市埋蔵文化財センター2018a
51	森山二丁目遺跡	H29(2017)	武家地（足軽屋敷）	道路、石敷遺構、ゴミ穴	金沢市埋蔵文化財センター2018a
52	金沢城下町遺跡 （尾張町１丁目７番地点）	H30(2018)	惣構（東内惣構）	石垣、堀、土坑	金沢市埋蔵文化財センター2019a

※金沢市埋蔵文化財センター:2001年は金沢市教育委員会(金沢市埋蔵文化財センター)、2002年以降は金沢市(金沢市埋蔵文化財センター)

(財)石川県埋蔵文化財センター:石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター(2013年度から公益財団法人)

2012、石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター 2014c］でも７世紀後半から 10 世紀初頭の遺物が出土し、竪穴建物、掘立柱建物等の遺構が確認されている。広坂１丁目遺跡では７世紀初め頃から 11 世紀の遺物が確認されるとともに、藤原宮式、平城宮式に準拠した大量の瓦、「佛」刻書土器、「寺」刻書瓦、仏器等が出土し、矩形の区画溝、掘立柱建物、竪穴建物等が確認され、古代寺院が造営されたと考えられている。また、前田氏（長種系）屋敷跡地点、丸の内７番地点でも古代の土器が出土し、城跡周辺では兼六園のある小立野台地側や、反対の尾山神社側等にまだ空白部はあるが、律令初期から金沢城跡を取り囲むように遺跡が展開していたと想定され、地域の拠点となっていたと考えられる。

中世では、広坂１丁目遺跡で区画溝や礎石建物、墓地等が確認され、13 世紀後半頃～ 14 世紀代に盛期を持つ居館、室町末～ 17 世紀初頭は寺内町内の有力者の居住域か施設が想定されている。また、県庁跡地（堂形）では、16 世紀後半の館ないし寺院の区画施設と推定される溝、土塁が確認されている。一方、城の反対側に位置する丸の内７番地点では遺構は不明であるが 13 世紀頃から 17 世紀初頭の遺物が出土し、隣接する石川橋白鳥堀調査区では 16 世紀第３四半期頃に築造されたと考えられる鍛冶関連遺構が確認されている。高岡町地点では薬研堀状の溝が確認され館跡の一部と考えられている。

文献資料からは 14 世紀には現在の久保市乙剣宮付近に「山崎窪市」が成立し、天文 15 年（1546）には現在の城地に金沢御堂（金沢坊舎）が創建され寺内町が展開し、加賀地域における政治・宗教・経済の拠点として発展したとされている。遺跡からはまだまだ当時の様相を具体的に述べるほどの資料は得られていないものの、古代から引き続き、それらのベースとなった集落の展開がうかがわれる。やがて金沢御堂（金沢坊舎）は織田政権の前に陥落し、佐久間氏・前田氏など織豊政権の大名による支配が始まるが、この段階を遺跡ではうまく捉えきれていない。

徳川氏が幕府を創始し、豊臣氏を滅ぼして名実ともに統一政権を確立した慶長・元和期頃、金沢城周辺では大名前田氏の支配の下、城下町の整備が進行する。現在、市街各所で調査された城下町の遺跡地点数は 50 か所を数えるが（第２図・第１表）、まとまった量の遺構・遺物が見られるようになるのは、この頃以後のことである。なお慶長年間に築造された内・外惣構の一部についても発掘調査が行われており、当初の構造や、規模を縮小しつつ存続・再生が図られる変遷過程が判明している［金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2008b・2011a・2011b・2012d・2013b・2014b・2018a、木越 2013］。城下町はその後度重なる火災等の災害（寛永８年（1631）・同 12 年（1635）の大火等）に見舞われ、また一方で計画的整備を繰り返しながら、寛文年間（1661 ～ 1672）までにほぼ骨格が整い、以後明治時代の初めまで、三都に次ぐ大都市として発展する。

先にもあげたが、城下中枢に位置する遺跡として広坂１丁目遺跡、前田氏（長種系）屋敷跡地点、丸の内７番地点がある。広坂１丁目遺跡は、17 世紀前半における性格はなお検討の余地はあるものの、陶磁器の優品が多く出土し、また 17 世紀中頃以降は高級武家の屋敷として、多様な遺構・遺物が検出されている。城下町遺跡として最大の面積が調査されており、火災の比定等、今後基準となる所見が蓄積されている点も大きく評価できよう。前田氏（長種系）屋敷跡地点は、寛永 16 年（1639）以後、標記の重臣屋敷となったところであるが、これ以前の遺構・遺物が充実しており、初期城下町の屋敷跡と考えられている。丸の内７番地点では、16 世紀後半～ 17 世紀初頭の町屋→ 17 世紀初頭～寛永８年大火頃の町屋→大火以降から万治２年の武家屋敷→万治２年以降の公事場・武家屋敷という城下町遺跡の成立、変遷が捉えられている。

これらの外側に位置する安江町・本町一丁目遺跡の各遺跡は、性格を異にするが、城下町の一般的な在り方を示す。安江町遺跡［金沢市・金沢市教育委員会 1997a］は中級藩士・町人居住地が対象となる調査であるが、町人の物質的な優位性が読み取れる、興味深いデータが得られた。本町一丁目遺

跡［金沢市教育委員会 1995］は町人の居住地に該当し、富籤の突札等、生活臭の強い遺物が目を引く一方、建物・井戸・土坑（粘土採取坑・廃棄土坑）等の遺構配置から、屋敷地の空間構造も追究されている。木ノ新保（久昌寺含む）・三社町の各遺跡は、城下縁辺に所在する。久昌寺遺跡［金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2004b］では同名の曹洞宗寺院の墓地に該当する約 300 基に達する墓が調査され、城下の墓制を考える上で重要な成果をあげている。木ノ新保遺跡［石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター 2002b］では、墓地・農地から足軽・下級武士の屋敷地への変容をうかがうことができ、三社町遺跡［石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター 2007］でも、農地から町人地への変化が遺構より捉えられている。いずれも城下縁辺における都市域の拡大を示す良好な事例である。

その他に城下町から離れるが、関連する遺跡として戸室石切丁場跡、野田山墓地、辰巳用水が挙げられる。戸室石切丁場跡［石川県金沢城調査研究所 2008e・2013c］は金沢市東部の戸室山・キゴ山周辺に広がる採石関連遺跡群であり、城内石垣の９割強を占める石材産地である。悉皆踏査により丁場の分布範囲と保存状態が確認され、戸室石の特性を踏まえた総合的な調査研究により丁場の構造と変遷、戸室石の石割技術など様々な点が明らかにされた。野田山墓地では、墓地移転に伴う山麓部分の調査や藩主前田家墓所の測量・試掘調査等が実施されている［金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2003d・2008a・2012e］。辰巳用水［金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2009b］は寛永９年（1632）に開削され、終着点である金沢城では堀や庭園の水源として利用された。調査でも導水管（木樋、石樋）が確認されている。上流部では用水法面を保護するための三段石垣や隧道など当時の土木技術を良好に留めた遺構が残る。

「御城中壱分碁絵図」（横山隆昭氏蔵）文政13年（1830）

第３図　近世後期の金沢城全体図

第２節　金沢城の沿革

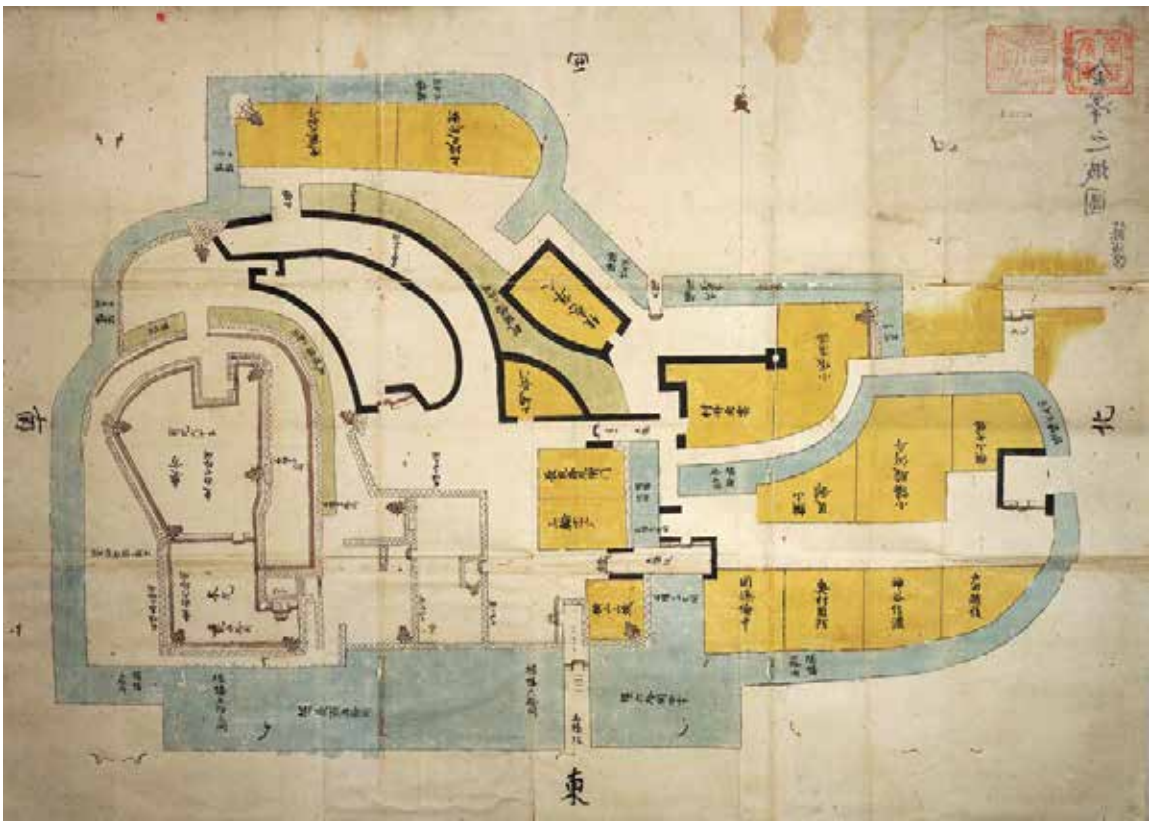
金沢城の沿革については既刊の『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書Ⅰ』［石川県金沢城調査研究所 2008d］が詳しく、参照されたい。ここでは、次頁の年表（第２表）をもって代え、若干の補足を付加しておきたい。

年表では、金沢城の歴史を４期に区分し、造成・災害・修築等を中心に記載した４つの時期については、利家による城内整備から寛永の大火までを「初期金沢城」、寛永大火後の城内整備から宝暦の大火までを「寛永の大火後」、宝暦大火後の城内整備から廃藩までを「宝暦の大火後」、廃藩から現在までを「近代以降」とした。

初期金沢城とそれ以前については、その様相を窺うに足る絵図・文献は極めて少なく、埋蔵文化財調査の所見が重要となる。

画期となった災害のうち、寛永８年（1631）の大火は、金沢城の骨格を変える契機となった。それまでは本丸が中心であったが、大火を契機に二ノ丸が拡大され、ここに壮麗な御殿が営まれた。この二ノ丸を中心として定まった縄張りが、現在まで受け継がれることとなる。一方、宝暦９年（1759）の大火は、全盛期の終わりを象徴する災害で、三階櫓や辰巳櫓といった本丸の櫓群は、二度と再建されることなく、石川門・河北門・橋爪門のいわゆる三御門も、再建までに 10 ～ 30 年の長期を要した。

廃藩後では、明治 14 年（1881）に二ノ丸御殿が焼亡したほか、あらたに城地を管轄した陸軍の手により旧来の建物は次々に撤去された。また城の外堀・内堀の多くは埋め立てられ、松原屋敷・金谷出丸など縁辺が削平され往時の形状が失われた郭もある。戦後、金沢大学の敷地になってからも様々な改変を受けている。



「加州金沢之城図」（東京大学総合図書館蔵）近世初期

第４図　近世初期の金沢城

第２表　金沢城の沿革

時期	年号	西暦	出　来　事
前	天文15年	1546	本願寺別院として金沢御坊（金沢坊舎）を設置、金沢城の前身
初期金沢城	天正８年	1580	佐久間盛政が入城、土塁や堀を整備
	天正11年	1583	賤ヶ岳の合戦において佐久間盛政が敗北 前田利家が入城し、これ以後前田家が14代にわたり金沢城主をつとめる
	天正14年	1586	天守構築、翌年に南部藩家臣北信愛が前田利家のもてなしを受け、天守をはじめ、 城内の案内をされる
	天正15年	1587	石垣職人の穴太源介に知行100俵を与え召抱える
	文禄元年	1592	戸室石を利用した本格的な石垣構築を開始、東ノ丸東面・北面、本丸西面の石垣を構築
	慶長７年	1602	落雷により天守焼失
	慶長期		本丸南面・三ノ丸北面・尾坂門の石垣を構築
	元和期		東ノ丸附段・百間堀縁などの石垣を構築
	元和６年	1620	本丸焼失、翌年本丸御殿などを再建
寛永の大火後	寛永８年	1631	城下町から出火、辰巳櫓に飛び火し本丸御殿など城内も延焼　【寛永の大火】 大火後二ノ丸を造成拡張し御殿を造営。大規模な城普請でほぼ現在の縄張りに近い状態になる
	寛永９年	1632	犀川上流から取水する辰巳用水を施工、城内に引水され城内外の堀が水堀化
	寛永11年	1634	玉泉院丸に泉水や築山、御亭などを造成
	寛永17年 ～ 万治３年	1640 1660	20年間藩主不在、城内が荒廃
	寛文元年	1661	5代藩主綱紀がはじめて入国、城内及び城下町整備や新田開発、文化振興等をすすめる
	寛文２年 ～ 寛文11年	1662 1671	城内の損傷著しい石垣箇所を修築。玉泉院丸色紙短冊積み石垣もこの頃に構築か 鉛瓦が普及
宝暦の大火後	宝暦９年	1759	城下町で一万軒以上が焼失、金沢城内でも本丸・二ノ丸・三ノ丸などの主要部が全焼する被害　【宝暦の大火】
	宝暦10年	1760	幕府に城再建と石垣修築を願い出て、修築
	宝暦11年	1761	河北門石垣を修築
	宝暦12年	1762	橋爪門を再建
	宝暦13年	1763	五十間長屋石垣を修築、10代藩主重教二ノ丸御殿に入る
	明和２年	1765	石川門石垣を修築
	安永元年	1772	河北門を再建
	天明８年	1788	五十間長屋や石川門などを再建 橋爪門続櫓台修理
	文化５年	1808	二ノ丸火災
	文化６年	1809	橋爪門を再建、12代藩主斉広二ノ丸御殿に移徙
	寛政11年 安政２年 安政５年	1799 1855 1858	┤地震による石垣被害が大きく、石垣を修築
近代以降	明治４年	1871	兵部省（のち陸軍省）の所轄となり、多くの建物が払い下げ
	明治９年	1876	河北門二ノ門の渡櫓や櫓台石垣を撤去するよう進達
	明治14年	1881	二ノ丸御殿から出火し、御殿の他、菱櫓・五十間長屋・橋爪門など焼失
	明治15年	1882	河北門一ノ門を解体、代わりに矢来門を設置
	明治40年	1907	辰巳櫓下の高石垣が崩落、石垣が幅200mに渡り上部2／3が取り壊され、現在残るように段を設けて改修
	昭和24年	1949	戦後、金沢大学の敷地として利用
	平成７年	1995	金沢大学の敷地を城外へ移転
	平成８年	1996	石川県が土地を取得し、金沢城公園として整備を開始
	平成13年	2001	菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓を復元
	平成20年	2008	国史跡に指定
	平成22年	2010	河北門を復元、いもり堀の段階復元
	平成27年	2015	橋爪門を復元、玉泉院丸庭園を再現復元

第３節　いもり堀の沿革

位置

いもり堀は白鳥堀や蓮池堀（百間堀）と同じく金沢城の外堀で、東ノ丸・本丸の南から玉泉院丸の西に至っていた。本報告では、確認調査等を実施したこのうちの南東部（東ノ丸・本丸・薪ノ丸南側）を対象とする。

近世初期の様相

当該区域では、本丸縁辺に近く地形に沿う形で、先行する堀（本丸南堀）が文禄年間（1592 ～ 96）には存在していた。この遺構は元和年間（1615 ～ 24）に埋め立てられ、南側におおよそ並行する形で直線的な平面形状の外堀が開削された。これが明治期まで遺存したいもり堀である。寛永８年（1631）以後には最南東北岸に櫓台石垣が造営された。以上の状況は文献・絵図史料からは窺えず、後述する埋蔵文化財調査により明らかにされたものである。

近世前期の様相（第５・６図）

正保元年（1644）にはいもり堀南東の石垣が修理された（「前田貞里書状」金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵「加賀藩史料」七六、［石川県金沢城調査研究所 2019b］所収）。いもり堀に関連する文献史料の初見で、この頃付近に「薬蔵」（弾薬庫か）があったことが知れる。この箇所は「辰巳之方崩石垣」とされているが、宝永３年（1706）の史料（「先祖由緒并跡々勤方等之覚」金沢市立玉川図書館後藤文庫、［日本海文化研究室 1976］所収）では「崩丁場」とあり、以後近世後期にはほかに「鯉喉之御櫓」（「御城内等秘抄＜御城中等御手配之事＞」所蔵・所収前掲の通り）等の名称が史料にみえる。寛文２年（1662）にも損壊を受け（第５図絵図①記載、「古より公儀江被上候御城絵図・御国絵図改申品々之帳＜寛文弐年 公儀江被上候絵図＞」加越能文庫、［石川県教育委員会事務局金沢城研究調査室 2003b］所収）、同４年（1664）に改修された（「先祖由緒并跡々勤方等之覚」）。この時普請を担当した穴生として、後藤権兵衛（「先祖由緒并跡々勤方等之覚」）や奥源三郎が知られる（「奥源兵衛家系」（穴太家旧蔵）、［石川県金沢城調査研究所 2008c］所収）。

改修された鯉喉櫓台石垣は、「加賀国金沢之絵図」（第５図②）等によると、高さが水底より８間（約 14.5 m）あり、享和から文政期に活躍した穴生で技術書や史書を多く著した後藤彦三郎に「石法極め積み立てたる石垣にて、御城中第一番の石垣に候」（「文政七年 唯子一人伝」金沢市立玉川図書館後藤文庫、［石川県金沢城調査研究所 2011b］所収）等と記されている。石垣は明治期に上部（高さ８間とすると約 1/3）を失っているため現状では不明であるが、彦三郎による「のり合つよく相見え」等の記載（「文政七年 唯子一人伝」）から、反りの強い勾配だったと思われる。

いもり（守宮）堀の名称は、近世前期の史料では確認できず、また『越登賀三州志』（寛政 10 ～文政２年（1798 ～ 1819））にも見えないが、「御城内等秘抄」など文政７年（1824）頃にまとめられた穴生役後藤家の文書に現れる他、天保 15 年（1844）作成の「加州金沢御城来因略記」（石川県立図書館蔵）等に記されている。

いもり堀の全容は、17 世紀後半以降、絵図に描写されている。第５図①～④、第６図⑤は 17 世紀後半～ 18 世紀前半の状況で、南東の鯉喉櫓台を伴う景観が描かれている。玉泉院丸の泉水南東といもり堀とが連絡する表現が認められ、この部分がもとはいもり堀ないし先行する本丸南堀から分岐した堀であったことを示唆している。ただし④の描写のように、18 世紀代に入っても玉泉院丸泉水南東部に水を湛えた部分が伸びていたのかは実際には疑問で、②の絵図が示す延宝年間には埋没してい

る可能性も考えられる。

③では、いもり堀北岸縁の遮蔽施設の大部分（南東の鯉喉櫓台、北西の稲荷屋敷付近以外、以下主要部とする）が土塀であることが明記されている。また鯉喉櫓台・稲荷屋敷付近の描写表現は土塀ではなく、太鼓塀と想定される。③～⑤には塀の内側に４棟の長屋があり、後の史料によるとこれは武具を収めた土蔵とされる。④は 18 世紀前半の状況で、凡例によると描かれた塀は二重塀である。なお詳細な年代は不明ながら、宝暦以前とされる⑤では、稲荷屋敷付近に小規模な櫓台の表現があり、近世後期の絵図と共通する。

なお絵図にみる通りいもり堀は水堀であり、③では辰巳用水の分流とみられる水路が接続している。ただし堀の構築時期は辰巳用水開削に先行し、初期の状況は判然としない。

近世後期の様相（第６図）

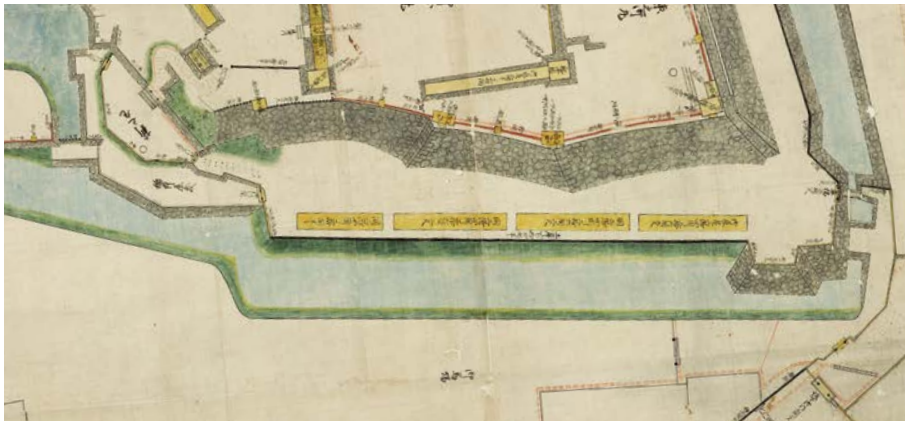
第６図⑥～⑧は 19 世紀以後の状況である。宝暦９年（1759）の大火で一帯は焼失し、発掘調査でも被災の痕跡が窺われるが、絵図によると土蔵が一棟のみ再建されている。⑥～⑧の三葉は近世後期を代表する絵図であるが、堀縁の遮蔽施設の表現がそれぞれ異なっている。文政 13 年（1831）作成の⑥では、主要部は土塀、鯉喉櫓台付近は掛塀か熨斗立とみられる表現であるが、天保４～９年（1833～1838）頃の景観年代が考えられる⑦では主要部に「塀跡」、鯉喉櫓台付近に「無双熨斗立」との記載がある。そして嘉永３年（1850）作成の⑧では稲荷屋敷付近を除き、遮蔽施設が描かれていない。なお南岸の大部分では、いずれも堂形馬場の土塁が堀縁まで迫っている。また⑥・⑧の絵図では、土塁の内側に平行するように辰巳用水の埋樋が描写されている。絵図には記されていないが、⑥では木樋、⑧では石樋になっているとみられる。

近代以降の様相

明治４年（1871）には城域が兵部省（のち陸軍省）の管轄になった。明治５年（1872）の「金沢旧城廓総図」（石川県立図書館蔵）では御花畑に土蔵の表現がなく、この時までに撤去されていた可能性が高い。明治 34 年（1901）、広坂の道路整備にともない、いもり堀南東の一部に土砂が投棄された（『稿本金沢市史　市街編第四』P958）。さらに明治 40 年（1907）、被服庫の敷地増設に伴い、いもり堀北部・御花畑の南側大部分、高さ約７～８ｍが削平され堀は埋め立てられるに至った。この時城内側の石垣に影響が及んだらしく、大鎬一帯が崩壊したため、対処として本丸・東ノ丸南面石垣全体の上部が撤去されることとなった（同前 P1035、［石川県金沢城調査研究所 2008d］P22・23）。戦後に入り昭和 22 年（1947）には、第２回国民体育大会開催に際しテニスコートが設営され、平成 10 年（1998）まで一般に利用されていた。

①「加州金沢城絵図」［（公財）前田育徳会蔵］寛文２年（1662）

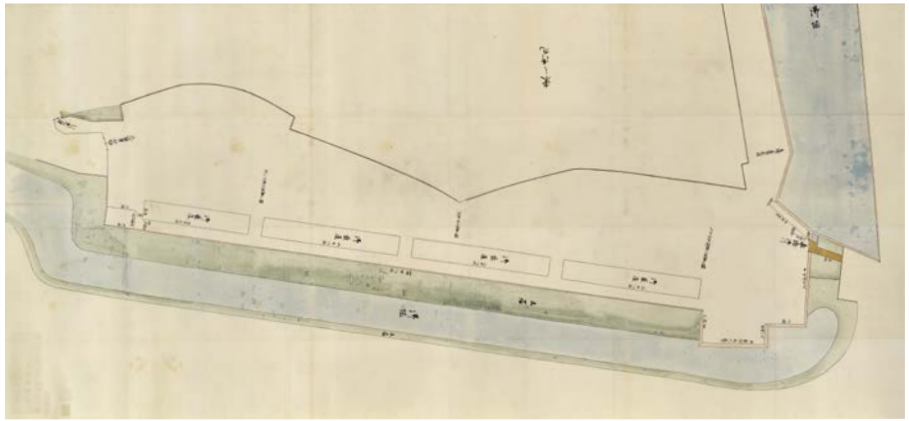
②「加賀国金沢之絵図」［金沢市立玉川図書館蔵］寛文８年～延宝年間（1668 ～ 1681）頃



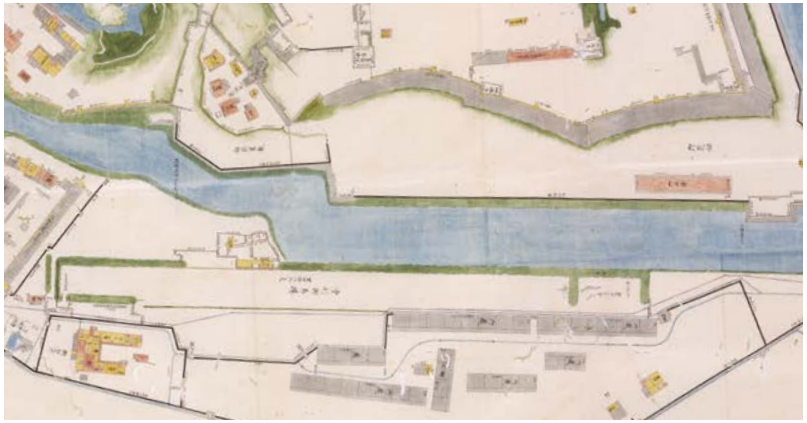
③「金沢城絵図幅」［石川県立歴史博物館蔵］延宝４年～元禄年間（1676 ～ 1704）頃

④「金沢城図（奥村家鎧袋内・箱入）」［金沢市立玉川図書館蔵］18 世紀前半

第５図　いもり堀絵図１



⑤「金沢城中地割絵図甲号」（車橋御門ヨリ高石垣下）［金沢市立玉川図書館蔵］
宝暦９年（1759）以前



⑥「御城中壱分碁絵図」［横山隆昭氏蔵］文政 13 年（1830）

⑦「金沢御城内外御建物絵図」（「薪之御丸辺」「申酉之御櫓辺」「辰巳之御櫓辺」「御厩」「堂形御馬場并御細工所辺」「堂形御蔵」「坂下御門辺」）
［（公財）前田育徳会蔵］天保４～９年（1833～38）頃

⑧「御城分間御絵図」［（公財）前田育徳会蔵］嘉永３年（1850）

第６図　いもり堀絵図２

第４節　既往の調査成果

１．金沢城の発掘調査（第７図・第３・４表）

金沢城跡における埋蔵文化財調査は、昭和 43 年の金沢城学術調査委員会が実施した本丸・二ノ丸等の学術調査が端緒である。昭和 50 ～ 61 年には金沢大学が主体となり、大学施設設置工事に伴う調査を実施している。

平成４～６年には県土木部が所管する都市計画道路整備に伴い、石川県立埋蔵文化財センターが石川門前土橋、車橋門の一部で調査を実施している。平成８年に石川県が金沢城跡の用地を国から取得したことに始まる金沢城公園整備事業に伴い、平成９～ 13 年にかけて石川県立埋蔵文化財センター（平成 10 年以降は（財）石川県埋蔵文化財センター）が二ノ丸内堀・菱櫓、本丸附段、三ノ丸等の調査を実施した。

平成 13 年、石川県教育委員会文化財課に金沢城研究調査室（平成 19 年度に石川県金沢城調査研究所に改組）が設置され、翌年より絵図・文献、埋蔵文化財、建造物、伝統技術（石垣）の４分野から総合的な調査研究が開始された。埋蔵文化財確認調査事業は初期金沢城の解明を目的として平成 14 年度から継続的に実施されている。調査では本丸・東ノ丸を中心にして石垣の構築過程、本丸大手通路（虎口）の変遷過程、本丸の造成状況、庭園遺構の検出など多くの成果がある。

平成 15 年度以降は公園整備事業に係る調査が再開され、いもり堀・河北門・玉泉院丸庭園・橋爪門・鼠多門等で復元整備にかかる確認調査が実施された。このほか、都心地区整備推進事業として（財）石川県埋蔵文化財センターが城の外郭部にあたる堂形で調査している。

２．いもり堀周辺の調査（第８図）

（１）車橋の調査［石川県立埋蔵文化財センター 1996］

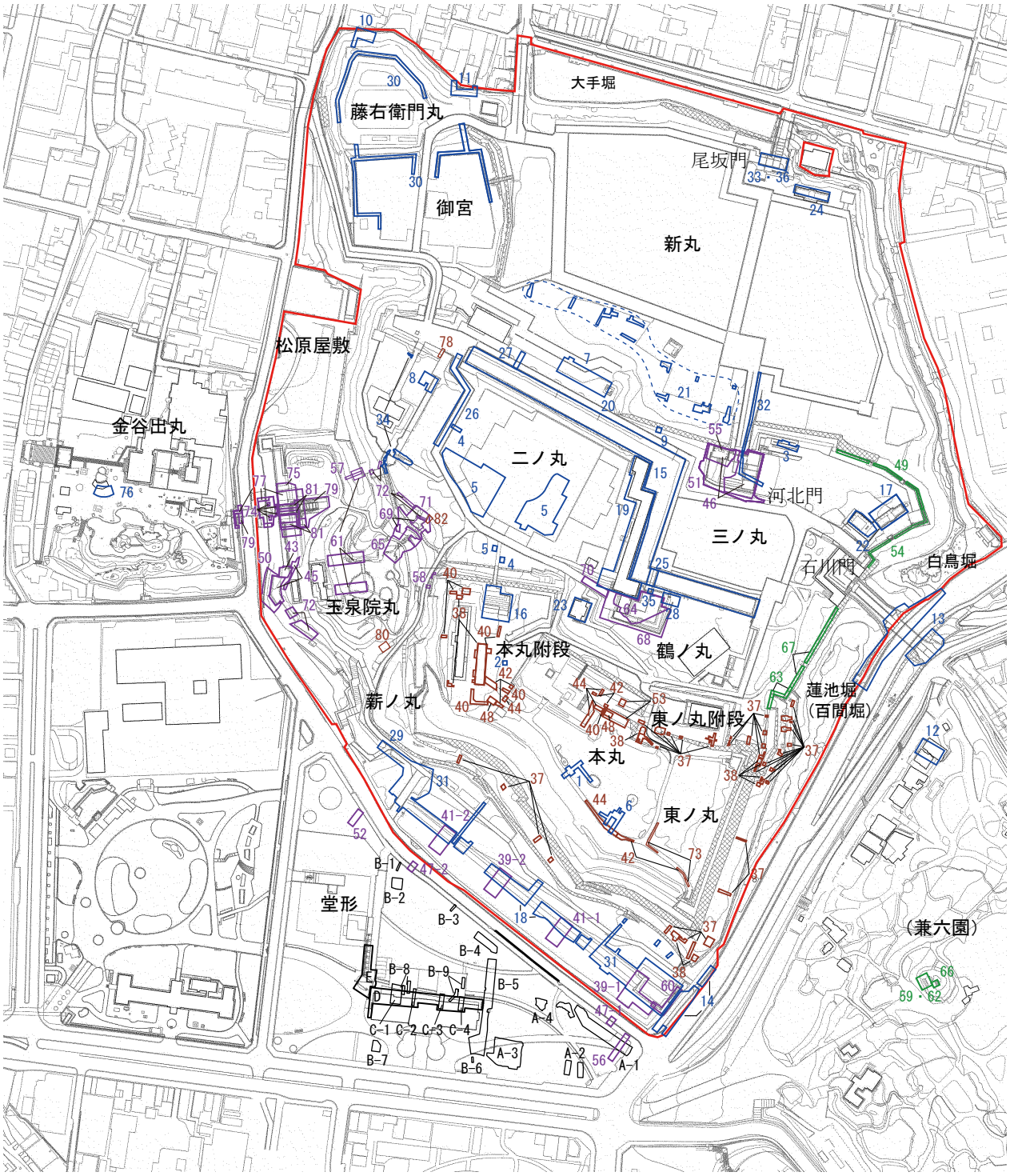
いもり堀調査区の南東に隣接する。平成６年（1994）、道路整備を原因とし、石川県立埋蔵文化財センターが調査した。近世の遺構として東西方向に三条の石垣・石積が検出されており、いずれもいもり堀調査区に延長している。石垣３（1800S）はいもり堀造営以前の構築、石垣２（1934N）は鯉喉櫓台改修に関わる櫓台内部の石積、石垣４（1931S）は鯉喉櫓台東面（1930E）に入角をもって連続する石垣である。

（２）金沢城跡埋蔵文化財確認調査 本丸南（辰巳櫓下）の調査［石川県金沢城調査研究所 2008d］

いもり堀調査区の北側、明治 40 年（1907）に削平された御花畑の残存部に位置する。平成 14・15 年度（2002・2003）に初期金沢城の構造解明に係り、金沢城研究調査室が確認調査を実施した。南東の辰巳櫓南（2002-28 ～ 31 地点）では、東西方向に二条（1801S・1802S）、南北方向に一条（1803W）の石垣を検出した。本丸南堀の北岸に相当する遺構で、文禄～元和年間にかけて、構築・廃絶時期は一様ではないが、重複しつつ存続した。いもり堀の北岸となった御花畑造営に際し、最後まで残っていた 1802S も埋め立てられている。

（３）県庁跡地の調査［石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター 2010・2012］

いもり堀調査区の南側に位置する。一帯は近世において「堂形」と称され、藩政期には米蔵や馬場等があった。石川県庁の移転後の都心地区整備推進事業に係り、平成 15・16・19・20 年度に財団法人石川県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。このうち 15 年度Ｉ区は、いもり堀調査区（南部）2008 年度調査区と重複している。いもり堀調査区と連続する遺構として、馬場跡・辰巳用水管・池状遺構等がある。また 20 年度調査区では、堀跡とされる遺構が検出された。胴木や石材砕片の存在から切石積石垣の護岸が想定されているが、遺構の性格や構築年代の詳細等検討を要する。



史跡指定範囲(H20. 6. 17)
金沢城跡埋蔵文化財確認調査（H14～20, 26, 29, 30, R1）
文化財保存修理に係る埋蔵文化財調査（H19～23）
金沢城公園整備に係る埋蔵文化財調査（H15～30）
都心地区整備に係る埋蔵文化財調査（H15, 16, 19, 20, 24）
その他の埋蔵文化財調査

0　100m

第７図　金沢城跡発掘調査位置図（～令和元年度）

第３表　金沢城跡発掘調査一覧（１）

No.	調査箇所	調査年度	調査主体	調査原因	備考	文献
1	本丸	昭和43(1968)	金大金沢城調委	学術調査	四脚門･礎石建物跡	井上1969･吉岡1985･増山1999
2	本丸附段	昭和43(1968)	金大金沢城調委	学術調査		井上1969･吉岡1985･増山1999
3	三ノ丸	昭和43(1968)	金大金沢城調委	学術調査	川原石石積	井上1969･吉岡1985･増山1999
4	二ノ丸	昭和43(1968)	金大金沢城調委	学術調査	能舞台跡･台所跡･極楽橋付近建物跡	井上1969･吉岡1985･増山1999
5	二ノ丸	昭和44(1969)	県教委･金大	校舎増築	殿舎跡･排水施設･用水路	県教委1970･吉岡1985･増山1999
6	本丸	昭和44(1969)	県教委･金大	学術調査	三階櫓･三十間長屋跡	県教委1970･吉岡1985･増山1999
7	四十間長屋	昭和50(1975)	金大	学生会館別館建設	長屋礎石･櫓石垣	上野1976･吉岡1985･増山1999
8	二ノ丸	昭和52(1977)	金大	学術調査	明治 14 年焼失の御殿跡	佐々木1981･吉岡1985･増山1999
9	三ノ丸～四十間長屋間通路	昭和54(1979)	金大考古学研究室	無線アンテナ設置	大型礎石	佐々木1980･吉岡1985･増山1999
10	藤右衛門丸北側法面裾部	昭和56(1981)	金大考古学研究室	擁壁設置	石垣列･瓦	貞末ほか1986･増山1999
11	黒門横北側懸崖部	昭和61(1986)	金大考古学研究室	境界崖部崩落防止工事	石垣列･切石側溝、瓦	貞末ほか1989
12	兼六園（江戸町推定地）	平成元年(1989)	県埋文センター	店舗改築	17 世紀初期の遺構面（礎石建物等）	県埋文センター1992
13	石川門前土橋（石川橋）	平成4－6(1992－94)	県埋文センター	道路整備	土橋の形成過程　16 世紀後半頃の鍛冶関連遺構等	県埋文センター1997･1998
14	車橋	平成6(1994)	県埋文センター	道路整備	石垣	県埋文センター1996
15	内堀第１次･菱櫓	平成9(1997)	県埋文センター	公園整備（復元整備）	堀･橋脚（埋置された刀･鏡･銭）･菱櫓礎石等	金沢城調査研究所2011d･2012b
16	本丸附段	平成10･12(1998･2000)	(財)県埋文センター	公園整備（復元整備）	階段跡	金沢城調査研究所2019c
17	三ノ丸第１次	平成10(1998)	(財)県埋文センター	公園整備（施設建設）	鉄砲所跡（鍛冶場遺構）、鉄砲部品	金沢城研究調査室2006b
18	いもり堀第１次	平成10(1998)	(財)県埋文センター	公園整備（復元整備）	天正～元和頃の堀･土橋、元和以後の堀･櫓台	三浦1999
19	五十間長屋	平成10－11(1998－99)	(財)県埋文センター	公園整備（復元整備）	石垣内部構造　櫓･長屋礎石、17 世紀初頭の遺構面	金沢城調査研究所2011d･2012b
20	内堀第２次	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備（復元整備）	西半北側石垣の構造把握	金沢城調査研究所2011d･2012b
21	新丸第１次	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備（園路整備）	近代に埋没した堀の範囲確定	金沢城調査研究所2016d
22	三ノ丸第２次	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備（施設建設）	礎石建物（番所跡）、石組井戸	(財)県埋文センター2002a
23	鶴ノ丸第１次	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備（施設建設）	木樋･石樋（辰巳用水）	金沢城調査研究所2016d
24	新丸第２次	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備（施設建設）	16 世紀後半から末期頃の遺構面	(財)県埋文センター2002a
25	橋爪門外橋橋脚基礎	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備（復元整備）	橋脚基礎の構造把握	金沢城調査研究所2011d･2012b
26	二ノ丸園路	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備（園路整備）	礎石、石組遺構	金沢城調査研究所2016d
27	三ノ丸第３次	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備（設備設置）	土坑	金沢城調査研究所2011d･2012b
28	鶴ノ丸第２次	平成12(2000)	(財)県埋文センター	公園整備（復元整備）	16 世紀末期頃の遺構面	金沢城調査研究所2015c
29	いもり堀第２次	平成12(2000)	(財)県埋文センター	公園整備（園路整備）	慶長後半から元和年間の石垣	湊屋･土田2001
30	北ノ丸第１次	平成12(2000)	(財)県埋文センター	公園整備（園地整備）	火葬遺構、空堀跡、石瓦等	金沢城調査研究所2019c
31	いもり堀第３次	平成12(2000)	(財)県埋文センター	公園整備（園路整備）	元和以前の堀･土橋･土俵護岸　金箔瓦	湊屋･土田ほか2001
32	三ノ丸第４次	平成12(2000)	(財)県埋文センター	公園整備（園路整備）	河北門石垣台･礎石、16 世紀後半～末頃の遺構面	金沢城調査研究所2011c
33	新丸第３次	平成12(2000)	(財)県埋文センター	公園整備（園路整備）	尾坂門石段、16 世紀後半～末期頃の遺構面 36 と合わせて尾坂門調査として報告	金沢城調査研究所2016d
34	風呂屋口門等	平成13(2001)	(財)県埋文センター	公園整備（園路整備）	石段、石組溝 数寄屋屋敷調査区として報告	金沢城調査研究所2016d
35	橋爪門枡形	平成13(2001)	(財)県埋文センター	公園整備（園路整備）	土坑、ピット	金沢城調査研究所2015c
36	尾坂門	平成13(2001)	(財)県埋文センター	公園整備（植栽）	石組溝、路面 33 と合わせ尾坂門調査として報告	金沢城調査研究所2016d
37	本丸周辺	平成14(2002)	金沢城研究調査室	保存目的調査	本丸虎口変遷の把握	金沢城調査研究所2008d
38	本丸周辺	平成15(2003)	金沢城研究調査室	保存目的調査	三十間長屋続櫓台石垣の調査等	金沢城調査研究所2008d
39	いもり堀	平成15(2003)	金沢城研究調査室	公園整備（復元整備）	鯉喉櫓台の検出	金沢城研究調査室2004a
40	本丸周辺	平成16(2004)	金沢城研究調査室	保存目的調査	寛永大火以前の２面の遺構面	金沢城調査研究所2008d
41	いもり堀	平成16(2004)	金沢城研究調査室	公園整備（復元整備）	築城当初の堀の規模を確認	金沢城研究調査室2005a
42	本丸	平成17(2005)	金沢城研究調査室	保存目的調査	本丸三階櫓石垣	金沢城調査研究所2014d
43	玉泉院丸	平成17(2005)	金沢城研究調査室	公園整備（石垣修築）	近代の改修、石垣上部の二重塀の基礎構造の把握	金沢城調査研究所2010a
44	本丸	平成18(2006)	金沢城研究調査室	保存目的調査	元和期の大規模造成、初期金沢城の礎石建物	金沢城調査研究所2014d
45	玉泉院丸（南西石垣）	平成18(2006)	金沢城研究調査室	公園整備（石垣修築）	部分修理の把握、初期金沢城石垣	公園緑地課･調査研究所2010

第4表　金沢城跡発掘調査一覧(2)

№	調査箇所	調査年度	調査主体	調査原因	備考	文献
46	河北門	平成18(2006)	金沢城研究調査室	公園整備（復元整備）	残存状況、規模、改修、創建時期の把握	金沢城調査研究所2011c
47	いもり堀	平成18(2006)	金沢城研究調査室	公園整備（復元整備）	南岸の位置確認	金沢城研究調査室2007a
48	本丸	平成19(2007)	金沢城調査研究所	保存目的調査	寛永８年大火以前の大型遺構	金沢城調査研究所2014d
49	石川門（右方太鼓塀）	平成19(2007)	金沢城調査研究所	文化財修理（建造物）	控柱跡の確認	金沢城調査研究所2014c
50	玉泉院丸（南西石垣）	平成19(2007)	金沢城調査研究所	公園整備（石垣修築）	改修範囲と時期、初期金沢城石垣の変遷の確認	公園緑地課･調査研究所2010
51	河北門	平成19(2007)	金沢城調査研究所	公園整備（復元整備）	枡形門創建前（慶長後期以前）の遺構確認	金沢城調査研究所2011c
52	いもり堀	平成19(2007)	金沢城調査研究所	公園整備（復元整備）	南岸の位置確認	金沢城調査研究所2008a
53	本丸	平成20(2008)	金沢城調査研究所	保存目的調査	寛永８年大火以前の大型遺構	金沢城調査研究所2014d
54	石川門（右方太鼓塀）	平成20(2008)	金沢城調査研究所	文化財修理（建造物）	控柱跡の確認	金沢城調査研究所2014c
55	河北門	平成20(2008)	金沢城調査研究所	公園整備（復元整備）	石垣解体調査（ニラミ櫓台、一ノ門頬当）	金沢城調査研究所2011c
56	いもり堀	平成20(2008)	金沢城調査研究所	公園整備（復元整備）	堀の南岸、辰巳用水石管、近世初期の石垣、石列等	金沢城調査研究所2009a
57	玉泉院丸（泉水）	平成20(2008)	金沢城調査研究所	公園整備（遺構確認）	泉水北部の遺構確認	金沢城調査研究所2015d
58	玉泉院丸（いもり坂石垣）	平成20(2008)	金沢城調査研究所	公園整備（遺構確認）	石垣変形箇所の基底部試掘	金沢城調査研究所2019c
59	兼六園栄螺山	平成21(2009)	金沢城調査研究所	文化財修理（建造物）	石垣解体調査	管理事務所･調査研究所2012
60	いもり堀	平成21(2009)	金沢城調査研究所	公園整備（復元整備）	鯉喉櫓台石垣東部の残存状況確認、一部解体	金沢城調査研究所2010a
61	玉泉院丸	平成21(2009)	金沢城調査研究所	公園整備（遺構確認）	泉水中央部､北部の遺構確認（中島､出島､景石等）	金沢城調査研究所2015d
62	兼六園栄螺山	平成22(2010)	金沢城調査研究所	文化財修理（建造物）	石垣解体調査	管理事務所･調査研究所2012
63	石川門（左方太鼓塀）	平成22(2010)	金沢城調査研究所	文化財修理（建造物）	控柱跡の確認	金沢城調査研究所2014c
64	橋爪門	平成22(2010)	金沢城調査研究所	公園整備（復元整備）	二ノ門礎石根固坑、石組暗渠	金沢城調査研究所2015c
65	玉泉院丸	平成22(2010)	金沢城調査研究所	公園整備（遺構確認）	泉水北東部の遺構確認（護岸石組・景石等）	金沢城調査研究所2015d
66	兼六園栄螺山	平成23(2011)	金沢城調査研究所	文化財修理(石垣修築)	石垣・石造物の解体調査	管理事務所･調査研究所2012
67	石川門（左方太鼓塀）	平成23(2011)	金沢城調査研究所	文化財修理（建造物）	控柱跡の確認	金沢城調査研究所2014c
68	橋爪門	平成23(2011)	金沢城調査研究所	公園整備（復元整備）	二ノ門礎石根固坑、石組暗渠、近世初期遺構	金沢城調査研究所2015c
69	玉泉院丸	平成23(2011)	金沢城調査研究所	公園整備 (遺構確認・復元整備)	色紙短冊積石垣下の遺構確認	金沢城調査研究所2018d
70	橋爪門	平成24(2012)	金沢城調査研究所	公園整備（復元整備）	石組暗渠、石垣台、枡形路面	金沢城調査研究所2015c
71	玉泉院丸	平成24(2012)	金沢城調査研究所	公園整備（復元整備）	色紙短冊積石垣周辺と滝石組上部の遺構確認	金沢城調査研究所2018d
72	玉泉院丸（南石垣）	平成25(2013)	金沢城調査研究所	公園整備 (石垣修築・復元整備)	石垣の解体調査、近世初期の土塁確認	公園緑地課･調査研究所2017
73	東ノ丸	平成26(2014)	金沢城調査研究所	保存目的調査	東ノ丸庭園の遺構確認	金沢城調査研究所2018c
74	玉泉院丸	平成26(2014)	金沢城調査研究所	公園整備（遺構確認）	鼠多門・鼠多門橋の遺構確認	金沢城調査研究所2015a
75	玉泉院丸	平成27(2015)	金沢城調査研究所	公園整備（遺構確認）	鼠多門の遺構確認	金沢城調査研究所2015e･2016a
76	金谷出丸	平成27(2015)	金沢市埋文センター	建物新築	塀または柵跡、瓦廃棄土坑、石組遺構	金沢市埋蔵文化財センター2016a
77	玉泉院丸	平成28(2016)	金沢城調査研究所	公園整備（遺構確認）	鼠多門・鼠多門橋の遺構確認	金沢城調査研究所2016e･2017a
78	数寄屋屋敷北	平成29(2017)	金沢城調査研究所	保存目的調査	切石積石垣確認調査	金沢城調査研究所2018a
79	玉泉院丸	平成29(2017)	金沢城調査研究所	公園整備（遺構確認）	鼠多門・鼠多門橋の遺構確認	金沢城調査研究所2018a
80	玉泉院丸（南東）	平成30(2018)	金沢城調査研究所	保存目的調査	切石積石垣確認調査	金沢城調査研究所2018e･2019a
81	玉泉院丸	平成30(2018)	金沢城調査研究所	公園整備（遺構確認）	鼠多門の遺構確認	金沢城調査研究所2019a
82	玉泉院丸（北）	令和元(2019)	金沢城調査研究所	保存目的調査	切石積石垣確認調査	金沢城調査研究所2019d
A	県庁跡地（堂形）	平成15(2003)	(財)県埋文センター	都心地区整備(確認調査)	焼米（堂形米蔵関連遺物）、近世初期以前土塁遺構	(財)県埋文センター2010
B	県庁跡地（堂形）	平成16(2004)	(財)県埋文センター	都心地区整備(確認調査)	足軽番所、堂形馬場	(財)県埋文センター2010
C	県庁跡地（堂形）	平成19(2007)	(財)県埋文センター	都心地区整備(施設建設)	古代～近世の遺構面	(財)県埋文センター2012
D	県庁跡地（堂形）	平成20(2008)	(財)県埋文センター	都心地区整備(施設建設)	堂形建物、石垣、堀跡、古代～中世の遺構面	(財)県埋文センター2012
E	県庁跡地（堂形）	平成24(2012)	(財)県埋文センター	都心地区整備(施設建設)	石列、石組遺構	(公財)県埋文センター2014c

県教委:石川県教育委員会　県埋文センター:石川県立埋蔵文化財センター　(財)県埋文センター:石川県教育委員会･(財)石川県埋蔵文化財センター(2013年度から公益財団法人)
金沢城研究調査室:石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室　金沢城調査研究所:石川県金沢城調査研究所
管理事務所･調査研究所:石川県金沢城･兼六園管理事務所　石川県金沢城調査研究所　公園緑地課･調査研究所:石川県土木部公園緑地課　石川県金沢城調査研究所

車橋調査区　石垣２（1800S・左）・３（1934N）　西から

本丸南（辰巳櫓南）調査区　遠景　北西から

本丸南（辰巳櫓南）調査区　1801S（上）・1802S　南から

本丸南（辰巳櫓南）調査区　1801S　西から

本丸南（辰巳櫓南）調査区　1802S　南から

本丸南（辰巳櫓南）調査区　1803S　西から

第８図　既往の調査区

第３章　調査の概要

第１節　調査の目的と対象区域

１．調査の目的

本報告の対象となるいもり堀の埋蔵文化財発掘調査は、金沢城公園整備事業を原因とし、いもり堀の復元のために、堀の深さや幅および法面の形状、鯉喉櫓台石垣の規模・様式等の基礎的データを得ること、および復元いもり堀に伴う取水路設置を目的としたものである。

２．対象区域

いもり堀は東ノ丸・本丸の南から玉泉院丸の西に至る金沢城の南西側を囲む外堀である。本報告の対象区域は堀東部の北岸および南岸に相当するが、本書では前者をいもり堀北部、後者をいもり堀南部として報告している。

調査箇所について、最小の単位である一続きの発掘掘削範囲を調査地点、近接する調査地点のまとまりが展開する区域を調査区とする。本報告では調査区単位を優先し、鯉喉櫓台調査区･北岸調査区･土橋調査区・稲荷屋敷下調査区・南岸調査区の順に記述した。また、調査成果の報告については、調査地点の調査年次・着手時期に関わらず、調査区全体の特徴や調査目的等に応じた順序だてで記述している。

鯉喉櫓台調査区の調査は、平成 10 年度（1998-1 地点）・平成 12 年度（第３次：2002-2 地点）・平成 15 年度（2003-1 地点）・平成 21 年度（2009 地点）に行われた。各調査地点が隣接・重複していることから、一体的に報告する。

北岸調査区の調査は､平成 10 年度(1998-2 地点)･平成 15 年度(2003-2 地点)･平成 16 年度(2004-1･2 地点）に行われた。各調査地点が隣接・重複していることから、一体的に報告する。

土橋調査区の調査は、平成 10 年度（1998-3 地点）と平成 12 年度（第３次：2000-3 地点）に行われた。両調査地点が重複していることから、一体的に報告する。

稲荷屋敷下調査区の調査は、平成 12 年度（第２次：2000-1 地点）に行われた。

南岸調査区の調査は､平成 18 年度（2006-1･2 地点)･平成 19 年度（2007 地点)､平成 20 年度（2008 地点）で調査を実施した。各調査地点間の距離が離れているため、地点ごとに報告する。

また、発掘調査と並ぶ現地調査の一環として、平成 16･17 年度にボーリング調査を実施した。ボーリング調査の範囲は、いもり堀北部（平成 16 年度）および本丸南堀（平成 17 年度）の内部各４箇所である。このほか、平成８・９・18 年度には、いもり堀復元のための基礎的データを得ることを目的に、石川県土木部公園緑地課がいもり堀北部および本丸南堀、鯉喉櫓台石垣の内部の 15 箇所で、ボーリング調査を実施しており、第７章でその結果も併せて報告する。なお、調査地点の名称については、発掘調査地点との混同を避けるため、例えば平成 16　年度の第１地点を H16-1　地点と称することとした。

第２節　調査の方法

１．調査区・調査地点の設定

調査区・調査地点については、いもり堀の復元のための基礎的情報の確認および取水路設置を目的として、条件に適した箇所を選別し設定した。各調査区･調査地点の区分については第９図に示した。また、調査地点をさらに小区画に区分して調査を進めた部分があり、詳細については第４章掲載の各

調査区の区割図を参照されたい。

鯉喉櫓台調査区については、1998-1・2000-2 地点をＡ（１～３）～Ｅ（１～３）区の小区画に区分して調査を進めたが、2003-1・2009 地点では小区画を設定していない。北岸調査区では、1998-2 地点をＦ～Ｉ区に区分して調査を行ったが、2003-2、2004-1・2 地点においては区画割を行っていない。土橋調査区では、1998-3 地点全体をＩ区として区分し、2000-3 地点についてＥ１～６・Ｂ１～４・Ｗ１～６の小区画に区分して調査した。稲荷屋敷調査区の調査（2000-1 地点）では区画割を行わず調査した。南岸調査区の 2006-1・2、2007 地点は小規模なため区画割を行わなかったが、2008 地点ではＡ～Ｈ区の小区画を設定して調査を行った。

２．調査の方法

発掘調査

発掘調査においては、近代以後に堆積した土層を重機により掘削し、近世以後（一部近世以前も）の遺構埋土および堆積土・造成土について人力で掘削し、精査した。

調査記録については、写真撮影・実測図の作成を行った。写真撮影は 35 ㎜および 120 ㎜のフィルムカメラでカラー・白黒・リバーサルの各種フィルムを用いたほか、デジタルカメラも使用した。実測図については、土層断面図・個別遺構の詳細平面図は直営、空中写真測量および三次元レーザー計測による調査地点の全体平面図、石垣立面・断面図は業者委託により作成した。

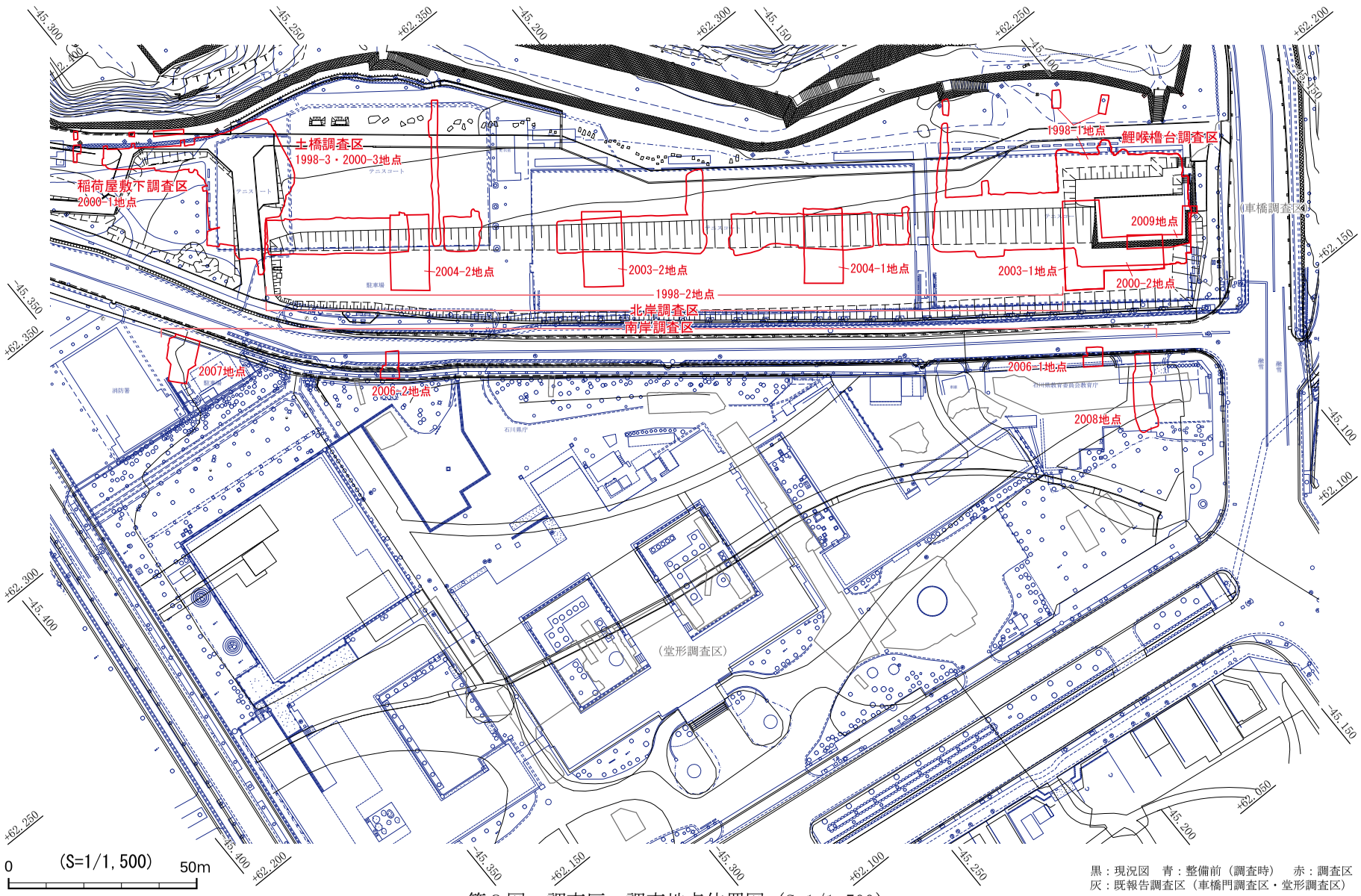
ボーリング調査

ボーリング調査は委託業務として実施した。ボーリング調査は、発掘では到達できない深度からの土壌の採取が可能であり、大型遺構や大規模造成土の規模・構造、造成以前の旧地形等の探求に関して有効である。調査の詳細については第７章にまとめた。

出土品整理

出土品整理の経過・内容については既に第１章第２節で述べているが、出土遺物の洗浄・記名・分類・接合および実測・トレースの大部分については、石川県教育委員会から委託を受けて（財）石川県埋蔵文化財センターが平成 14 ～ 22 年度に実施し、一部を直営で平成 30 ～令和元年度に実施している。遺物の写真撮影は、平成 30 ～令和元年度に直営で行った。報告書の原稿作成および編集等は、平成 30 年度～令和元年度にかけて実施した。また、いもり堀北岸調査区出土の越前赤瓦および本丸南堀出土の大型木製品についての検討にあたり、指導・助言を受けた（越前赤瓦：吉岡埋蔵文化財専門委員長ほか（平成 19 年度）、木製品：麓建造物専門委員（令和元年度））。

このほか、平成 30 ～令和元年度にかけて、出土資料の自然科学的調査として、出土木製品について、樹種同定、放射性炭素年代測定および塗膜分析を業者委託により実施した。これらの調査成果については第６章にまとめた。



黒：現況図　青：整備前（調査時）　赤：調査区
灰：既報告調査区（車橋門調査区・堂形調査区）

第９図　調査区・調査地点位置図（S=1/1,500）

第４章　遺構

第１節　いもり堀北部の調査

１．調査区の概要（第 10 図）

いもり堀の埋蔵文化財調査は、堀東部の北岸および南岸で実施されており、本書では堀北岸で行われた調査をいもり堀北部の調査、南岸で行われた調査をいもり堀南部の調査として報告する。

いもり堀北部の埋蔵文化財調査は、平成 10・12・15・16・21 年度の５ヶ年にわたって実施された。調査範囲が広範にわたるため、鯉喉櫓台調査区（平成 10・12（第３次）・15・21 年度）・北岸調査区（平成 10・15・16 年度）・土橋調査区（平成 10・12（第３次）年度）・稲荷屋敷下調査区（平成 12 年度（第２次））に分けて報告する。

なお、いもり堀北部における基本的な層序は、以下のように大別される。

Ⅰ層：近現代層。明治 40 年（1907）のいもり堀の埋立土、旧陸軍時代の造成土、金沢大学時代のテニスコート造成土等からなる。

Ⅱ層：近世後期（宝暦大火（宝暦９年（1759））以後）から明治 40 年にいもり堀が埋め立てられる直前までの土層で、いもり堀の底および土羽の堆積層に対応する。

Ⅲ層：近世前期（いもり堀構築後～宝暦大火以前）の土層で、Ⅲａ～Ⅲｄ層に細分される。Ⅲａ層はいもり堀内外の堆積土に対応する。Ⅲｂ層～Ⅲｄ層は鯉喉櫓台石垣の構築および改修に伴う土層で、Ⅲｂ層は鯉喉櫓台石垣の寛文４年（1664）改修に伴う造成土、Ⅲｃ層は鯉喉櫓台石垣の正保元年（1644）改修に伴う造成土、Ⅲｄ層は鯉喉櫓台石垣構築（寛永大火（寛永８年（1631））後）に伴う造成土にそれぞれ対応する。

Ⅳ層：近世初期の土層で、いもり堀構築に伴う造成土（Ⅳａ層）、本丸南堀（いもり堀に先行する堀）埋立土（Ⅳｂ層）に細分される。

Ⅴ層：近世初期の本丸南堀段階の土層で、周辺表土層（Ⅴａ層）、本丸南堀第２段階の自然堆積層（Ⅴｂ層）、本丸南堀第２段階の造成土（Ⅴｃ層）、本丸南堀第１段階の造成土（Ⅴｄ層）に細分される。

Ⅵ層：本丸南堀構築以前の土層。

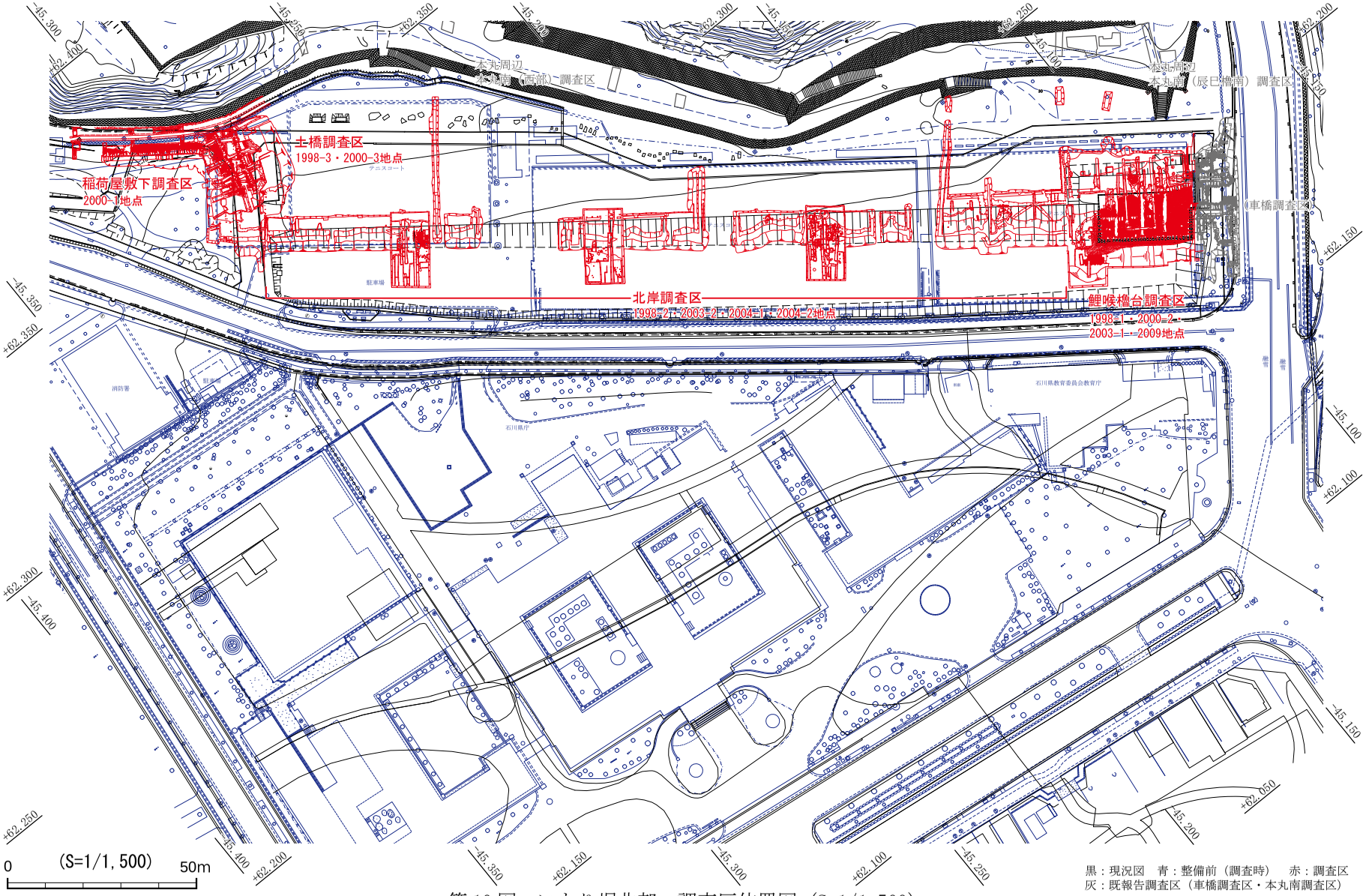
２．調査の結果

鯉喉櫓台調査区

（１）概要（第 11 ～ 20 図）

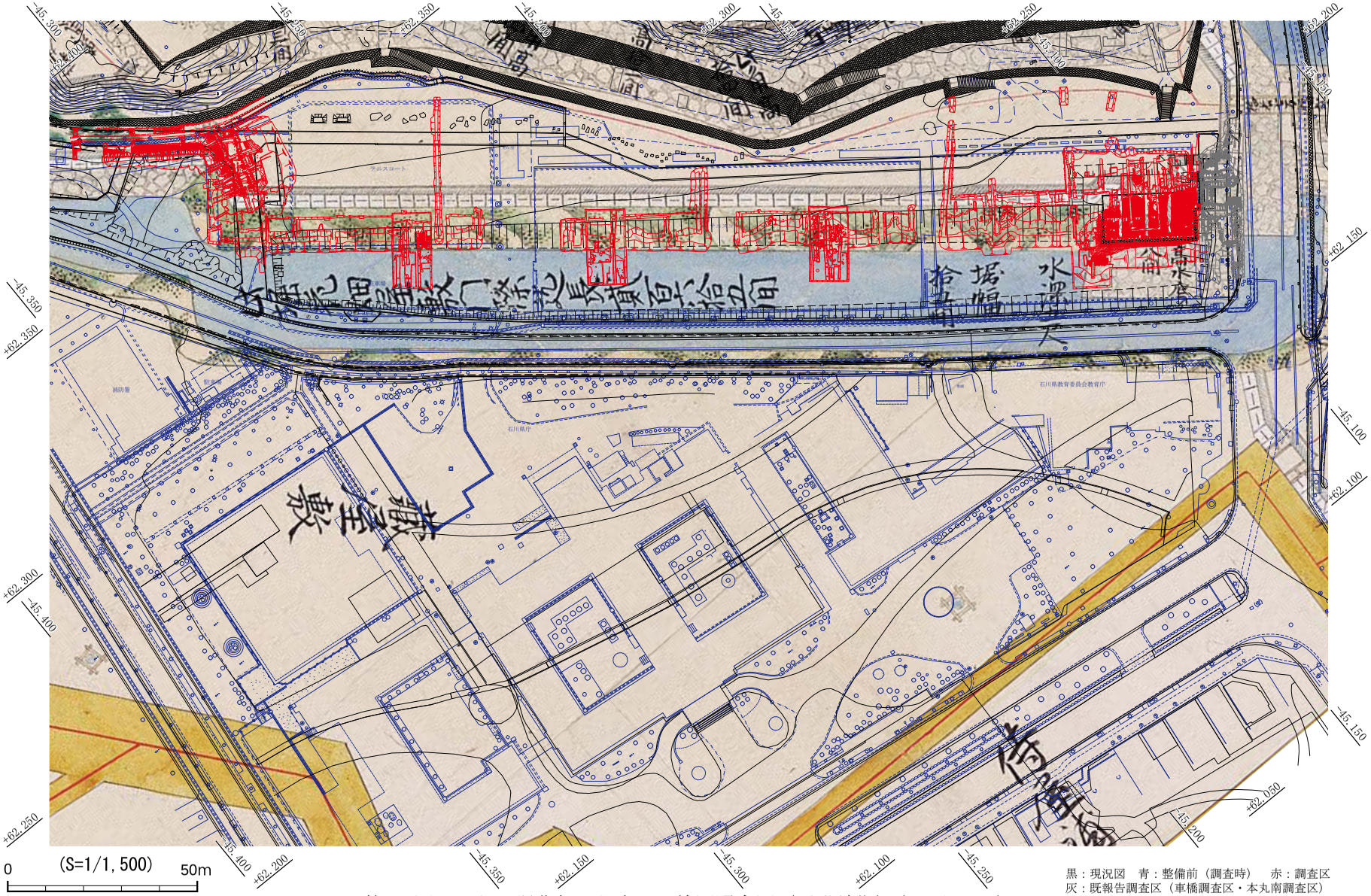
本調査区は近世の絵図によると、金沢城の南端、いもり堀東端の鯉喉櫓台が位置した地点にあたる。南東に隣接する車橋調査区は、平成６年度（1994）に石川県立埋蔵文化財センターによって発掘調査されている［石川県立埋蔵文化財センター 1996］。

調査着手前は、平成９年までテニスコートとして利用されていたため、標高約 28.6 ｍで平坦に整地されていた。平成 10 年度調査（1998-1 地点）において重機によりテニスコート造成土を除去し、車橋調査区で確認された南東 - 北西方向に延びる石垣 1934N（車橋門報告書では石垣２として報告）、1800S（同石垣３）、1931S（同石垣４）の続きを検出した。また、1931S から続く鯉喉櫓台（1930E・1930S・1930W）を平面的に検出した。さらに、土層断面の観察から、いもり堀北岸および櫓台の張り出し以北は南に向かって傾斜する土羽であり、櫓台の張り出しは河原石を石垣内に充填する事により造成されていることが分かった。また調査地点北端で、北に向かって傾斜し東西に延びる落ち込みの南端が検出された。この落ち込みは、いもり堀全体の調査成果を総合的に判断して、いもり堀に先



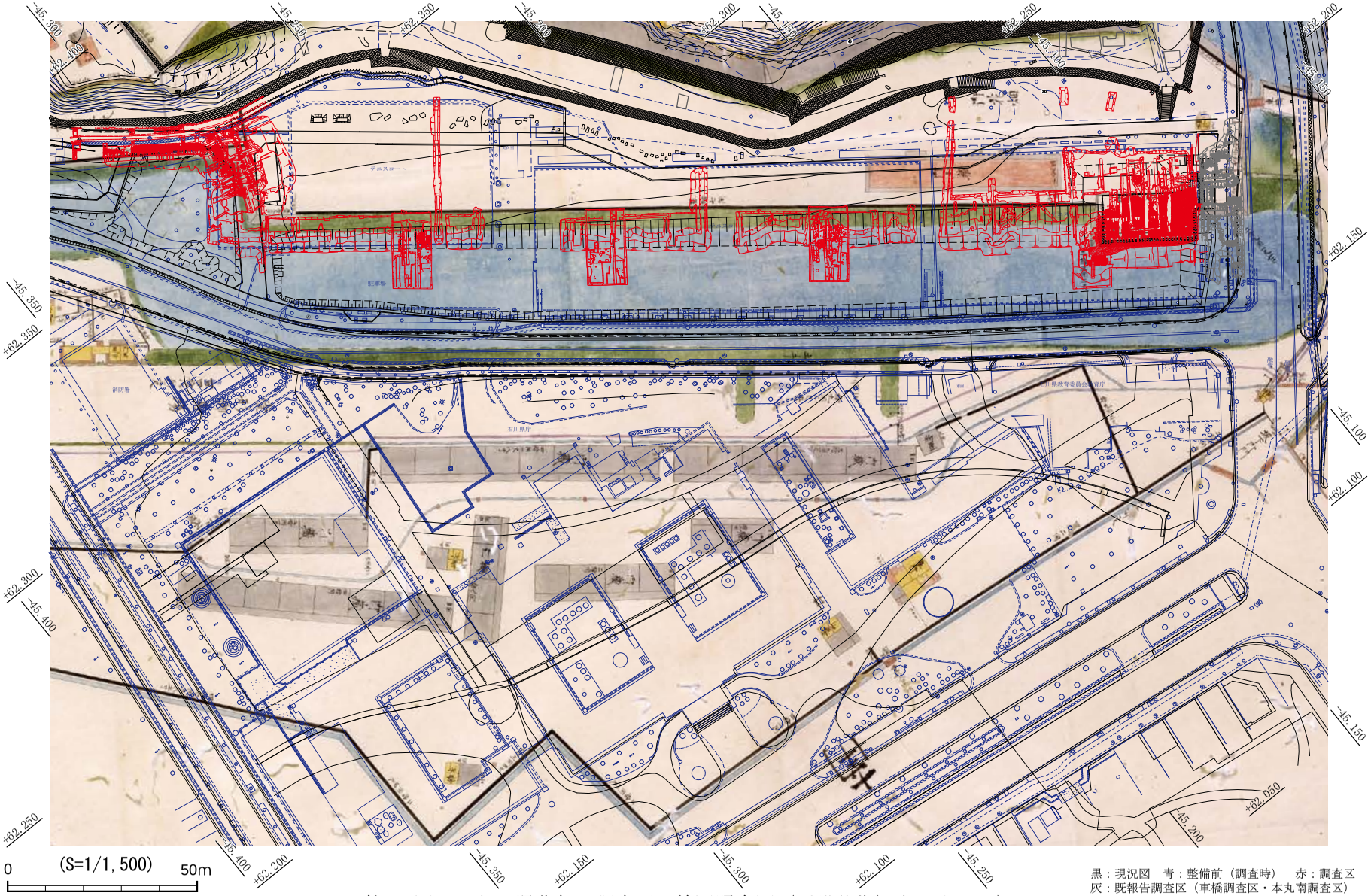
黒：現況図　青：整備前（調査時）　赤：調査区
灰：既報告調査区（車橋調査区・本丸南調査区）

第 10 図　いもり堀北部　調査区位置図（S=1/1,500）



黒：現況図　青：整備前（調査時）　赤：調査区
灰：既報告調査区（車橋調査区・本丸南調査区）
絵図：「加賀国金沢之絵図」（金沢市立玉川図書館蔵）

第 11 図　いもり堀北部　調査区・絵図照合図（近世前期）（S=1/1,500）



0 (S=1/1,500) 50m

第 12 図　いもり堀北部　調査区・絵図照合図（近世後期）（S=1/1,500）

黒：現況図　青：整備前（調査時）　赤：調査区
灰：既報告調査区（車橋調査区・本丸南調査区）
絵図：「御城中壱分基絵図」（横山隆昭氏蔵）

立ち存在した堀（本丸南堀）ではないかと考えられた。

鯉喉櫓台周辺は、明治40年代以前に建設された旧陸軍第七連隊被服庫等のコンクリート基礎や溜桝等により破壊されている箇所が多々あり、テニスコート造成土の下には煉瓦ブロックや土管の残骸などが散在していた。平成12年度調査（2000-2地点）では可能な限りこれらを除去し、旧陸軍が削平したレベルでの鯉喉櫓台の姿を検出すること、鯉喉櫓台設置以前と設置後の周辺景観の変遷を把握することに努めた。また、石垣台外周を地表から約2.4ｍ地点（標高約26ｍ、現在の湧水点）まで重機掘削し、石垣石の石材加工状況や改修痕跡を観察し、裏込層の断面精査等の詳細調査を行った。平成15年度調査（2003-1地点）では、更に深く掘り下げ、いもり堀の堀底の深さ・形状、鯉喉櫓台石垣（1930S・W）の規模・形状および根石の確認を行った。平成21年度調査（2009地点）では、いもり堀南東端に位置する鯉喉櫓台の復元整備に伴い、過年度に実施した調査を補完するため、上面・立面の一部について精査した。

石垣および石積みの配置については、車橋調査区で検出された1934Nの続きは、櫓台東部で張り出しの付け根に沿って検出しているが､絵図ではこの石垣を確認できない。この続き部分に関しては、調査の結果、鯉喉櫓台の改修に伴う内部の石積みとして性格付けている。本丸南堀の南に位置する石垣1800Sは1934Nと向かい合う位置で検出しているが、これも絵図では確認できない。鯉喉櫓台石垣とは直接結びつかず、石の加工状況が金沢城跡の石垣では古相を示す。鯉喉櫓台構築以前に単独で存在した石垣と考えられる。また、車橋調査区で検出した1931Sの続きを調査区東端部で検出しており、1930Eの北端と入角を形成していた。

櫓台石垣各面および裏石積（1933N・1934N)、1800Sで使用されている石垣石は、控えの長さや面の加工状況などに違いが見られるが、これらは時代による相違と考えられ、その認識は本調査で判明した栗石の積まれ方や土層堆積状況と整合している。これら調査成果を総合し、鯉喉櫓台の周辺景観については、①本丸南堀のみが存在し、いもり堀はまだ掘削されていない段階、②本丸南堀が廃絶し、いもり堀が掘削された段階、③鯉喉櫓台が設置された段階、④櫓台設置後１度目の改修が行われた段階（正保元年（1644))、⑤櫓台設置後２度目の改修が行われた段階（寛文４年（1664))、という５つの段階を踏んで変遷していると想定される。

（２）遺構

①鯉喉櫓台石垣（第15・17～23・24①～⑤・25・26①②・27～30・31①図）

鯉喉櫓台はいもり堀に南南西方向に張り出しており、石垣は南南西、西北西、東南東に面を向けて築かれているが、煩雑な表記を避けるため、本報告では櫓台石垣に関しては南南西を南、西北西を西、東南東を東として記述した。

検出した櫓台石垣は、堀に向かって突出した主要部分は長辺23.4ｍ、短辺11.8ｍの規模で、現存上面の標高28.6ｍを測る。鍵の手に折れ曲がりながら東側の車橋門へ続いていた。明治40年(1907)に旧陸軍により上部が撤去され、いもり堀とともに埋め立てられており、発掘調査で基底部（堀底）からの残存部分約9.6ｍを確認した。また､石垣周辺の堀底について､寛文４年改修頃（標高19.0ｍ）と構築当初（標高18.0ｍ）の新旧２面を確認している。寛文８年の「加賀国金沢之絵図」（金沢市立玉川図書館蔵）では高さ８間（約14.5ｍ）と記載されていることから、現存石垣上面より約4.9ｍ削平されたと考えられる。

石材は全て戸室石で、青戸室石が多数を占める。特に築石には比較的多様な面形状の粗加工石が用いられ、面はノミ・ツル等の工具により丁寧に加工され、平坦に整えられていたが、西面（1930W）のものは南面（1930S)・東面（1930E）に比べるとやや小ぶりの石で、面の調整が粗く、凹凸の残るものが多い。また、大型刻印を残す旧材も見られた。積みは布積みを基本とするが、やや波打っていたり、乱積み･落とし積み状を呈する部分も見られた。隅角部は角石、角脇石、角尻石で構成される。

角石、角脇石は精緻に整えられた切石材で、角石はほぼ直方体状を呈し、大面側では角尻石が１石、小面側では角脇石が２石隣接する。二番角脇石への角石の掛かりは総じて小さい。角石と角尻石の上面が一直線に揃っており段差が見られない。隅角稜線部には片幅２～６㎝の明瞭な縁取り加工が施されていた。間詰石には戸室石が多く用いられたが、小型の河原石も西面や根石付近等の箇所で比較的多く見られた。戸室石間詰には、石口の隙間に合わせた、略三角形ないし台形に加工した板状の材（概ね 10 ㎝弱の厚さ）が用いられたが、板状材のほかに控えの長い（概ね 20 ㎝前後）楔状のものも見られた。

堀底の根石は隅角部では切石材を使用していた。角石では石面周縁部を削り込み（上部は上段の築石の石面に揃えるように加工されている）、瘤状に残された内側には精緻なノミ加工が施されていた。角脇石では石面上部を削り込み、上段の築石の石面に揃えるように加工されており、瘤状に残された下部には精緻なノミ加工が施されていた。西面では根石だけではなく根石直上の石（角石・角脇石）にも同様の削り込み加工が見られる。また、根石前面には、多量の戸室チップを含む層が確認でき、現地で石材の調整等が行われたことがうかがえる。

刻印は大型のものを残す旧材の転用も見られたが、概して少ない（南面で８種 15 石、西面で７種９石）。また、南面の一部の築石の上面に、石を積む順番を書いたものと考えられる漢数字（二十五、二十六等）が縦書きで朱書きされたものを確認した。

裏込めは栗石で充填されており、大（長辺の平均 25.4 ㎝、短辺の平均 18.1 ㎝、重量の平均 6.8 ㎏）・中（長辺の平均 19.9 ㎝、短辺の平均 13.7 ㎝、重量の平均 3.1 ㎏）・小（長辺の平均 15.3 ㎝、短辺の平均 10.5 ㎝、重量の平均 1.4 ㎏）の粒径に区分できた。栗石（大）は櫓台の西・南・東側で確認され、栗石（中）は石垣 1933N・1934N に伴って見られ、栗石（小）は栗石（中）の下位で確認されたことから、栗石（小）は構築時鯉喉櫓台石垣の裏込め、栗石（中）は正保元年（1644）改修の裏込め、栗石（大）は寛文４年（1664）改修の裏込めに対応すると考えられる。このほか、南西・南東の隅角部で、楔状の敷金５点（南西３、南東２）と敷金が置かれていたとみられる痕跡２箇所（南東）を確認した。また、堀の水位は、石垣南面西側の標高約 27.5 ｍ（堀底から約 8.6 ｍ）の辺りで排水用の石樋を検出したことから、通常 27.5 ｍ以下と推測される。これらの石垣の特徴および文献記録から、現存石垣は寛文４年（1664）の改修後（金沢城石垣編年５期）の姿を残していると考えられる。なお、西面のいもり堀法面に接する部分も、同様の特徴を示しており、先行する石垣が残されることなく改修を受けたと考えられる。また、南西および南東角の一部を除いた上部のほぼ全面に、宝暦大火により溶解した鉛瓦の付着痕が見られた。

②鯉喉櫓台石垣寛文４年改修に伴う遺構（SX01、土留石垣）（第 15･18･21 ～ 23･24 ⑥･31 ②③･32･33 図）

SX01 は鯉喉櫓台石垣西面の改修に際し、石垣前面のいもり堀土羽を掘り込んだ、平面規模約９×４ｍの大規模な掘り込みである。瓦・礫を多く含む土砂で埋め戻され、その前面の堀底側に土砂流出防止のための土留石垣が構築された。土留石垣の築石は全て戸室石で、青戸室石が多い傾向にある。粗加工石積だが、一部に割面や自然面を残したものも見られる。また、面調整については、鯉喉櫓台石垣と比べるとやや粗い傾向にある。高さは約 3.7 ｍを測る。

③鯉喉櫓台石垣正保元年改修に伴う遺構

櫓台内部を構成する栗石の中から、絵図では確認できない北面の石積みを２列検出した。車橋調査区から続く石垣 1934N（車橋門調査報告書では石垣２）およびその西側で 1930S に平行して延びる 1933N で、これらは鯉喉櫓台の正保元年（1644）改修に伴う内部の石積みと考えられる。

石垣 1934N（第 16・17・27・28・34 ①・35 ①②・36・37 図）

調査時に裏石積１と呼称していた北面の石積みで、車橋調査区の石垣２からの延長である。本調査区では延長８ｍを検出し、車橋調査区での検出分を合わせると 18.8 ｍを測る。本調査区での検出

最大高は1.6ｍ（最高点の標高28.58ｍ）で、22石を確認している。根石は確認できていない。車橋調査区の石垣４（1931S）最上部から約6.8ｍの距離でほぼ並行に並ぶ。この石積みは、北に面する石垣1800S前面の焼土層およびその上層（鯉喉櫓台石垣構築当初の裏込め：Ⅲｄ層）を掘り込み、掘方を粒径が中位の栗石を多量に含む層（Ⅲｃ層）で埋めて構築されている。

確認された石材は、全て戸室石であった。築石の積みは、面が揃っておらず、上部の石が下部の石より前に迫り出していた。あえて勾配を言うなら、ほぼ垂直な積みであった。縦目地が通っており、石垣の積みと言うよりは、石垣石を崩れない程度に積み上げたような印象である。

面の加工痕には、線状および滴状のノミ痕が認められるが、自然面、割面を残すものも見られる。刻印は６石の正面に６種類確認している。その内訳は、「○」１石、「□」１石、「×」１石、「⊕」１石、「卍」１石、「◯◯◯」１石である。

石垣1800Sとの間層にみられる栗石を多く含む層は、1934Nを設置する際の掘方を埋めた層と考えられる。南の掘方は1930Sに伴う栗石（寛文４年（1664）改修）によって埋められているため検出していない。また、石材の特徴から、寛永期以前の石を使用していると考えられる。

石垣1933N（第15・16・29・30・34②④図）

調査時に裏石積２と呼称していた北面の石積みで、検出全長約15.7ｍを測る。検出最大高は1.8ｍ（最高点の標高28.29ｍ）で、29石を確認している。根石は確認していない。石垣1930Sとは面の検出最上部間が約6.8ｍでほぼ平行関係にある。石積みの西端は、1930Wとは重ならない。一方、東端は1930Eから約５ｍ西で検出している。石材は全て戸室石である。積み方は面が揃っておらず、1934N同様、石垣石を崩れない程度に積み上げたという印象である。

面の加工痕は、1934N同様、線状、滴状のノミ痕が認められるが、自然面、割面を残すものも見られる。刻印は２石の面に２種類確認している。その内訳は、「瓢箪」１石、「丸弧」１石である。

掘方は判然としないが、1934N同様、石積み前面にも掘方があって、石積み設置後そこに栗石を埋め込んだと考えれば、前面の栗石層がその埋土とも考えられる。また、石垣裏込めの精査により、面の上部から控え、石尻にかけては、栗石は人頭大程度のものが使われており、櫓台南面石へと続く。1934N同様、寛永期以前の石を使用していると考えられる。

④石垣1931S（第17・38図）

車橋調査区から続く石垣（報告書では石垣４）の西端部で、1930Eと入角を形成する。調査では青戸室石の粗加工石による６石、1.8ｍを検出しており、車橋調査区での検出分を合わせた延長は7.8ｍを測る。築石には方形ないし長方形を呈する規格化された粗加工石が用いられ、面は丁寧に加工され、平坦に整えられていた。積みは布積みである。間詰石には石口の隙間に合わせて石を加工しているものが見られた。これらの特徴から、金沢城石垣編年５期（寛文～元禄年間頃（1661～1704）の石垣とみられ、寛文４年改修の鯉喉櫓台石垣と一体のものと考えられる。

⑤いもり堀（第15・18・31・39～41）

櫓台の西側で、北岸の土羽面を検出した。また、土層観察により、いもり堀構築当初の土羽を構成する盛土層（Ⅳａ層）を確認した。盛土は基本的に礫の多い砂質土からなり、検出した土羽の幅は約11ｍであった。また、前述したが、堀底は寛文４年改修頃（標高19.0ｍ）と構築当初（標高18.0ｍ）の新旧２面を確認している。鯉喉櫓台の背後から調査区東端にかけての状況を見ると、構築当初のいもり堀南東端には櫓台は設けられなかったと考えられる。正保元年（1644）石垣改修時に掘り込まれたため、一部で構築当初のいもり堀土羽の状況が明らかでない部分も見られるが、堀北岸が後述する石垣1800Sに連続していた可能性がある。

出土遺物は、瓦が多く出土しているが、鯉喉櫓台石垣裾付近の堀堆積層（Ⅱ層）から、宝暦９年（1759）の大火で被災したとみられる鉛瓦・銅板・銅釘がまとまって見られた。

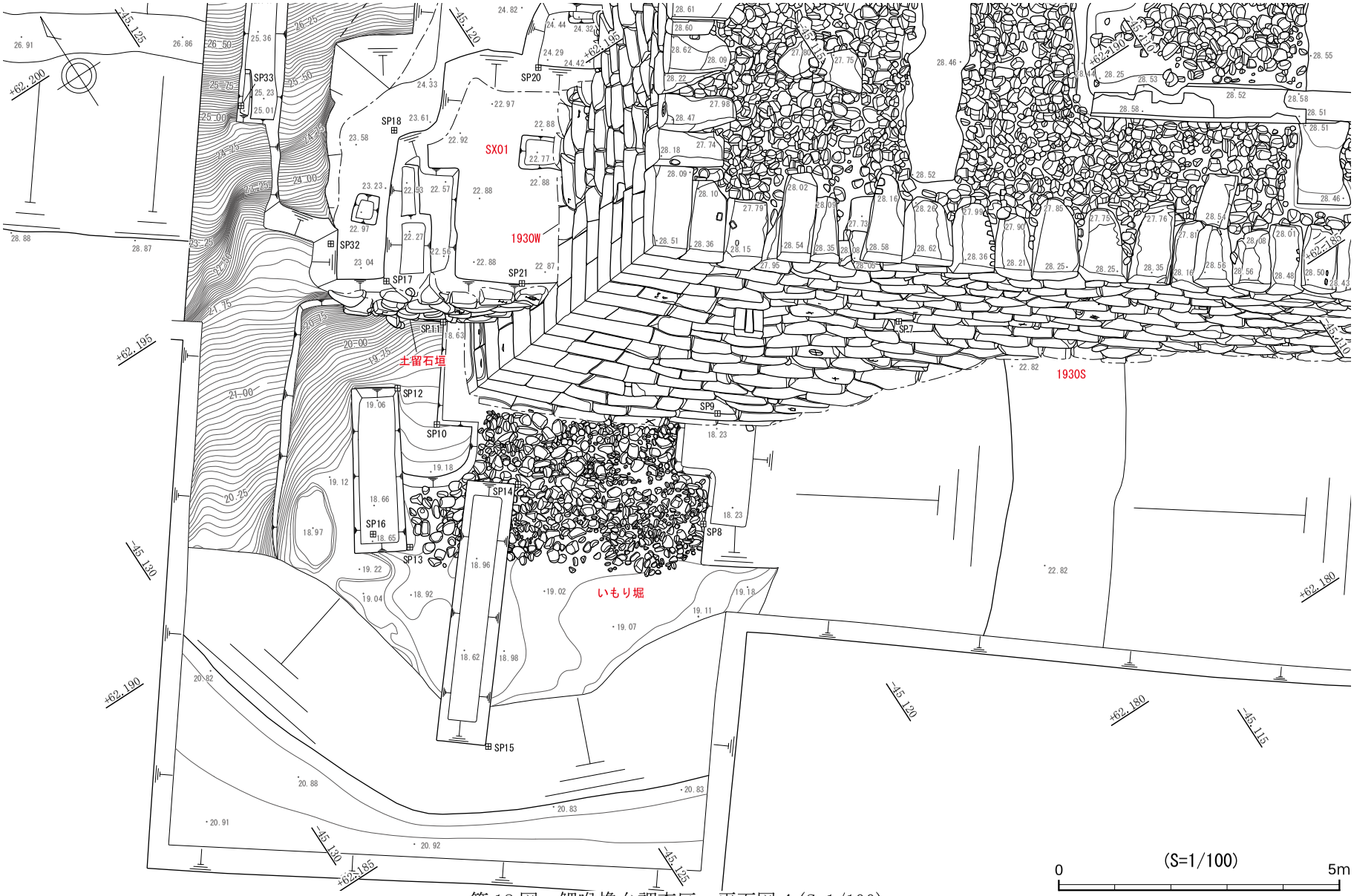
第 13 図　鯉喉櫓台調査区　全体図（S=1/300）

第 14 図　鯉喉櫓台調査区　区割図（S=1/300）

第 15 図　鯉喉櫓台調査区　平面図 1 (S=1/100)

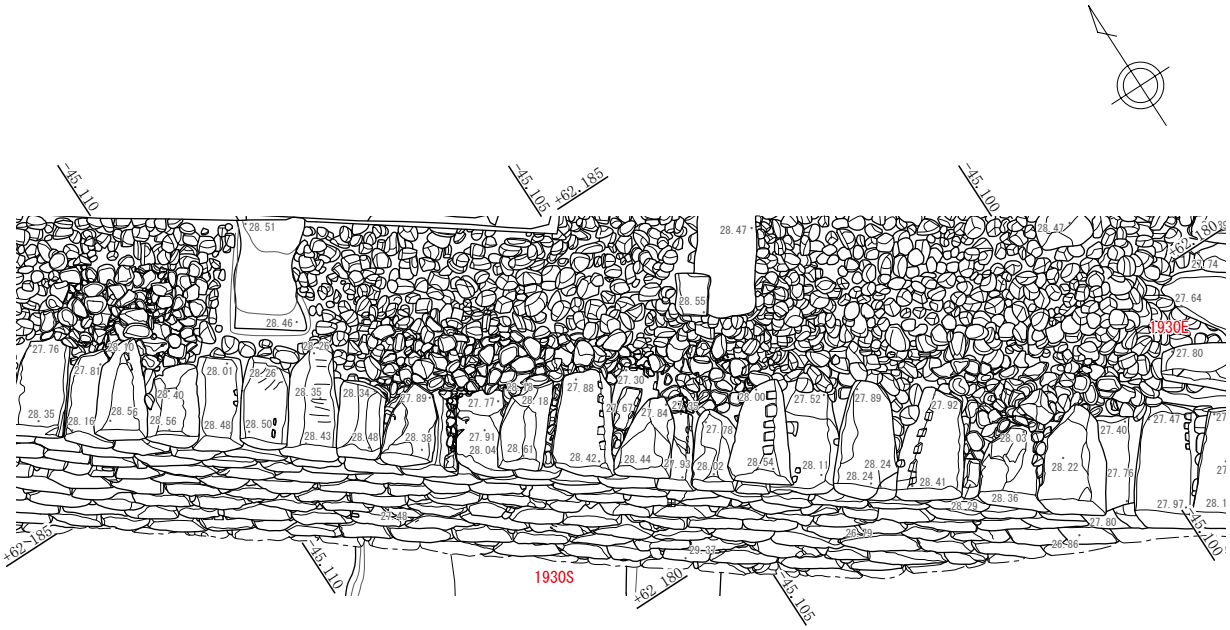
第 16 図　鯉喉櫓台調査区　平面図 2 (S=1/100)

第 17 図　鯉喉櫓台調査区　平面図 3 (S=1/100)

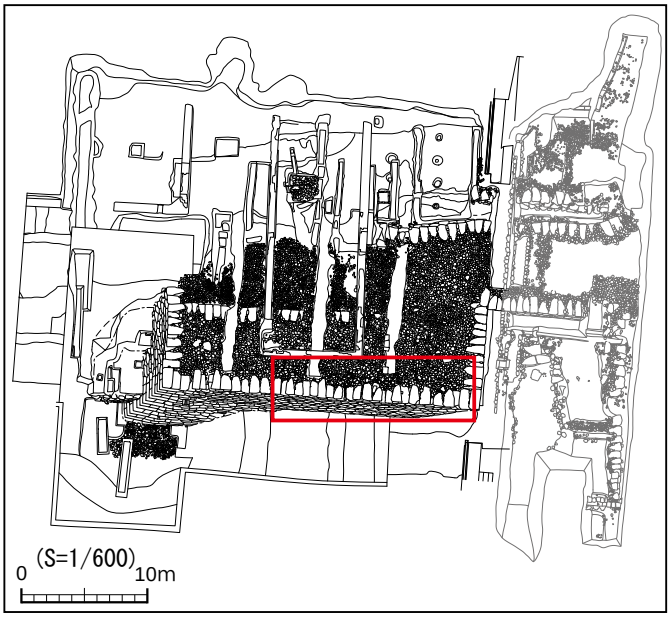


第 18 図　鯉喉櫓台調査区　平面図 4 (S=1/100)

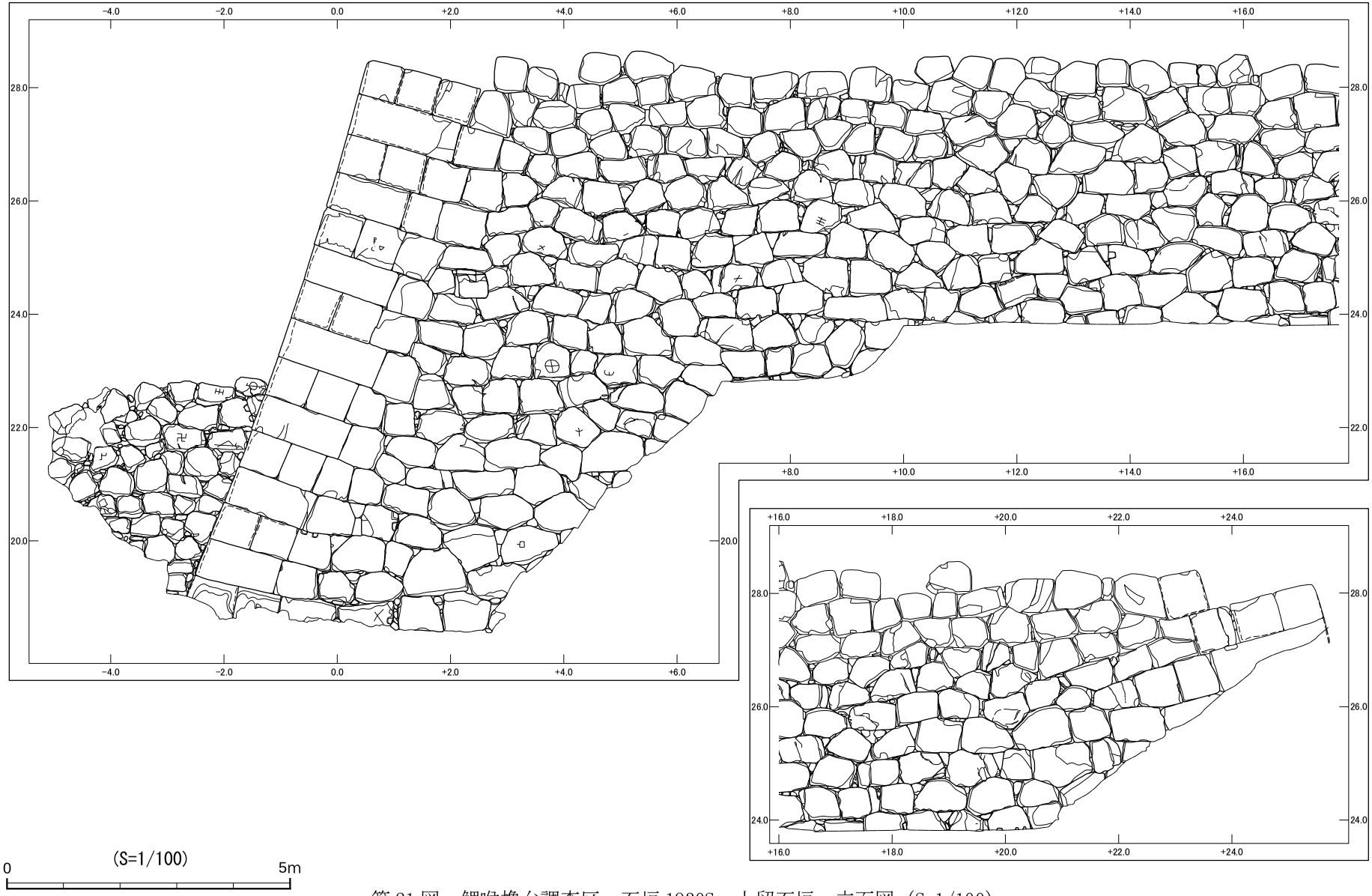
第 19 図　鯉喉櫓台調査区　平面図 5 (S=1/100)



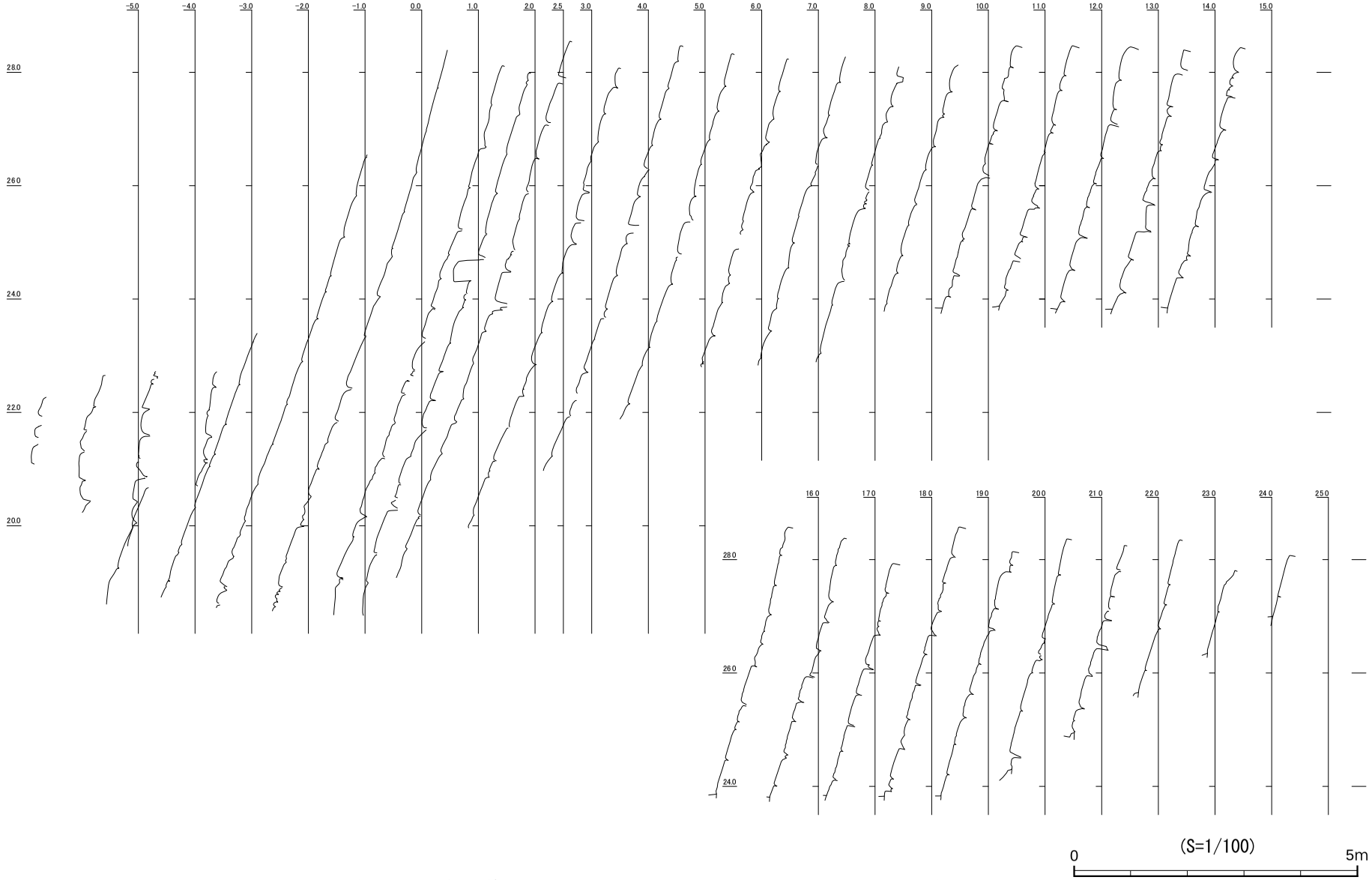
＊本図は、平成 21 年度調査時に平成 15 年度調査終了後に埋め戻した土を再掘削した際、原位置から移動した石を撤去した後、石垣 1930S 上面について再実測した図である。



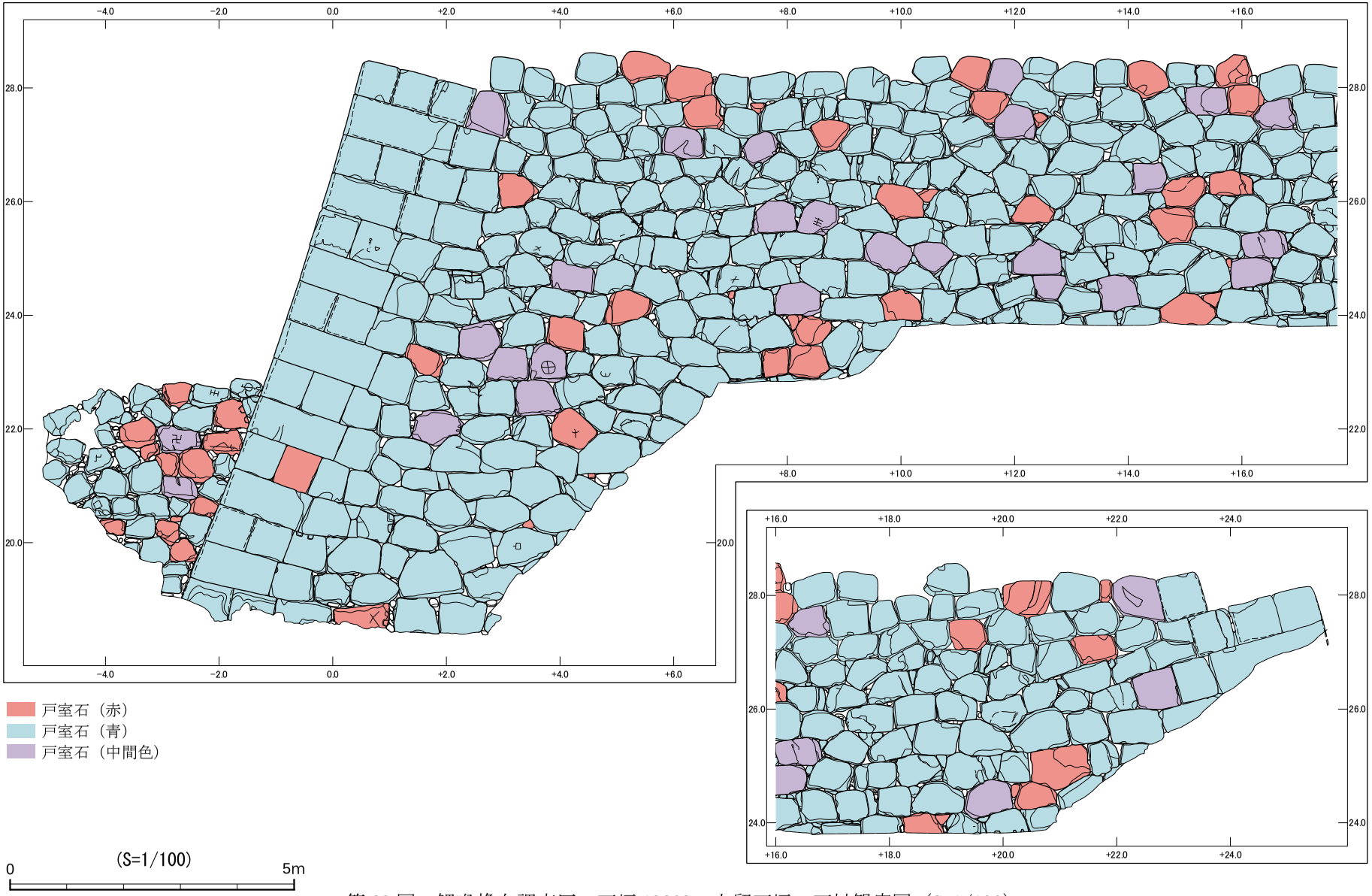
第 20 図　鯉喉櫓台調査区　平面図６（石撤去後）（S=1/100）



第 21 図　鯉喉櫓台調査区　石垣 1930S・土留石垣　立面図（S=1/100）



第 22 図　鯉喉櫓台調査区　石垣 1930S・土留石垣　垂直断面図（S=1/100）



第 23 図　鯉喉櫓台調査区　石垣 1930S・土留石垣　石材観察図（S=1/100）

①1930S　隅角部の石加工（東側）

稜線部の縁取り加工

合端の切り合わせ加工

角脇石に隣接する築石側面の合端調整に、丁寧な縦ノミ加工が見られた

角尻石の築石との合端は角石側よりやや粗く仕上げられていた

②1930S　間詰石

板石状

クサビ状（控えが長い）

③1930S　基底部の様相

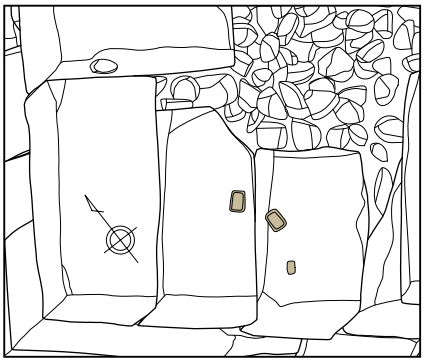
④1930S 朱書

「二十六」

「二十□」

⑤1930S　敷金・敷金痕跡検出状況

【南西角】



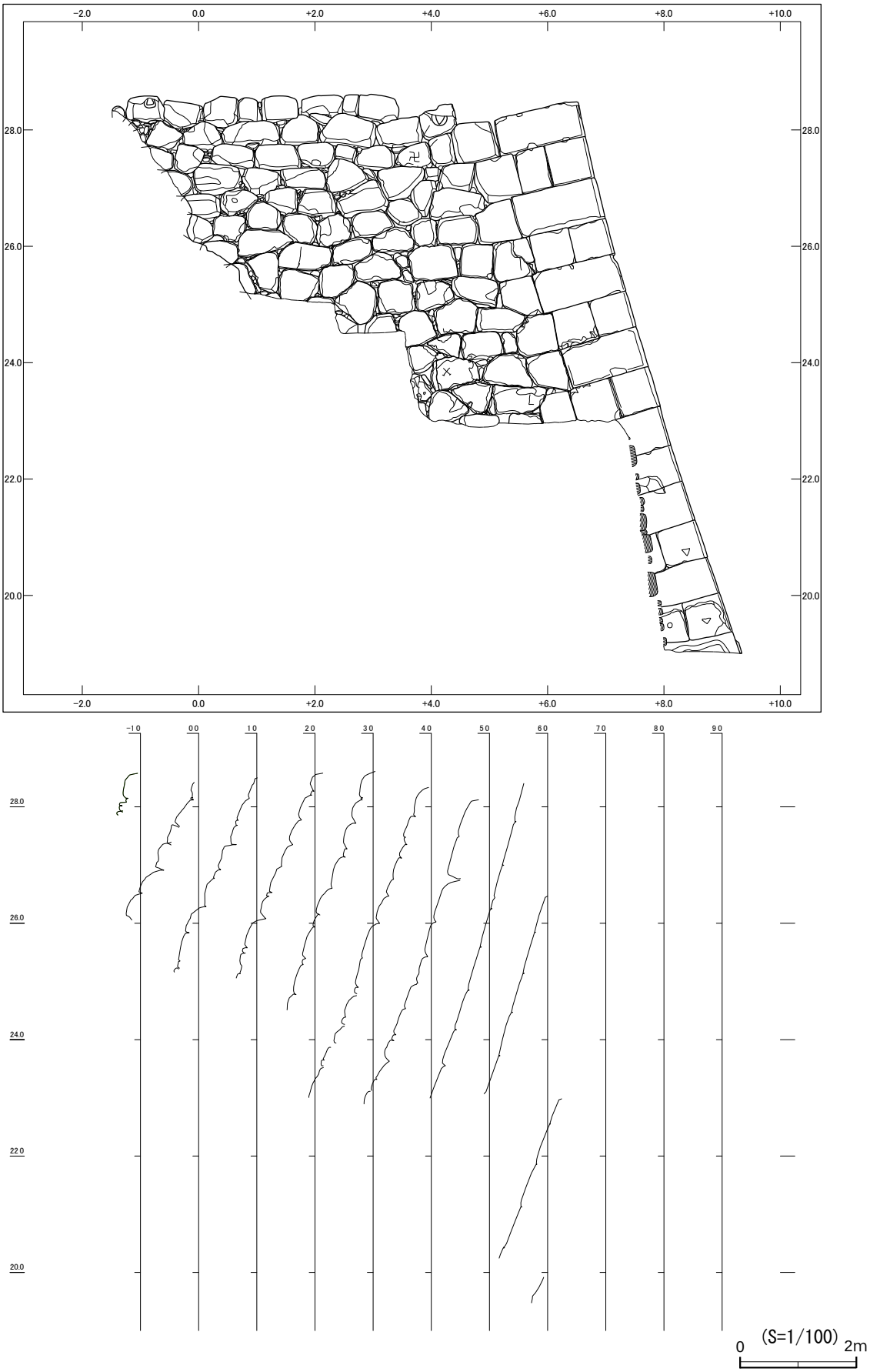
【南東角】

敷金・敷金痕跡

0　(S=1/50)　1m

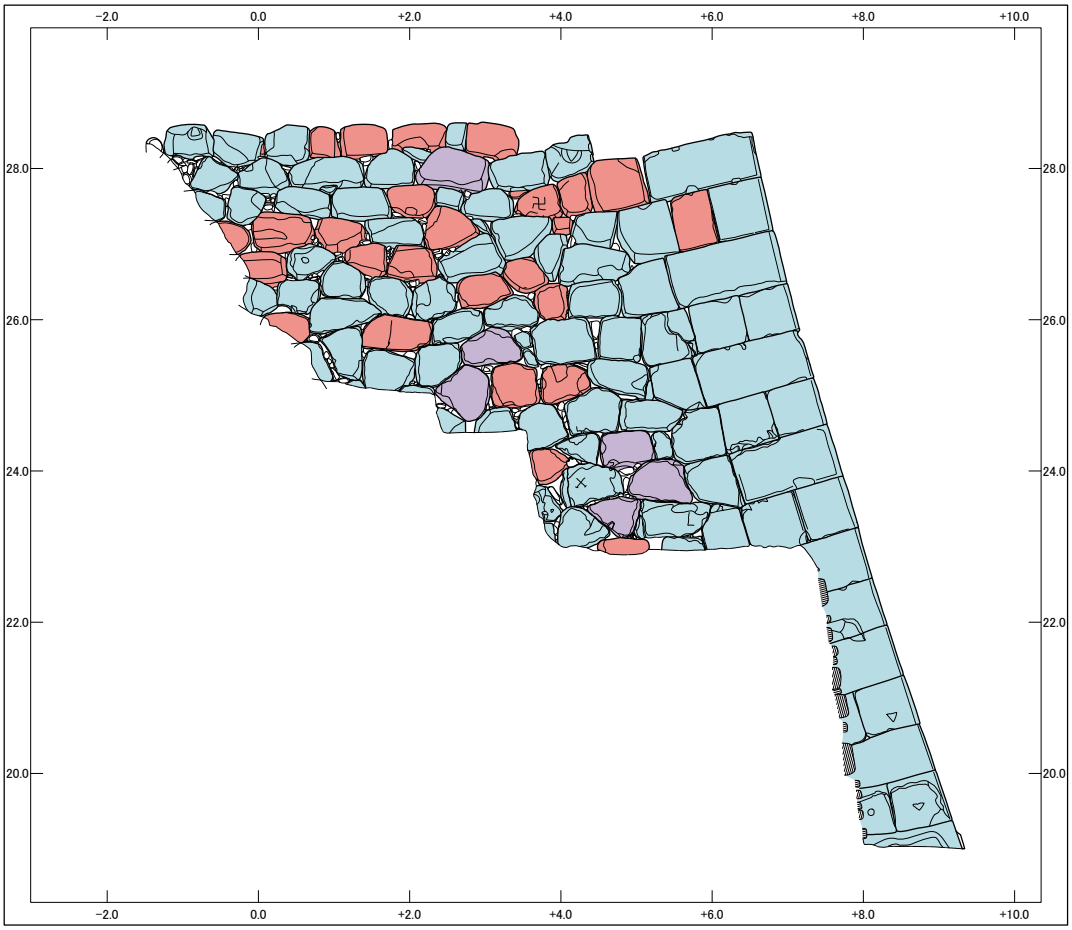
⑥土留石垣　基底部の様相

第 24 図　鯉喉櫓台調査区　石垣 1930S・土留石垣　石材観察状況

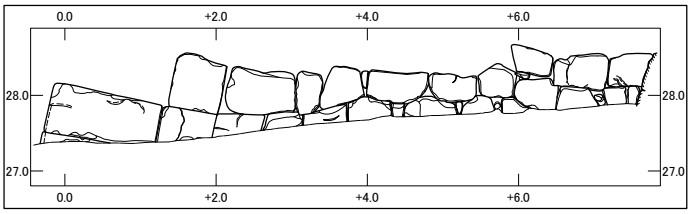


第 25 図　鯉喉櫓台調査区　石垣 1930W　立面図・垂直断面図 (S=1/100)

①1930W石材観察

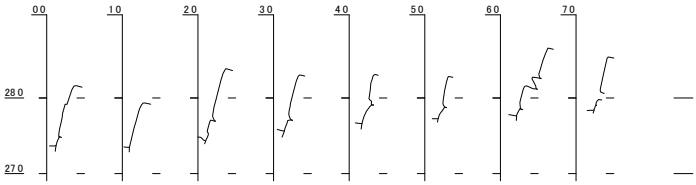


③1930E　立面図

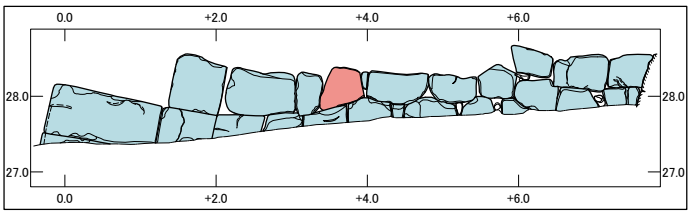


②1930W　基底部の様相

④1930E垂直断面図



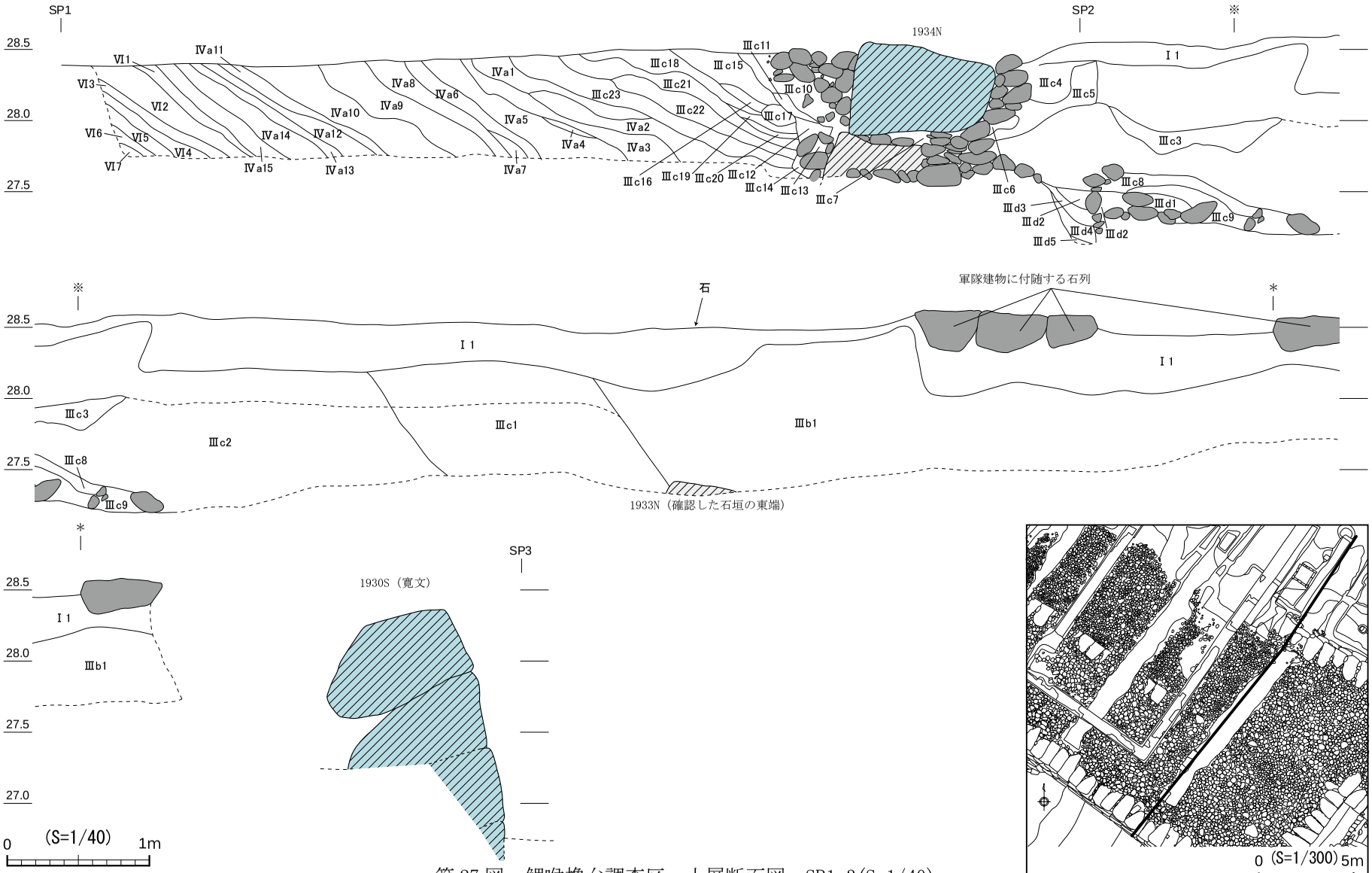
⑤1930E　石材観察図



戸室石（赤）
戸室石（青）
戸室石（中間色）

0　(S=1/100)　2m

第 26 図　鯉喉櫓台調査区　石垣 1930W　石材観察図・写真、1930E　立面図・垂直断面図・石材観察図 (S=1/100)



第 27 図　鯉喉櫓台調査区　土層断面図　SP1-3(S=1/40)

Ⅰ層：近現代層
Ⅰ1　旧陸軍時代の攪乱

Ⅲb層　近世前期：鯉喉櫓台石垣（寛文４年改修）に伴う造成土
Ⅲb1　裏込栗石　大粒

Ⅲc層　近世前期：鯉喉櫓台石垣（正保元年改修）に伴う造成土
Ⅲc1　裏込栗石　Ⅲb1層よりやや小さい
Ⅲc2　裏込栗石　Ⅲb1層より小粒
Ⅲc3　暗褐色土　径５㎝以下の礫含む　炭粒・焼土多量に含む　遺物少量あり
Ⅲc4　灰褐色礫混土　径１～２㎝の礫多い　栗石も少量入る
Ⅲc5　灰色礫混土　径１～２㎝の礫多い　栗石も少量入る　鉄分の沈着多い
Ⅲc6　暗灰褐色礫混土　径１～２㎝の礫多い　鉄分の沈着多い
Ⅲc7　Ⅲc6層に似ている
Ⅲc8　暗灰褐色土　ややシルト質　濁白色シルト・淡黄色シルトブロック・径１㎝程の礫含む
Ⅲc9　Ⅲc8層+鉄分沈着
Ⅲc10　暗褐色砂礫土　径１～３㎝の礫・栗石多く含む　最下に鉄分の沈着＝SP29-30断面Ⅲc1層
Ⅲc11　黄白色砂質土　径１㎝以下の礫含む
Ⅲc12　淡褐色砂質土　径１㎝以下の礫含む
Ⅲc13　Ⅲc12層に似ている
Ⅲc14　黄白色シルト質土
Ⅲc15　黄灰色砂質土　濁灰白色シルトブロック・径２～３㎝の礫・炭含む
Ⅲc16　黄褐色砂質土　径１㎝以下の礫・炭含む
Ⅲc17　暗黄褐色砂質土　径１㎝以下の礫・炭含む
Ⅲc18　淡黄褐色砂質土　径３㎝以下の礫含む
Ⅲc19　淡黄橙褐色砂質土　径１㎝程の礫含む
Ⅲc20　黄褐色砂質土　径２㎝以下の礫多く含む
Ⅲc21　淡黄灰色砂質土　径５㎝以下の石多く含む
Ⅲc22　淡黄灰褐色砂質土　径１～５㎝の石多く含む
Ⅲc23　暗褐色シルト質土　径１～５㎝の礫多く含む　黄橙色シルトブロック含む＝SP29-30断面Ⅲc8層

Ⅲd層　近世前期：鯉喉櫓台石垣構築に伴う造成土
Ⅲd1　暗褐色土　淡黄白色砂質土ブロック入る　この層より下で見られる栗石は、Ⅲc2層よりも小粒で、構築時の栗石が残っているとみられる
Ⅲd2　橙褐色砂質土　径２㎝以下の礫含む
Ⅲd3　灰褐色砂質土　径２㎝以下の礫含む
Ⅲd4　灰白色砂質土　黄灰色砂質土ブロック入る
Ⅲd5　淡黄褐色砂質土　径２㎝以下の礫含む

Ⅳa層　近世初期：いもり堀構築に伴う造成土
Ⅳa1　黄灰褐色砂質土　しまりあり　径５㎝以下の礫含む
Ⅳa2　暗褐色砂質土　淡黄灰色シルトブロック含む　径１～４㎝の礫含む
Ⅳa3　暗黄灰色砂質土　１㎝程の礫多い
Ⅳa4　濁淡灰シルト質土　径１㎝程の礫多い
Ⅳa5　淡黄褐色砂質土　径５㎝以下の石・礫非常に多い
Ⅳa6　淡褐色砂質土　径２㎝以下の礫多く含む
Ⅳa7　褐色礫混土　径３㎝以下の礫多く含む
Ⅳa8　淡灰色砂質土　径１㎝以下の礫少量含む
Ⅳa9　暗黄褐色砂礫層　径１～６㎝程を中心に10～15㎝の石も含む　石が中心
Ⅳa10　濁黄褐色砂礫層　径１～６㎝程を中心に10～15㎝の石も含む　石が中心
Ⅳa11　黄褐色粗砂層　径１㎝以下の礫含む
Ⅳa12　黄褐色砂礫層　径３㎝以下の礫多い
Ⅳa13　黄褐色粗砂層　径１㎝以下の礫含む
Ⅳa14　黄褐色砂礫層　径６㎝以下の礫多い
Ⅳa15　褐色砂礫層　径３～10㎝の石多く含む

Ⅵ層　本丸南堀構築以前の層：地山か
Ⅵ1　灰色砂　径５㎝以下の小石混
Ⅵ2　灰色砂　径１㎝以下の礫含む
Ⅵ3　灰色砂　径１㎝以下の礫多く含む　やや褐色がかる
Ⅵ4　灰色砂　径１㎝以下の礫含む
Ⅵ5　灰色砂　径１㎝以下の礫多く含む　やや褐色がかる
Ⅵ6　灰色砂　径１㎝以下の礫含む
Ⅵ7　灰色砂　径１㎝以下の礫多く含む

第 28 図　鯉喉櫓台調査区　土層注記　SP1-3

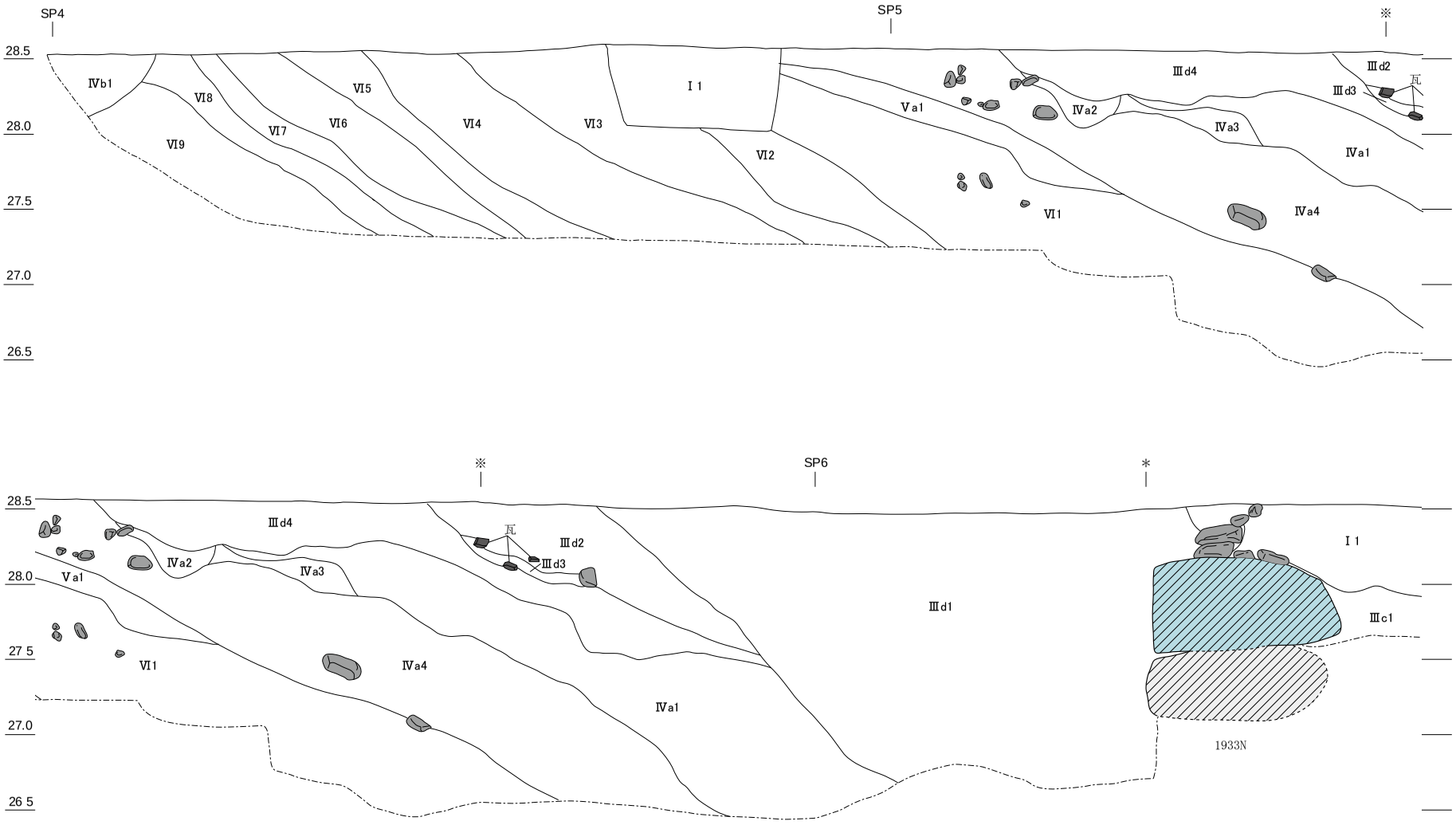
⑥いもり堀構築以前の遺構

石垣 1800S（第 17・34 ③・35 ①③・36 ②図）

絵図に記載されていないが、後述する本丸南堀の南側で検出された石垣で、堤の南面を構成していた可能性がある。本調査区では戸室石を５石（青戸室３石、赤戸室が２石）、検出長 1.7 ｍを確認し、車橋調査区での検出分（石垣３）を合わせると延長 11 ｍとなる。積みは落とし積みの部分が目立つ。根石は確認していない。石垣 1934N とは面を向き合って約 1.3 ｍの間隔を持ってほぼ並行する。築石は割石で、面の形状が揃っておらず、控えも短い。また、面は自然面および割面のみで、割面が目立つ。刻印は確認されていない。河原石の間詰石が多用されていた。裏込めは栗石を主体とし、抽出した栗石 100 個の大きさを計測したところ、その平均値は長辺 14.9 ㎝、短辺が 10.6 ㎝、重量 1.6 kgであった。これらの特徴から、金沢城石垣編年２期（慶長年間頃（1596 ～ 1615））の構築と考えられる。また、この石垣の前面には、場所によって層の厚みに差があるが、焼土層が堆積していた。既調査成果から、この焼土層が寛永８年大火（1631）に係る火災片付層とみられることから、鯉喉櫓台の構築は寛永８年以後と考えられる。よって、1800S は後述する本丸南堀が存在する時期に構築され、本丸南堀の廃絶後も、いもり堀の北岸に鯉喉櫓台石垣が構築されるまで（元和期～寛永大火以前）存続しており、当該期のいもり堀北岸の一部を構成していた可能性が想定される。

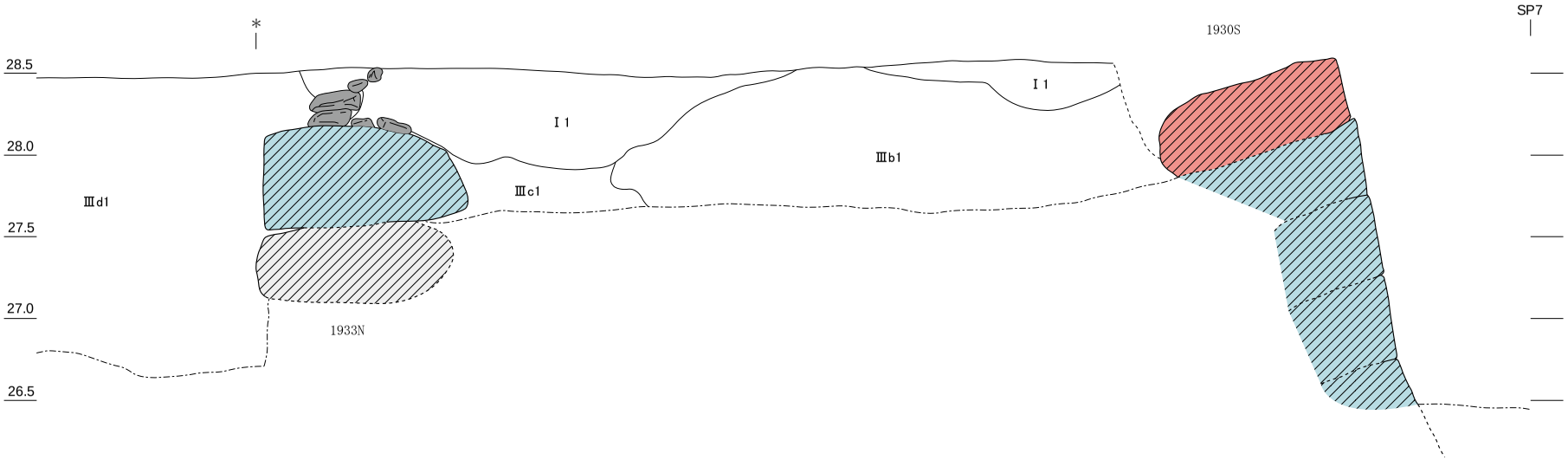
本丸南堀（第 16・17・29・30・39・40 図）

絵図に記載されていないが、調査区北端部で、いもり堀に先行する堀の南岸の一部を検出している。この堀は、従前より「いもり堀古段階」、「旧いもり堀」、「古いもり堀」、「いもり堀に先行する堀」、「本丸南堀」等と呼称されていたが、本報告書では「本丸南堀」とする。本丸の南から稲荷屋敷までの石垣の形状に沿って蛇行するかのような形状を呈するとみられるが、南東端には櫓台はなく、土羽が続いていた。本調査区内で検出した範囲は調査区東端から約 23 ｍ分で、堀底の確認には至っていない。ベースとなる層は黄褐色系の砂質土または砂層で、埋土は暗灰褐色系の砂礫層である。元和年間（1615 ～ 1624）に埋め立てられ、いもり堀に切り替えられたと考えられる。



0 (S=1/40) 1m

第 29 図　鯉喉櫓台調査区　土層断面図　SP4-7　1 (S=1/40)



Ⅰ層　近現代層
Ⅰ1　旧陸軍時代の攪乱

Ⅲb 層　近世前期：鯉喉櫓台石垣（寛文４年改修）に伴う造成土
Ⅲb1　櫓台内裏込栗石　大粒【寛文修築時のもの】

Ⅲc 層　近世前期：鯉喉櫓台石垣（正保元年改修）に伴う造成土
Ⅲc1　櫓台内裏込栗石　中粒【正保修築時のものか】

Ⅲd 層　近世前期：鯉喉櫓台石垣構築に伴う造成土
Ⅲd1　櫓台内裏込栗石　小粒【寛永期鯉喉櫓台設置時のものか】
Ⅲd2　濁灰褐色粘質土　径５～20㎝の栗石と思われる石を多く含む　瓦含む【櫓台石垣背面の盛土】
Ⅲd3　黒褐色粘質土　炭粒含む　黄灰色シルト質土ブロック含む【櫓台石垣背面の盛土】
Ⅲd4　暗褐色砂礫土　径１～２・５～10㎝の石多く含む　淡黄灰白色シルトの小ブロック多く含む【櫓台石垣背面の盛土】

Ⅳa 層　近世初期：いもり堀構築に伴う造成土
Ⅳa1　褐色砂質土　非常に砂質強い　径５～10㎝の石多く含む　鉄分多量に沈着
Ⅳa2　淡褐色礫層　径１～３㎝を中心とし10㎝程の石も含む礫層　土はわずか
Ⅳa3　淡褐色砂質土　径１～３㎝の礫含む
Ⅳa4　黄褐色シルト　礫・砂利を含む　砂質シルト

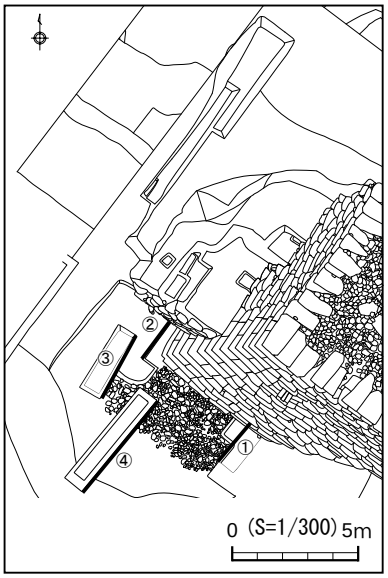
Ⅳb 層　本丸南堀埋立土
Ⅳb　暗褐灰色シルト　砂利　礫を含む

Ⅴa 層　近世初期：本丸南堀段階の周辺表土層
Ⅴa1　暗褐色シルト　暗褐粘シルトと黄褐シルトの互層

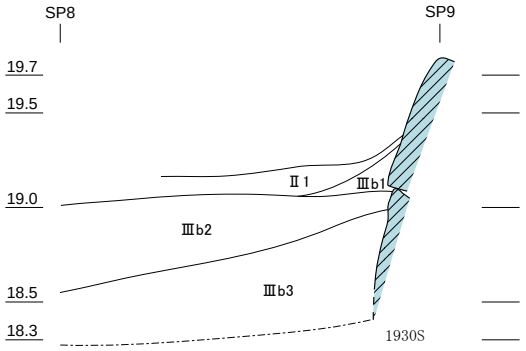
Ⅵ層　本丸南堀構築以前の土層
Ⅵ1　黄褐色シルト　径２～15㎝の礫・砂利を含む
Ⅵ2　にぶい黄褐色砂　ほぼ均質な砂層
Ⅵ3　黄褐色シルト　砂質　砂利を含む
Ⅵ4　にぶい黄褐色シルト　砂利を含む
Ⅵ5　黄褐色砂
Ⅵ6　黄褐色砂　径３～５㎝の礫含む
Ⅵ7　黄褐色砂　砂の層
Ⅵ8　黄褐色小礫　径１～３㎝の礫中心
Ⅵ9　褐色砂　砂利・礫混じりの層

0 (S=1/40) 1m

第30図　鯉喉櫓台調査区　土層断面図　SP4-7　2 (S=1/40)



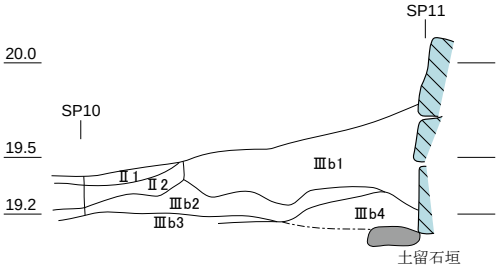
①1930S根石付近　SP8-9土層断面



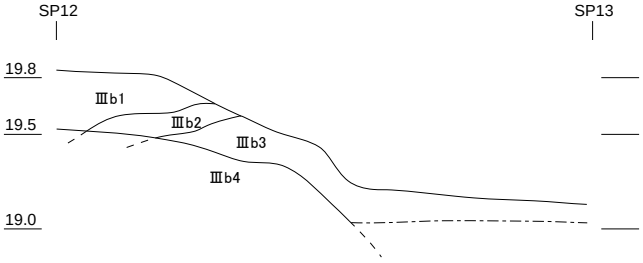
Ⅱ層　近世後期堆積土
Ⅱ1　灰褐色粘質土　植物遺体多く含む

Ⅲb層　近世前期：寛文４年石垣改修に伴う造成土
Ⅲb1　暗褐色砂質土　戸室破片・チップ非常に多く含む
Ⅲb2　暗褐色砂質土　戸室破片・チップ多く含む
Ⅲb3　大きな栗石の層

②土留石垣前面　SP10-11土層断面



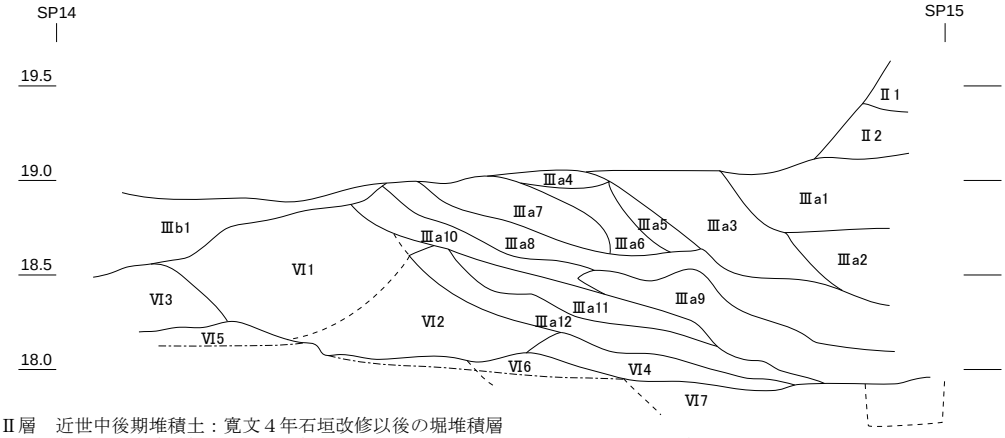
③土留石垣前面　SP12-13土層断面



Ⅱ層　近世後期堆積土
Ⅱ1　暗褐色砂質土　砂利石多く入る
Ⅱ2　暗灰褐色粘質土　植物遺体・繊維多く含む　鉛瓦層（鉛瓦は宝暦大火被災か）

Ⅲb層　近世前期：鯉喉櫓台石垣（寛文４年改修）に伴う造成土
Ⅲb1　淡灰色粘土【石垣前面盛土】
Ⅲb2　灰褐色粘質土　腐植土縞状に入り、砂含む
Ⅲb3　暗褐色土　小石・戸室チップ多く含む
Ⅲb4　前面栗石層

④堀底断割 SP14-15土層断面



Ⅱ層　近世中後期堆積土：寛文４年石垣改修以後の堀堆積層
Ⅱ1　褐色粘質土　砂多く含み、植物遺体含む
Ⅱ2　黒灰褐色粘土

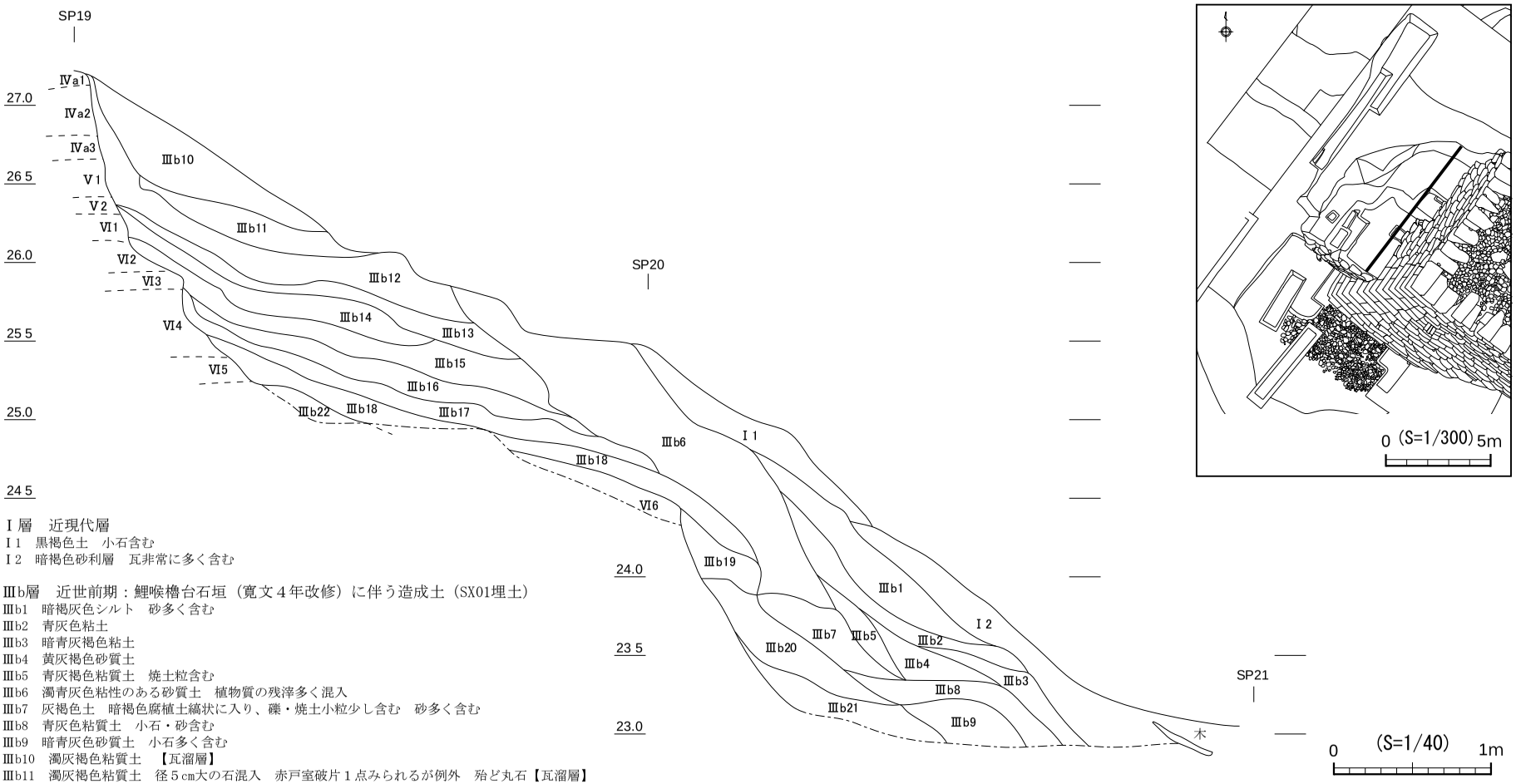
Ⅲb層　近世前期：鯉喉櫓台石垣（寛文４年改修）に伴う造成土
Ⅲb1　栗石層　青灰粗砂・小砂利・戸室剥片若干含む

Ⅲa層　近世前期：寛文４年石垣改修以前の堀堆積層
Ⅲa1　黄灰色砂質土＋礫石（ジャリケツ）
Ⅲa2　黄灰色粘質土
Ⅲa3　灰色細砂
Ⅲa4　暗灰褐色砂質土　径10～15cmの礫石含む
Ⅲa5　灰褐色粘土　ブロックで入ったものか
Ⅲa6　黄灰色粗砂　径15～20cmの礫石含む
Ⅲa7　淡灰色シルト　径20～30cmの礫石含む
Ⅲa8　暗灰色粗砂　腐植土
Ⅲa9　淡褐色粘土
Ⅲa10　暗灰色粗砂　小礫多く含む
Ⅲa11　淡灰褐色粗砂
Ⅲa12　淡褐色粗砂　淡褐色粘質土を大きなブロックで含む

Ⅵ層　本丸南堀構築以前の層：地山
Ⅵ1　淡灰色粗砂　橙褐色粗砂、縞状に入る
Ⅵ2　淡灰色粗砂　Ⅵ1層よりやや粒子細かく、径３～10cmの石多く含む
Ⅵ3　橙褐色粗砂
Ⅵ4　淡灰色粗砂
Ⅵ5　淡緑灰色粘土　非常に硬くしまる
Ⅵ6　淡緑灰色砂
Ⅵ7　灰色粘土　硬い岩質

0 (S=1/40) 1m

第31図　鯉喉櫓台調査区　土層断面図　SP8-9・SP10-11・SP12-13・SP14-15(S=1/40)



Ⅰ層　近現代層
Ⅰ1　黒褐色土　小石含む
Ⅰ2　暗褐色砂利層　瓦非常に多く含む

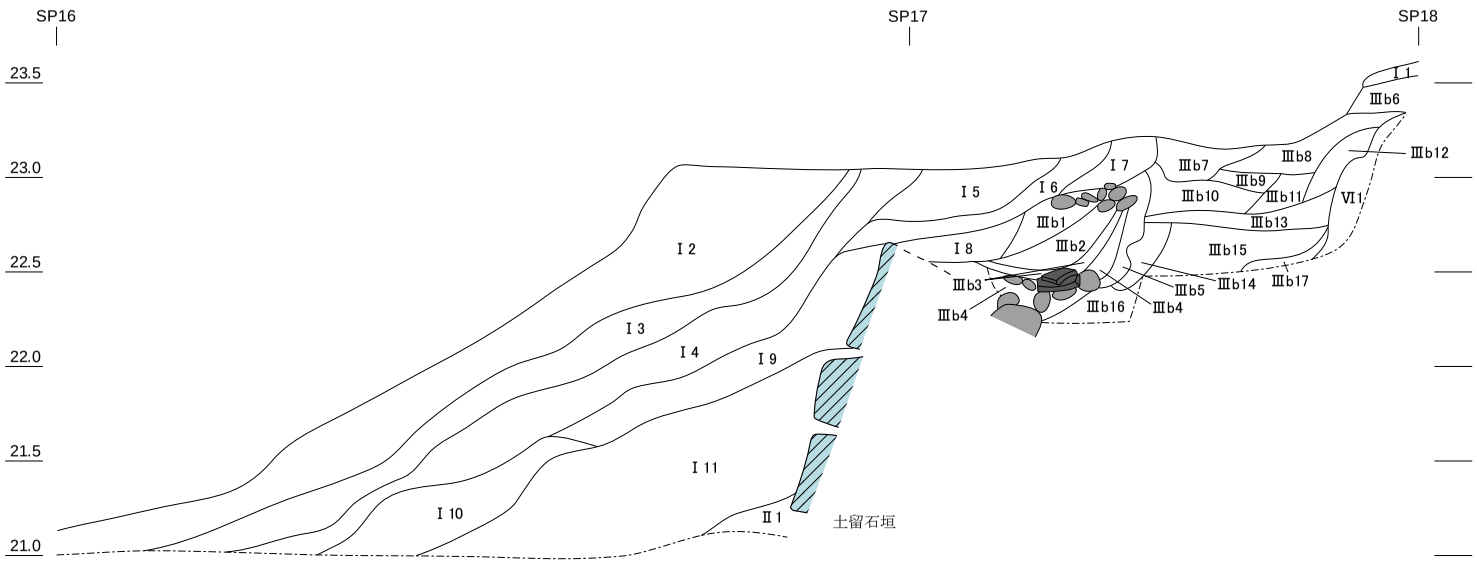
Ⅲb層　近世前期：鯉喉櫓台石垣（寛文４年改修）に伴う造成土（SX01埋土）
Ⅲb1　暗褐灰色シルト　砂多く含む
Ⅲb2　青灰色粘土
Ⅲb3　暗青灰褐色粘土
Ⅲb4　黄灰褐色砂質土
Ⅲb5　青灰褐色粘質土　焼土粒含む
Ⅲb6　濁青灰色粘性のある砂質土　植物質の残滓多く混入
Ⅲb7　灰褐色土　暗褐色腐植土稿状に入り、礫・焼土小粒少し含む　砂多く含む
Ⅲb8　青灰色粘質土　小石・砂含む
Ⅲb9　暗青灰色砂質土　小石多く含む
Ⅲb10　濁灰褐色粘質土　【瓦溜層】
Ⅲb11　濁灰褐色粘質土　径５cm大の石混入　赤戸室破片１点みられるが例外　殆ど丸石【瓦溜層】
Ⅲb12　濁灰褐色粘性のある砂質土　粒子やや粗い【瓦溜層】
Ⅲb13　濁灰色粘質土　径１～５cm大の川原石混入　観察時やや酸化して褐色を呈していた【瓦溜層】
Ⅲb14　濁灰褐色粘性のある砂質土
Ⅲb15　濁灰褐色粘質土　褐色・青灰色粘土ブロック混入　径１～15cm大の川原石多く混入【瓦溜層】
Ⅲb16　濁灰色粘性のある砂質土　粒子やや粗い　酸化のため全体にやや褐色を帯びる【瓦溜層】
Ⅲb17　濁褐色砂質土　径１～10cm大の小石多く混入【瓦溜層】
Ⅲb18　濁灰色粘質土　石等の混入物が殆ど見られない　均質な層
Ⅲb19　淡灰褐色砂質土
Ⅲb20　青灰褐色粘質土　礫・焼土粒若干含む　砂多く含む
Ⅲb21　黒褐色腐植土　焼土粒含む
Ⅲb22　濁灰褐色粘質土　径10cm大の川原石混入

Ⅳa層　近世初期：いもり堀構築に伴う造成土
Ⅳa1　濁灰黄褐色粘質土
Ⅳa2　Ⅳa1層よりやや暗い
Ⅳa3　暗灰褐色粘質土　層の下辺には表面が黒ずんだ径10cm未満の石多量に含む

Ⅴ層　近世初期：本丸南堀段階の土層
Ⅴ1　濁褐灰色粘性のある砂質土
Ⅴ2　青灰色粘性のある砂質土

Ⅵ層　本丸南堀構築以前の土層
Ⅵ1　灰褐色砂質土　径１～10cm大の小石層
Ⅵ2　濁暗褐色粘質土　径２cm程度の小石混入
Ⅵ3　濁暗褐色粘質土　径２cm程度の小石混入
Ⅵ4　暗褐灰色粘質土　径５～20cmの川原石混入
Ⅵ5　青灰色粘土
Ⅵ6　橙褐色砂質土＋礫石層　鉄分沈着著しい　径５～15cmの礫

第32図　鯉喉櫓台調査区　土層断面図　SP19-21（SX01）（S=1/40）



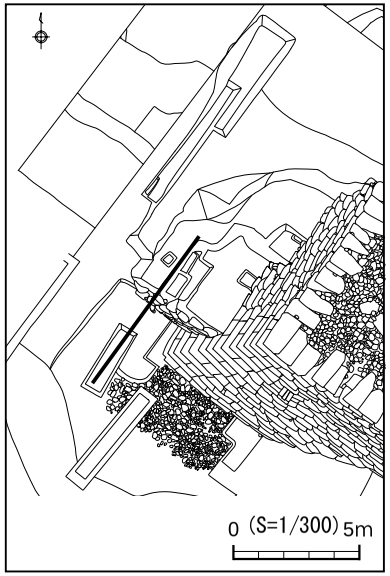
Ⅰ層　近現代層
Ⅰ1　暗褐色土【表土】
Ⅰ2　灰褐色土　石・砂・戸室チップ・瓦片含む
Ⅰ3　褐灰色土　石・砂・腐植土ブロック含む
Ⅰ4　褐灰色土　砂・腐植土ブロック含む　Ⅰ3層よりキメが細かくそろう
Ⅰ5　灰褐色砂質土
Ⅰ6　暗褐色土
Ⅰ7　茶褐色砂質土
Ⅰ8　褐色土　黄白色粘土ブロック含む　下層との境で釉薬瓦（近代か）
Ⅰ9　褐灰色砂質土　小礫非常に多く含む
Ⅰ10　淡褐灰色砂質土　小礫非常に多く含む
Ⅰ11　灰色砂と腐植土の入る礫石層（径10～30cm大）

Ⅱ層　近世後期堆積土
Ⅱ1　黒色腐植土

Ⅲb層　近世前期：鯉喉櫓台石垣（寛文４年改修）に伴う造成土（SX01埋土）
Ⅲb1　橙褐色粘質土
Ⅲb2　褐灰色砂質土
Ⅲb3　黒褐色土
Ⅲb4　橙褐色砂質土　鉄分沈着著しい　瓦非常に多く含む【落込み砂利層】
Ⅲb5　暗灰褐色粘質土　腐植土含む
Ⅲb6　青灰色砂質土
Ⅲb7　褐灰色粘質土
Ⅲb8　淡黄灰色粘質シルト
Ⅲb9　淡黄灰色粘質土
Ⅲb10　淡褐灰色粘質土
Ⅲb11　橙褐灰色砂質土
Ⅲb12　暗褐色砂質土
Ⅲb13　灰褐色砂質土
Ⅲb14　淡灰色粘土
Ⅲb15　青灰色砂質土
Ⅲb16　淡灰色砂
Ⅲb17　暗褐色砂質土

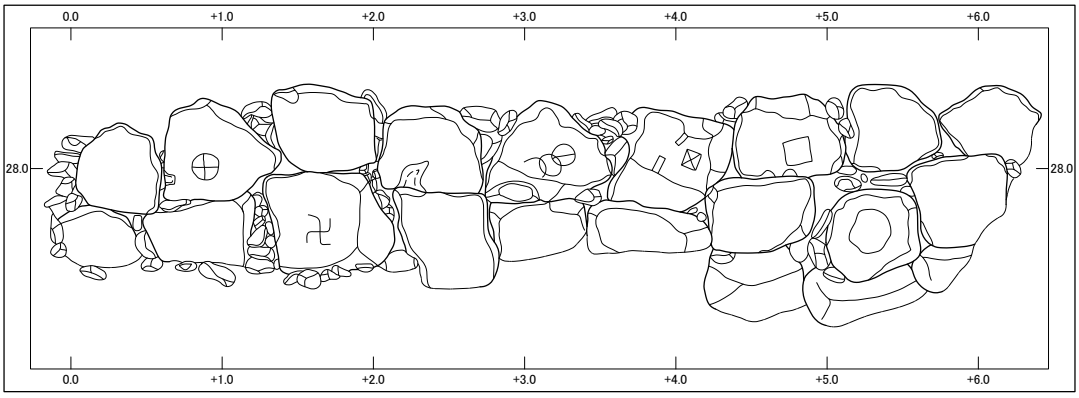
Ⅵ層　本丸南堀構築以前の土層
Ⅵ1　橙褐色粗砂【地山か】

0　(S=1/40)　1m

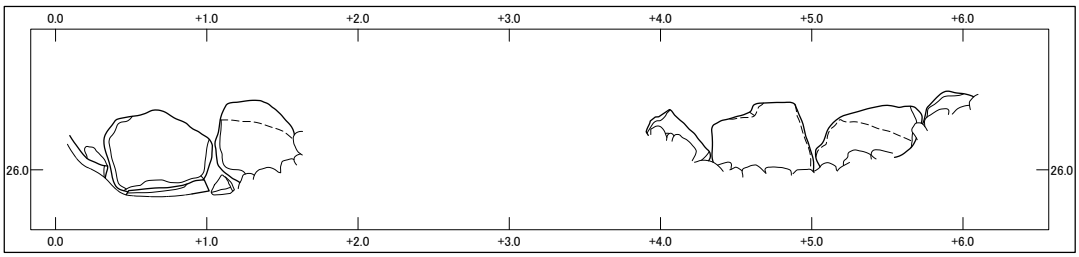


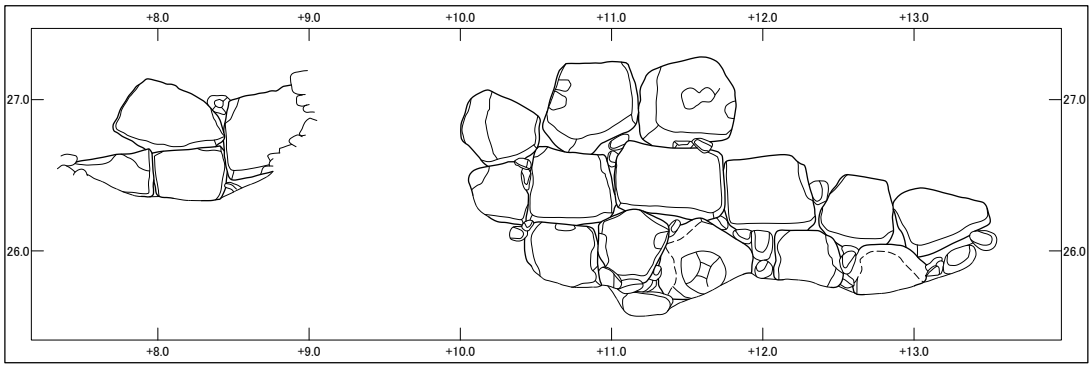
第33図　鯉喉櫓台調査区　土層断面図　SP16-18(S=1/40)

①1934N

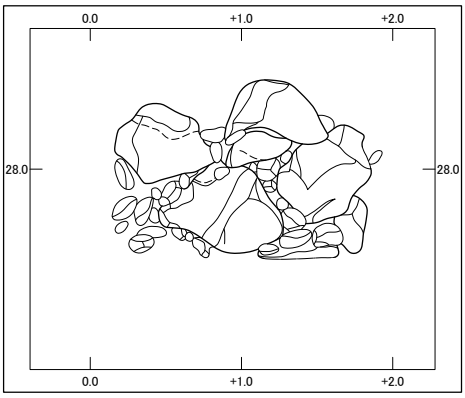


②1933N

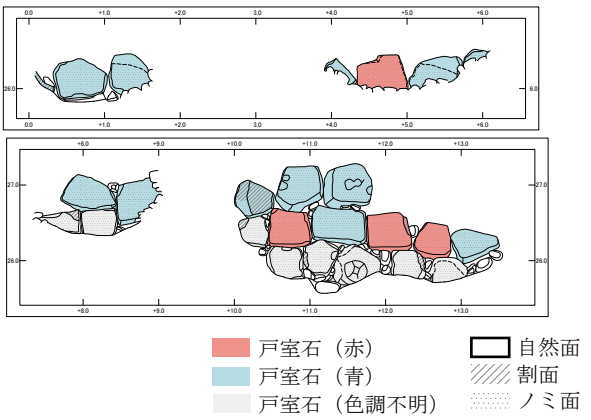




③1800S



④1933N　石材観察図

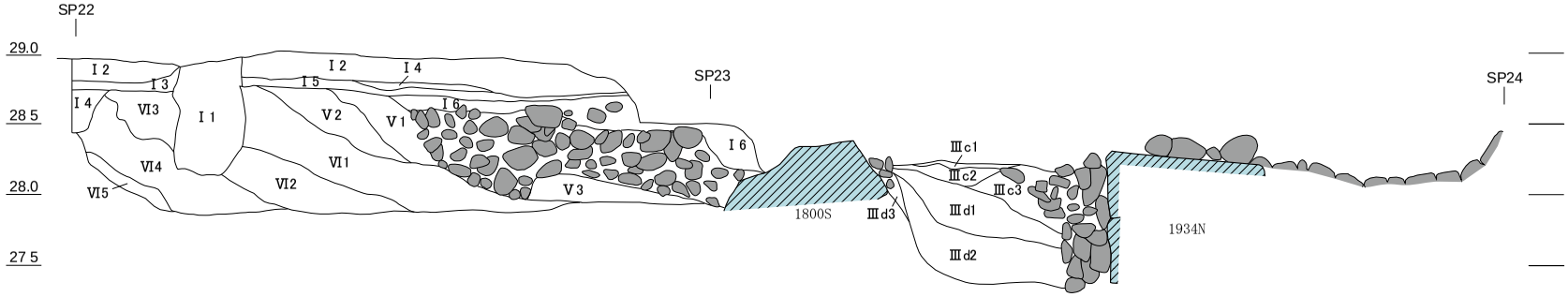


0　(S=1/50)　2m

0　(S=1/100)　2m

第 34 図　鯉喉櫓台調査区　石垣 1934N･1933N･1800S　立面図（S=1/50）、1933N　石材観察図（S=1/100）

①SP22-24 土層断面



0 (S=1/50) 2m

Ⅰ層　近現代層
Ⅰ1　濁暗褐色土【撹乱層】
Ⅰ2　表土　黄色砂質土【テニスコートによる整地層】
Ⅰ3　砂利層【テニスコートによる整地層】
Ⅰ4　赤色（レンガ色）砂質土　炭含む【テニスコートによる整地層】
Ⅰ5　コークス層【テニスコートによる整地層】
Ⅰ6　濁黄色砂レキ土と褐色砂の混合土

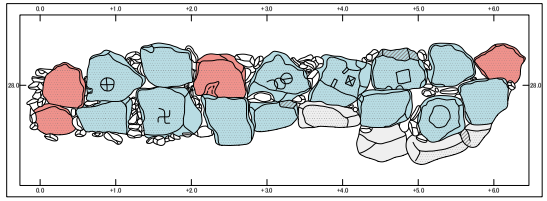
Ⅲc 層　近世前期：鯉喉櫓台石垣（正保元年改修）に伴う造成土
Ⅲc1　灰色砂質土　固くしまる　下層に鉄分沈着【1934N 掘方埋土】
Ⅲc2　黄褐色砂質土と暗褐色土（粘性やや有）の混合土【1934N 掘方埋土】
Ⅲc3　暗褐色土砂礫土と黄褐色砂質土の混合土　炭含む　ややもろくしまりがない【1934N 掘方埋土】

Ⅲd 層　近世前期：鯉喉櫓台石垣構築に伴う造成土
Ⅲd1　緑灰色シルト
Ⅲd2　褐色粗砂
Ⅲd3　暗褐色砂質土　焼土・炭を含む【焼土層】

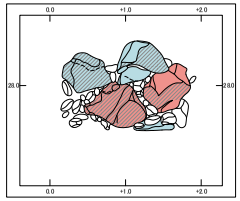
Ⅴ層　近世初期：本丸南堀段階の土層
Ⅴ1　黄色砂礫土【1800S 裏込め】
Ⅴ2　灰色砂礫土　鉄分下層に沈着【1800S 裏込め】
Ⅴ3　黄褐色砂質土と暗灰色シルト【1800S 裏込め】

Ⅵ　本丸南堀構築以前の土層
Ⅵ1　黄褐色砂礫土　小石を多く含む
Ⅵ2　黄褐色砂礫土　小砂利を多く含み固くしまる
Ⅵ3　褐色砂　鉄分を多く含み固くしまる
Ⅵ4　暗灰色シルト
Ⅵ5　オリーブ色シルト

②1934N　石材観察

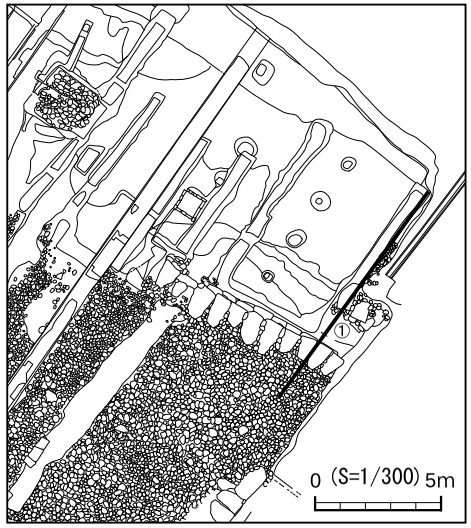


③1800S　石材観察



戸室石（赤）
戸室石（青）
戸室石（色調不明）
自然面
割面
ノミ面

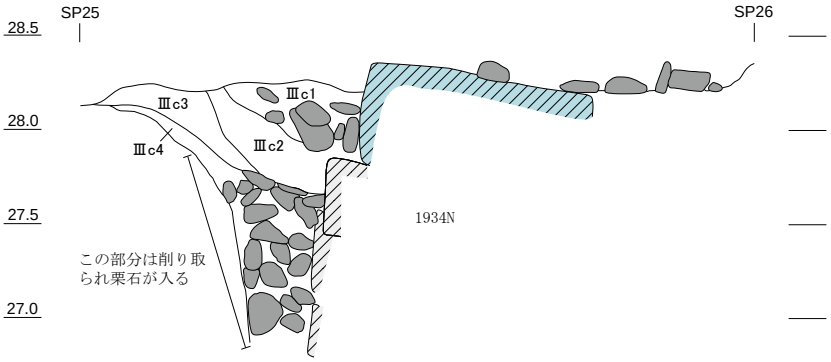
0 (S=1/100) 2m



0 (S=1/300) 5m

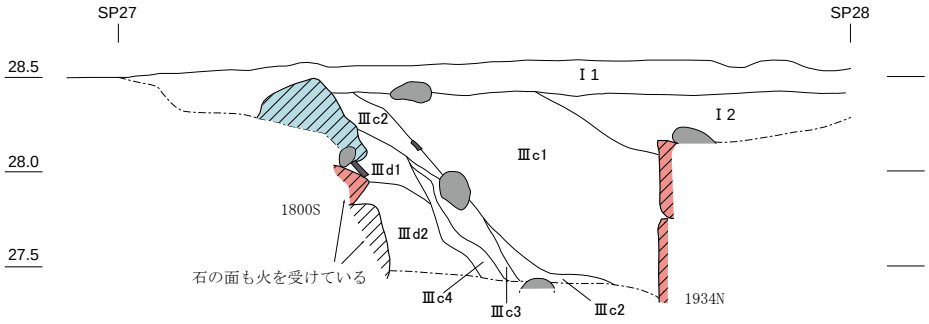
第 35 図　鯉喉櫓台調査区　土層断面図　SP22-24（S=1/50）、石垣 1934N・1800S　石材観察図（S=1/100）

①SP25-26土層断面



Ⅲc 層　近世前期：鯉喉櫓台石垣（正保元年改修）に伴う造成土
Ⅲc1　灰色砂礫土　固くしまる　鉄分を多く含む【1934N 掘方埋土】
Ⅲc2　暗褐色砂礫土　炭含む　ややもろくしまりがない【1934N 掘方埋土】
Ⅲc3　暗黄褐色砂質土【1934N 掘方埋土】
Ⅲc4　暗黄褐色砂礫土　栗石を多く含む【1934N 掘方埋土】

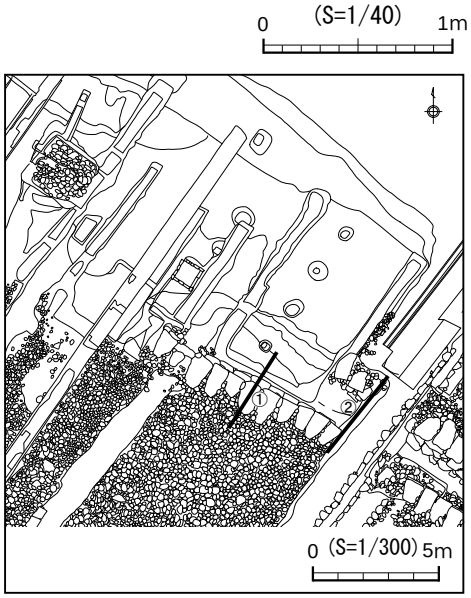
②SP27-28土層断面



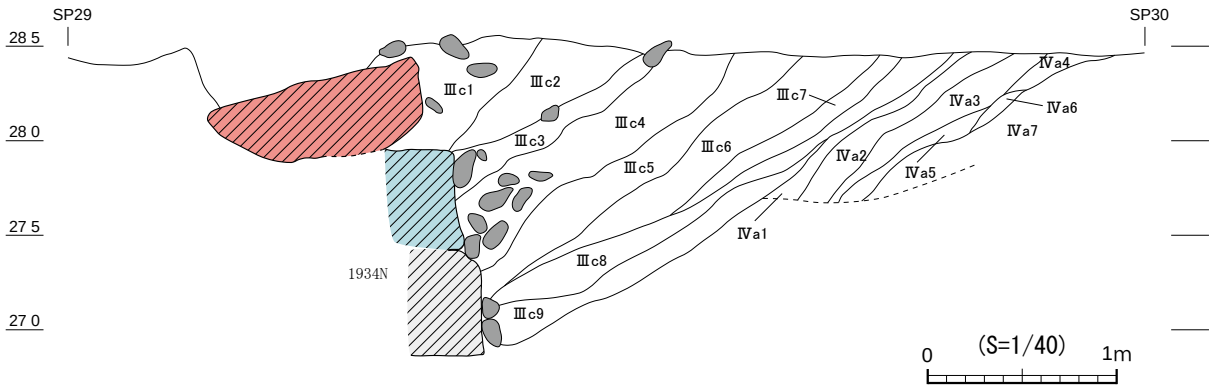
Ⅰ層　近現代層
Ⅰ1　暗赤褐色シルト【テニスコート整地層またはスタンド地盤か】
Ⅰ2　暗灰色シルト　栗石を大量に含む【明治整地層】

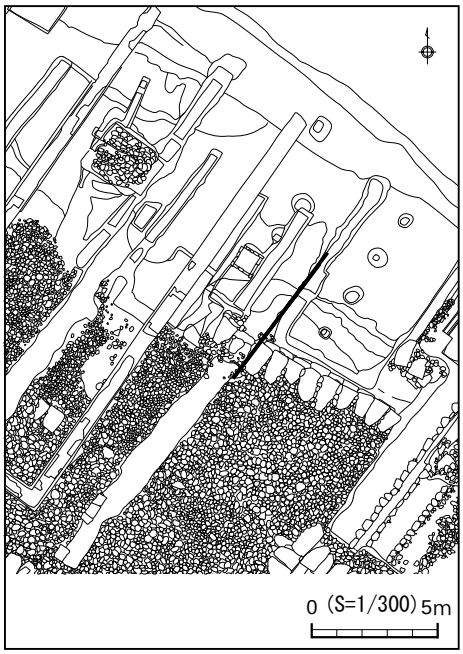
Ⅲc 層　近世前期：鯉喉櫓台石垣（正保元年改修）に伴う造成土
Ⅲc1　栗石層　ほとんど間層をもたない【1934N 掘方埋土】
Ⅲc2　灰色シルト　やや砂質　燻瓦含む
Ⅲc3　灰色砂　ややオリーブかかった砂　ほぼ均質
Ⅲc4　黄褐色砂　ほぼ均質

Ⅲd 層　近世前期：鯉喉櫓台石垣構築に伴う造成土
Ⅲd1　暗褐色シルト　炭粒　焼土がブロック状に混じる【焼土層】
Ⅲd2　橙色シルト【焼土層】



第 36 図　鯉喉櫓台調査区　土層断面図　SP25-26・SP27-28(S=1/40)





Ⅲc層　近世前期：鯉喉櫓台石垣（正保元年改修）に伴う造成土
Ⅲc1　暗灰褐色砂礫土　径１～３㎝の礫　栗石多く含む　最下に鉄分の沈着
Ⅲc2　暗灰色砂礫土　径１～４㎝の礫多　栗石・炭粒含む
Ⅲc3　暗褐色砂礫土　淡灰褐色砂ブロック混　径１～５㎝の礫含む　栗石含む
Ⅲc4　暗黄褐色砂礫土　栗石層　炭粒わずかに含む　栗石は径10～20㎝程
Ⅲc5　暗褐色礫混土　径10㎝以下の石多く含む　主構成物は石
Ⅲc6　淡褐色礫混土　径１～３㎝の礫・石多く含む　土は緻密
Ⅲc7　暗褐色シルト質土　径１～２㎝の礫多く含む　Ⅲc8層に似ているがやや明るい
　　非常にしまりあり
Ⅲc8　暗褐色シルト質土　径１～５㎝の礫多く含む　黄橙色シルトブロック含む
Ⅲc9　褐色砂礫土　径３～10㎝の石多く含む

Ⅳa層　近世初期：いもり堀構築に伴う造成土
Ⅳa1　淡黄灰色砂　しまりあり　Ⅳa3層に似ている
Ⅳa2　淡黄褐色粗砂　鉄分のためか褐色強い部分あり　径0.2～0.5㎝程度の粗砂
Ⅳa3　淡黄灰色砂　Ⅳa5層より若干淡い　濁灰白色シルトブロック含む
Ⅳa4　淡褐色砂　Ⅳa7層よりやや暗い
Ⅳa5　淡黄灰色砂　しまりあり　Ⅳa7層と質は似ている
Ⅳa6　淡褐色砂　Ⅳa7層より淡い
Ⅳa7　淡褐色砂　しまりあり　淡黄白色シルトの径１～２㎝程度のブロック・径１㎝以下の礫含む
　　赤味あり

第 37 図　鯉喉櫓台調査区　土層断面図　SP29-30(S=1/40)

（３）小結

・調査により、鯉喉櫓台石垣（1930S）が高さにして約 9.6 m残存していることを確認した。寛文８年（1668）の「加賀国金沢之絵図」（金沢市立玉川図書館蔵）では、水底より高さ八間と記載されていることから、本来の高さが 14.5 mと推定され、現存石垣の上面より約 4.9 m高かったことになる。

・鯉喉櫓台石垣は、文献や埋蔵文化財調査の成果により、寛永８年大火（1631）後に築造され、正保元年（1644）・寛文４年（1664）に改修を受けたと考えられるが、石垣の精査により、現存石垣が寛文４年改修の姿を残していることが確認された。

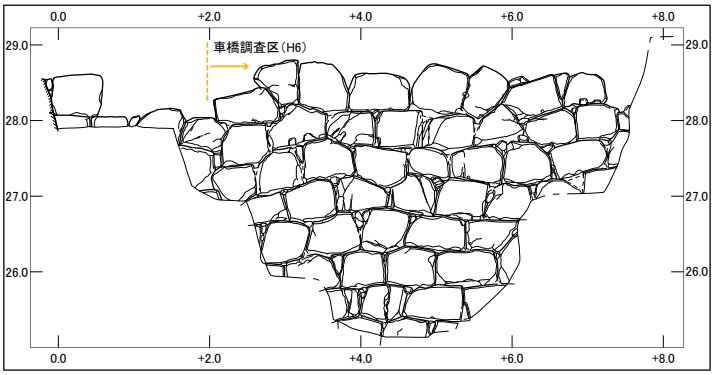
・鯉喉櫓台の寛文４年改修に伴う遺構として、石垣西側に接する土羽において大規模な掘り込み SX01 と、堀底側に設けられた土留石垣が検出されている。

・鯉喉櫓台の正保元年改修を示す痕跡として、櫓台内部で検出された石積み 1934N および 1933N が挙げられる。

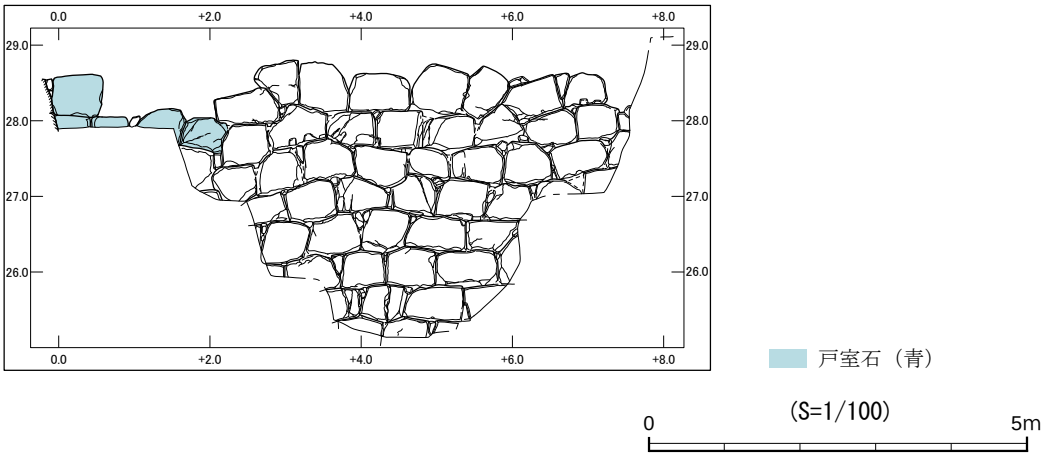
・城内の石垣に使用された戸室石は赤戸室石が多く見られる傾向にあるが、鯉喉櫓台石垣で使われた石垣石については、青戸室石が多数を占めることが特徴的である。その理由が如何なるものかは特定できないが、金沢城の石材利用を考える上で興味深い事例である。

・鯉喉櫓台周辺における景観の変遷は大きく五段階に分けることができ、櫓台設置後は２度の大きな崩壊と修築による内部構造の変化があったと考えられる。

①1931S　立面図



②1931S　石材観察



第 38 図　鯉喉櫓台調査区　石垣 1931S　立面図・石材観察図（S=1/100）

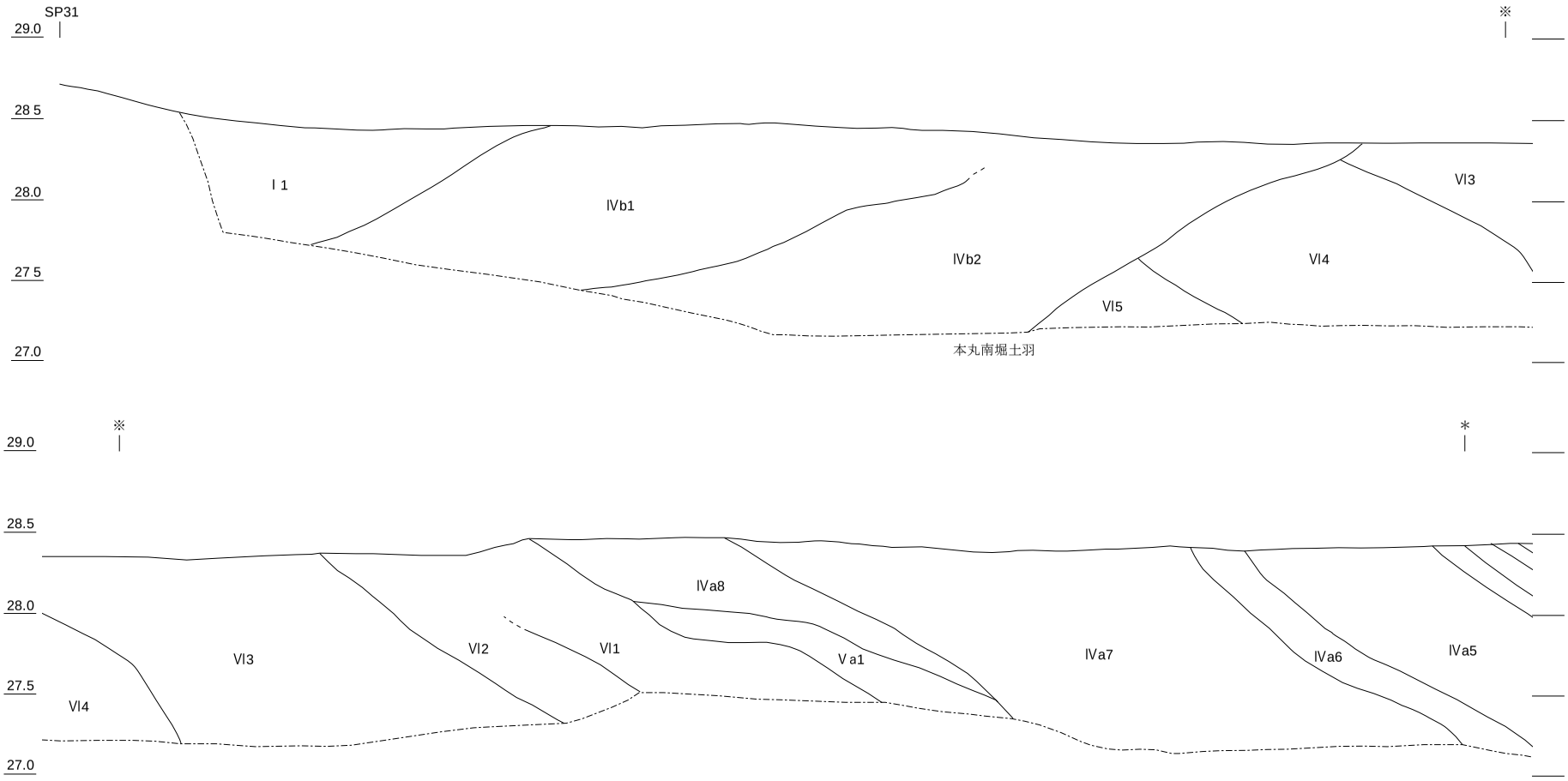
第１段階：いもり堀掘削以前の段階。本丸高石垣に沿って本丸南堀が存在した。

第２段階：いもり堀掘削後～鯉喉櫓台設置以前の段階。元和年間（1615 ～ 1624）と考えられる本丸南堀の廃絶に伴い、その南側にいもり堀が掘削される。堀北岸は土羽で、構築当初のいもり堀南東端には櫓台はなかったとみられるが、前段階から存続する石垣 1800S が当初の堀南東端を構成していたとみられる。

第３段階：寛永８年（1631）の大火後、鯉喉櫓台石垣が設置された段階。土羽を礫の多い土で整地した後に、小粒の河原石でいもり堀を埋め立てて、櫓台を構築したとみられる。石垣台には面に刻印が施された石垣石が使用された。

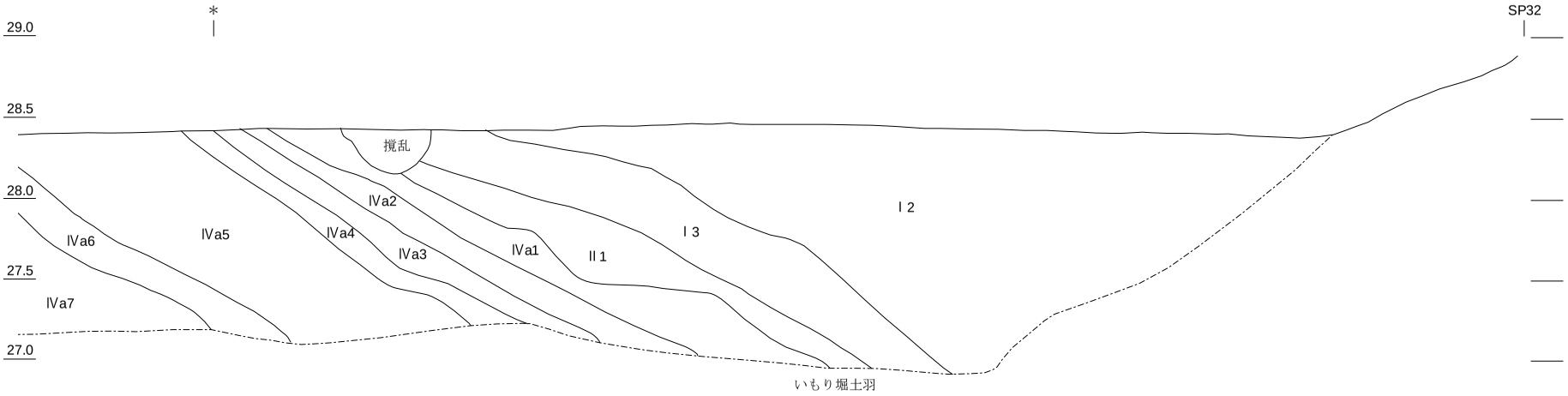
第４段階：正保元年（1644）、鯉喉櫓台石垣の１度目の改修が行われた段階。設置当初の石垣石や栗石はいもり堀に崩れ落ち、大規模な修復を行っている。修復には設置当初より大きい河原石を栗石として用い、石垣石も新たにした。また、土砂や栗石の崩壊、流出を防ぐために、崩れ落ちた石垣石を再利用して 1934N・1933N を設置した。

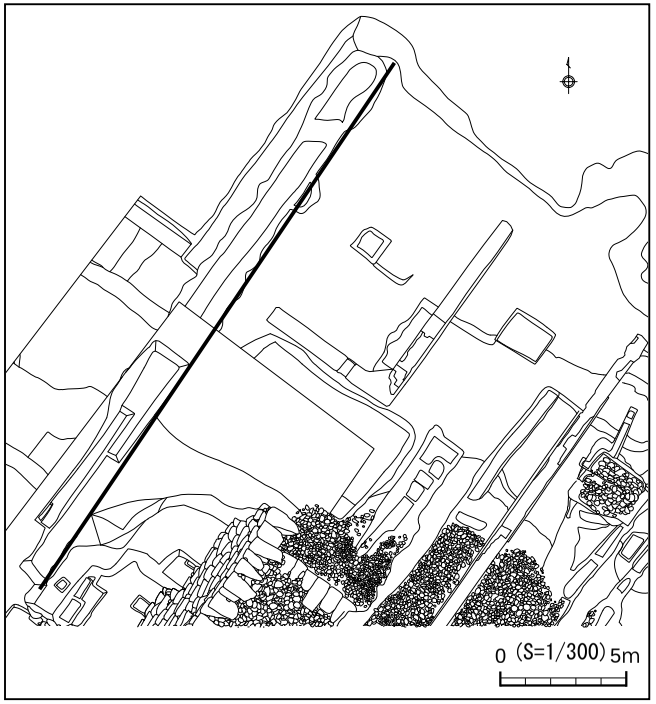
第５段階：寛文４年（1664）、鯉喉櫓台石垣の２度目の改修が行われた段階。改修には、前段階よりさらに大きい河原石を栗石として用い、石垣石も新たにした。調査時検出した石垣は、この段階のものである。



0 (S=1/40) 1m

第 39 図　鯉喉櫓台調査区　土層断面図　SP31-32　1 (S=1/40)





Ⅰ層　近現代層
Ⅰ1　テニスコートフェンスによる撹乱
Ⅰ2　暗灰褐色シルト　径 15 ～ 20 ㎝大の栗石【明治 40 年堀埋立土】
Ⅰ3　黒褐色シルト　燻瓦が多く入る　礫も少し入る

Ⅱ層　近世後期：宝暦大火以後～明治 40 年の堆積土
Ⅱ1　暗褐色シルト　砂利・礫入る　木の根の痕跡が多く見られる【旧表土】

Ⅳa 層　近世初期：いもり堀構築に伴う造成土
Ⅳa1　黄褐色シルト　黄褐粘がブロック状（径１～５㎝）に多く入る　粘質の層　小礫・砂利も少し入る【土羽版築か】
Ⅳa2　黄褐色砂　ほとんど砂の層　少量の砂利入る　固くしまる【土羽版築か】
Ⅳa3　黄褐色砂　砂利がたくさん入る【土羽版築か】
Ⅳa4　黄褐色シルト　黄褐粘ブロック（径３～４㎝）に砂質シルト　砂利・小礫が入った層　粘土層【土羽版築か】
Ⅳa5　暗灰褐色シルト　灰色砂シルト　黄褐色シルトがブロック状（径 0.5 ～１㎝）に混
Ⅳa6　暗灰褐色シルト　Ⅳa5 層より少し小礫多い
Ⅳa7　暗灰色シルト　灰褐色粘ブロック（径 0.5 ㎝）入る　砂利等少ない
Ⅳa8　暗灰褐色シルト　径２～５㎝大の礫が多く入る

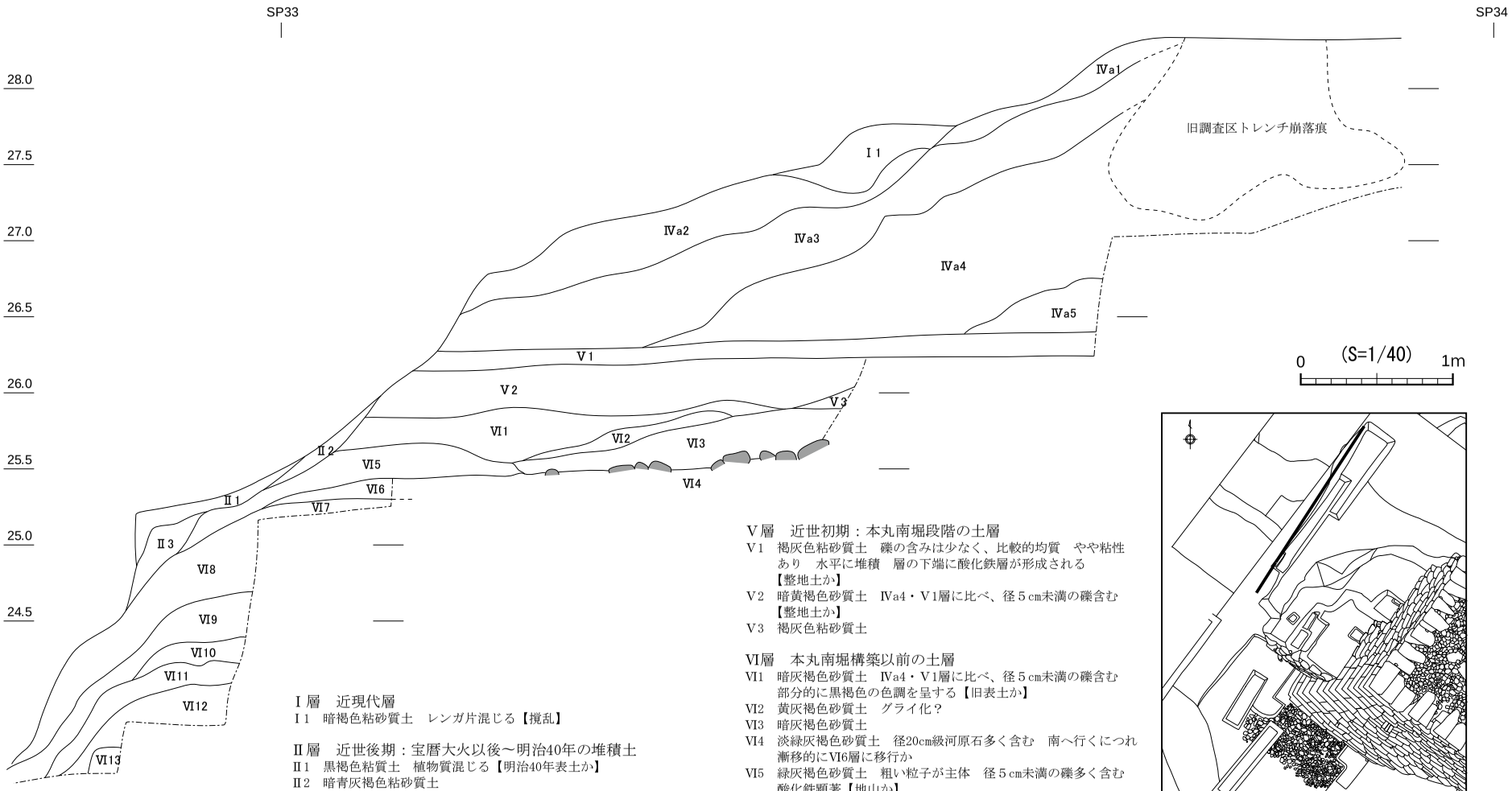
Ⅳb 層　近世初期：本丸南堀埋立土
Ⅳb1　暗灰褐色シルト　砂質　径２～７㎝大の礫入る
Ⅳb2　暗灰色シルト　径３～５㎝の礫多く混　暗褐シルトと灰砂質が径１～２㎝大のブロック状に混

Ⅴa 層　近世初期：本丸南堀段階の周辺表土層
Ⅴa1　黒灰色シルト　粘性あり　炭化物の塊（やわらかい）の層も含む　漆器が出土【旧表土か】

Ⅵ層　本丸南堀構築以前の土層
Ⅵ1　灰色シルト　砂質　礫多い
Ⅵ2　黄褐色シルト　砂利含む中心の層
Ⅵ3　暗灰色シルト　灰色シルトに大量の砂利が入る　砂利層
Ⅵ4　灰黄褐色シルト　砂利　小礫　暗灰シルト　黄褐粘ブロック（径１㎝大）が混
Ⅵ5　礫層　径２～３㎝大の礫層【地山】

0 (S=1/40) 1m

第 40 図　鯉喉櫓台調査区　土層断面図　SP31-32　2 (S=1/40)



Ⅰ層　近現代層
Ⅰ1　暗褐色粘砂質土　レンガ片混じる【撹乱】

Ⅱ層　近世後期：宝暦大火以後～明治40年の堆積土
Ⅱ1　黒褐色粘質土　植物質混じる【明治40年表土か】
Ⅱ2　暗青灰褐色粘砂質土
Ⅱ3　灰褐色土　やや粘性あり砂多く含む

Ⅳa層　近世初期：いもり堀構築に伴う造成土
Ⅳa1　淡黄灰色砂質土　径１cm未満の小礫多く含む
Ⅳa2　淡黄～淡灰色粘質土　径５cm未満の礫多く含む
Ⅳa3　暗褐色砂質土　径５cm未満の礫極めて多く含む　砂礫層状部分あり
Ⅳa4　淡褐灰色砂質土　礫の含みは少なく、比較的均質
Ⅳa5　暗橙褐色礫　径５～10cm礫多く含む

Ⅴ層　近世初期：本丸南堀段階の土層
Ⅴ1　褐灰色粘砂質土　礫の含みは少なく、比較的均質　やや粘性あり　水平に堆積　層の下端に酸化鉄層が形成される【整地土か】
Ⅴ2　暗黄褐色砂質土　Ⅳa4・Ⅴ1層に比べ、径５cm未満の礫含む【整地土か】
Ⅴ3　褐灰色粘砂質土

Ⅵ層　本丸南堀構築以前の土層
Ⅵ1　暗灰褐色砂質土　Ⅳa4・Ⅴ1層に比べ、径５cm未満の礫含む　部分的に黒褐色の色調を呈する【旧表土か】
Ⅵ2　黄灰褐色砂質土　グライ化？
Ⅵ3　暗灰褐色砂質土
Ⅵ4　淡緑灰褐色砂質土　径20cm級河原石多く含む　南へ行くにつれ漸移的にⅥ6層に移行か
Ⅵ5　緑灰褐色砂質土　粗い粒子が主体　径５cm未満の礫多く含む　酸化鉄顕著【地山か】
Ⅵ6　褐灰～淡黄灰色粘質土　粘性きわめて強い【地山か】
Ⅵ7　暗灰褐色粘砂質土　均質　混在物少ない【地山か】
Ⅵ8　青灰褐色粘質シルト　砂多く含み、径２～３cm大の礫少し含む【地山か】
Ⅵ9　黒灰褐色シルト　腐植土・砂含む【地山か】
Ⅵ10　淡青灰色粘質土　細砂含む【地山か】
Ⅵ11　緑灰色粘質土　細砂若干含み、粘性強い【地山か】
Ⅵ12　淡緑灰色粘土　粘性強い【地山か】
Ⅵ13　橙褐色砂質土＋径５～15cm大の礫層【地山か】

第41図　鯉喉櫓台調査区　土層断面図　SP33-34(S=1/40)

北岸調査区

（１）概要（第 11・12・42 ～ 50 図）

本調査区は絵図によると、いもり堀北岸～いもり堀内部に対応する部分で、鯉喉櫓台調査区～土橋調査区間の､北西－南東方向に延長約 210 mに及ぶ長大な調査区である。平成 10 年度(1998-2 地点)・平成 15 年度（2003-2 地点）・平成 16 年度（2004-1・2 地点）の３次にわたり調査が行われた。調査は、いもり堀復元計画策定にかかる遺構確認を目的とするもので、いもり堀の土羽の状況、堀底の深さ・形状等の基礎データを得ることを目的とした調査が行われた。また、出土遺物からいもり堀周辺の建物の屋根瓦についての知見を得た。

（２）遺構

①いもり堀（第 43 ～ 62 ①②・63 ～ 70 ①・71 ～ 73 図）

堀の土羽については、近世初期の築造当初から明治 40 年（1907）の埋立直前に至る状況を確認した。堀中央部の 2003-2 地点では、近世初期の築造当初の面と、その上層の宝暦９年（1759）大火までに法面崩落による土砂が土羽斜面から堀底にかけて堆積して形成された面（Ⅲａ層上面)、および明治 40 年の堀埋立直前までの面を確認した。また、堀西部の 2004-2 地点、東部の 2004-1 地点では、近世初期の築造当初の面と明治 40 年の堀埋立直前までの面を確認した。この両地点の堀底でも、宝暦大火以前に法面崩落により短期間で堆積したとみられる土砂を確認した（Ⅲａ層)。このような堀底の状況から、いもり堀では堀構築当初の姿に戻すような大規模な堀ざらえが行われなかったと考えられる。また、土羽の斜面上から石垣石や礫がまとまって検出される状況も見られた。Ⅲａ層の上には焼土（粒・塊）や溶解した鉛片や鉛瓦を含む宝暦大火後の土（Ⅱ層）が堆積していた。なお、堀構築時のベース（Ⅵ層）には、古代の遺物包含層も含まれる。

検出した構築当初の土羽の幅は、2004-2 地点で 15 ～ 16 m、2003-2 地点で 15 ～ 16 m、2004-1 地点で 14 ～ 15 mであった。また、構築当初の堀底の標高は、2004-2 地点で約 16.6 m、2003-2 地点で約 17.5 m、2004-1 地点で推定 17.5 ～ 18 m（確認した最下部の標高は 19.3 m ）で、現地表からの堀の深さは 10 ～ 11 mを測る。堀底が西に向かって低くなっており、堀の深さを維持しながら地形の傾斜に合わせて掘削されたと考えられる。

出土遺物には陶磁器や瓦、金属製品、木製品が見られたが、Ⅲａ層より越前赤瓦がまとまって出土している点が特筆される。

②本丸南堀（第 57 ～ 59・61・63・72・73 ①図）

部分的にではあるが、土層断面精査の際、鯉喉櫓台調査区で検出された堀の続きを延長約 150 m の範囲で確認している。土層断面の観察で得られた最大幅は 21.4 m以上、深さ 1.9 m以上を測る。

③ SK01（第 48・49・70 ②図）

2004-1 地点で、いもり堀と重複して検出された土坑である。平面楕円形と推定され、長径 255 ㎝、短径 224 ㎝以上、深さ 78 ㎝を測る。Ⅱ層土で埋め立てられていた。

④ SX01（第 50・73 ②図）

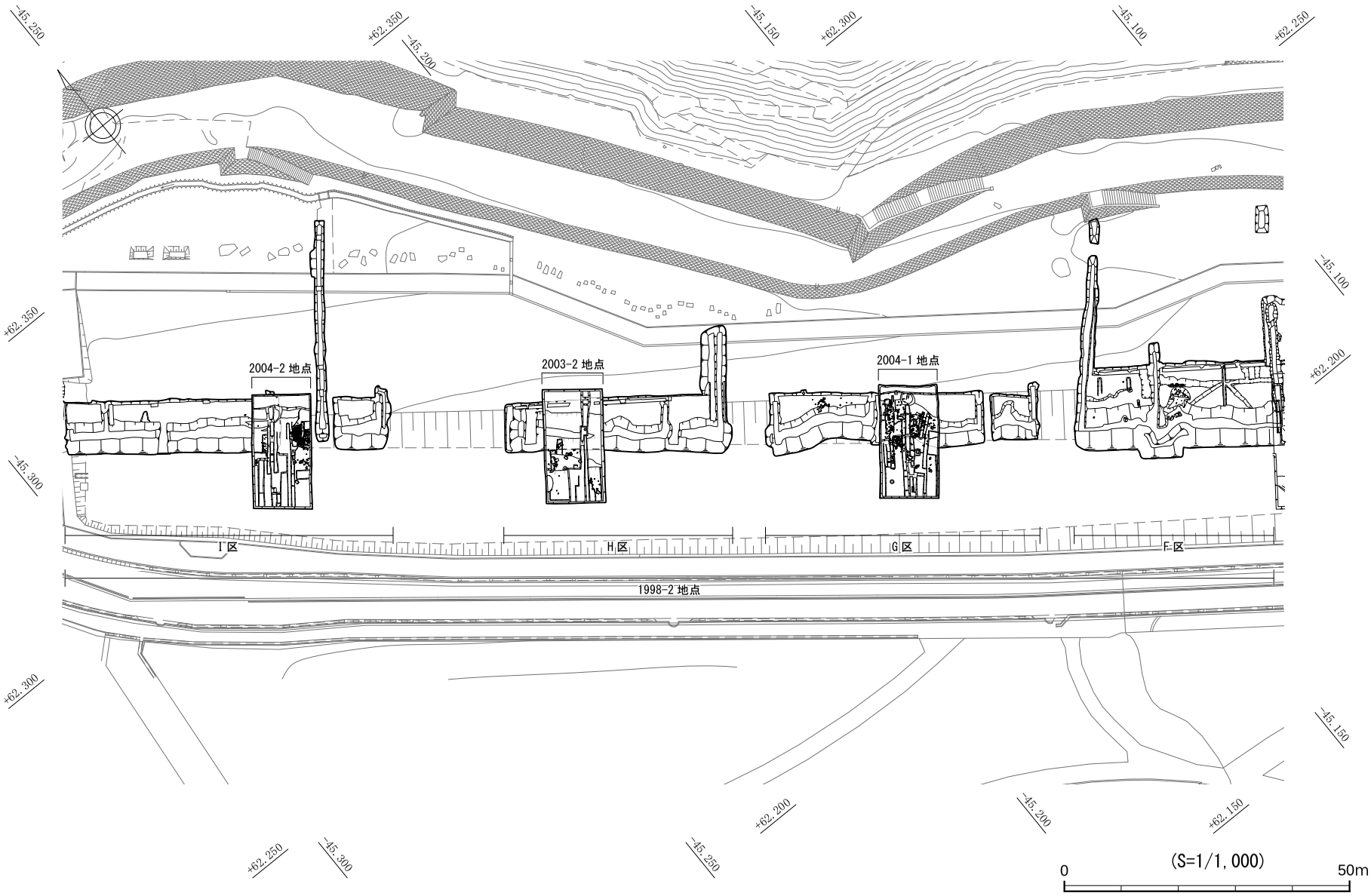
1998-2 地点Ｆ区で、いもり堀に近接して検出された。Ⅳａ層を基盤とした遺構で、土層断面で確認した幅は 2.54 m、深さ 1.34 mを測る。近代に廃絶されたとみられる。遺物を伴わず、遺構の性格は明らかではないが、堀への排水施設の可能性があろうか。

⑤ P01（第 46・47・62 ③図）

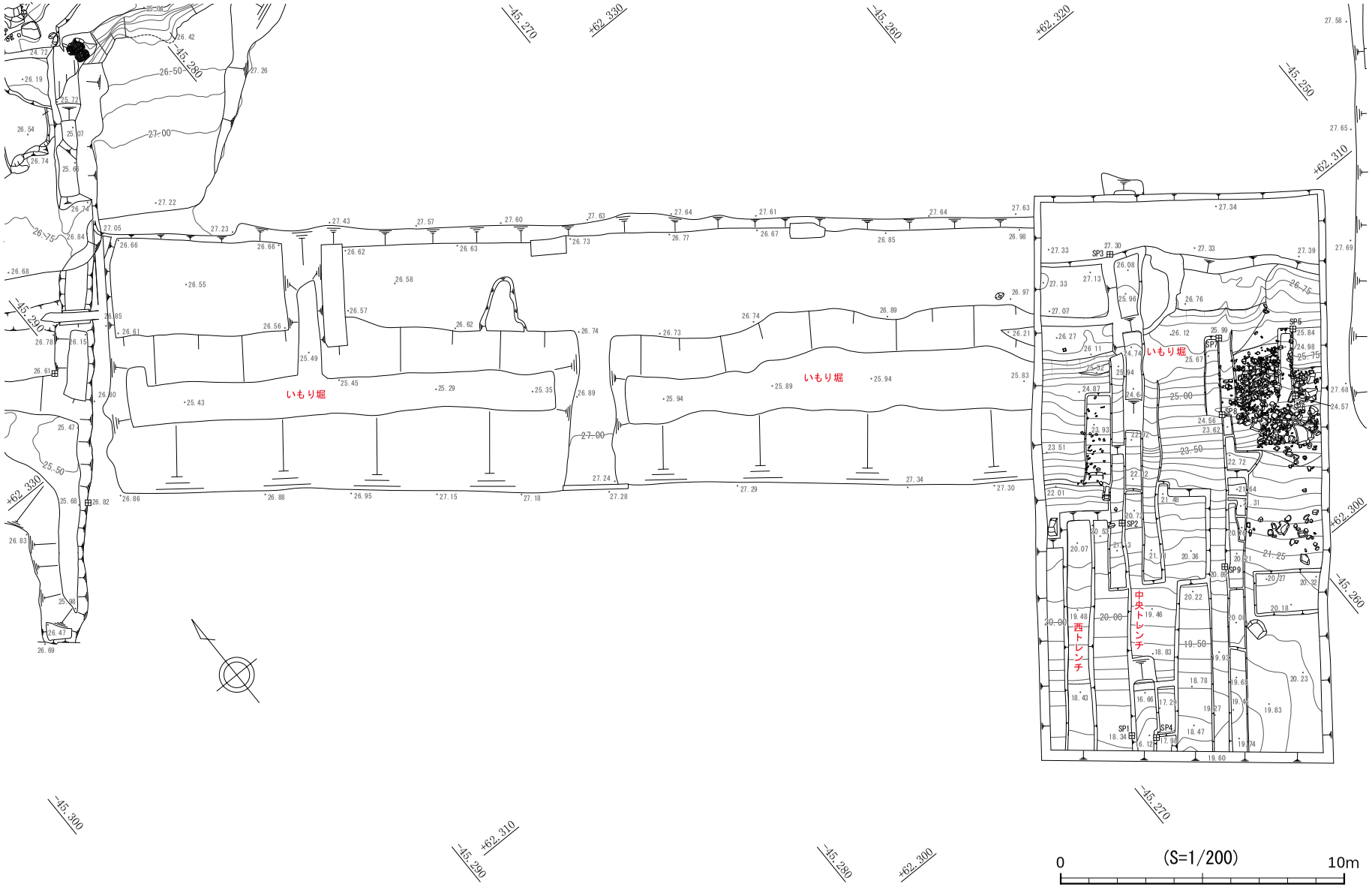
2003-2 地点中央部のトレンチ内で検出した平面円形のピットで、７世紀頃と推定される遺構面を切り込んでいる。径約 40 ㎝、深さ 22 ㎝を測る。遺物は出土せず、遺構の性格も明らかでない。

（３）小結

・いもり堀の土羽について、近世初期の築造当初の面と明治 40 年の堀埋立直前までの面の新旧２面

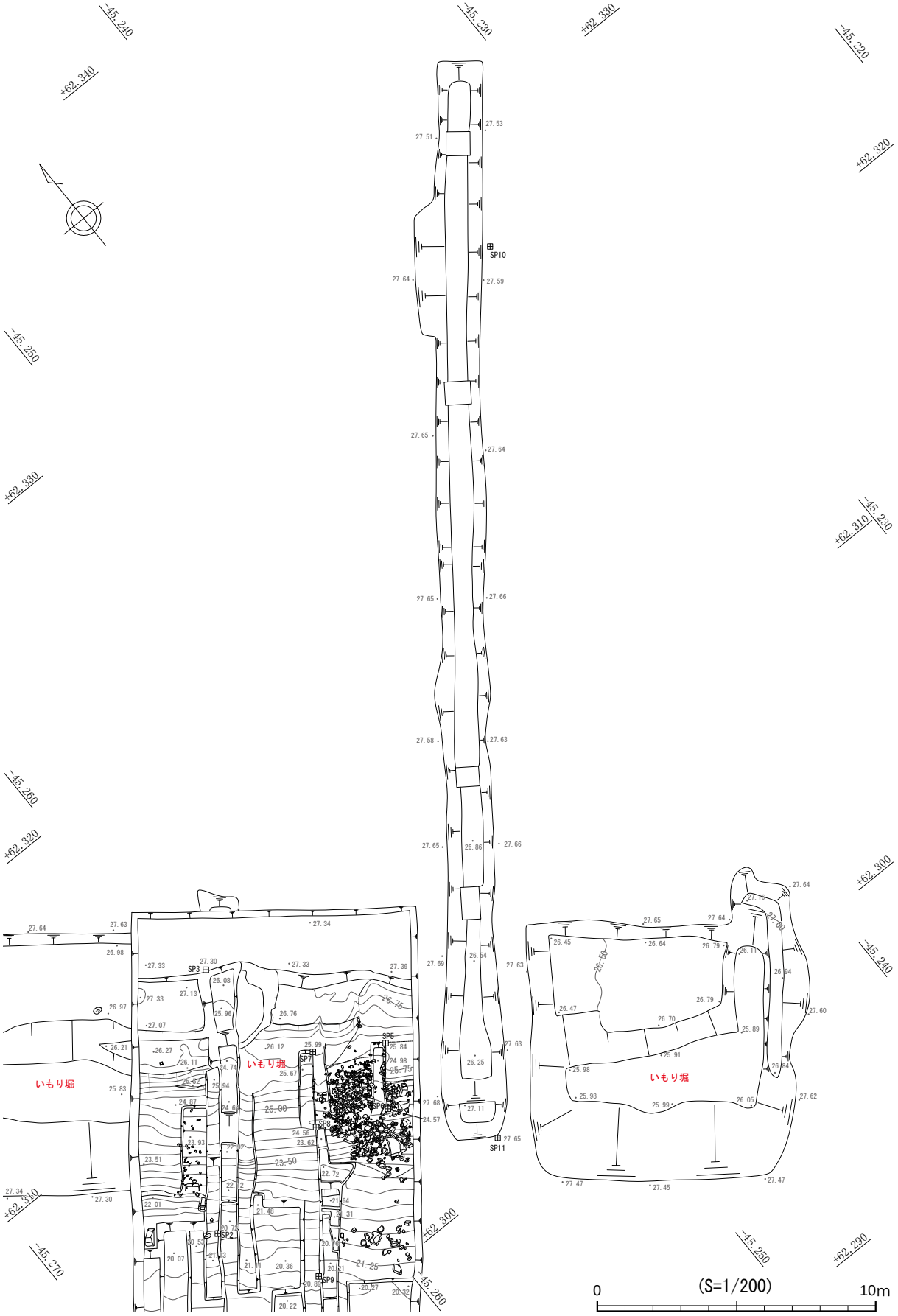


第 42 図　北岸調査区　全体図 (S=1/1,000)

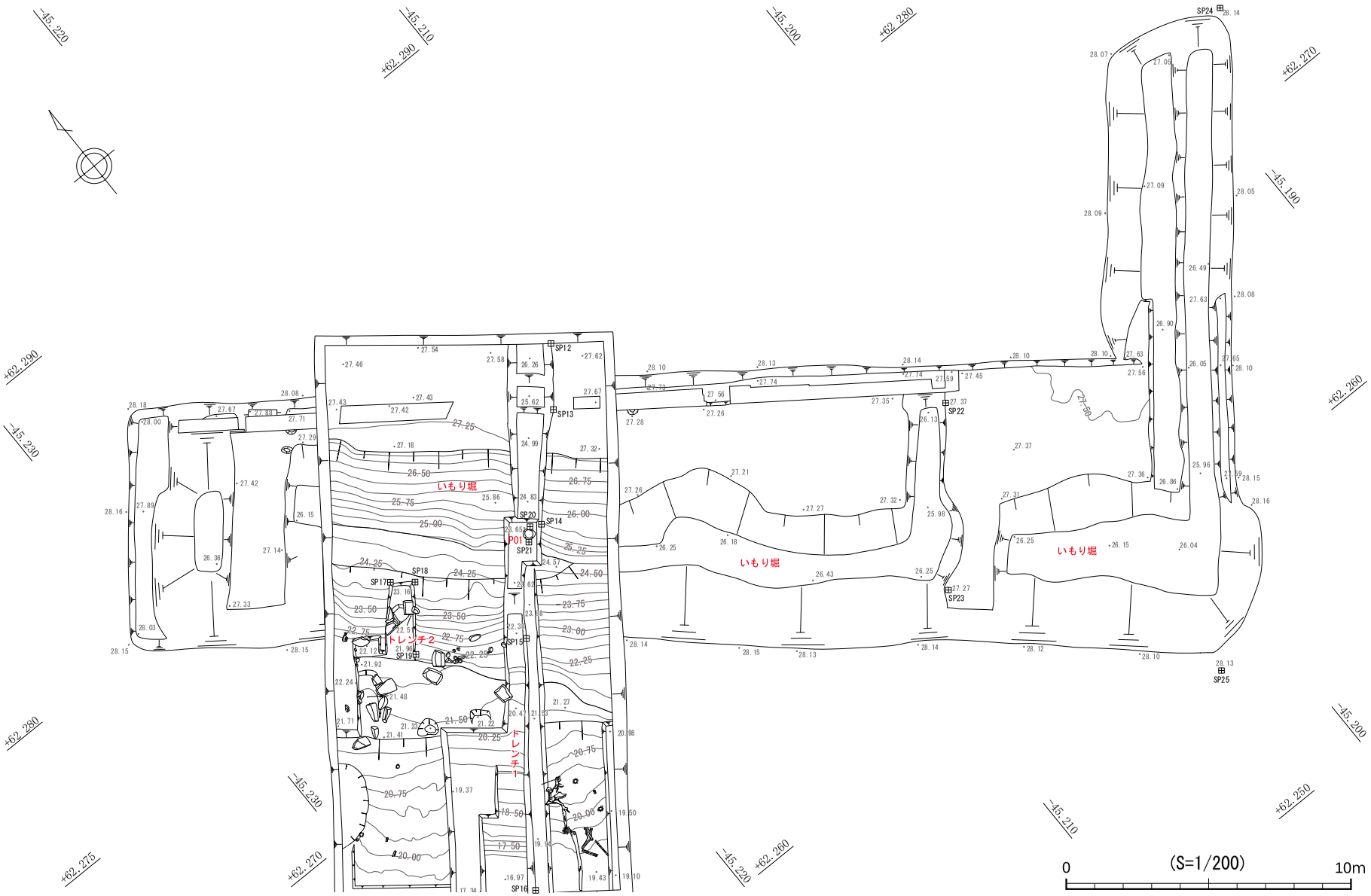


第 43 図　北岸調査区　平面図 1　(S=1/200)

第 44 図　北岸調査区　平面図２（S=1/100）

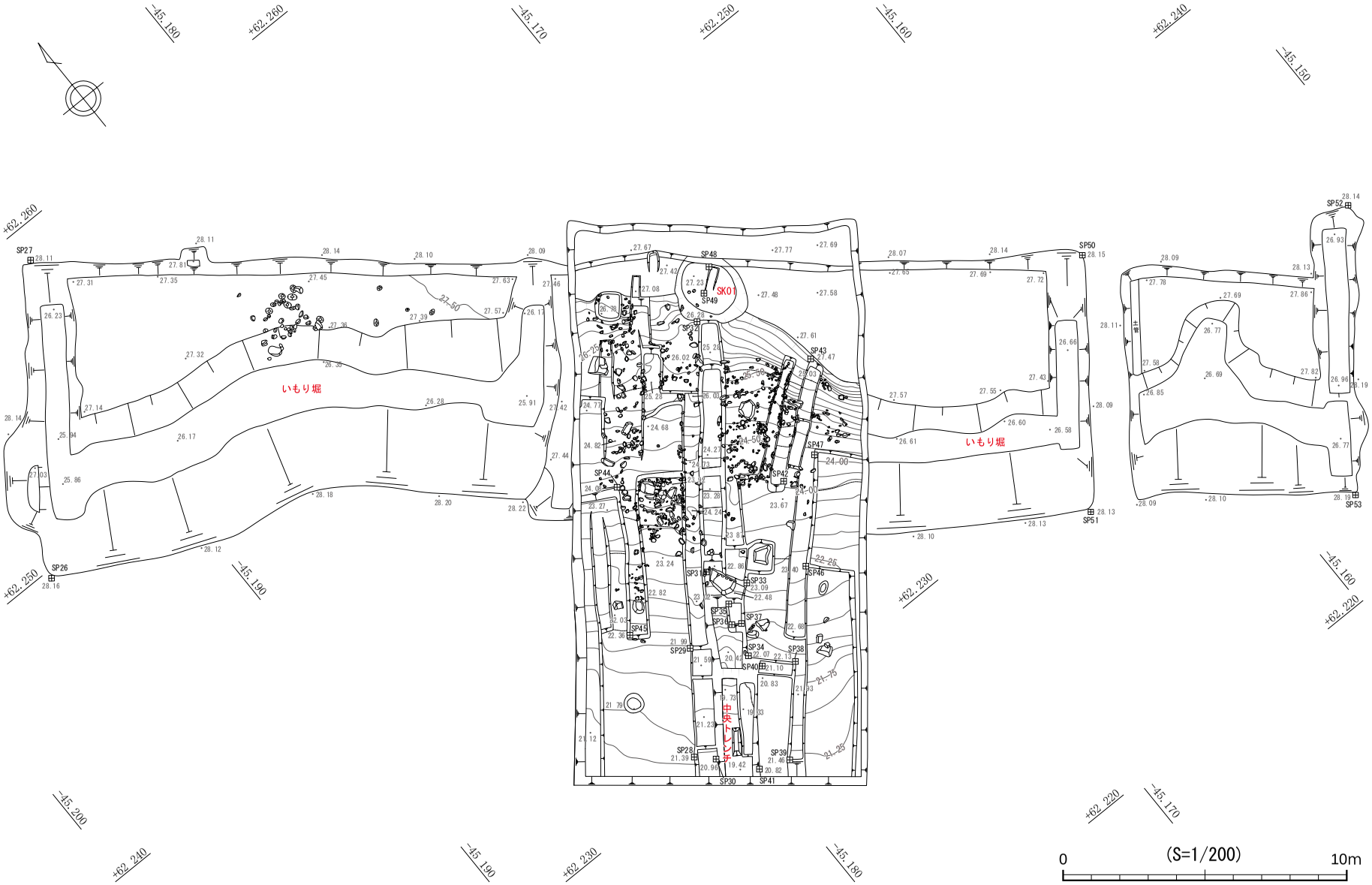


第 45 図　北岸調査区　平面図３（S=1/200）



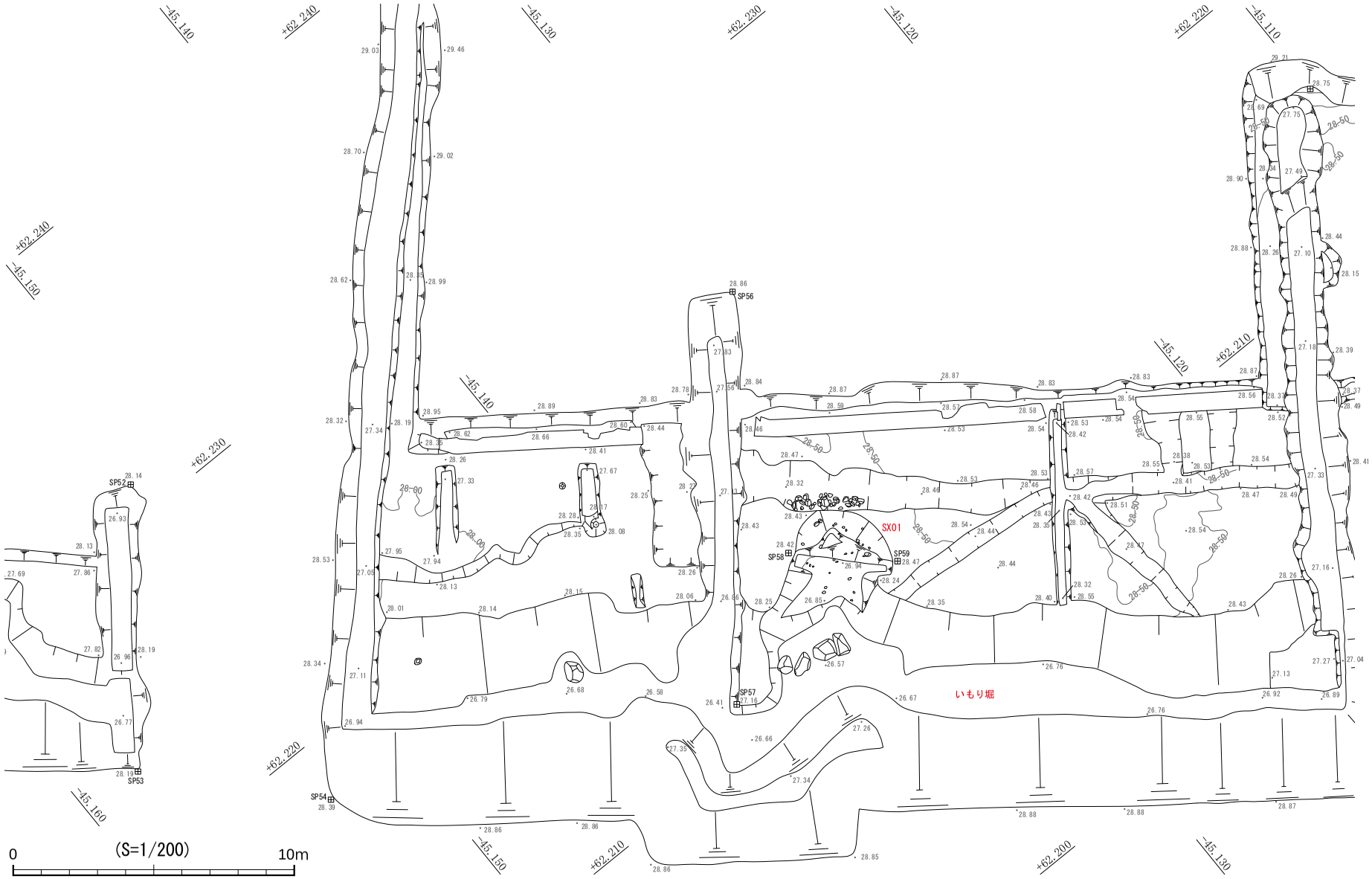
第46図　北岸調査区　平面図４（S=1/200）

第 47 図　北岸調査区　平面図５（S=1/100）

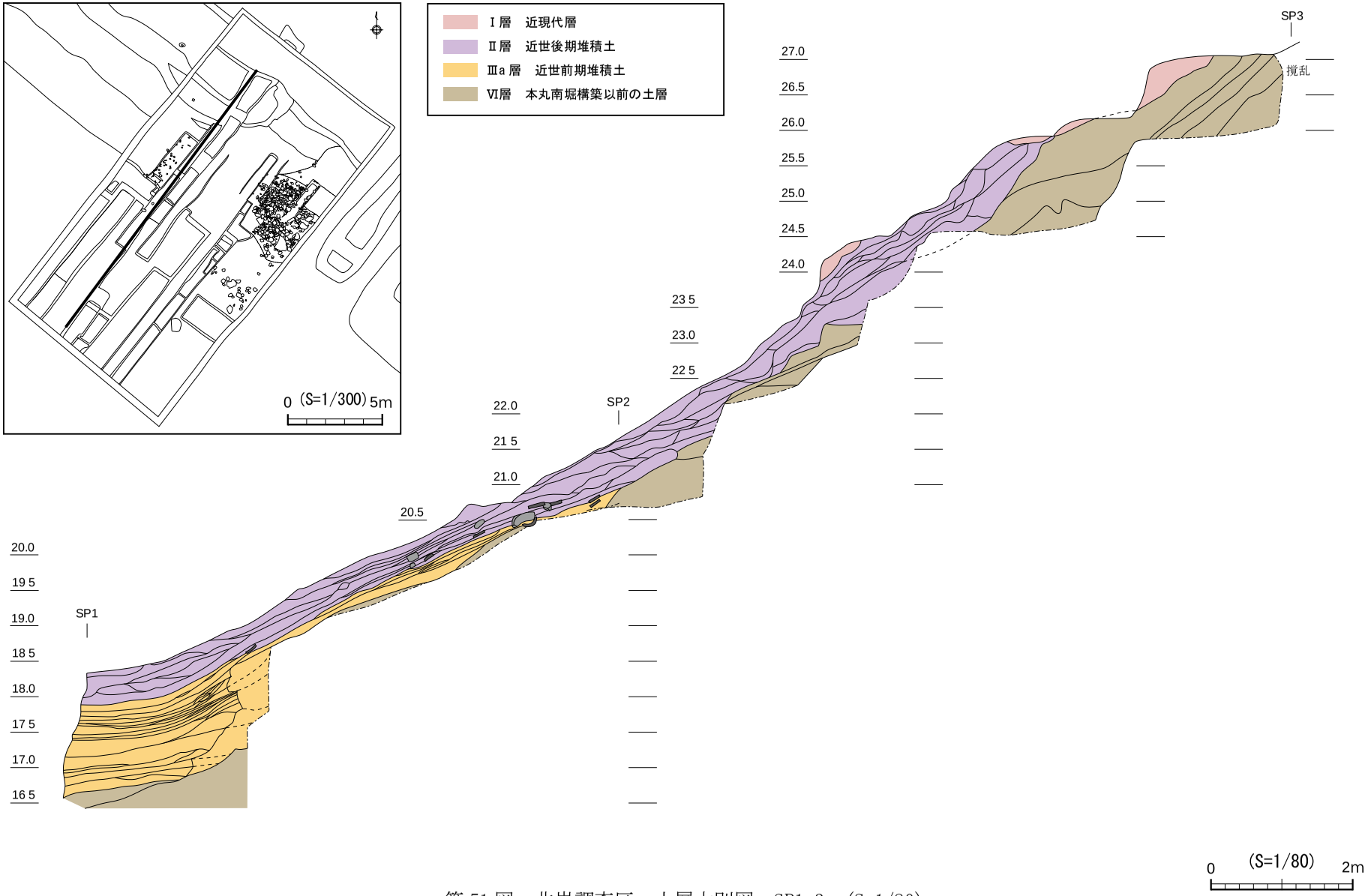


第 48 図　北岸調査区　平面図 6 （S=1/200）

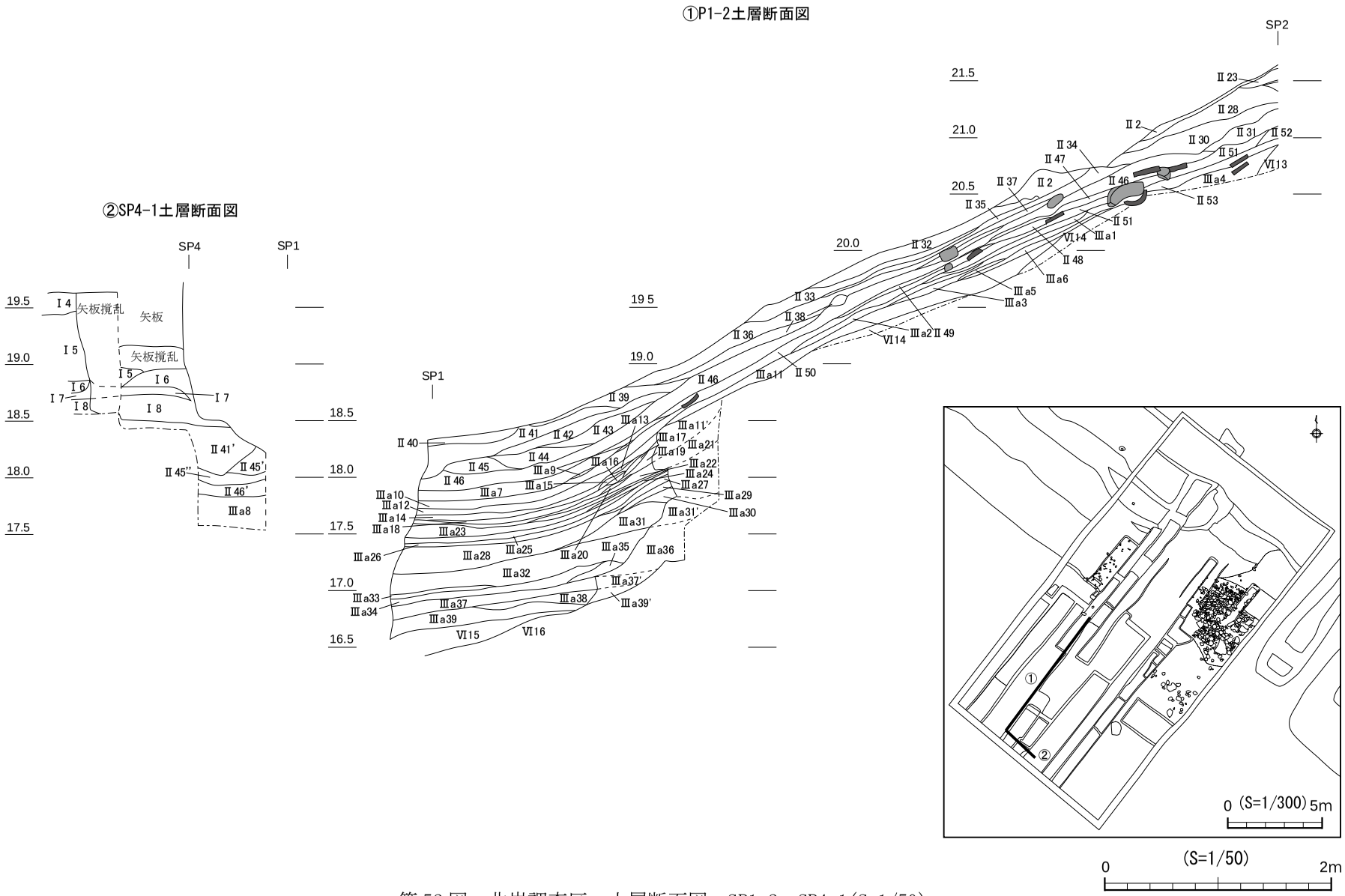
第 49 図　北岸調査区　平面図 7 （S=1/100）



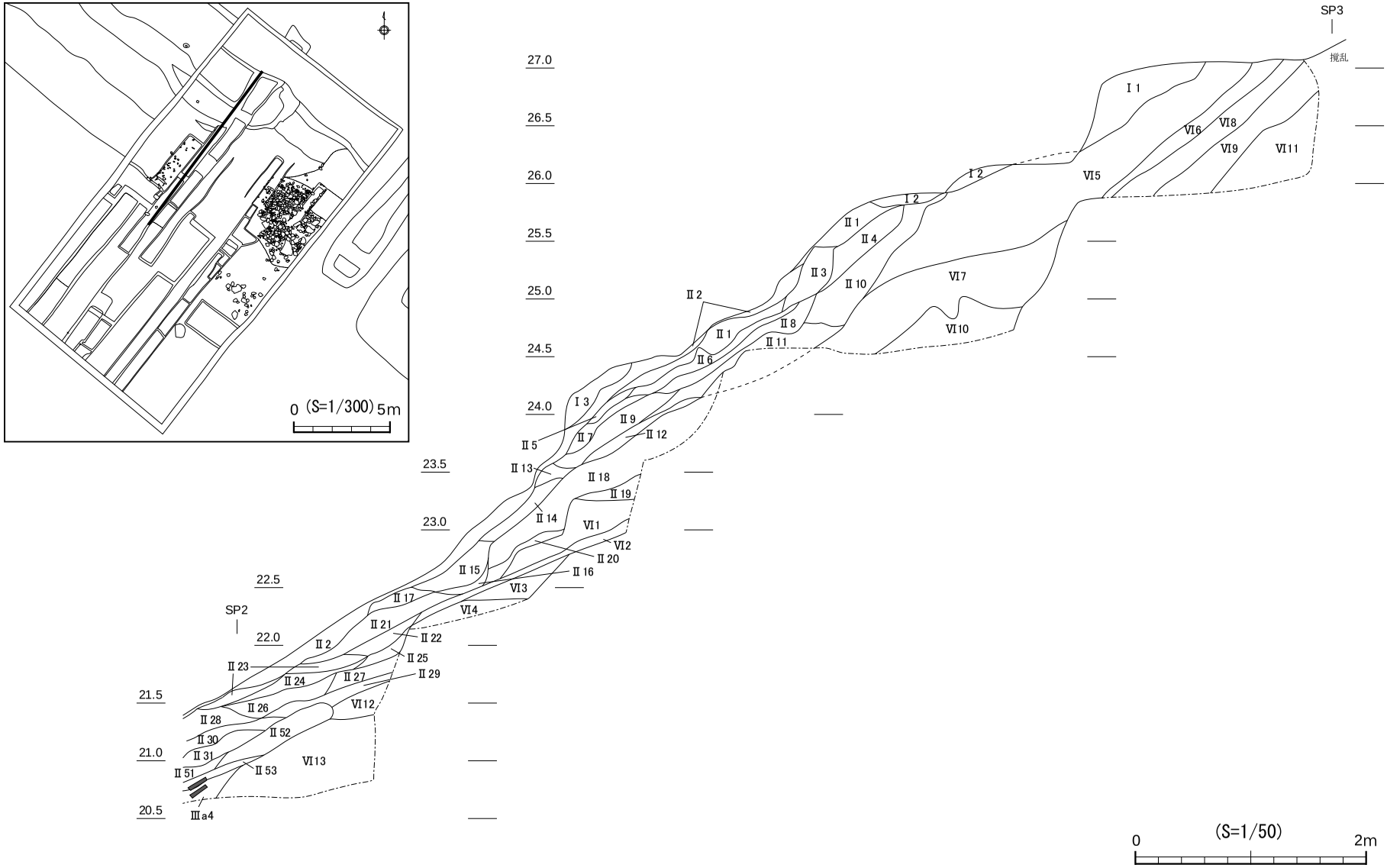
第 50 図　北岸調査区　平面図８（S=1/200）



第 51 図　北岸調査区　土層大別図　SP1-3　(S=1/80)



第 52 図　北岸調査区　土層断面図　SP1-2・SP4-1(S=1/50)



第 53 図　北岸調査区　土層断面図　SP2-3　(S=1/50)

Ⅰ層　近現代層
Ⅰ1　黄色砂質土　径２～５㎜の小石多く含む【埋戻土か】
Ⅰ2　黄色砂　灰色粘土含む【埋戻土】
Ⅰ3　淡灰色砂【埋戻土】
Ⅰ4　暗灰褐色粘質土
Ⅰ5　灰色粘質土　粗砂礫多く含む
Ⅰ6　黒灰色粘土
Ⅰ7　灰色粘質土
Ⅰ8　黒灰色粘土

Ⅱ層　近世後期：宝暦大火以後～明治40年の堆積土
Ⅱ1　暗灰褐シルト【明治表土】
Ⅱ2　暗褐色土【明治表土】
Ⅱ3　淡灰褐色土　砂・礫含み、鉄分沈着多い
Ⅱ4　褐色土　シルト質土・小石多く含む
Ⅱ5　灰褐色粘質シルト
Ⅱ6　灰褐色シルト
Ⅱ7　灰褐色粘質シルト＋小礫・小石
Ⅱ8　褐色シルト　鉄分沈着あり
Ⅱ9　褐色粗砂＋小礫・小石
Ⅱ10　暗黄褐色土　礫・砂少し含む
Ⅱ11　黄褐色粗砂
Ⅱ12　灰褐色粘質土
Ⅱ13　Ⅱ18層と同質　竹根の撹乱でせり上がったもの
Ⅱ14　黒灰褐色土　竹根撹乱著しい
Ⅱ15　暗灰褐色土　竹根撹乱著しい
Ⅱ16　暗褐色土　砂多く含みしまりない、竹根多い
Ⅱ17　褐色粘質土
Ⅱ18　暗褐色土＋小礫・小石
Ⅱ19　暗褐色土＋礫
Ⅱ20　黒灰色粘質土＋砂・礫【漸移層】
Ⅱ21　暗褐色土　砂多く含む　Ⅱ18層由来、崩落したものか
Ⅱ22　暗灰褐色粘土　砂混
Ⅱ23　暗褐色シルト　砂混
Ⅱ24　暗褐色シルト
Ⅱ25　黄褐色砂礫
Ⅱ26　暗褐色砂質土
Ⅱ27　灰色粘砂
Ⅱ28　暗褐色シルト腐植土
Ⅱ29　黒灰色砂質土
Ⅱ30　黒灰色砂礫　下では腐植土混じる
Ⅱ31　灰褐粘シルト　下では粘性あり
Ⅱ32　灰褐色粘質土　数㎜の細砂が入る互層状　木の皮・根等若干含む
Ⅱ33　灰褐色粘質土　数㎜の細砂が入る互層状　木の皮・根等若干含む
Ⅱ34　灰褐色粘質土　数㎜の細砂が入る互層状　木の皮・根等若干含む
Ⅱ35　灰褐色粘質土　数㎜の細砂が入る互層状　木の皮・根等若干含む
Ⅱ36　灰褐色粘質土　数㎜の細砂が入る互層状　木の皮・根等若干含む
Ⅱ37　灰褐色粘質土　数㎜の細砂が入る互層状　木の皮・根等若干含む
Ⅱ38　灰褐色粘質土　砂・腐植物多く含む
Ⅱ39　灰褐色粘土　Ⅱ38層より砂多く色暗い
Ⅱ40　灰褐色粘質土　数㎜の細砂が入る互層状　木の皮・根等若干含む
Ⅱ41　黒褐色砂質土　礫含む
Ⅱ41’黒褐色腐植土　竹根多く入る
Ⅱ42　灰褐色粘質土　砂若干・礫・腐植物含む
Ⅱ43　淡灰褐色粘土
Ⅱ44　淡灰褐色粘土　淡黄灰白色粘土ブロック含む
Ⅱ45　黒褐色粘質土　こぶし大の礫と砂含む　腐植物含む
Ⅱ45’灰色粘質土
Ⅱ45’黒褐色土　腐植土混
Ⅱ46　黒灰色粘質土　腐植土混
Ⅱ46’黒灰色粘土
Ⅱ47　暗灰色砂質土　腐植物混
Ⅱ48　暗灰褐色粘質土　数㎜の細砂が入る互層状
Ⅱ49　暗灰褐色粘質土　数㎜の細砂が入る互層状
Ⅱ50　暗灰褐色粘質土　数㎜の細砂が入る互層状
Ⅱ51　灰色粘質細砂　白色ブロック混
Ⅱ52　黒灰色粘土
Ⅱ53　灰色粗砂

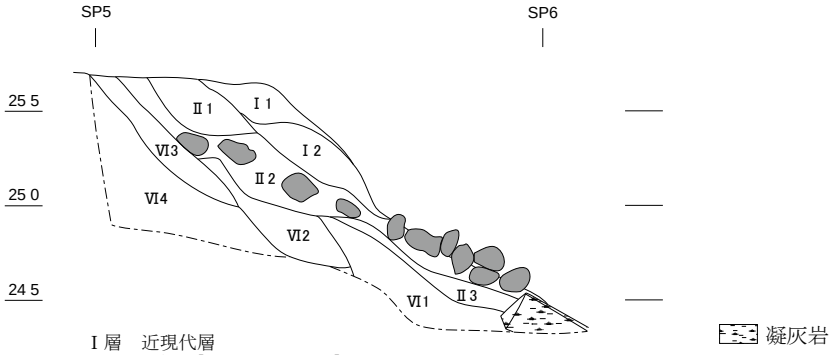
Ⅲa層　近世前期：宝暦大火以前の堆積土
Ⅲa1　暗灰褐色粘質土　数㎜の細砂が入る　互層状
Ⅲa2　暗灰褐色粘質土　数㎜の細砂が入る　互層状
Ⅲa3　暗灰褐色粘質土　数㎜の細砂が入る　互層状
Ⅲa4　褐灰色砂
Ⅲa5　暗灰褐色粘質土　数㎜の細砂が入る　互層状
Ⅲa6　暗灰褐色粘質土　数㎜の細砂が入る　互層状
Ⅲa7　灰褐色粘土　間層に１～２㎜の砂入る　腐植物若干入る
【地山の崩落に伴う砂と粘土の互層】
Ⅲa8　暗灰褐色粘土
Ⅲa9　灰色砂
Ⅲa10　灰褐色粘土　間層に１～２㎜の砂入る　腐植物若干入る
【地山の崩落に伴う砂と粘土の互層】
Ⅲa11　黒灰色粗砂礫　遺物含む（越前瓦）
Ⅲa11’黒灰色粗砂礫　粗砂・大きな礫混入【地山の崩落により不連続】
Ⅲa12　灰褐色粘土　間層に１～２㎜の砂入る　腐植物若干入る
【地山の崩落に伴う砂と粘土の互層】
Ⅲa13　灰褐色粘土　間層に１～２㎜の砂層入る　腐植物若干入る
【地山の崩落に伴う砂と粘土の互層】
Ⅲa14　灰褐色粘土　間層に１～２㎜の砂層入る　腐植物若干入る
【地山の崩落に伴う砂と粘土の互層】
Ⅲa15　暗灰褐色粗砂【地山の崩落に伴う砂と粘土の互層】
Ⅲa16　灰褐色粘土【地山の崩落に伴う砂と粘土の互層】
Ⅲa17　灰褐色粘土　間層に１～２㎜の砂層入る
Ⅲa18　灰褐色粘土　間層に１～２㎜の砂層入る　腐植物若干入る
【地山の崩落に伴う砂と粘土の互層】
Ⅲa19　灰褐色粘土　　間層に１～２㎜の砂層入る
Ⅲa20　暗灰褐色粗砂【地山の崩落に伴う砂と粘土の互層】
Ⅲa21　暗灰褐色粗砂　粗砂・大きな礫混入【地山の崩落により不連続】
Ⅲa22　灰褐色粘土　間層に１～２㎜の砂層入る　腐植物若干入る
【地山の崩落に伴う砂と粘土の互層】
Ⅲa23　灰褐色粘土　間層に１～２㎜の砂層入る　腐植物若干入る
【地山の崩落に伴う砂と粘土の互層】
Ⅲa24　暗灰褐色粗砂【地山の崩落に伴う砂と粘土の互層】
Ⅲa25　灰褐色粘土　間層に１～２㎜の砂層入る　腐植物若干入る
【地山の崩落に伴う砂と粘土の互層】
Ⅲa26　灰褐色粘土　間層に１～２㎜の砂層入る　腐植物若干入る
【地山の崩落に伴う砂と粘土の互層】
Ⅲa27　暗灰褐色粗砂【地山の崩落に伴う砂と粘土の互層】
Ⅲa28　灰褐色粘土　間層に１～２㎜の砂層入る　腐植物若干入る
【地山の崩落に伴う砂と粘土の互層】
Ⅲa29　灰褐色粘質土
Ⅲa30　灰褐色粘質土　粗砂非常に多く含む
Ⅲa31　灰褐色粘質砂質土　粗砂多く含み径20～30㎝の礫入る
Ⅲa31’灰褐色粗砂・大きな礫混入【地山の崩落により不連続】
Ⅲa32　灰褐色粘土　間層に１～２㎜の砂層入る
Ⅲa33　灰褐色粘土　間層に１～２㎜の砂層入る
Ⅲa34　灰褐色粘土　間層に１～２㎜の砂層入る
Ⅲa35　暗褐色粗砂
Ⅲa36　暗褐色粗砂・大きな礫混入【地山の崩落により不連続】
Ⅲa37　灰褐色粘土　間層に１～２㎜の砂層入る
Ⅲa37’灰褐色粘土　粗砂・大きな礫混入【地山の崩落により不連続】
Ⅲa38　灰褐色粘土　間層に１～２㎜の砂層入る
Ⅲa39　暗灰色粗砂　径５～10㎝の礫多く含む
Ⅲa39’暗灰色粗砂・大きな礫混入【地山の崩落により不連続】

Ⅵ層　本丸南堀構築以前の層
Ⅵ1　黒灰色粘質土【古代包含層か】
Ⅵ2　暗灰褐色粘土
Ⅵ3　淡黄灰色粘土
Ⅵ4　淡黄灰色シルト
Ⅵ5　黄色砂質土　暗褐色土粒含む【地山か】
Ⅵ6　黄色砂質土　径２～５㎜の小石含む【地山か】
Ⅵ7　褐色砂、黄色砂＋河原石（径３～５㎝大中心）【地山か】
Ⅵ8　黄色砂質土　黒褐色土粒少し含む【地山か】
Ⅵ9　黄褐色礫混土　黄色粘土粒含む【地山か】
Ⅵ10　黄色砂＋河原石（径10㎝大中心）【地山か】
Ⅵ11　黄褐色砂質土　径２～３㎝の小石多く含む【地山か】
Ⅵ12　黄褐色粗砂
Ⅵ13　茶褐色粗砂　礫混【地山か】
Ⅵ14　灰色粗砂礫【地山か　当初法面】
Ⅵ15　灰褐色粘土【当初法面】
Ⅵ16　灰色砂礫【地山】

※調査区東隅付近では、矢板付近まで木の根が残る
※竹根は見られないが、ヒゲ根はⅡ38～Ⅱ42層で多く見られる

第54図　北岸調査区　土層注記　SP1-3・SP4-1

①SP5-6土層断面

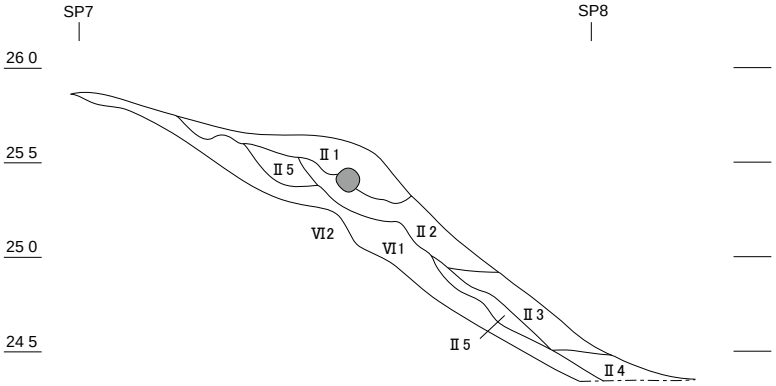


Ⅰ層　近現代層
Ⅰ1　灰褐色土【明治40年堀埋立土】
Ⅰ2　暗灰褐色土【明治40年堀埋立土】

Ⅱ層　近世後期：宝暦大火以後～明治40年の堆積土
Ⅱ1　暗褐色粘質土【旧表土】
Ⅱ2　褐色砂＋淡灰色粘質土＋径20～40cm大の礫【礫溜】
Ⅱ3　暗褐色粘質シルト

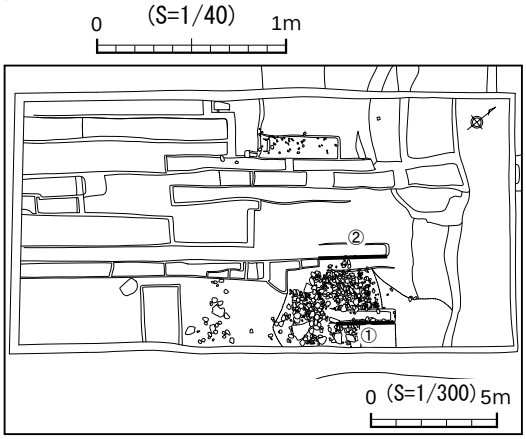
Ⅵ層　いもり堀構築以前の層：いもり堀構築時のベース
Ⅵ1　暗灰褐色粘質土
Ⅵ2　褐色粘質土　砂多く含む
Ⅵ3　黄褐色砂質土　中央アゼⅤ11層と同質
Ⅵ4　黄色砂　径２～３cm大の礫石多い　西アゼⅥ2層と同質

②SP7-8土層断面

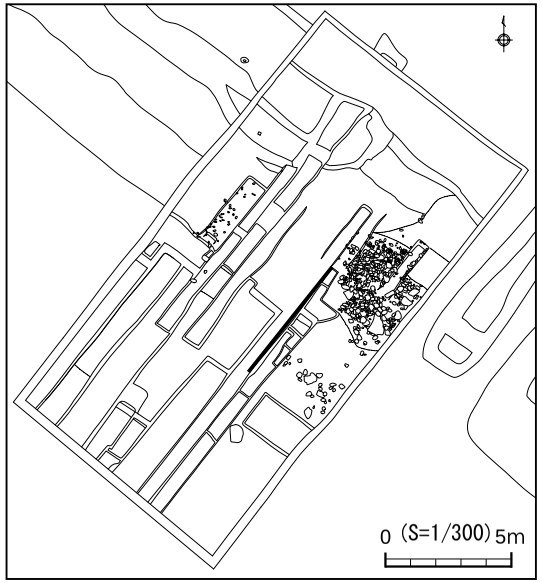


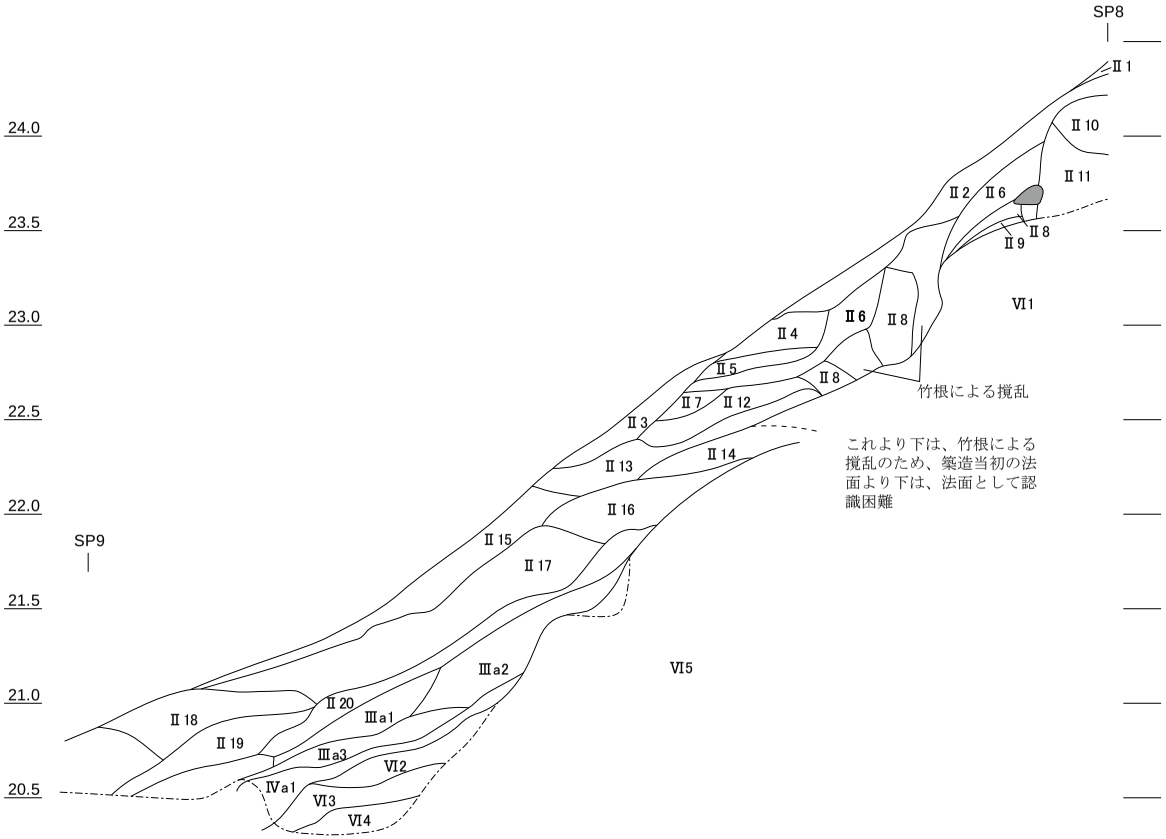
Ⅱ層　近世後期：宝暦大火以後～明治40年の堆積土
Ⅱ1　暗褐色土
Ⅱ2　灰褐色粘質土　砂多く含む【礫溜】
Ⅱ3　灰褐色粘質土　礫少し含む＝SP9-8土層断面Ⅱ2層【明治表土下法面形成土】
Ⅱ4　淡青灰色砂　シルト質【明治表土下法面形成土】
Ⅱ5　灰色粘質土　灰白粘土ブロック含む

Ⅵ層　いもり堀構築以前の層：いもり堀掘削時のベース
Ⅵ1　黄褐色砂質土　径10cm大の礫少し含む
Ⅵ2　黄褐色砂質土　径１cm以下の小石多く含む



第 55 図　北岸調査区　土層断面図　SP5-6・SP7-8(S=1/40)





Ⅱ層　近世後期：宝暦大火以後～明治40年の堆積土
Ⅱ1　淡青灰色砂　鉄分酸化により赤褐色＝SP7-8土層断面Ⅱ4層
　【明治表土下法面形成土】
Ⅱ2　灰褐色粘質土＝SP7-8土層断面Ⅱ3層【明治表土下法面形成土】
Ⅱ3　暗灰褐色土　竹のヒゲ根多
Ⅱ4　淡灰褐色粘質土
Ⅱ5　淡灰褐色シルト
Ⅱ6　暗褐色土　砂多く含み、竹根ヒゲ根多く含む
Ⅱ7　黄灰色砂質土
Ⅱ8　Ⅱ10層と同質　竹の撹乱で分断されたものか
Ⅱ9　黒灰色粘質土　少し砂・石含む【Ⅵ1層の漸移層】
Ⅱ10　暗褐色土＋小礫・小石　中央アゼⅡ15層と同質
Ⅱ11　暗褐色砂質土
Ⅱ12　灰褐色砂質土　竹のヒゲ根多
Ⅱ13　暗褐色土　竹のヒゲ根多
Ⅱ14　褐色砂質土　鉄分沈着
Ⅱ15　灰色砂質土
Ⅱ16　暗灰褐色砂質土　根多く入る
Ⅱ17　灰色砂質土　礫含む
Ⅱ18　青灰色粗砂　礫混じる
Ⅱ19　灰褐色粘質土　礫混じる
Ⅱ20　黒灰色砂礫

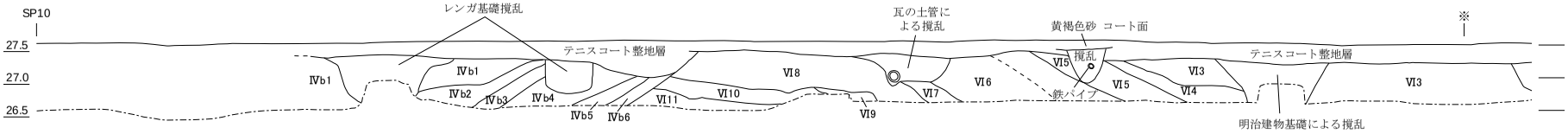
Ⅲa層　近世前期：宝暦大火以前の堆積土
Ⅲa1　黒灰色シルト
Ⅲa2　黒灰色粘土【上段で検出したベース（古代包含層）が崩壊し堆積したもの】
Ⅲa3　黄灰色粘土

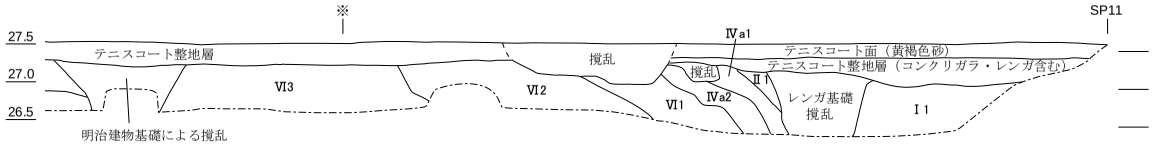
Ⅳa層　近世初期：流れこみまたは法面形成土
Ⅳa1　黄灰色砂

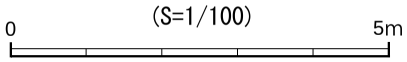
Ⅵ層　いもり堀構築以前
Ⅵ1　黒灰色粘質土【古代包含層か】
Ⅵ2　橙褐色粗砂　礫混じる
Ⅵ3　暗褐色粗砂
Ⅵ4　橙褐色粗砂
Ⅵ5　灰色細砂

0 (S=1/40) 1m

第56図　北岸調査区　土層断面図　SP9-8(S=1/40)







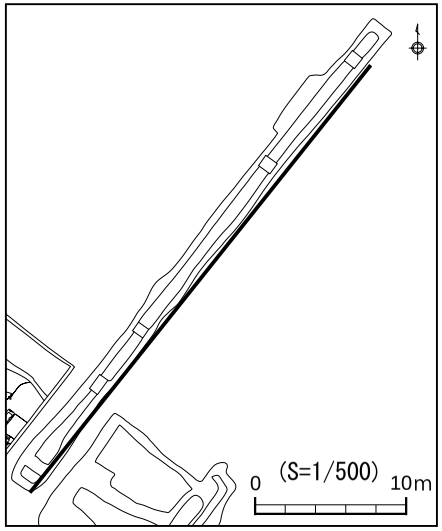
Ⅰ層　近現代層
Ⅰ1　暗灰褐色シルト　礫（径５～20㎝）含む【明治40年の堀埋立土】

Ⅱ層　近世後期：宝暦大火以後～明治40年の堆積土
Ⅱ1　暗褐色シルト　腐植物層【旧表土】

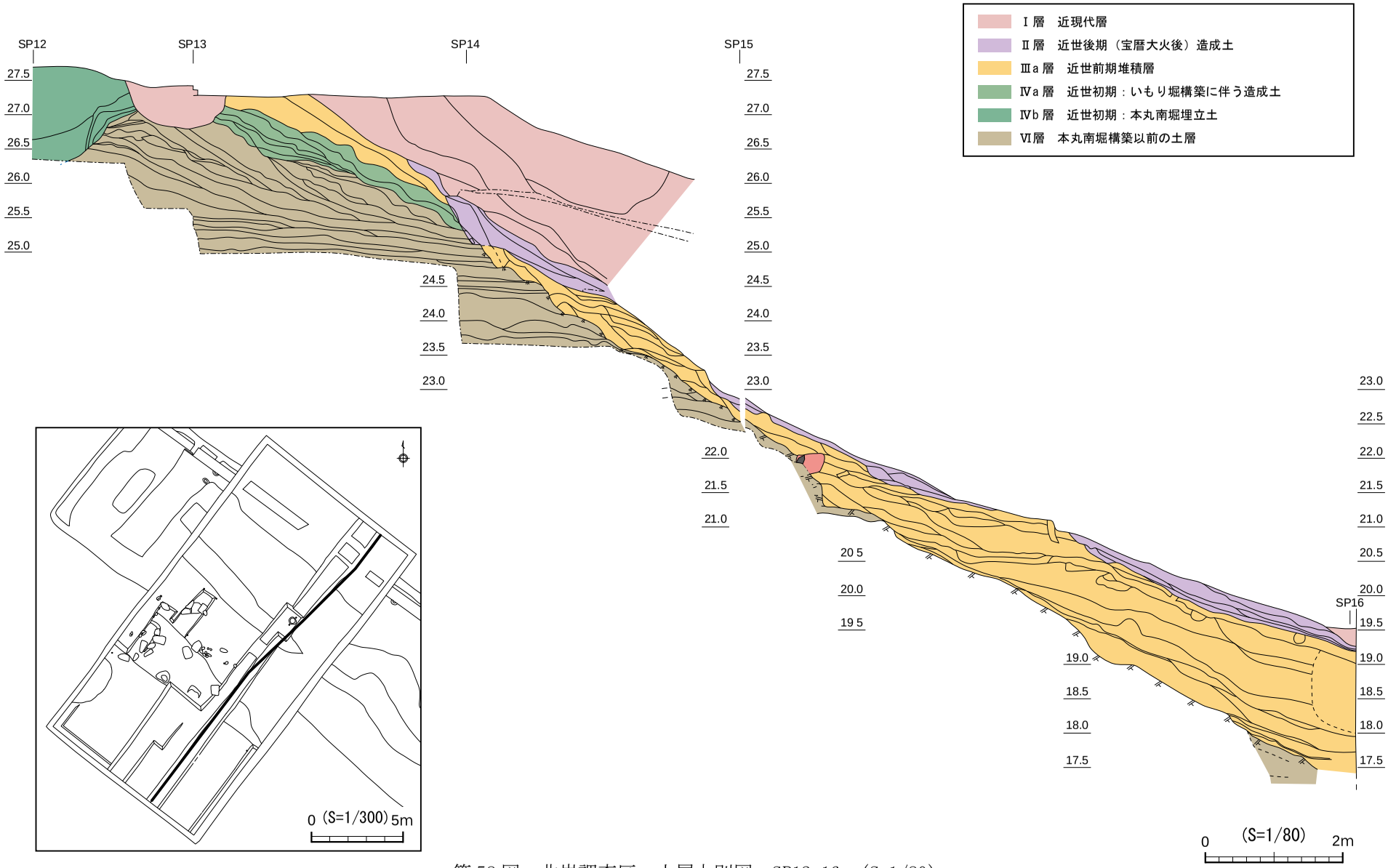
Ⅳa層　近世初期：いもり堀構築に伴う造成土
Ⅳa1　灰褐色シルト　灰色粘土ブロック（径15～20㎝）が入る　ブロックの間に灰褐色砂質シルトが入る【土羽に貼り付け整形した面か】
Ⅳa2　暗褐灰色シルト　暗褐色シルトと灰色粘土ブロック（径0.5～３㎝）が混

Ⅳb層　近世初期：本丸南堀埋立土
Ⅳb1　暗灰色シルト　灰色粘土シルト・黄褐色粘土ブロック・礫・砂が混
Ⅳb2　暗灰褐色シルト　黄褐色粘土ブロック（径２～３㎝）混　やや粘質
Ⅳb3　暗褐色シルト　黄褐色粘土ブロック（径２～３㎝）混　暗褐色シルトもブロック状に混
Ⅳb4　黄褐色シルト　砂質シルトに黄褐色粘土ブロック（径１～３㎝）が混
Ⅳb5　灰黄褐色シルト　砂質　黄褐粘ブロック（径約１㎝）混じるも少ない
Ⅳb6　灰褐色シルト　灰色粘土・灰砂がブロック状（径２～３㎝）に混

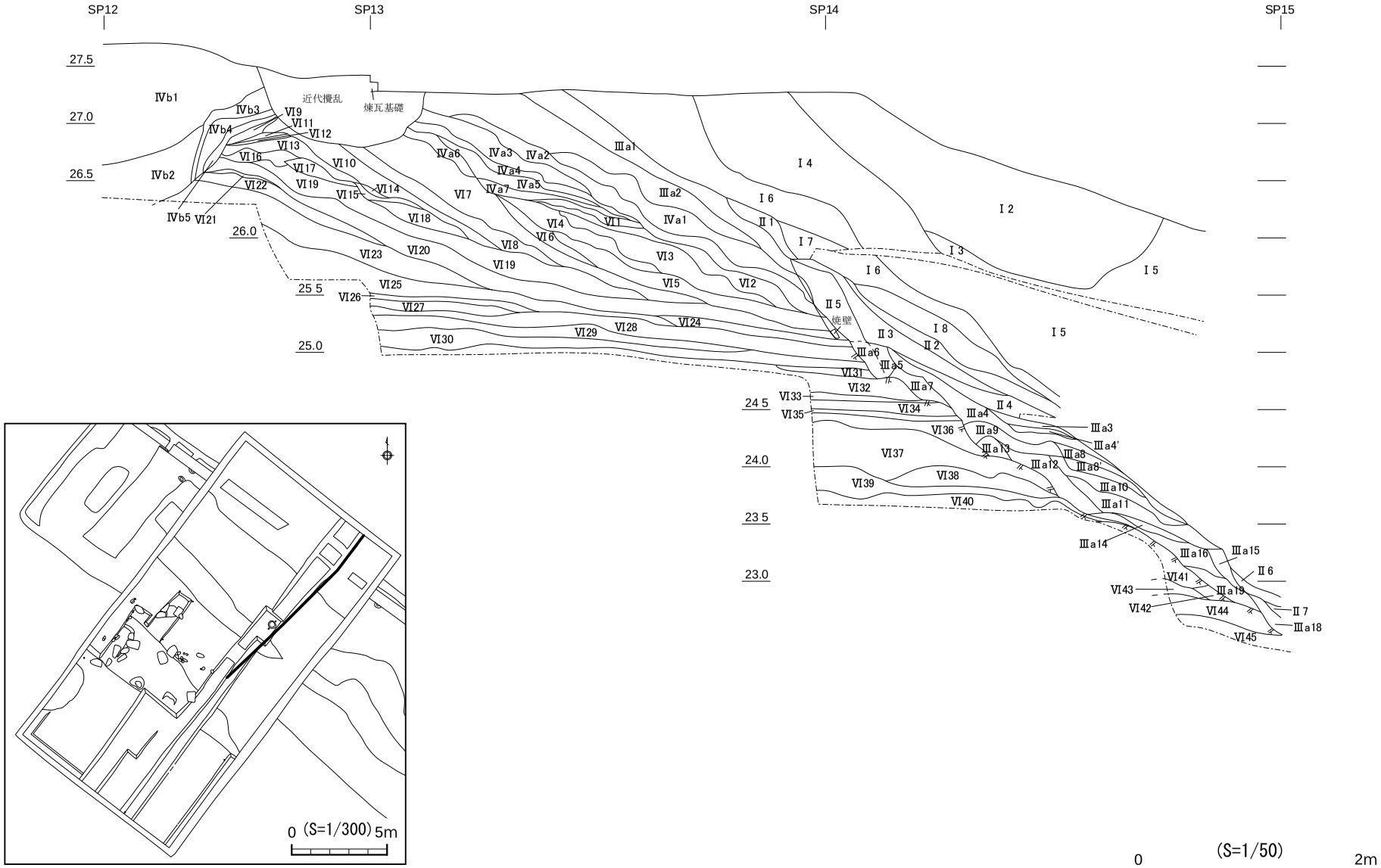
Ⅵ層　本丸南堀構築以前の土層
Ⅵ1　黄褐色シルト　砂質のシルトに礫（径３～５㎝）が入る
Ⅵ2　灰褐色シルト　礫・灰色砂・暗褐色シルトがブロック状に混
Ⅵ3　褐灰色シルト　礫・灰色砂・暗褐色シルトがブロック状に混　礫やや多い
Ⅵ4　暗灰色シルト　粘質のシルトに礫入る
Ⅵ5　黄褐色礫　径２～４㎝大の礫の層　黄褐色砂が間に入る
Ⅵ6　黄褐色シルト　礫（径３～５㎝）・黄褐色粘土がブロック状に混じった層と小礫（径１～３㎝）の層
Ⅵ7　灰色シルト　粘質シルトと礫（径２～３㎝、多い）の層
Ⅵ8　暗灰褐色シルト　暗褐灰色シルトに黄褐色粘土がブロック状（径約３㎝）に多く混じる　粘質
Ⅵ9　暗褐灰色シルト　暗褐灰色砂質シルトに黄褐粘ブロック（径約３㎝）が混　Ⅵ10層より砂質
Ⅵ10　暗褐灰色シルト　暗褐灰色シルトに黄褐色粘土ブロック（径約10㎝）が混
Ⅵ11　灰色シルト　かなり粘性　灰色粘土ブロック（径１～２㎝）も混



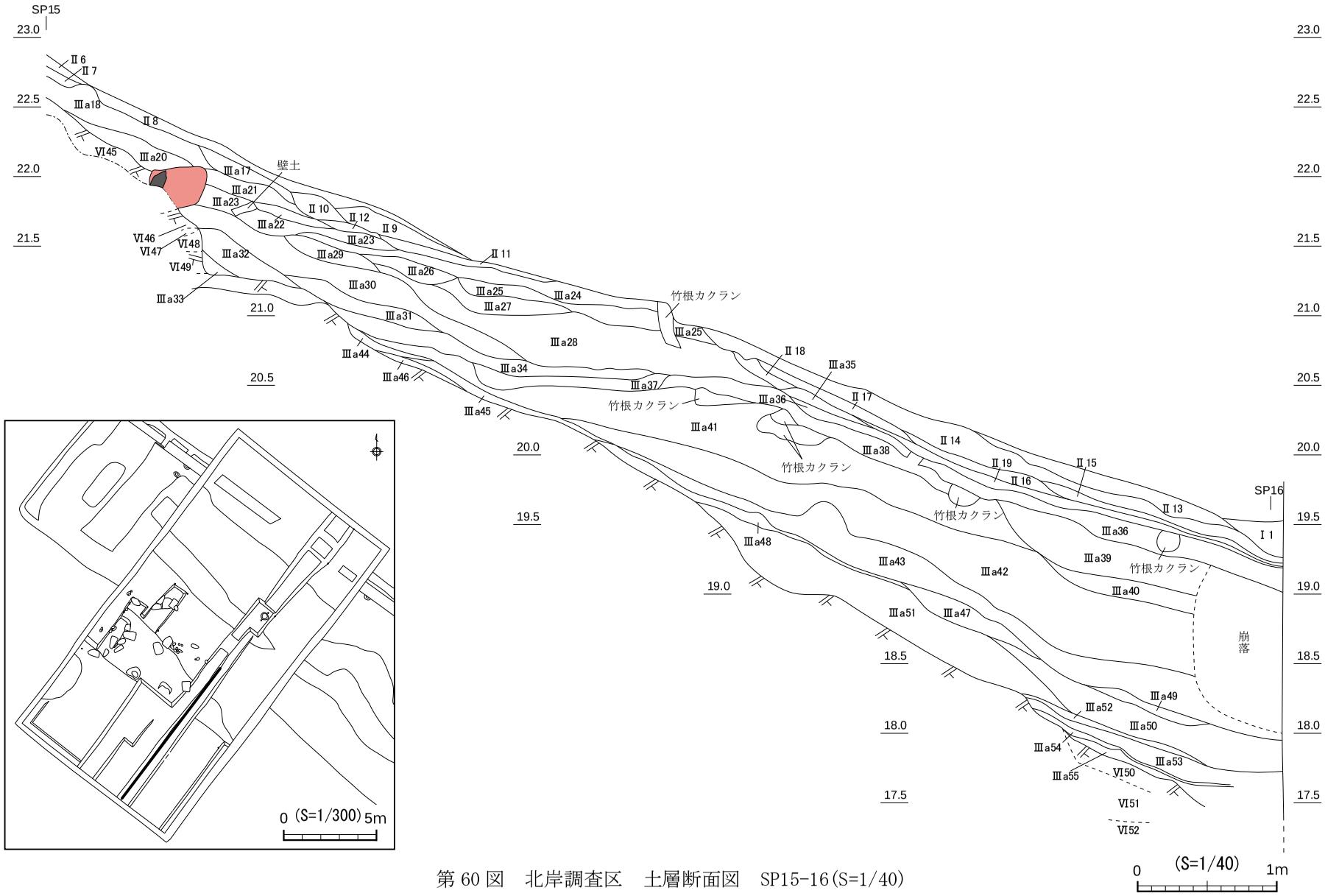
第57図　北岸調査区　土層断面図　SP10-11　(S=1/100)



第 58 図　北岸調査区　土層大別図　SP12-16　(S=1/80)



第 59 図　北岸調査区　土層断面図　SP12-15　(S=1/50)



第 60 図　北岸調査区　土層断面図　SP15-16(S=1/40)

Ⅰ層　近現代層
Ⅰ1　矢板撹乱
Ⅰ2　褐色砂質土　小礫多く含む【堀埋立土】
Ⅰ3　褐灰色砂質土【堀埋立土】
Ⅰ4　褐色砂質土　小礫少ない【堀埋立土】
Ⅰ5　青灰褐色粘砂質土【堀埋立土】
Ⅰ6　淡黄褐～淡青褐色シルト質土【堀埋立土】
Ⅰ7　淡褐色シルト質土【堀埋立土】
Ⅰ8　暗青褐灰色シルト質土　有機物混じる【堀埋立土】

Ⅱ層　近世後期：宝暦大火以後～明治40年の堆積土
Ⅱ1　暗褐色シルト質土・淡黄褐色シルト質土　混土
Ⅱ2　黒褐色腐植土【ブラックバンド（堀埋立前表土）】
Ⅱ3　暗青灰褐色粘質土
Ⅱ4　暗褐灰色粘質土　焼土塊（焼壁片か）混【宝暦大火焼土埋込か】
Ⅱ5　灰褐色粘砂質土　焼土塊（焼壁片か）混【宝暦大火焼土埋込か】
Ⅱ6　暗灰色粘質土　植物根多く含む　下部は小石を多く含む【堀底堆積層】
Ⅱ7　暗灰色粘質土　径５cm未満の小石混入（下部により多い）【堀底堆積層】
Ⅱ8　暗茶褐色腐植土　酸化すると土色黒くなる、径１cm程度の小石多く含む【堀底堆積層】
Ⅱ9　褐灰色砂質土　小石を多く含む　壁土？含む【堀底堆積層】
Ⅱ10　濁青灰色粗砂　腐植物多く混入　小石を多く含む【堀底堆積層】
Ⅱ11　暗灰褐色粘質土　直上に落葉多量に密着　小石を多く含む【堀底堆積層】
Ⅱ12　暗褐灰色砂質土　小石を多く含む【堀底堆積層】
Ⅱ13　暗灰褐色粘質土【堀底堆積層】
Ⅱ14　暗茶褐色腐植土　Ⅱ8層と同じだが小石ほとんどなし【堀底堆積層】
Ⅱ15　砂混じりの暗茶褐色腐植土【堀底堆積層】
Ⅱ16　濁灰色砂質土　腐植物等混入【堀底堆積層】
Ⅱ17　暗灰褐色粘質土　直上に落葉多量に密着　小石を多く含む【堀底堆積層】
Ⅱ18　淡褐灰色粘土　腐植物混入【堀底堆積層】
Ⅱ19　濁暗褐灰色粘質土【堀底堆積層】

Ⅲa層　近世前期：宝暦大火以前の堆積土
Ⅲa1　橙灰褐色砂質土　黄褐色シルト質土小塊含む【近世中期法面か】
Ⅲa2　淡橙灰褐色砂質土　径２cm大の石混入　小礫を含み、硬くしまった土質
Ⅲa3　濁暗灰色粘質土　淡褐灰色粘質土ブロック混入
Ⅲa4　濁暗灰色粘質土　青灰色粘質土ブロック混入＝SP17-18・18-19Ⅲa2層
Ⅲa4’Ⅲa4層よりやや明るい
Ⅲa5　明灰褐色砂質土　小礫・黄褐色シルト質土小塊少ない【近世中期法面か】
Ⅲa6　黄灰色粘質土【近世中期法面か】
Ⅲa7　濁茶褐色粘砂質土　粗砂混入
Ⅲa8　濁暗灰色粘質土
Ⅲa8’淡褐灰色粘質土ブロック混入
Ⅲa9　濁茶褐灰色粘質土　青灰色粘質土ブロック混入＝SP17-18・18-19Ⅲa3層
Ⅲa10　淡褐灰色粘質土
Ⅲa11　褐灰色粘砂質土　径５～10cm大の礫混入
Ⅲa12　濁褐灰色粘砂質土
Ⅲa13　濁茶褐色粘砂質土
Ⅲa14　青灰色細砂
Ⅲa15　濁青灰色粘質土
Ⅲa16　濁青灰色粘砂質土
Ⅲa17　褐灰色砂質土
Ⅲa18　暗褐灰色粘砂質土　いぶし瓦片
Ⅲa19　濁青灰色粘砂質土　青灰色粘土ブロック混入
Ⅲa20　灰色粘質土＝SP18-19Ⅲa23層
Ⅲa21　灰色粗砂　径５cm未満の礫混入
Ⅲa22　褐灰色粘砂質土　腐植物混入、径0.1cm程度の小石多く混入
Ⅲa23　淡褐灰色粘質土
Ⅲa24　青灰色粘質土　径１cm程度の小石多く混入
Ⅲa25　濁灰色粘砂質土
Ⅲa26　淡褐灰色砂質土
Ⅲa27　Ⅲa28層より粘土質が強
Ⅲa28　濁青灰色粘質土　径１cm程度の小石多く混
Ⅲa29　青灰色粘砂質土
Ⅲa30　淡褐灰色砂質土
Ⅲa31　淡褐灰色粗砂
Ⅲa32　濁暗灰色粘土
Ⅲa33　青灰色細砂
Ⅲa34　濁青灰色粘砂質土　径２～３cmの小石多く混入
Ⅲa35　青灰色粘砂質土
Ⅲa36　青灰色砂質土
Ⅲa37　淡灰色細砂
Ⅲa38　暗灰褐色粘質土　腐植物混入
Ⅲa39　濁青灰色粘砂質土　径１～15cm大の小石や粗砂多く混入
Ⅲa40　青灰色粗砂
Ⅲa41　濁暗青灰色粘質土　青灰色粘土ブロック、径５cm程度の小石まばらに混入
Ⅲa42　濁青灰色砂質土　青灰色粘土ブロック多量に混入
Ⅲa43　濁青灰色砂質土　径２～20cm大の石多く混入
Ⅲa44　暗茶褐色小石層　径１cm未満の小石層、隙間に暗茶褐色土が入る【堀底堆積層】
Ⅲa45　暗茶褐色粘質土　腐植物混入【堀底堆積層】
Ⅲa46　灰褐色粘質土【堀底堆積層】
Ⅲa47　暗灰色細砂【堀底堆積層】
Ⅲa48　暗茶褐色細砂　腐植物、粘質土混入【堀底堆積層】
Ⅲa49　暗茶褐色腐植土【堀底堆積層】
Ⅲa50　暗灰色粘土【堀底堆積層】
Ⅲa51　礫層　径５～20cm前後の礫層、隙間に暗茶褐色粘質土【堀底堆積層】
Ⅲa52　淡灰褐色粘土【堀底堆積層】
Ⅲa53　暗褐灰色粘土　木製品（銅釘の刺さった長板・漆器碗等）出土層【堀底堆積層】
Ⅲa54　灰褐色細砂【堀底堆積層】
Ⅲa55　灰褐色粘土【堀底堆積層】
A　竹木等の根カクラン

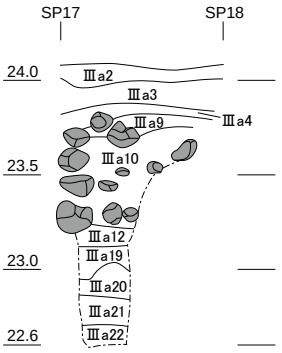
Ⅳa層　近世初期造成土：いもり堀構築当初の基盤層
Ⅳa1　Ⅲa7層より石混入せず　小礫を含み、硬くしまった土質
Ⅳa2　淡灰褐色砂質土　小礫を含み、硬くしまった土質
Ⅳa3　黄橙褐色砂質土　小礫を含み、硬くしまった土質
Ⅳa4　灰褐色砂質土　黒灰褐色砂質土塊含む　小礫を含み、硬くしまった土質
Ⅳa5　濁灰褐色砂質土　小礫を含み、硬くしまった土質
Ⅳa6　濁褐灰色砂質土　淡灰色細砂混入
Ⅳa7　濁灰褐色砂質土＋淡灰色砂質土　小礫を含み、硬くしまった土質

Ⅳb層　近世初期：本丸南堀埋立土
Ⅳb1　濁茶褐灰色粘質土　径５cm未満小石多く混入　硬くしまる
Ⅳb2　Ⅳb1層より小石含まない　硬くしまる
Ⅳb3　濁灰茶褐色粘質土　硬くしまる
Ⅳb4　淡褐灰色粘質土　硬くしまる
Ⅳb5　灰褐色細砂

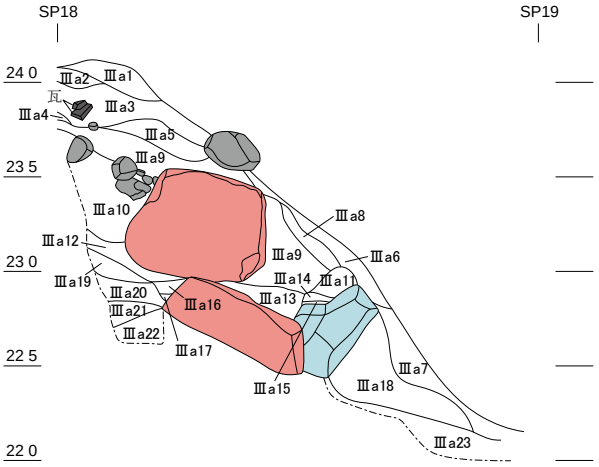
Ⅵ層　本丸南堀構築以前の層
Ⅵ1　濁淡灰色砂質土　褐灰色砂質土混入
Ⅵ2　濁褐灰色砂質土　淡灰色細砂混入
Ⅵ3　Ⅵ2層より淡灰色細砂少ない
Ⅵ4　濁淡灰色細砂　褐灰色砂質土混入
Ⅵ5　濁褐灰色砂質土　淡灰色細砂混入
Ⅵ6　Ⅵ4層より褐灰色砂質土少ない
Ⅵ7　淡灰色細砂　硬くしまる
Ⅵ8　灰褐色粘砂質土　硬くしまる
Ⅵ9　濁淡灰色細砂　茶褐色砂質土混入
Ⅵ10　淡灰褐色砂質土　粗砂多く含む
Ⅵ11　淡灰色細砂
Ⅵ12　淡褐灰色細砂
Ⅵ13　濁淡灰色細砂　硬くしまる、褐灰色砂質土混入
Ⅵ14　濁灰褐色砂質土　くずれやすい
Ⅵ15　橙茶褐色砂質土　焼土？、層下辺には炭粒多く含む
Ⅵ16　Ⅵ13層より褐灰色砂質土多い
Ⅵ17　濁暗灰色砂質土　粗砂多く含む
Ⅵ18　濁暗灰褐色砂質土　淡灰色細砂ブロック混入
Ⅵ19　Ⅵ18層と同色、径５cm程度の小石多く含む
Ⅵ20　淡灰色細砂　灰褐色砂質土ブロック混入、７世紀須恵器杯蓋出土
Ⅵ21　橙褐色細砂
Ⅵ22　礫層　径１～20cm大のものまで大きさ様々
Ⅵ23　灰褐色砂質土
Ⅵ24　茶褐色粗砂＋淡灰色砂質土
Ⅵ25　暗褐灰色粘砂質土
Ⅵ26　褐灰色細砂　径１cm程度の小石混入、サラサラしている【水成堆積か】
Ⅵ27　褐灰色細砂　粘性ややあり、小石なし【水成堆積か】
Ⅵ28　褐灰色細砂　【水成堆積か】
Ⅵ29　Ⅵ28層と同色、薄い粘質土層あり【水成堆積か】
Ⅵ30　灰色細砂　【水成堆積か】
Ⅵ31　濁灰色砂質土　やや硬くしまる、茶褐色の鉄分層互層【水成堆積か】
Ⅵ32　濁灰色砂質土　まばらに茶褐色（鉄分）土ブロックあり【水成堆積か】
Ⅵ33　淡灰色粘土層　茶褐色粘質土混入【水成堆積か】
Ⅵ34　濁茶褐色粗砂　層下辺に鉄分集中【水成堆積か】
Ⅵ35　濁茶褐色粘土【水成堆積か】
Ⅵ36　濁灰色粘土　７世紀遺物出土【古代包含層】
Ⅵ37　濁灰色粘土　径0.5cm程度の小石多く含む　７世紀遺物出土【古代包含層】
Ⅵ38　濁灰色粘土　７世紀遺物出土【古代包含層】
Ⅵ39　暗灰色粘土　７世紀遺物出土【古代包含層】
Ⅵ40　濁淡褐灰色粘土　径約40cmのピット検出【古代の遺構面か】
Ⅵ41　青灰色粘土
Ⅵ42　青灰色砂質土
Ⅵ43　淡灰褐色細砂
Ⅵ44　濁暗灰色粗砂
Ⅵ45　茶褐色粗砂
Ⅵ46　淡灰褐色細砂
Ⅵ47　青灰色シルト
Ⅵ48　淡褐灰色細砂
Ⅵ49　濁青灰色細砂　径３cm未満の小石多く混入
Ⅵ50　青灰色粗砂【地山】
Ⅵ51　青灰色砂質土　径２～20cm大の小石多量に含む【地山】
Ⅵ52　青灰色粘土【地山】

第61図　北岸調査区　土層注記　SP12-16

①SP17-18土層断面

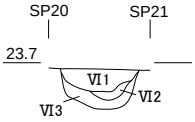


②SP18-19土層断面

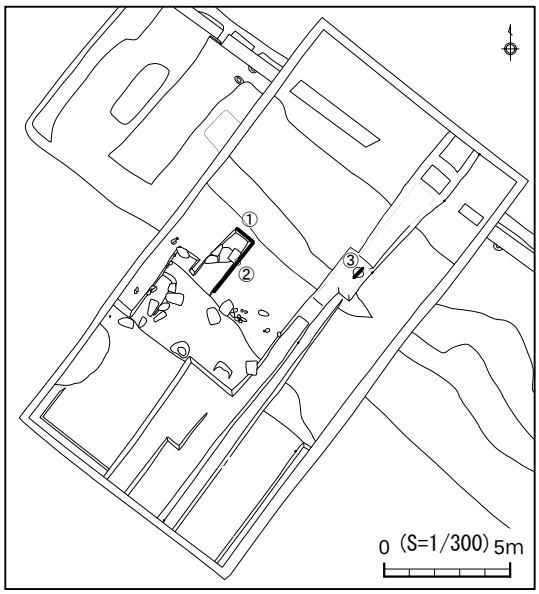


Ⅲa層：近世前期：宝暦大火以前の堆積土
Ⅲa1　淡灰褐色粘土
Ⅲa2　濁暗灰色粘質土＝SP14-15Ⅲa4層
Ⅲa3　濁茶褐灰色粘質土＝SP14-15Ⅲa9層
Ⅲa4　濁暗灰色粘質土　茶褐色粘質土ブロック混入
Ⅲa5　濁灰色粘質土　淡灰褐色粘質土ブロック混入
Ⅲa6　濁暗灰色粘土
Ⅲa7　灰色砂質土
Ⅲa8　濁茶褐灰色粘砂質土
Ⅲa9　暗灰色粘砂質土
Ⅲa10　茶褐色砂質土　鉄分沈着　トレンチ１の西壁までは存在する層
Ⅲa11　茶褐色粗砂
Ⅲa12　濁茶褐灰色粘土
Ⅲa13　茶褐色粘砂質土
Ⅲa14　淡褐灰色粘土＋淡褐灰色細砂
Ⅲa15　淡褐灰色細砂
Ⅲa16　茶褐色砂質土　非常にやわらかい
Ⅲa17　暗茶褐色粘土
Ⅲa18　褐灰色砂質土
Ⅲa19　濁茶褐色細砂　非常に硬くしまる
Ⅲa20　茶褐灰色細砂　硬くしまる
Ⅲa21　茶褐色粗砂　硬くしまる　径３㎝程度の小石含む
Ⅲa22　暗茶褐色粗砂　非常に硬くしまる　径２㎝程度の小石含む
Ⅲa23　灰色粘質土＝SP15-16Ⅲa20層

③SP20-21土層断面（P01）



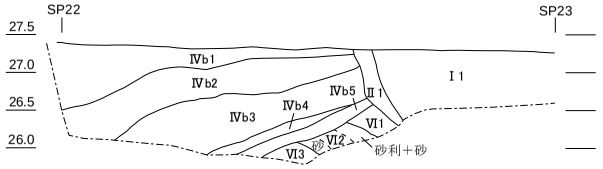
Ⅵ層：本丸南堀構築以前の層
Ⅵ1　濁黒灰色粘土　茶褐色粘土混入
Ⅵ2　濁暗褐灰色粘土　茶褐色粘土多く混入
Ⅵ3　淡灰褐色粘土　黒灰色粘土混入



0 (S=1/40) 1m

第 62 図　北岸調査区　土層断面図　SP17-18・SP18-19・SP20-21（P01）（S=1/40）

①SP22-23 土層断面



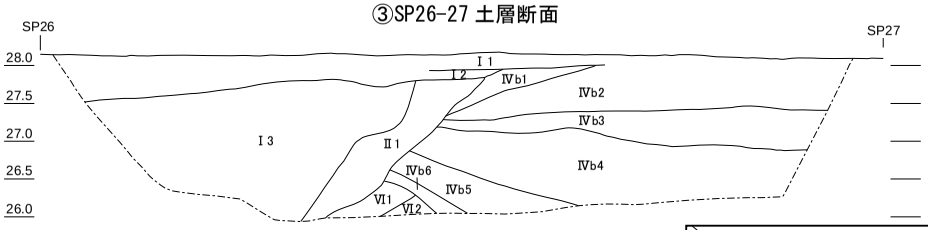
Ⅰ層　近現代層
Ⅰ1　灰褐色砂　礫（径５～８㎝）混【明治 40 年いもり堀埋立土】

Ⅱ層　近世後期：宝暦大火以後～明治 40 年の堆積土
Ⅱ1　暗褐色シルト　均質しまりなし【明治 40 年いもり堀埋立て前表土】

Ⅳb 層　近世初期：本丸南堀埋立土
Ⅳb1　黄灰色シルト　やや粘質　黄褐色粘シルトがブロック（径約３㎝）状に多く入る
Ⅳb2　灰色シルト　やや砂質　黄褐色粘シルトがブロック（径約３㎝）状に少し入る
Ⅳb3　灰褐色シルト　やや砂質
Ⅳb4　暗褐灰色シルト　やや粘質
Ⅳb5　暗灰色シルト　灰色粘質シルトと褐色砂質シルトが混　全体的には砂質

Ⅵ層　本丸南堀構築以前の土層
Ⅵ1　小砂利層　径１～２㎝大　角が取れ丸くなる
Ⅵ2　黄褐色砂　砂と小砂利が混じる　Ⅵ3 層に近い方は砂ばかり
Ⅵ3　小礫層　径３～４㎝大　角が取れ丸くなる

③SP26-27 土層断面

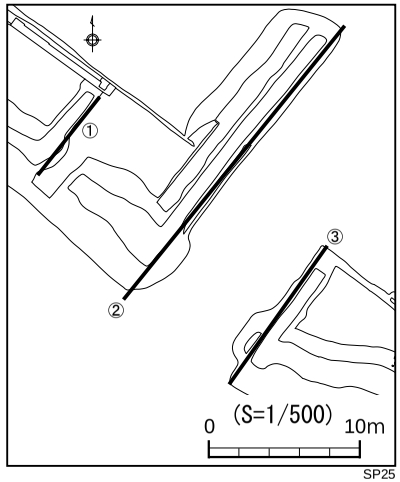


Ⅰ層　近現代層
Ⅰ1　テニスコート整地層
Ⅰ2　暗灰色シルト　砂利石混　人頭大礫も多い【明治の整地層】
Ⅰ3　暗灰色土　小砂利・砂の層【明治 40 年のいもり堀埋立土】

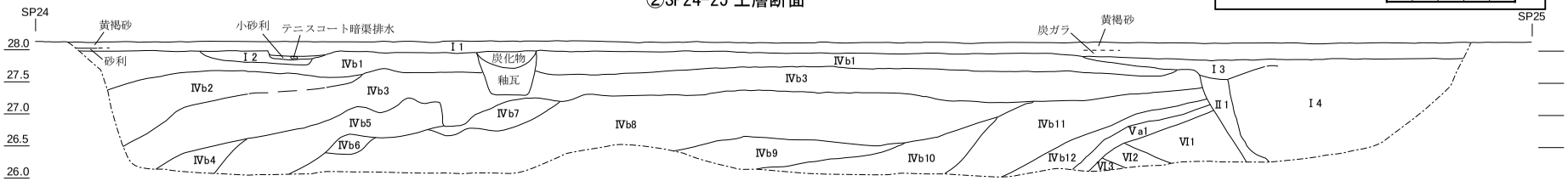
Ⅱ層　近世後期：宝暦大火以後～明治 40 年の堆積土
Ⅱ1　黒褐色シルト　腐食物層【明治表土】

Ⅳb 層　近世初期：本丸南堀埋立土
Ⅳb1　暗褐色シルト　粘性少しある　礫少ない　固くしまる
Ⅳb2　褐色シルト　粘性少しあるもやや砂質　礫多い　固くしまる
Ⅳb3　暗灰褐色シルト　粘性あり　地山質粘土のブロック（径７～８㎝）混　固くしまる
Ⅳb4　暗灰色シルト　粘性あり　礫少しある　Ⅳb3 層の地山質ブロックの小さいもの（径３～４㎝）混　固くしまる
Ⅳb5　暗灰色シルト　砂質　小砂利　礫混　固くしまる
Ⅳb6　暗灰褐色シルト　粘性あり　固くしまる

Ⅵ層　本丸南堀構築以前の土層：地山
Ⅵ1　暗灰色砂　砂に径５～６㎝大の礫が混
Ⅵ2　暗褐色礫層　径２～３㎝大の砂利のみの層　崩れやすい



②SP24-25 土層断面



Ⅰ層　近現代層
Ⅰ1　テニスコート整地層　上５㎝位は黄褐色砂のコート面　直下に小砂利層があり下は炭ガラの層
Ⅰ2　暗褐色シルト　やや粘性あり【テニスコート暗渠を堀削したときの撹乱か】
Ⅰ3　暗灰褐色砂　礫混じり【明治の整地層】
Ⅰ4　暗褐色シルト　礫（径 10 ～ 15 ㎝）混じる　砂利も多い　やや砂質【明治 40 年いもり堀埋立土】

Ⅱ層　近世後期：宝暦大火以後～明治 40 年の堆積土
Ⅱ1　黒褐色シルト　木の根のようなものもある　腐食層【明治】

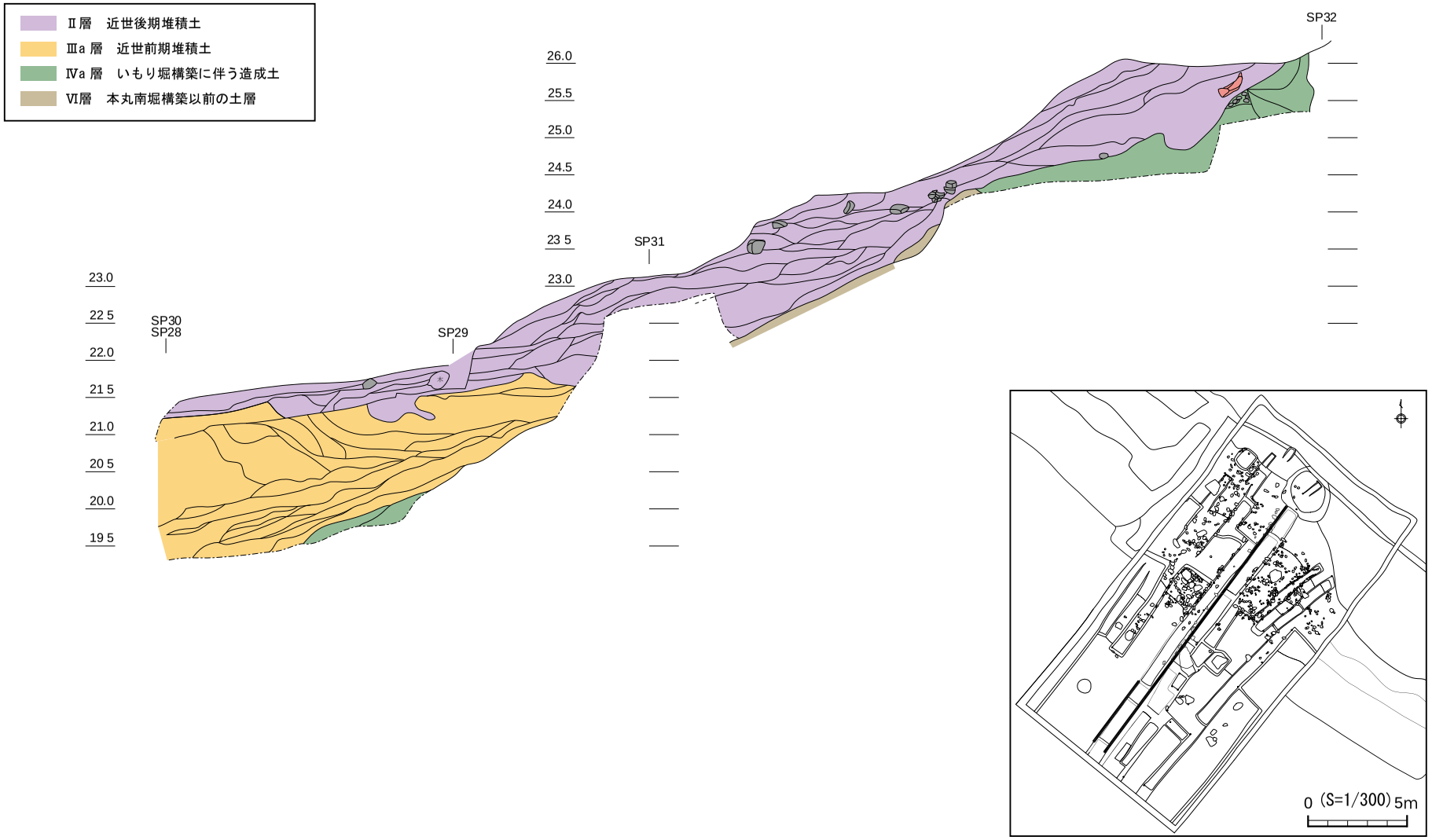
Ⅳb 層　近世初期：本丸南堀埋立土
Ⅳb1　灰褐色シルト　やや砂質
Ⅳb2　褐灰色シルト　灰色砂質土と褐色粘質シルトが混じる　互層状にブロックが重なるところもある
Ⅳb3　暗褐色シルト　暗褐色粘質シルトと灰色粘土（地山）がブロック状（径５～ 10 ㎝）に混　礫も含む
Ⅳb4　暗褐色シルト　Ⅳb3 層よりも灰色粘土（地山）ブロックの割合が多い　礫少ない
Ⅳb5　黄褐色シルト　灰色粘質シルトと黄褐色粘土（地山）ブロック（径５～ 10 ㎝）・礫混
Ⅳb6　暗灰褐色シルト　Ⅳb5 層より礫少ない　Ⅳb8 層と同じか
Ⅳb7　暗灰褐色シルト　灰色粘土ブロック・礫混【旧堀（Ⅰ期）埋土】
Ⅳb8　暗灰色シルト　灰色砂質シルトと灰褐粘（地山）ブロック（径５～ 10 ㎝）混
Ⅳb9　暗褐灰色シルト　黄褐色粘土（地山）ブロック（径５～ 10 ㎝）・礫・小砂利・灰～青灰砂が混
Ⅳb10　暗褐色シルト　礫（径３～５㎝大）多く入る
Ⅳb11　黄褐色砂　砂と小砂利（径 0.5 ㎝）の層　礫は比較的少ない
Ⅳb12　暗褐色シルト　礫（径３～５㎝）多く入る　砂も含むが全体としては粘質

Ⅴa 層　本丸南堀段階の周辺表土層
Ⅴa1　暗褐灰色砂　均質

地山
Ⅵ1　黄褐色礫　径２～４㎝大の礫の層　互層に堆積している
Ⅵ2　黄褐色砂　礫（径５～７㎝）と砂の層　地山質（シルト～砂）の大きいブロックも混
Ⅵ3　礫層　径３～５㎝大の礫層

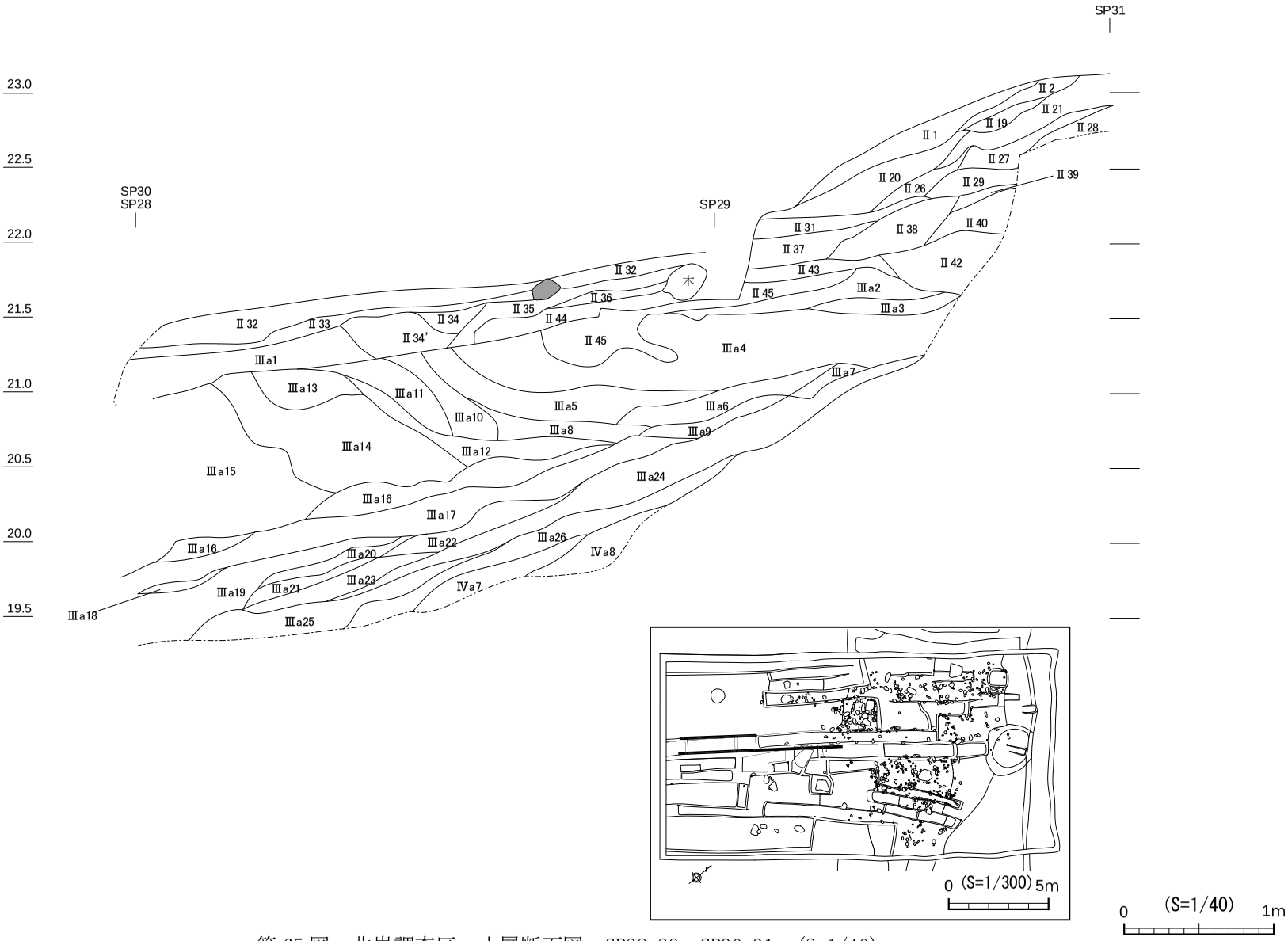
0　(S=1/100)　5m

第 63 図　北岸調査区　土層断面図　SP22-23・SP24-25・SP26-27（S=1/100）

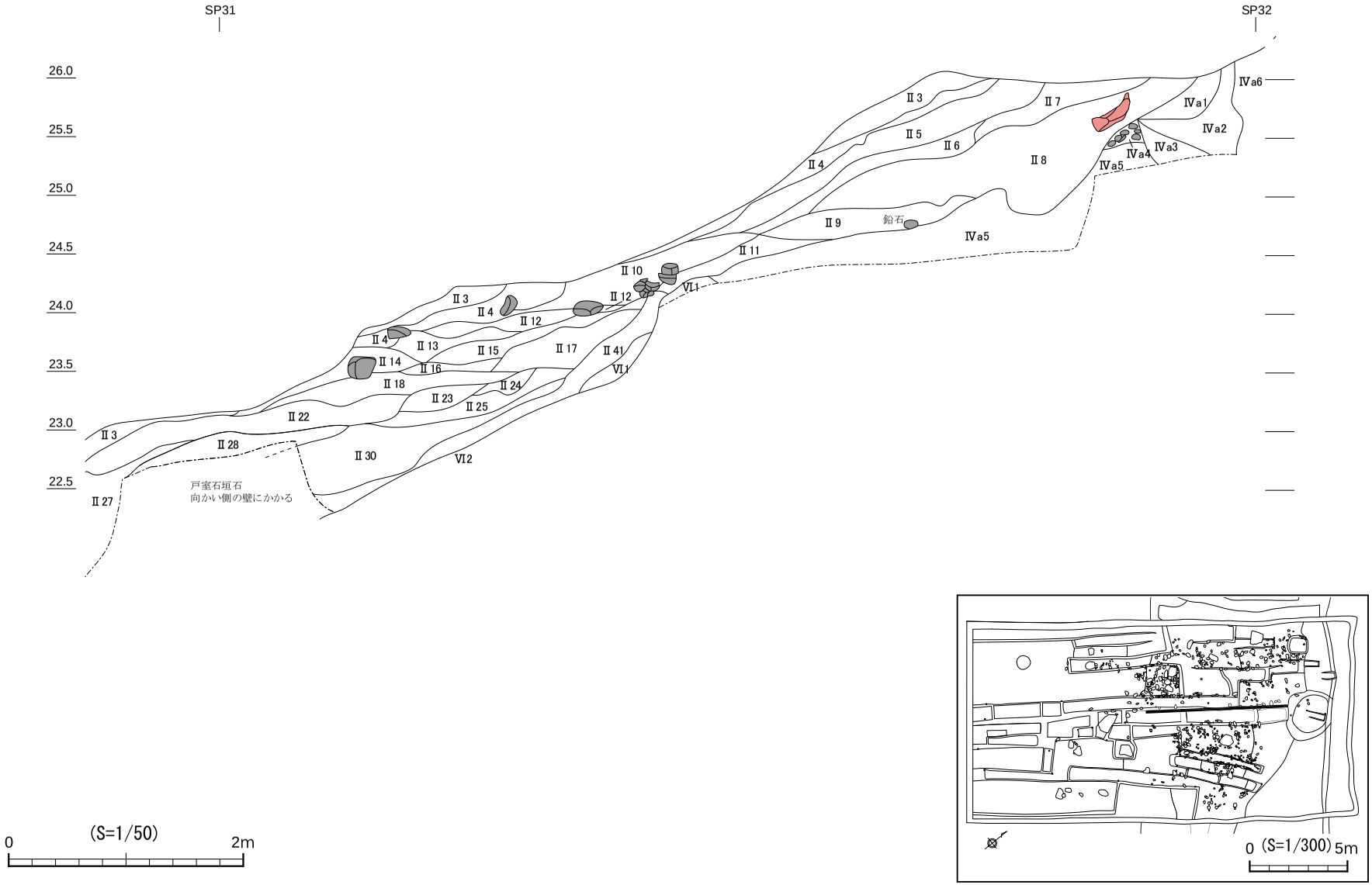


0 (S=1/80) 2m

第 64 図　北岸調査区　土層大別図　SP28-32　(S=1/80)



第 65 図　北岸調査区　土層断面図　SP28-29・SP30-31　(S=1/40)



第 66 図　北岸調査区　土層断面図　SP31-32(S=1/50)

Ⅱ層　近世後期：宝暦大火以後～明治40年の堆積土
Ⅱ1　黒褐色土【明治旧表土】
Ⅱ2　暗褐色砂質土
Ⅱ3　黒褐色土　砂・石・植物遺体多く含む　細かい焼土粒含む
　　＝SP42-43Ⅱ2層か【旧表土】
Ⅱ4　黒褐色土　シルト質　焼土粒・植物遺体含む【旧表土】
Ⅱ5　暗褐色土＋礫　焼土粒・石・砂・瓦含む　釉残瓦含む
　　＝SP42-43Ⅱ3層【旧表土】
Ⅱ6　暗灰褐色粘質シルト　植物遺体・細かい焼土粒含む
Ⅱ7　暗灰褐色砂質土　細かい焼土粒含む＝SP48-49Ⅱ7層
Ⅱ8　灰褐色砂質土＋礫　鉄分沈着著しい
Ⅱ9　暗灰褐色土＋礫
Ⅱ10　灰褐色土　砂多く含む　礫・焼土粒含む
Ⅱ11　暗褐色土　礫・焼土粒少し含む
Ⅱ12　褐色砂質土　鉄分沈着多い
Ⅱ13　暗褐色土　砂・小礫含み、焼土粒少し含む、鉄分沈着あり
Ⅱ14　黒褐色シルト　焼土塊・焼土粒多く含む
Ⅱ15　黒褐色粘質土　砂・小礫多く含む、戸室石片あり
Ⅱ16　淡灰褐色粗砂
Ⅱ17　褐色砂質土　小礫非常に多く含み、砂多く、鉄分沈着あり
Ⅱ18　淡褐灰色砂質土
Ⅱ19　灰褐色砂質土
Ⅱ20　灰褐色細砂
Ⅱ21　灰色細砂
Ⅱ22　Ⅱ21と同一層　淡灰色砂　粗砂と細砂４～５cm厚の互層状
Ⅱ23　淡灰色砂＋礫
Ⅱ24　淡灰褐砂　礫含む
Ⅱ25　淡褐色砂　小石・小礫多く含む
Ⅱ26　灰色細砂
Ⅱ27　灰色砂礫粘質土　砂・小礫多く含む
Ⅱ28　灰色粗砂＋礫
Ⅱ29　灰色砂　粗砂・小礫多く含む
Ⅱ30　淡灰色細砂
Ⅱ31　青灰色粘土　酸化して黄化
Ⅱ32　灰褐色粘質土
Ⅱ33　黄灰色粘質土　酸化して黄化、淡青灰色
Ⅱ34　淡青灰色砂礫土　暗褐腐植土ブロック含む
Ⅱ34’淡青灰色砂礫土＝SP38-39Ⅱ31層
Ⅱ35　淡青灰色砂質土　砂・礫多く含む
Ⅱ36　淡青灰色粘質土
Ⅱ37　灰色粗砂　礫多く含む
Ⅱ38　灰色砂質土　灰色粗土、層状に入る
Ⅱ39　灰色粘土
Ⅱ40　灰褐色砂質土　小礫・小砂利・粘土ブロック含む
Ⅱ41　黒灰色粘質土　砂・小礫多く含む
Ⅱ42　黒灰色砂質土　粗砂・礫含む
Ⅱ43　黒灰色粘質土　腐植土
Ⅱ44　暗褐色粘質土　腐植土
Ⅱ45　暗灰色粘質土

Ⅲa層　近世前期：宝暦大火以前堆積土
Ⅲa1　淡灰褐色粘質土＝SP38-39Ⅲa2層か
Ⅲa2　淡褐灰粘質土
Ⅲa3　淡褐灰色粗砂
Ⅲa4　青灰色粗砂　酸化著しい
Ⅲa5　淡黄褐色粗砂　小礫多く含む
Ⅲa6　淡黄褐色粗砂　腐植土少し含む
Ⅲa7　暗褐色粘質土
Ⅲa8　淡黄褐色粗砂　小礫少し含む
Ⅲa9　灰褐色粘質土　礫少し含む
Ⅲa10　灰褐色砂礫
Ⅲa11　灰色砂質土
Ⅲa12　黄灰色粗砂
Ⅲa13　灰褐色砂質土　砂礫土含む
Ⅲa14　灰褐色粘質土　砂多く含む
Ⅲa15　暗灰褐色粘質土
Ⅲa16　灰褐色粘質土
Ⅲa17　黒灰色粘土
Ⅲa18　黒灰色粘土　淡灰粘土ブロック含む
Ⅲa19　黒灰色粘土　砂・小石・腐植物・竹含む
Ⅲa20　灰褐色粘質土　砂多く含む
Ⅲa21　淡灰褐色粘質土
Ⅲa22　黒灰色土　粗砂・腐植物・小礫多く含む
Ⅲa23　黒灰色粘質土
Ⅲa24　褐灰色粗砂
Ⅲa25　黒灰色粘質土
Ⅲa26　黒灰色砂質土
※上位層（Ⅲa1～15）は土羽の崩落に伴い、短時間で堆積か

Ⅳa層　近世初期：いもり堀構築に伴う造成土
Ⅳa1　淡灰褐色土　砂多く含み、小礫少し入る
Ⅳa2　淡青灰色シルト　Ⅳa1層より粒子細かく、小石入る
　　鉄分沈着少しあり
Ⅳa3　淡褐色土　若干腐植物含む
Ⅳa4　黄灰色砂＋礫　礫はこぶし大でそろう
Ⅳa5　黄灰色シルト
Ⅳa6　淡青灰色土　小石含む
Ⅳa7　淡灰色砂質土
Ⅳa8　淡灰色砂質土　小礫多く含む

Ⅵ層　本丸南堀構築以前の層
Ⅵ1　黒灰色シルト【古代包含層か】
Ⅵ2　灰色粘土【地山　いもり堀構築当初法面か】

第 67 図　北岸調査区　土層注記　SP28-32

および部分的に近世前期～宝暦大火直前までの面を確認した。

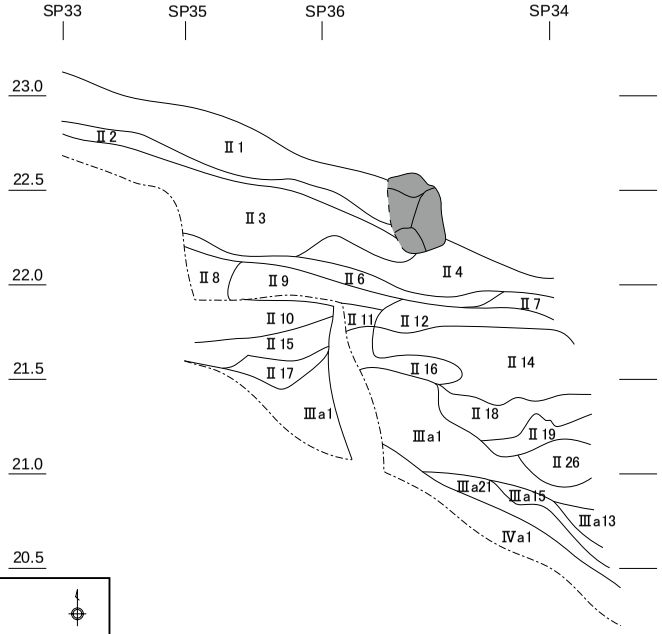
・いもり堀の土羽斜面および堀底に、宝暦大火（宝暦９年（1759））以前の法面崩落に伴う土砂が堆積している状況を確認しており（Ⅲａ層）、いもり堀では構築当初の姿に戻すような大規模な堀ざらえが行われなかったと考えられる。

・検出した構築当初の土羽の幅および高さは、2004-2 地点で幅 15 ～ 16 m、高さ約 10.5 m、2003-2 地点で幅 15 ～ 16 m、高さ約 9.8 m、2004-1 地点で幅 14 ～ 15 m、高さ約 9.5 ～ 10.0 m（推定）であった。

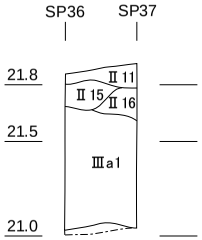
・堀底は西に向かって低くなっており、堀の深さ（約 10 m）を維持しながら地形の傾斜に合わせて掘削されたと考えられる。

・いもり堀の宝暦大火以前の堆積層（Ⅲａ層）から、越前赤瓦がまとまって出土しており、堀周辺の建物に使用されていたと考えられる。越前赤瓦は城内の出土事例から、17 世紀中葉から後半に使用されたと考えられている［金沢城調査研究所 2008d］。また、その上層（Ⅱ層）から宝暦大火で被災したとみられる鉛瓦が出土しており、宝暦大火時には、既に鉛瓦に葺き替えられていたと考えられるが、越前赤瓦はⅡ層からも出土しており、本調査区付近の屋根瓦の変遷については、詳細の解明になお課題が残る。

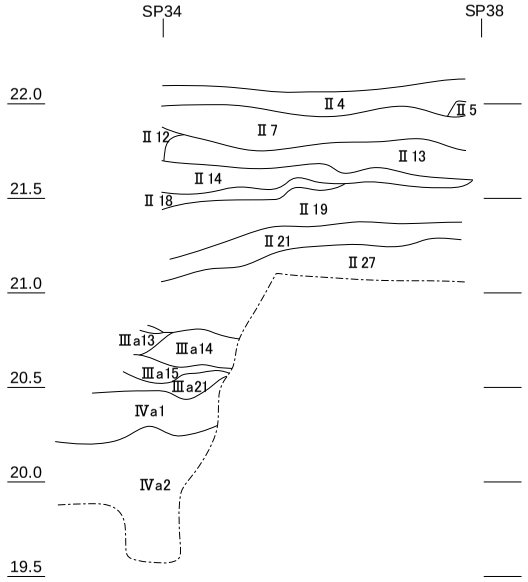
①SP33-34（上段）・②SP35-36（下段）土層断面

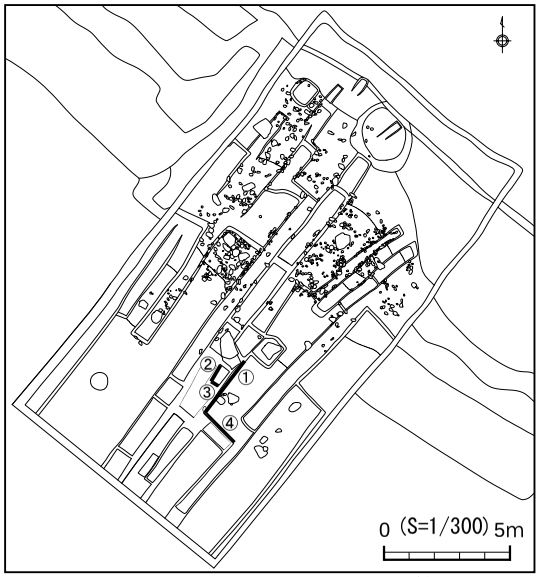


⑦SP36-37土層断面



⑧SP34-38土層断面





Ⅱ層　近世後期：宝暦大火以後～明治40年の堆積土
Ⅱ1　灰色細砂　植物遺体含む
Ⅱ2　灰色細砂
Ⅱ3　灰色砂礫
Ⅱ4　暗褐色粘質土　腐食土混じる
Ⅱ5　灰褐色粘質土
Ⅱ6　淡灰粘土
Ⅱ7　黄灰褐色粘質土
Ⅱ8　灰色砂礫
Ⅱ9　灰色砂礫　Ⅱ8層より礫小さい
Ⅱ10　灰色砂礫
Ⅱ11　灰色粘質土
Ⅱ12　暗褐色土　焼土含む
Ⅱ13　黄灰褐色粘質シルト
Ⅱ14　暗褐色粘質シルト
Ⅱ15　暗褐色粘質土　小礫含む
Ⅱ16　灰色砂質土　粘土ブロック含む
Ⅱ17　灰色砂質土　小礫含む
Ⅱ18　黒褐色土　竹根含む
Ⅱ19　黒灰褐色土　竹根含む
Ⅱ21　暗灰褐色粘質土
Ⅱ26　暗灰褐色土　竹根多く含む
Ⅱ27　黄灰褐色粘質土

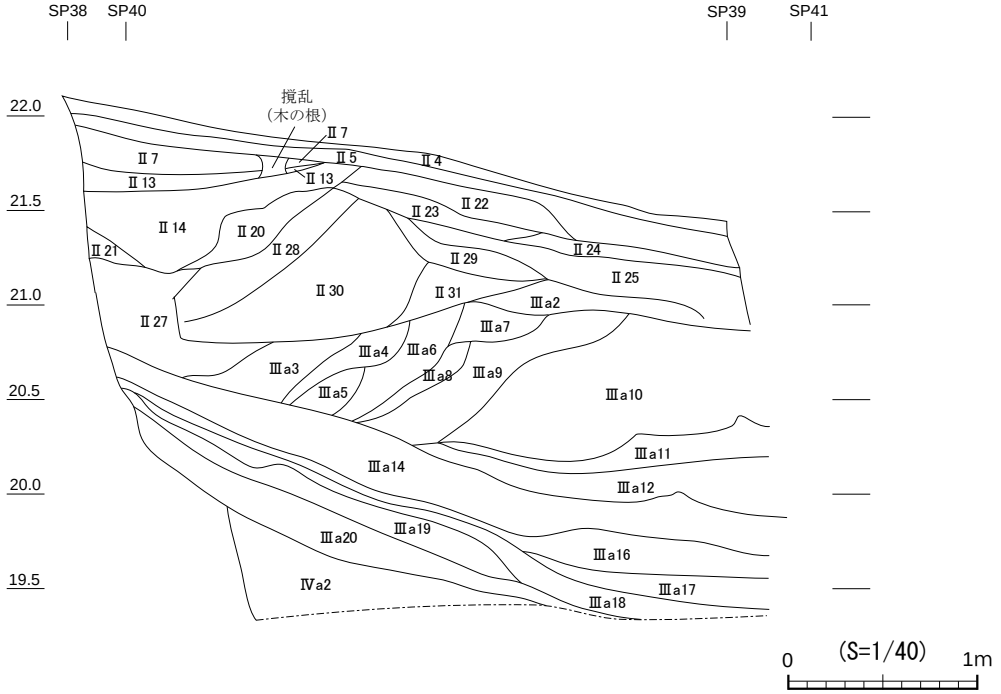
Ⅲa層　近世前期：宝暦大火以前堆積土
Ⅲa1　灰色砂礫　大きな礫含む
Ⅲa13　灰褐色粘質土＋礫
Ⅲa14　暗灰色粘土
Ⅲa15　灰褐色粗砂
Ⅲa21　灰色砂質土

Ⅳa層：近世初期：いもり堀構築に伴う造成土
Ⅳa1　灰褐色礫混砂質土
Ⅳa2　灰褐色砂質土

0 (S=1/40) 1m

第68図　北岸調査区　土層断面図　SP33-34・SP35-36・SP36-37・SP34-38(S=1/40)

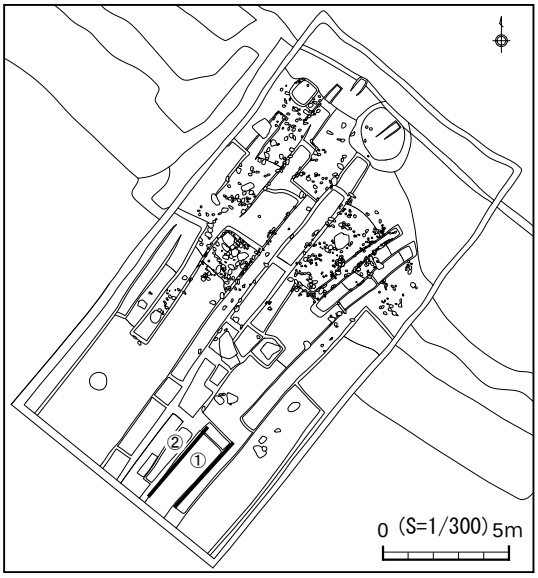
①SP38-39（上段）・②SP40-41（下段）土層断面



Ⅱ層　近世後期：宝暦大火以後～明治40年堆積土
Ⅱ4　暗褐色粘質土　腐植土混じる
Ⅱ5　灰褐色粘質土　腐植土混じる
Ⅱ7　黄灰褐色粘質土　粗砂多く含む
Ⅱ13　黄灰褐色粘質シルト
Ⅱ14　暗褐色粘質シルト
Ⅱ20　灰褐色シルト　黄灰色シルトブロック含む
Ⅱ21　暗灰褐色粘質土
Ⅱ22　灰褐色土　小礫・砂含む
Ⅱ23　灰黄色粘質土　小礫・砂含む
Ⅱ24　灰黄褐色粘土
Ⅱ25　黄灰色粘質土　黄灰色細砂を層状に含み、腐植土ブロック含む
Ⅱ27　黄灰褐色粘質土　上部で小礫少し含む
Ⅱ28　黄灰色シルト　砂・小礫少し含む
Ⅱ29　黄灰色土　粗砂・腐植土ブロック・礫含む
Ⅱ30　黄灰色砂質土　粗砂・腐植土ブロック含む
Ⅱ31　淡灰色砂礫土＝SP28-29西壁Ⅱ34'層

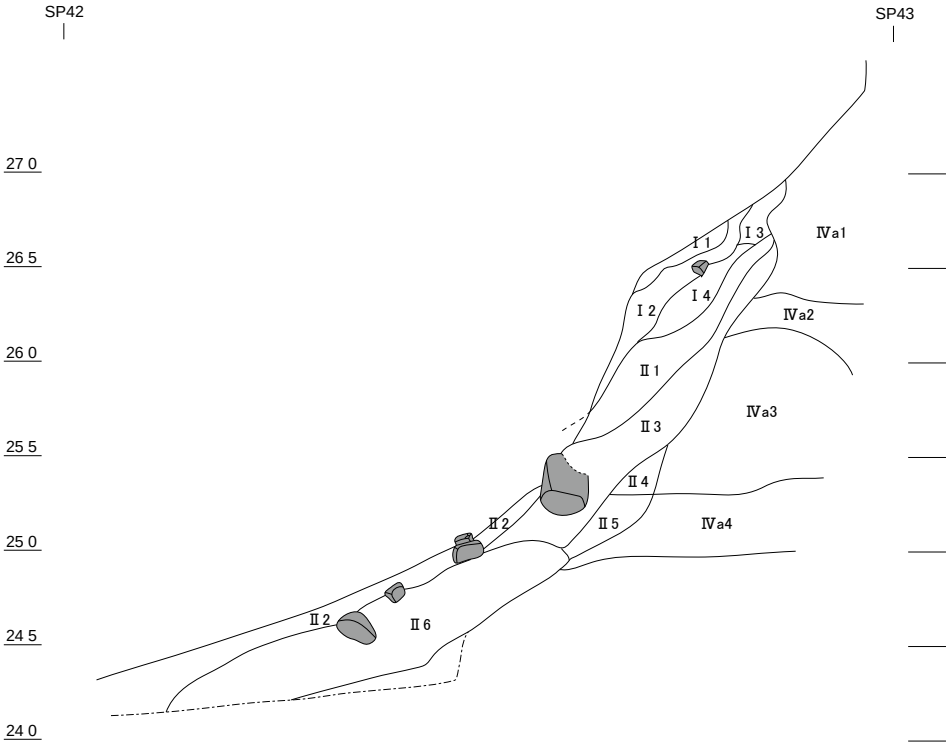
Ⅲa層　近世前期：宝暦大火以前堆積土
Ⅲa2　淡灰褐色粘質土＝SP30-31Ⅲa1層か
Ⅲa3　黄灰褐色粗砂
Ⅲa4　黄灰褐色粗砂　黒褐ブロック含む
Ⅲa5　黄灰色粘質土
Ⅲa6　灰褐色粘質土
Ⅲa7　淡黄色砂質土　礫多く含む
Ⅲa8　淡黄色粘質土
Ⅲa9　灰褐色土　砂・礫含む
Ⅲa10　黄灰褐色土　Ⅲa9層より礫少ない
Ⅲa11　灰褐色粘質土　砂含む
Ⅲa12　暗灰褐色土　砂多く含み、植物の根含む
Ⅲa14　暗灰色粘土
Ⅲa16　灰褐色礫混砂質土　遺物多く含む
Ⅲa17　淡灰色粘土　遺物多く含む
Ⅲa18　黒灰色粘土　遺物多く含む
Ⅲa19　灰色粗砂　遺物多く含む
Ⅲa20　暗褐色礫混砂質土　遺物多く含む
※Ⅲa14より上層は土羽の崩落に伴い短時間で堆積した層

Ⅳa層　近世初期：いもり堀構築に伴う造成土
Ⅳa2　灰褐色砂質土



第69図　北岸調査区　土層断面図　SP38-39・SP40-41(S=1/40)

①SP42-43土層断面

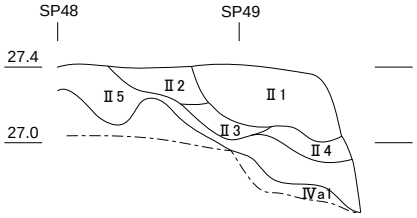


Ⅰ層　近現代層
Ⅰ1　黄褐色砂質土＋礫【明治40年いもり堀埋立土】
Ⅰ2　淡黄灰細砂【明治40年いもり堀埋立土】
Ⅰ3　黄褐色砂【明治40年いもり堀埋立土】
Ⅰ4　淡灰色砂【明治40年いもり堀埋立土】

Ⅱ層　近世後期：宝暦大火以後～明治40年の堆積土
Ⅱ1　黒褐色砂質土　植物遺体含む【旧表土】
Ⅱ2　黒褐色土　植物遺体含む＝SP30-31Ⅱ3層か【旧表土】
Ⅱ3　暗灰褐色砂質土　植物遺体含む＝SP31-32Ⅱ5層【旧表土】
Ⅱ4　暗褐色土＋礫（径20～30cm大）
Ⅱ5　暗灰粗砂
Ⅱ6　灰褐色砂質土＋礫＝SP31-32Ⅱ7層

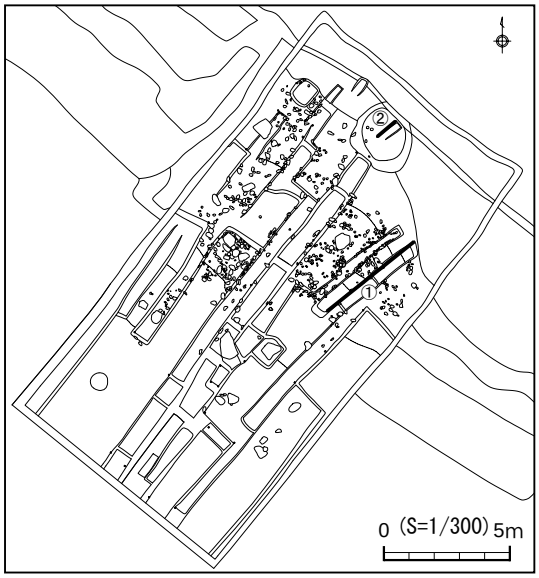
Ⅳa層　近世初期：いもり堀構築に伴う造成土
Ⅳa1　淡青灰色シルト　小石含み、鉄分沈着あり
Ⅳa2　褐色土　こぶし大の小礫含む
Ⅳa3　灰色シルト　こぶし大の小礫含む
Ⅳa4　淡褐色シルト＋こぶし大の小礫層

②SP48-49土層断面（SK01）



Ⅱ層　近世後期：SK01埋土
Ⅱ1　淡灰褐色シルト　細かい焼土粒若干含み、小石、小礫若干含む
Ⅱ2　淡褐色細砂　小礫多く含む
Ⅱ3　淡灰色シルト
Ⅱ4　淡灰褐色土　Ⅱ1層と同質だがやや粗い
Ⅱ5　灰褐色砂質土＋礫＝SP31-32Ⅱ7層

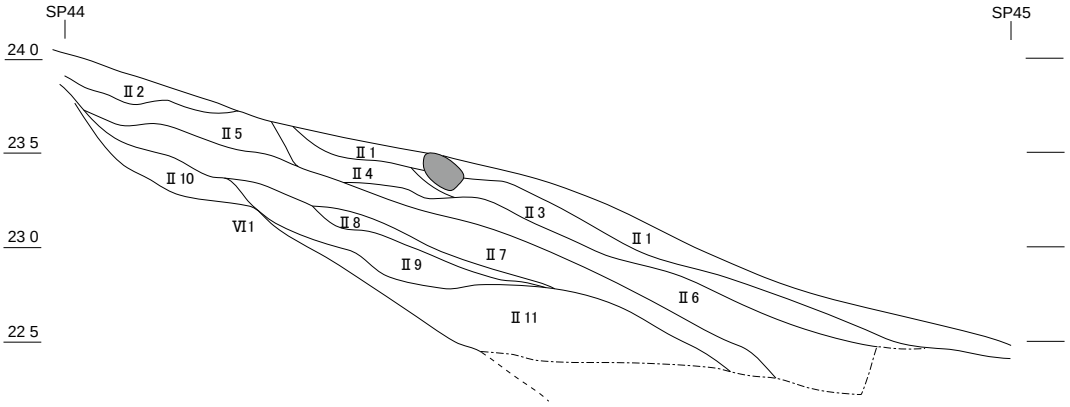
Ⅳa層　近世初期:いもり堀構築に伴う造成土
Ⅳa1　淡黄灰色粘質土

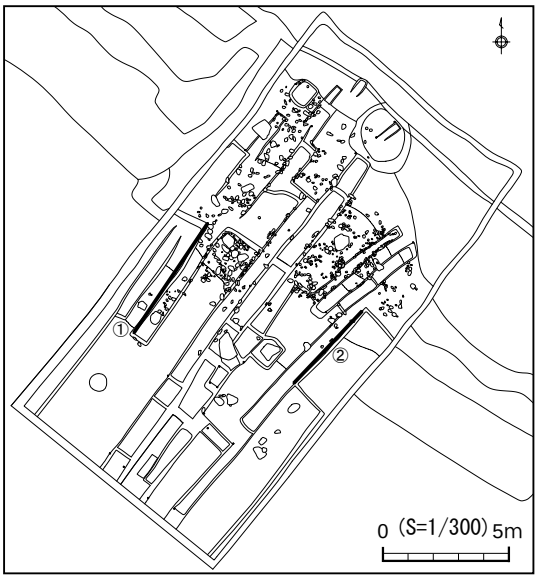


0 (S=1/40) 1m

第70図　北岸調査区　土層断面図　SP42-43・SP48-49(S=1/40)

①SP44-45土層断面



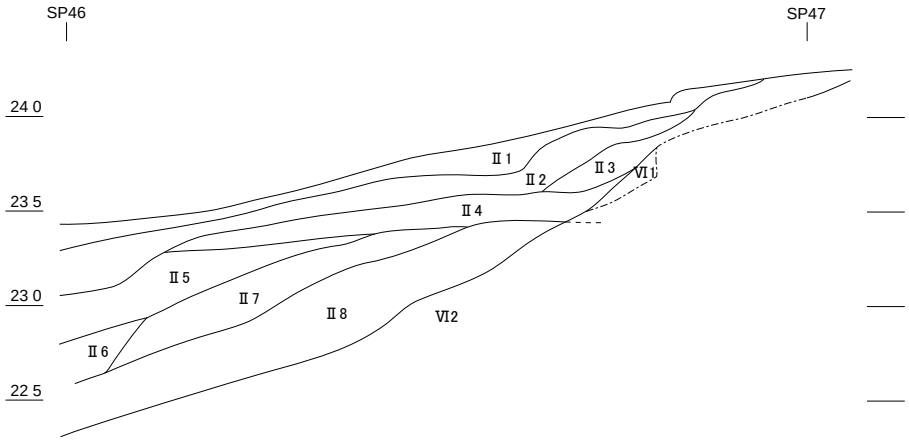


Ⅱ層：近世後期：宝暦大火以後～明治40年の堆積土
Ⅱ1　黒褐色土【明治旧表土】
Ⅱ2　灰褐色砂質土
Ⅱ3　暗灰褐色土　植物遺体若干含む
Ⅱ4　灰褐色砂質土　大小の礫含む　鉄分沈着多い
Ⅱ5　灰褐色シルト　灰色粘土ブロック含む
Ⅱ6　灰色粗砂
Ⅱ7　灰色砂　大小の礫含む
Ⅱ8　灰色砂　灰色シルトブロック含む
Ⅱ9　褐色粗砂　礫少し含む
Ⅱ10　灰褐色粘土　礫含む
Ⅱ11　暗灰褐色砂質土　腐植土含む　土師器皿出土

Ⅵ層：本丸南堀構築以前の層
Ⅵ1　灰色粘土【地山】

0 (S=1/40) 1m

②SP46-47土層断面

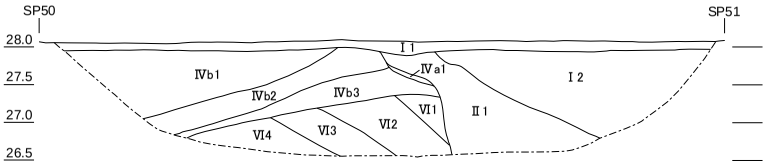


Ⅱ層：近世後期：宝暦大火以後～明治40年の堆積土
Ⅱ1　黒褐色土　竹根・植物遺体多く入る【明治埋め立て直前の旧表土か】
Ⅱ2　暗灰褐色土　砂・焼土粒含む　植物遺体入る
Ⅱ3　灰褐色シルト　砂・焼土粒含む　植物遺体入る
Ⅱ4　灰褐色砂質土　径３～４cm大の小礫多く含み、黄色砂含む
Ⅱ5　灰色細砂　径３～４cm大の小礫少し含む　酸化で黄変
【流れ込みまたは嵩上げによる砂堆積層】
Ⅱ6　灰色砂＋礫【流れ込みまたは嵩上げによる砂堆積層】
Ⅱ7　灰色砂　小礫・黄色砂含む【流れ込みまたは嵩上げによる砂堆積層】
Ⅱ8　灰色砂　細砂と粗砂４～８cm厚で互層状に入る
【流れ込みまたは嵩上げによる砂堆積層】

Ⅵ層：本丸南堀構築以前の層
Ⅵ1　褐灰色粘質シルト　植物遺体含む
Ⅵ2　淡青灰色粘土【地山】

第71図　北岸調査区　土層断面図　SP44-45・SP46-47(S=1/40)

①SP50-51 土層断面



Ⅰ層　近現代層
Ⅰ1　テニスコート整地層
Ⅰ2　暗褐灰色シルト　礫（径３～20㎝）含む
【明治40年いもり堀埋立土】

Ⅱ層　近世後期：宝暦大火以後～明治40年の堆積土
Ⅱ1　暗褐色シルト　礫（径２～４㎝）含む　砂質【旧表土か】

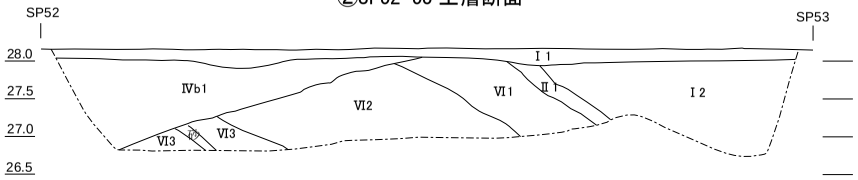
Ⅳa 層　近世初期：いもり堀構築に伴う造成土
Ⅳa1　暗灰色シルト　粘質【土羽の整形土（貼り付けた）か】

Ⅳb 層　近世初期：本丸南堀埋立土
Ⅳb1　暗灰褐色シルト　礫（径２～６㎝）・小砂利含む　灰色粘土シルト
と砂質シルトが細かい（径0.2～0.3㎝）ブロック状に混）

Ⅳb2　暗褐灰色シルト　Ⅳb1 層とほぼ同じだが礫が少ない
Ⅳb3　暗褐灰色シルト　礫（径３～10㎝）・小砂利含む
Ⅳb1 層と同様に礫多い

Ⅵ層　本丸南堀構築以前の土層：地山
Ⅵ1　灰色砂　均質
Ⅵ2　黄褐色砂　小砂利・砂が薄い互層をなして堆積
Ⅵ3　黄褐色シルト　小砂利と砂の互層に黄褐色粘土ブロック
（径0.3～0.4㎝）も入る
Ⅵ4　礫層　径２～３㎝大の礫層

②SP52-53 土層断面



Ⅰ層　近現代層
Ⅰ1　テニスコート整地層
Ⅰ2　暗褐灰色シルト　径３～20㎝の礫含む
【明治40年いもり堀埋立土】

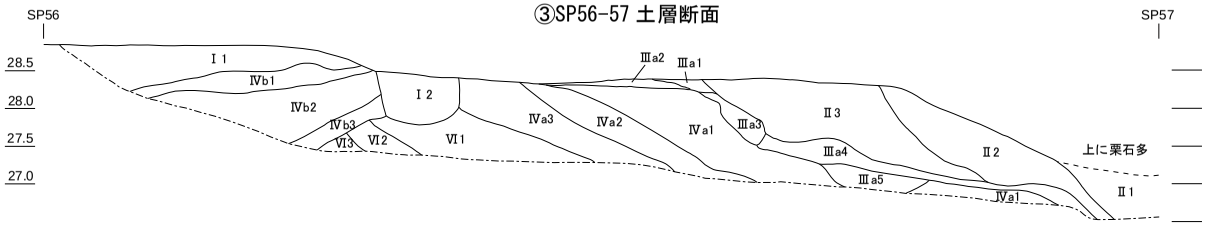
Ⅱ層　近世後期：宝暦大火以後
～明治40年の堆積土
Ⅱ1　暗褐色シルト　砂質だがややもろい
小礫少量含む【旧表土か】

Ⅳb 層　近世初期：本丸南堀埋立土
Ⅳb1　暗褐灰色シルト　礫（径３～10㎝）・小砂利含む

Ⅵ層　本丸南堀構築以前の土層：地山
Ⅵ1　暗灰褐色砂　ほぼ均質な層　砂利小礫も少し含む
Ⅵ2　黄褐色砂　砂利と砂が薄い互層をなして堆積
Ⅵ3　礫層　径２～５㎝の礫　間に灰色砂の層を挟む

(S=1/100)
0　5m

③SP56-57 土層断面



Ⅰ層　近現代層
Ⅰ1　テニスコート整地層及び試し掘りによる撹乱
Ⅰ2　撹乱

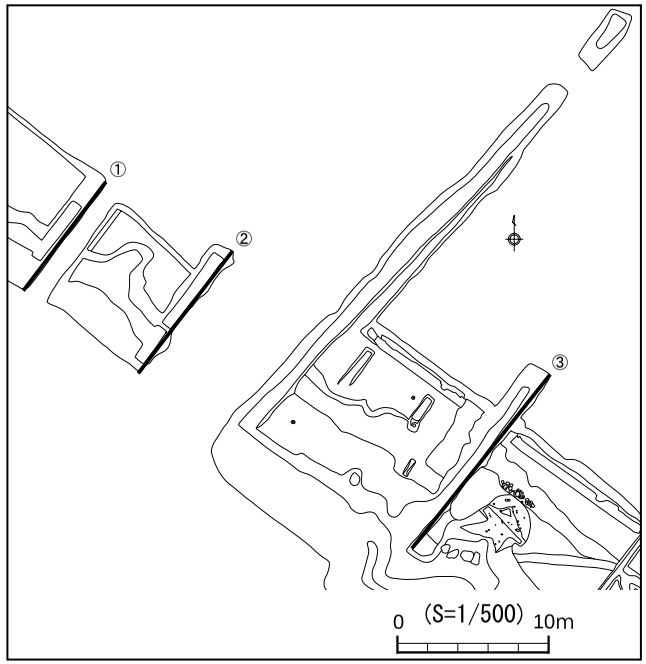
Ⅱ層　近世後期：宝暦大火後～明治40年堆積土
Ⅱ1　黒褐色シルト　腐植物層【明治に埋める直前の表土か】
Ⅱ2　暗褐色礫　礫（径３～10㎝）がぎっしり詰まる　鉄分の沈着激しい
一度に堆積か
Ⅱ3　暗灰褐色シルト　砂利（径約0.5㎝）と黄褐色粘土ブロック（径３～４㎝）混
ベースは暗灰褐色砂質シルト

Ⅲa 層　近世前期：宝暦大火以前の堆積土
Ⅲa1　黄褐色シルト　黄褐色粘土ブロック（径１～４㎝）多く入る
Ⅲa2　黒褐色シルト　ややしまりなし　黄褐色粘土ブロック（径約１㎝）混
Ⅲa3　暗褐色シルト　粘性のある暗褐色シルト中心の層　黄褐色粘土小ブロック
（径約0.2㎝）や砂利混【ある時期の表土か】
Ⅲa4　暗灰褐色シルト　礫（径５～10㎝）の間にシルトが入り込むような礫層
砂利も入る
Ⅲa5　暗褐色シルト　砂質　礫少ない

Ⅳa 層　近世初期：いもり堀構築時の造成土
Ⅳa1　黄褐色砂　小礫・砂利含む
Ⅳa2　黄褐色砂　砂利含む
Ⅳa3　黄褐色砂　小礫・砂利含む　黄褐色粘土ブロック（径約0.5㎝）も入る

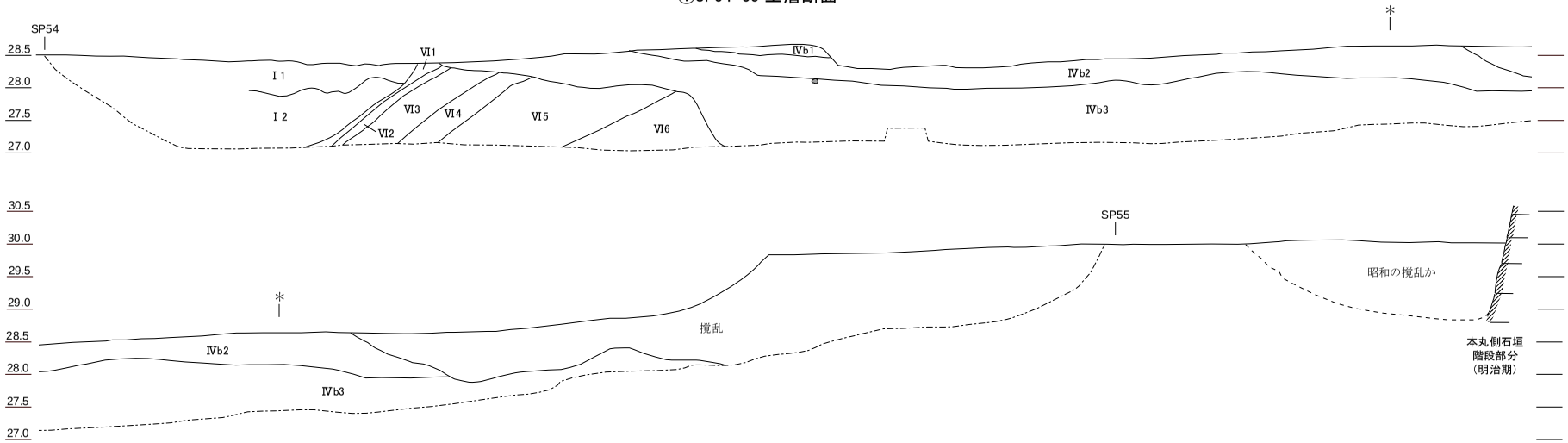
Ⅳb 層　近世初期：本丸南堀埋立土
Ⅳb1　暗灰褐色シルト　砂質　砂利小礫混じり
Ⅳb2　暗褐色シルト　やや粘性あり　黄褐色粘土ブロック（径３～４㎝）・砂利・
小礫混　小礫が多く入る
Ⅳb3　暗褐色シルト　礫（径３～10㎝）・黄褐色粘土ブロック（径１～４㎝）混

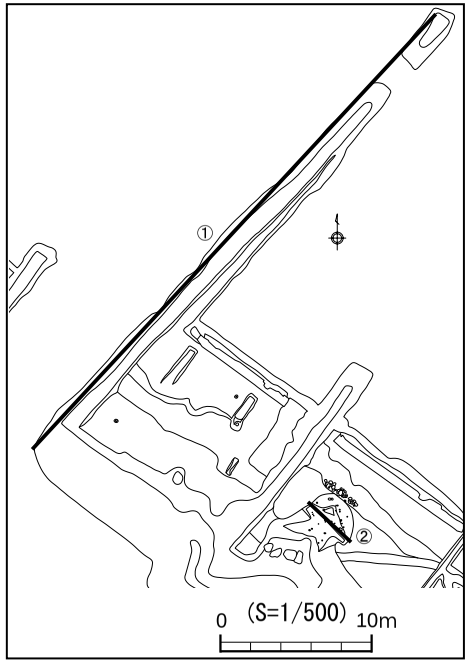
Ⅵ層　本丸南堀構築以前の土層：地山
Ⅵ1　灰褐色砂　小礫・砂利含む　小礫多い
Ⅵ2　黄褐色砂　ほぼ砂の層　砂利・小礫も少し入る
Ⅵ3　黄褐色砂　礫（径0.1～0.3㎝）・黄褐色粘土ブロック（約0.5㎝）入る



第72図　北岸調査区　土層断面図　SP50-51・SP52-53・SP56-57（S=1/100）

①SP54-55 土層断面



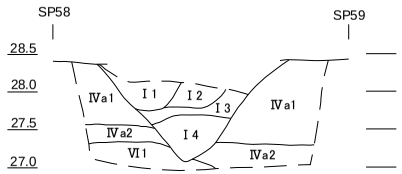


Ⅰ層　近現代層
Ⅰ1　暗灰褐色シルト　礫・ガラ・レンガ（混入か）含む【明治40年いもり堀埋立土か】
Ⅰ2　黄褐色砂　礫含む（径3㎝～15㎝）【明治40年いもり堀埋立土】

Ⅳb層　近世初期：本丸南堀埋立土
Ⅳb1　暗褐灰色シルト　暗褐色粘質シルトと灰黄色砂質シルトの層　小礫含む
Ⅳb2　暗褐灰色シルト　砂質　砂利・礫（径2～10㎝）含む　灰色粘土（地山か）ブロック（径3～4㎝）も混
Ⅳb3　暗灰色シルト　礫（径2～15㎝）・砂利含む　暗褐色粘土・灰色砂・灰色粘土（地山か）がブロック状（径約1㎝）に混

Ⅵ層　本丸南堀構築以前の土層
Ⅵ1　黄褐色シルト　砂質　灰黄色粘土（地山か）ブロック（径1～3㎝）が多く入る
Ⅵ2　灰褐色シルト　灰黄色粘土（地山か）ブロック（径0.5～1㎝）入るも少ない　砂混
Ⅵ3　褐灰色シルト　砂質　灰黄色粘土（地山か）ブロック（径0.5～2㎝）入る　砂利混
Ⅵ4　灰褐色シルト　灰色砂質シルトに灰黄色粘土（地山か）ブロック（径1～2㎝）入る 砂利混
Ⅵ5　黄褐色シルト　砂質シルト　砂利　灰黄色粘土（地山か　0.3～0.4㎝厚）が互層に入る【地山】
Ⅵ6　礫層　径0.5～5㎝の礫が互層に入る【地山】

②SP58-59 土層断面（SX01）



Ⅰ層　近現代層
Ⅰ1　暗灰褐色シルト 石・砂混じり　もろくしまりなし【SX01埋土】
Ⅰ2　暗褐色シルト　石・砂混じり　固くしまる　鉄分沈着【SX01埋土】
Ⅰ3　灰色シルト　石なし　粘性あり【SX01埋土】
Ⅰ4　赤褐色砂　粗砂と礫（径10㎝大）の層　鉄分の沈着激しい【SX01埋土】

Ⅳa層　近世初期：いもり堀構築に伴う造成土
Ⅳa1　暗灰褐色シルト　径5～6㎝大の礫中心　間にシルト入る【盛土層】
Ⅳa2　暗灰色シルト　粘性あり　砂、小礫混じる　ほぼ均質の層

地山
Ⅵ1　黄褐色シルト　ほとんど砂に近いシルト　均質

0　(S=1/100)　5m

第73図　北岸調査区　土層断面図　SP54-55・SP58-59（S=1/100）

土橋調査区

（１）概要（第 11・12・74 ～ 78 図）

調査区は、北岸調査区と稲荷屋敷下調査区に挟まれた位置にある。江戸時代前期の『加賀国金沢之図』（寛文８年（1668））（金沢市立玉川図書館蔵）と調査地点を照合すると、稲荷屋敷南東の御花畑といもり堀の一角に相当する。いもり堀岸は、稲荷屋敷下が石垣で築かれている以外は、すべて土羽として描写されている。寛文期のいもり堀の様相は、大方幕末まで引き継がれるが、部分的に変化の様相を示しており、南北にクランクする御花畑南西部の土羽は、江戸時代後期の絵図では、土羽斜面から立上がる鉢巻状の石垣が描かれていた。

平成 10 年度（1998-3 地点）と平成 12 年度（2000-3 地点）の２次にわたって実施された調査では、いもり堀に先行する本丸南堀の存在を明確にし、また、本丸南堀に伴う石垣土橋を検出し、その構造と変遷を把握した。

その結果、土橋は構築から廃絶までの間に改修、拡幅されており、それと連動して本丸南堀も浅い空堀から深さを増したと考えられる。

（２）遺構

①構築当初の土橋と本丸南堀（第 76 ～ 80・81 ②・82 ～ 85・87 ～ 98 ①図）

調査により、いもり堀に先行する本丸南堀に伴う南北方向（主軸方位はおよそ N-17°-W）に延びる土橋を検出した。構築当初の土橋は、東西両側面が石垣となっていた（東面：1810E、西面：1810W）。南端及び上部が失われていたが、検出長（南北方向）約 17.4 m、残存高約 1.9 mを測る。

周辺の土層観察によると概ね北高南低の斜面地となっており、旧地形は、北から南に向けて、低く傾斜しながら張り出す尾根状地形であったと考えられる。

土橋の構築基盤面を整地するため、地山レベルが低い地点を盛土造成していた。南端から中央東側の範囲は、標高約 25.3 m前後で整地し、ほぼ水平に基盤面を仕上げた上に、石垣の根石を据えている。一方、中央西側から北端の範囲は、地山が高く、地山直上に根石が据えられている。地山レベルに高低差があり均一となっていなかったことから、基盤面のレベルを揃えてから土橋を造り始めたものではないと考えられる。土橋石垣根石下端の基底高は、中央部以南は、ほぼ同一レベルで 25.1 ～ 25.2 mで、北部が高くなっていた。北端付近の東西面で比較すると、東面では、築石１石程（約 30 ㎝）高く、西面では、築石２段分程度（約 80 ㎝）高い。土橋の基底幅は、北端が 5.8 m、南端が 5.3 mで、北→南にその幅を狭めていた。

土橋石垣は乱積みで、石の控えは短めであった。築石の正面は、石材の平坦面を向けて積まれている。間詰石には河原石が用いられており、寸法は拳大のものが主体で、これに 20 ～ 30 ㎝大のものが加わる。石垣の勾配は、西面が約 60°、東面が約 65°前後を測り、東面の傾斜の方がやや大きくなっている。築石の大半が戸室石（赤、青、中間色（ニタリ）が見られ、赤戸室が多くを占める）で構成されるが、河原石も若干見られた。自然石主体である。これらの積みや石材等の特徴から、金沢城石垣編年１期（文禄年間頃（1592 ～ 1596））に属すると考えられる。また、明確に矢穴が確認されたのは、１石のみで、石垣下面での痕跡だったため、形状や寸法等の記録を取れなかった。墨書と刻印がわずかに見られ、墨書は 1810E の３石４箇所（正面および側面）、刻印は 1810E・1810W の８石８箇所（正面・上面・側面）で確認されている。墨書は、丸や一本線などが記されていた。刻印は、鱗紋や十文字など一定の形を示すものもあるが、不定形のものもある。土橋石垣の構築工程は、根石を据え、裏込めとして築石約１～２石分程度（約 50 ㎝）盛土し、その最上面を粘質土で整地し作業面を形成して築石を積み、裏込めに河原石主体（若干戸室石片を含む）の栗石を石垣際へ少量入れて土を盛り、作業面を形成して更に上段の石を積み上げていったと考えられる。なお、栗石 100 石を抽出して得られた寸法と重量の平均値は、長辺 17.5 ㎝、短辺 11.95 ㎝、重量 2.444 ㎏である。

本丸南堀の底において、自然堆積層である砂質土の堆積は非常に薄く、限定的な検出にとどまり、水成堆積特有の粘土層等は見られなかった。このことから、この段階における本丸南堀は空堀であったと考えられる。また、自然堆積層の薄さから、この状態が短期間であったと考えられる。上記の堀と土橋の状況について、「第１段階」とする。

②土橋と本丸南堀の改修（第 76 ～ 84・86 ～ 91・93 ～ 98 ①図）

土橋東側では、第１段階の石垣の前面に盛土され土羽となる。盛土による拡幅は基底部で約 1.7 ～２m。土羽は約 45°の傾斜で形成され、傾斜に沿って第１段階の底から約 2.3 m掘削して新たな堀底が形成された。そのレベルは 23.1 mを測り、堀底から土羽斜面に沿って、水中堆積特有の粘土層と砂質土が、交互に堆積している。この堆積層の検出レベルは最高所で 26.0 ～ 26.3 mで、層厚は堀底を確認した E2 区で最大約１.８mを測る。このことから、第１段階の空堀から深さを増すと同時に、この一帯が湛水していたことが判明した。また、土羽面から１段ないし２段積みされ列状に配置された俵積みが検出されている。これらの俵は稲藁で編まれ中に土が詰められたもので（土俵）、寸法は長さ約 60 ㎝、幅約 40 ㎝、厚さ約 25 ㎝を測る。このうち 10 俵分がほぼ完全な状態で検出された。粘土層の上端レベルから復元される当時の水際附近に配置されており、浸食防止のための護岸目的で埋設されたものと考えられる。土俵積みの検出レベルは、土橋北部で約 26.0 ～ 26.4 m、南部で約 25.4 ～ 25.8 mを測る。土俵の残存状況は、全体的に比較的良好であるほか、両端に桟俵を当てるタイプであることが確認された。なお、土俵については、一部を剥ぎ取って取り上げて実測図を作成しており、詳細については次章で紹介する。

土橋西側では、第１段階の石垣面から約 2.2 ～ 2.9 m前面に、南北方向の石列が構築された。石列を構成する石は、土橋北部では良好に残されていたが、南部では失われていた。石列は、残存状況の制約から規模・構造について不明な点を残すが、石垣土橋拡幅に伴う構造物（護岸目的か）と考えられる。石列を構成する石材は、平坦に掘削した地山上に直接据えられていたが、部分的に石の下面や石材間に河原石が置かれた箇所も見られた。また、石材は小さく控えの短い戸室石と河原石で、自然石および面に自然面を残す割石からなり、平坦な面を正面に向けて据えられている。石列内部の構造は、栗石として多くの河原石が充填されており、多少の盛土も混入している。また、栗石 100 石を抽出して得られた寸法と重量の平均値は、長辺 14.87 ㎝、短辺 0.79 ㎝、重量 1.591 ㎏で、土橋石垣内部の栗石と比較すると小ぶりであった。石列の前には、約 35 ～ 45°の傾斜で堀の斜面が形成されているが、調査による掘削深度の範囲内では、堀底および水成粘土堆積層は確認できなかった。以上に述べた土橋と堀の状況について、「第２段階」とする。

なお、平成８・９・17 年度に実施されたボーリング調査において、本丸南堀の土橋以東の範囲内に調査地点を設定したところ、堀堆積層の連続性が乏しく、検出範囲が限定的であったことが確認されており、当該範囲における湛水が全体に及ばず部分的であった可能性がある。また、土橋西側においても水成堆積を確認できなかったことから、本丸南堀全体が湛水していたと断定するに至らなかった。

③土橋・本丸南堀の廃絶（第 76 ～ 78・81 ～ 84・86 ～ 91・93 ～ 98 ①図）

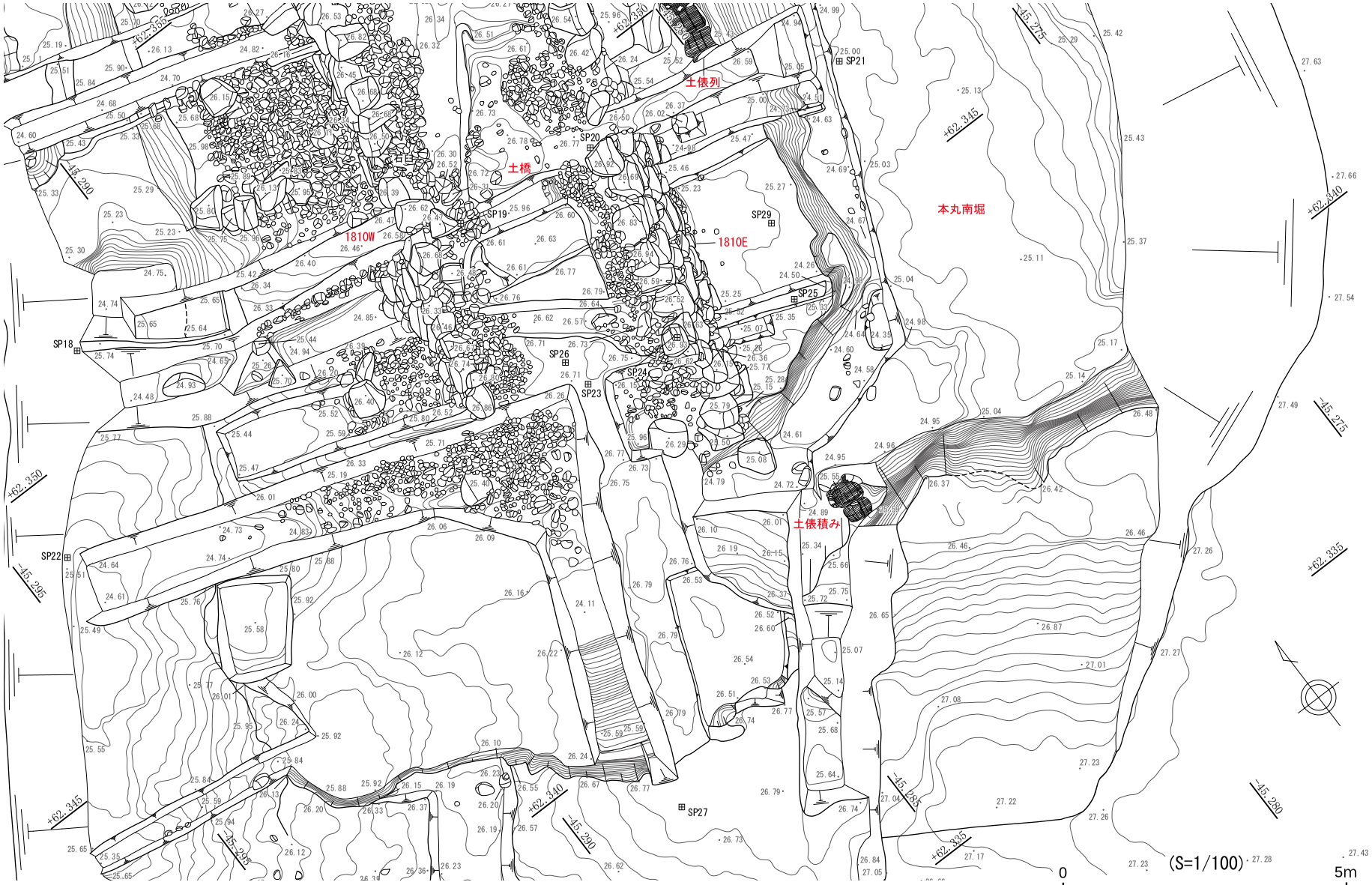
土橋は、その上部が取り壊されるとともに、南端部において南北幅約７m、深さ約３mにわたって掘り込まれ、破壊されていた。掘込内の埋土は、本丸南堀の埋立土と連続していることから、本丸南堀廃絶時における一連の造作と考えられる。おそらく、堀の埋立て時に土橋の南端部を取り壊し、水抜きを行ったものと考えられる。また、この掘り込みの南岸でも、中に土が充填された約５～６段の土俵積みが検出されている。土橋の廃絶と本丸南堀の埋立ては、いもり堀の掘削と連動する一連の普請であったと考えられる。この段階を「第３段階」とする。

なお、本丸南堀の廃絶およびいもり堀の開設は、堀埋立土（Ⅳｂ層）からの出土遺物および後述す

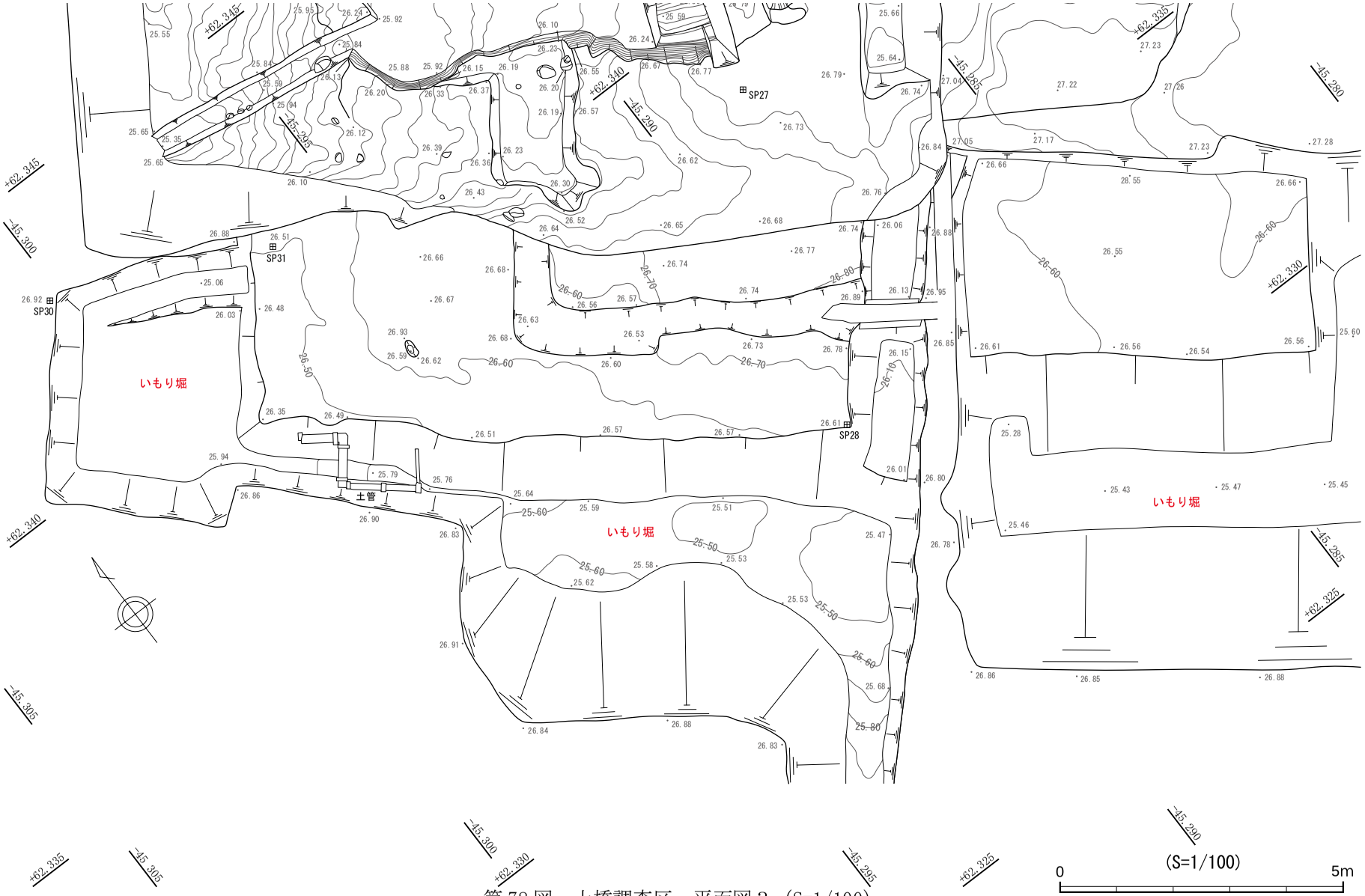
第 74 図　土橋調査区　全体図（S=1/200）

第 75 図　土橋調査区　区割図（S=1/200）

第 76 図　土橋調査区　平面図 1 (S=1/100)



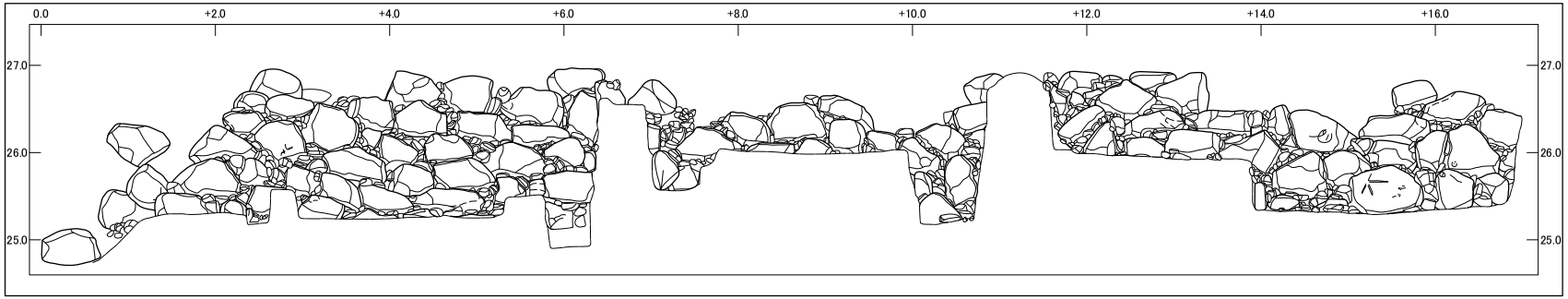
第 77 図　土橋調査区　平面図 2 (S=1/100)



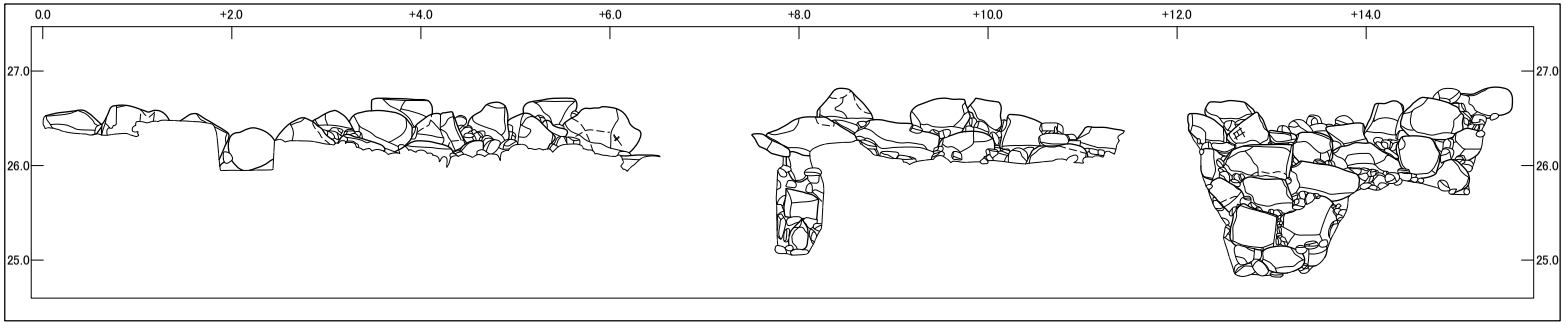
第78図　土橋調査区　平面図３（S=1/100）

(S=1/100)

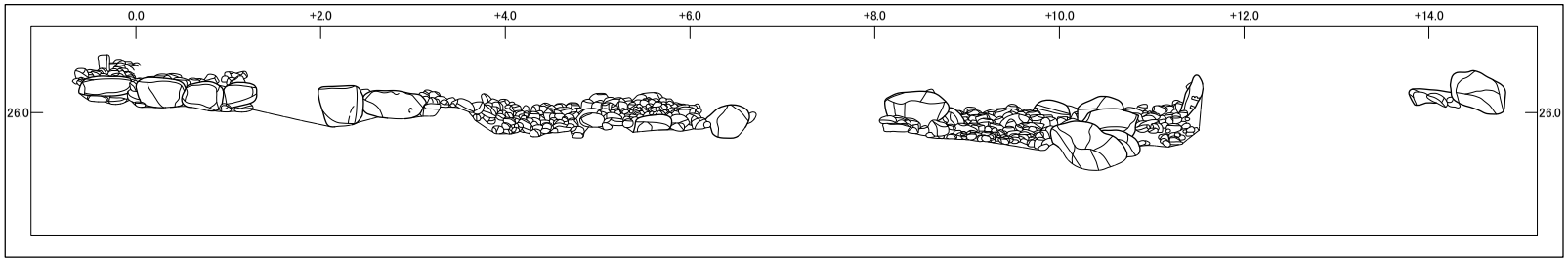
0　5m



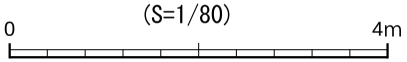
土橋石垣東面（1810E）立面図



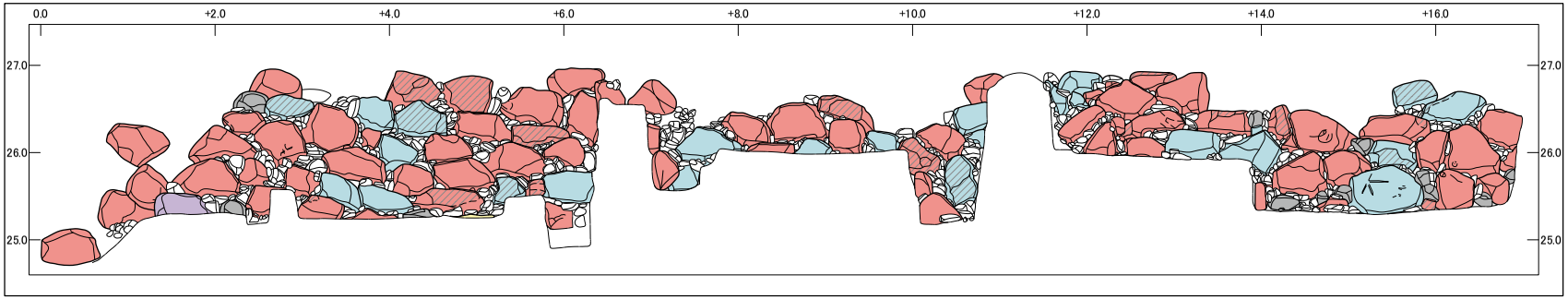
土橋石垣西面（1810W）立面図



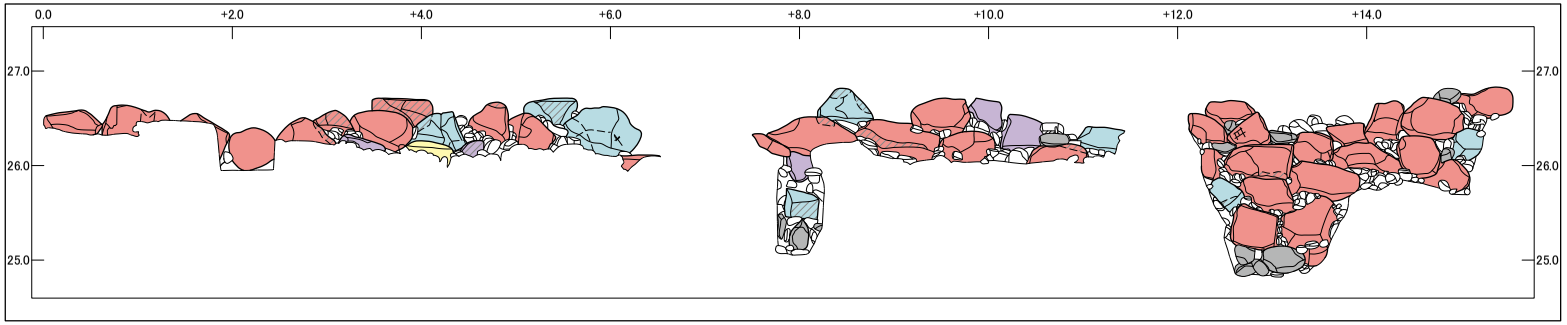
1810W 前面石列立面図



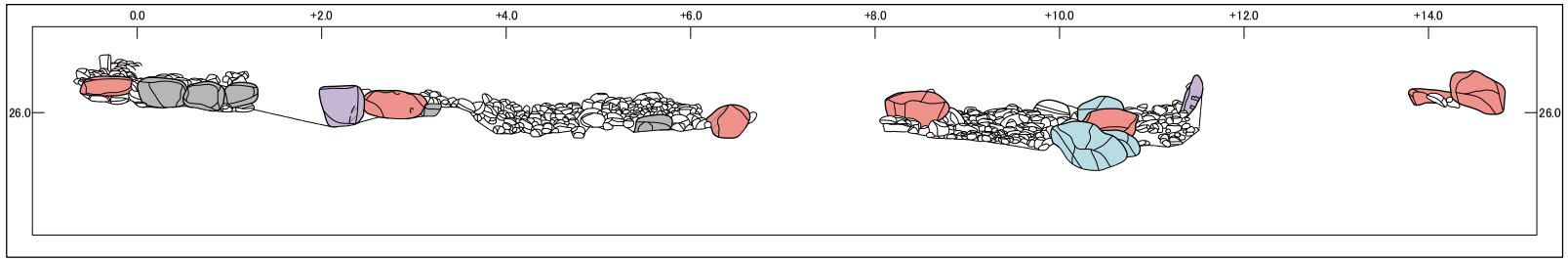
第 79 図　石垣 1810E・1810W、石列　立面図（S=1/80）



土橋石垣東面（1810E）石材観察図



土橋石垣西面（1810W）石材観察図



1810W 前面石列石材観察図

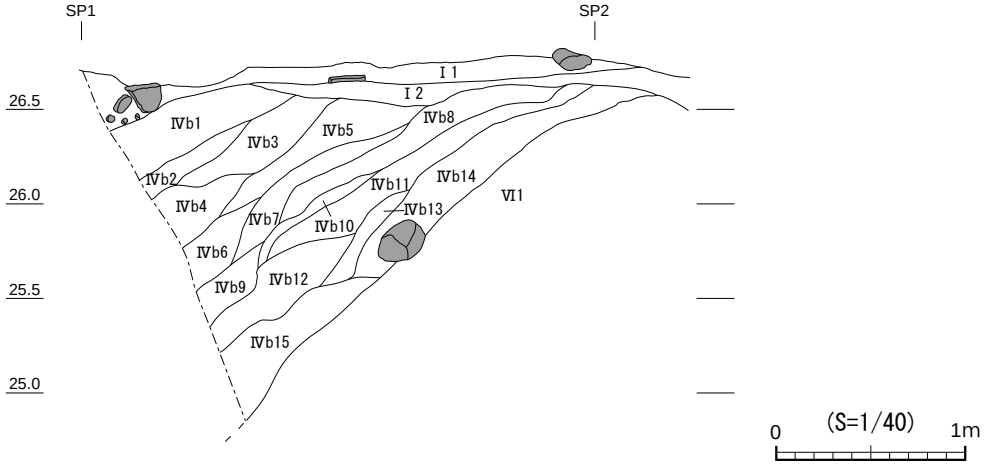
戸室石（赤）
戸室石（青）
戸室石（中間色）
河原石
種別不明

自然面
割面
加工面

(S=1/80)
0
4m

第 80 図　石垣 1810E・1810W、石列　石材観察図（S=1/80）

①SP1-2 土層断面

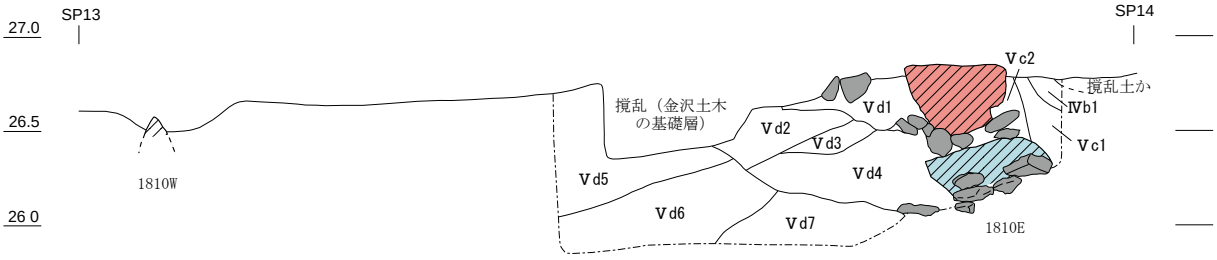


Ⅰ層　近現代層
Ⅰ1　褐色土　小礫・小石等含む【現地表面】
Ⅰ2　暗褐色土　小礫・小石等含む　【旧陸軍期の撹乱（土管掘方）】

Ⅳb 層　近世初期：本丸南堀埋立土
Ⅳb1　褐灰色土　径 10 ㎝以下の礫で構成された礫層　粗砂含む
Ⅳb2　やや明るい橙灰色土　小礫・小石・粗砂含む
Ⅳb3　黄灰色土　小礫・小石含む
Ⅳb4　明黄灰色土　小礫・黄灰色および橙色粘土ブロック（径約５㎝）含む
Ⅳb5　橙灰色土　小礫・炭化物・小石含む
Ⅳb6　橙黄灰色土　小礫・粗砂・橙黄灰色粘土ブロック（径約５㎝）含む
Ⅳb7　橙灰褐色土　小礫・小石・黄灰色および橙色粘土ブロックが点々と入る
Ⅳb8　橙褐色土　小礫・小石含む
Ⅳb9　やや明るい橙灰色土　小礫、黄灰色・黄色・橙色粘土ブロックが点々と入る
Ⅳb10　褐橙灰色土　小礫・小石含む
Ⅳb11　褐橙黄色土　小礫・小石・粗砂含む
Ⅳb12　褐橙黄灰色土　小礫・小石・橙色粘土粒が点々と入る
Ⅳb13　やや明るい褐黄橙色土　小礫・小石含む
Ⅳb14　やや明るい褐黄橙色土　小礫・小石含む
Ⅳb15　褐黄灰色土　小礫・小石・橙色土粒（径約１㎝）が点々と入る

Ⅵ層　本丸南堀構築以前の土層
Ⅵ1　灰白色砂質土【地山】

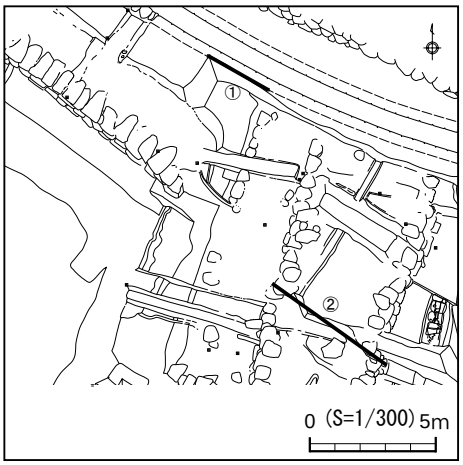
②SP13-14 土層断面



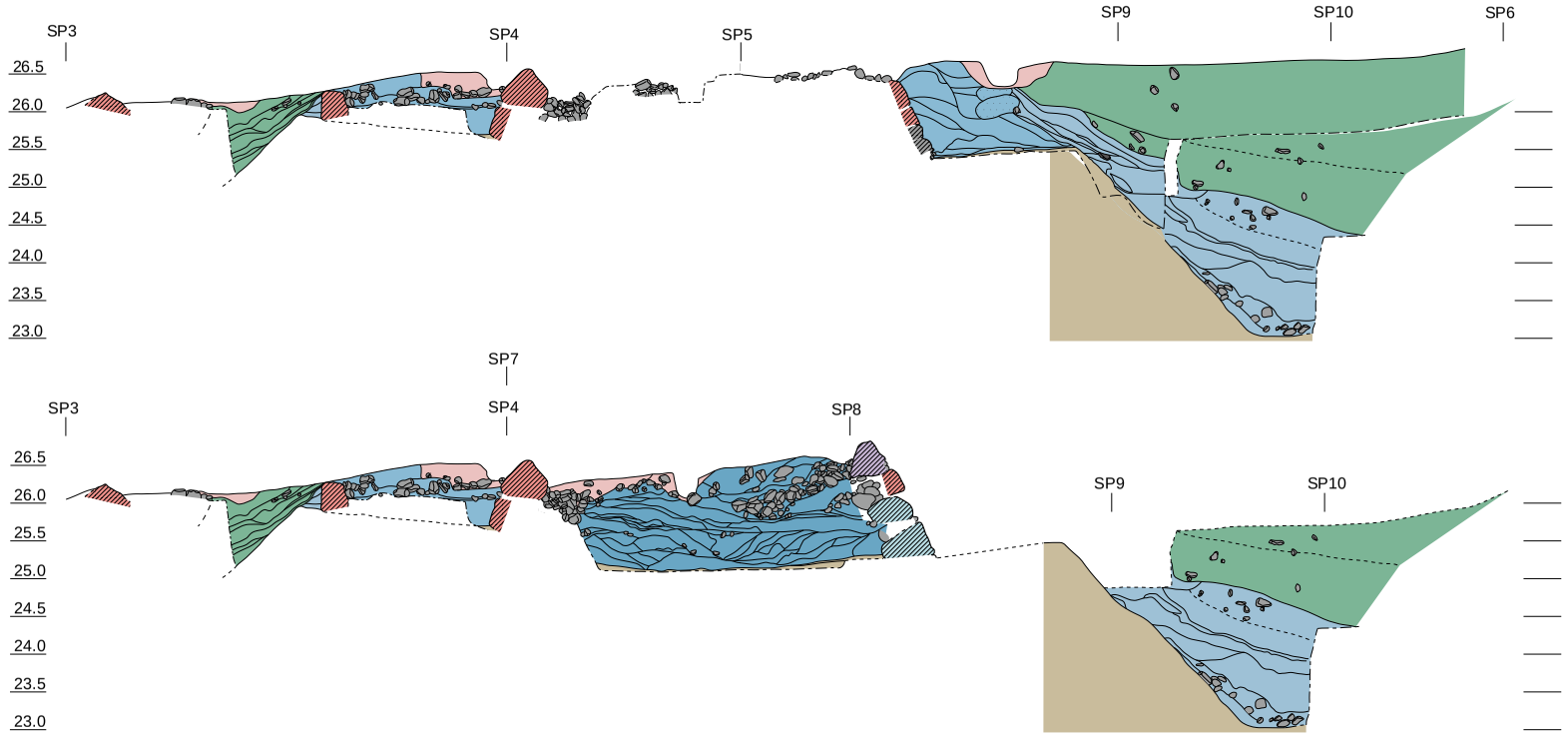
Ⅳb 層　近世初期：本丸南堀埋立土
Ⅳb1　暗灰褐色砂質シルト　ほぼ均質

Ⅴc 層　近世初期：本丸南堀第２段階の造成土（土橋改修に伴う造成土）
Ⅴc1　暗褐色シルト　粘性あり
Ⅴc2　暗灰色シルト　粘性あり

Ⅴd 層　近世初期：本丸南堀第１段階の造成土（土橋構築に伴う造成土）
Ⅴd1　黄褐色シルト　栗石混じり　やや砂質でしまりなし
Ⅴd2　暗黄褐色シルト　黄褐色粘質土（地山）・灰色粘質土・灰色砂がブロック状（径１～２㎝）に混
Ⅴd3　暗灰色シルト　粘性あり
Ⅴd4　栗石層　間層ほとんどなし
Ⅴd5　暗灰色シルト　粘性あり　少量の砂・小砂利・粘シルト土ブロック（径４～５㎝）が入るも、ほぼ均質な層
Ⅴd6　暗灰褐色シルト　砂質　灰色粘質土（地山）ブロック（径約１㎝）も入るがほぼ砂質シルト層
Ⅴd7　暗黄褐色シルト　砂質　灰色粘質土（地山）ブロック（径約 0.5 ㎝）も入る
※Ⅴd1 ～Ⅴd4 とⅤd5 ～Ⅴd7 で作業単位が変わっている？

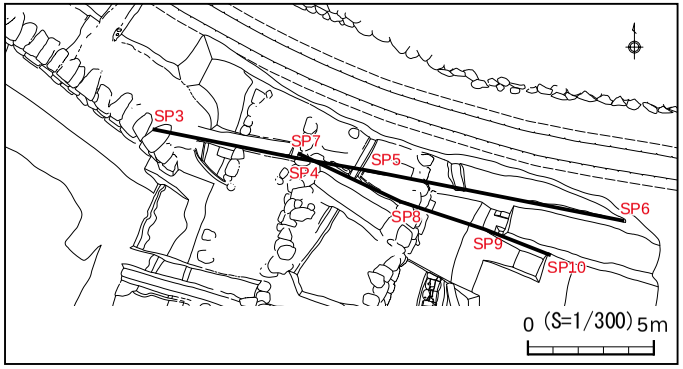


第 81 図　土橋調査区　土層断面図　SP1-2・SP13-14（S=1/40）

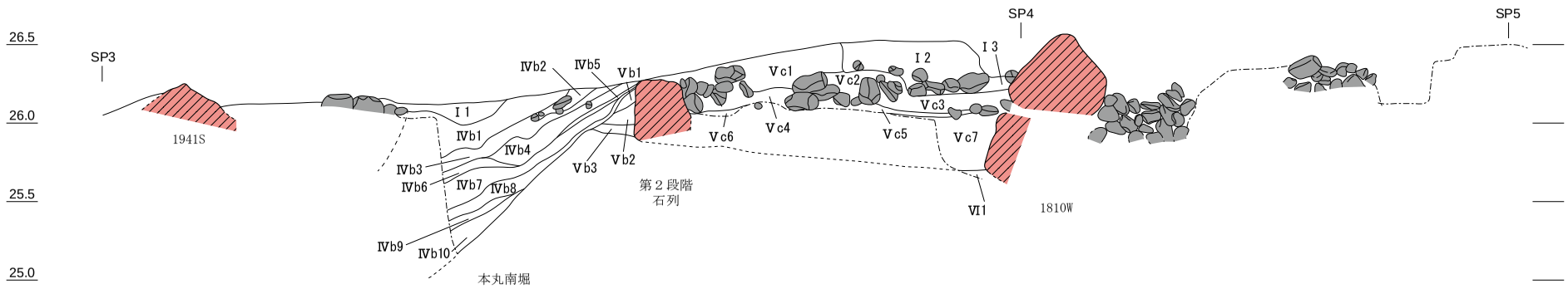


Ⅰ層　近現代層
Ⅳb 層　本丸南堀埋立土
Ⅴb 層　本丸南堀第２段階の自然堆積層
Ⅴc 層　本丸南堀第２段階の造成土
Ⅴd 層　本丸南堀第１段階の造成土
Ⅵ層　本丸南堀構築以前の土層

0　(S=1/100)　5m



第 82 図　土橋調査区　土層大別図 1 (S=1/100)



Ⅰ層　近現代層
Ⅰ1　淡褐色土　小礫・小石・炭化物含む【撹乱】
Ⅰ2　褐色土　小礫・小石・炭化物・コンクリート片含む【撹乱】
Ⅰ3　暗褐色土　小礫・粗砂含む　河原石（径 25 cm以内）が上層との境目に入る【撹乱】

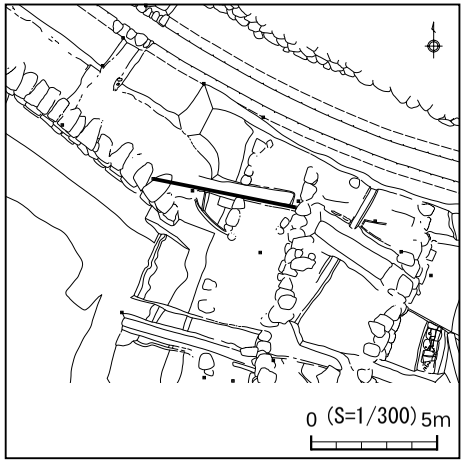
Ⅳb 層　近世初期：本丸南堀埋立土
Ⅳb1　黄灰色土　小礫・小石・黄灰色粘土ブロック（径５cm以内）含む
Ⅳb2　淡黄褐色土　小礫・小石・河原石（10 cm以内）含む
Ⅳb3　黄灰褐色土　小礫・小石・黄灰色粘土ブロック（径５cm以内）含む
Ⅳb4　黄褐色土　小礫・小石・黄橙色粘土ブロック（径３cm以内）含む
Ⅳb5　褐橙色土　小礫・粗砂含む
Ⅳb6　褐橙灰色土　小礫・小石含む
Ⅳb7　褐黄灰色土　小礫含む
Ⅳb8　橙灰褐色土　小礫・粗砂含む　橙色粘土粒点々と入る
Ⅳb9　暗橙褐色土　小礫・小石含む
Ⅳb10　暗橙褐灰色土　小礫・小石含む

Ⅴb 層　近世初期：本丸南堀第２段階の自然堆積層
Ⅴb1　暗褐橙色土　小礫含む
Ⅴb2　やや暗い橙褐色土　小礫・小石含む
Ⅴb3　明橙灰色シルト

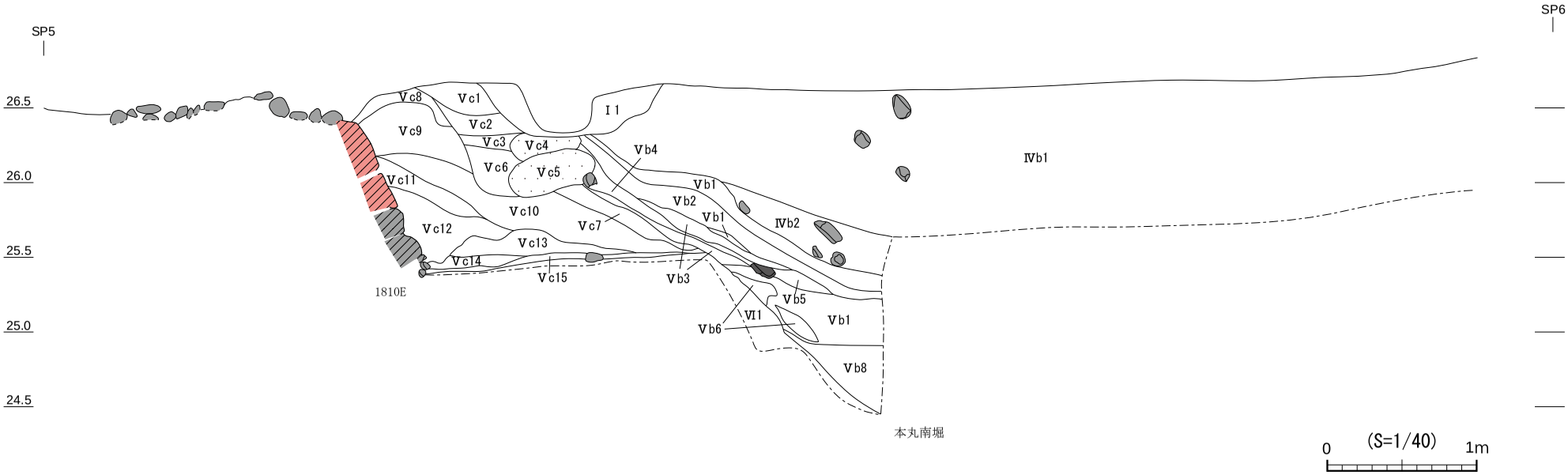
Ⅴc 層　近世初期：本丸南堀第２段階の造成土（土橋改修に伴う造成土）
Ⅴc1　黄橙褐色土　小礫・粗砂含む【石列の裏込層】
Ⅴc2　暗橙黄褐色土　小石・小礫含む　Ⅴc3 との間に栗石（径 25 cm以内）が入る【石列の裏込層】
Ⅴc3　淡黄橙褐色土　小礫含む　Ⅴc2 との間に栗石（径 25 cm以内）が入る【石列の裏込層】
Ⅴc4　やや暗い橙褐色シルト　栗石（径 25 cm以内）が入る　栗石は石垣石裏に隙間が生じないようにぎっしりと詰められている【石列の裏込層】
Ⅴc5　やや明るい灰白色シルト【石列の裏込層】
Ⅴc6　暗褐橙色土【石列の裏込層】
Ⅴc7　橙黄灰色シルト　地山質【石列の裏込層】

Ⅵ層　本丸南堀構築以前の土層：地山
Ⅵ1　明灰白色シルト

0　(S=1/40)　1m



第 83 図　土橋調査区　土層断面図　SP3-5（S=1/40）



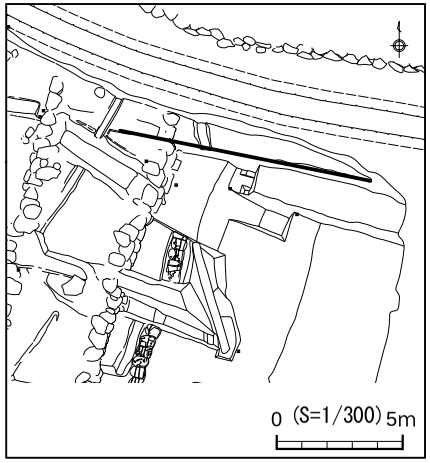
Ⅰ層　近現代層
Ⅰ1　暗褐灰橙色土【近代以降の土管掘方（おそらく旧陸軍期のもの）】

Ⅳb 層　近世初期：本丸南堀埋立土
Ⅳb1　淡褐灰色土　小礫・小石・河原石（径 20 ㎝以内）・粗砂含む
Ⅳb2　淡暗褐灰色土　小礫・小石・河原石（径 20 ㎝以内）・粗砂含む

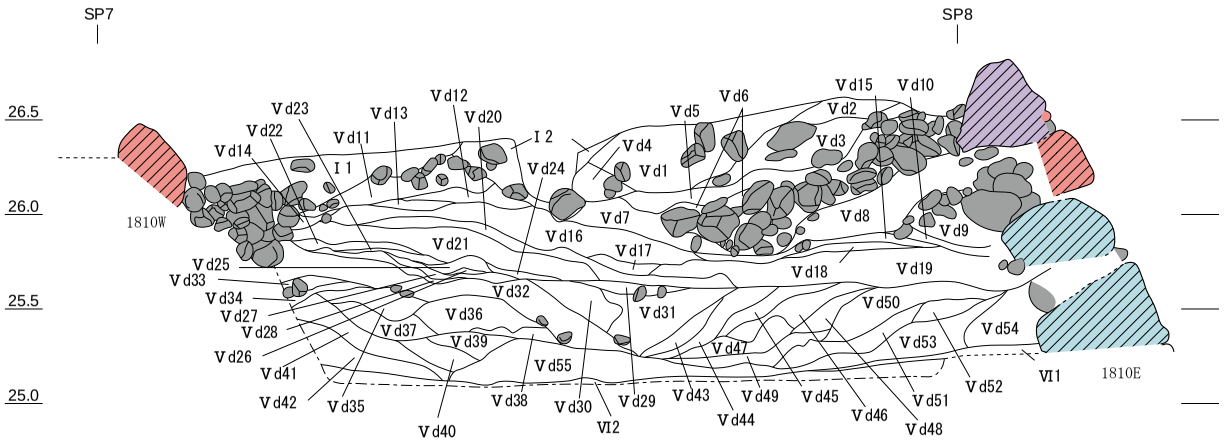
Ⅴb 層　近世初期：本丸南堀第２段階の自然堆積土
Ⅴb1　暗灰褐色粘土
Ⅴb2　暗灰橙褐色土　小礫・小石・粗砂含む
Ⅴb3　暗灰橙褐色土　粗砂層状に含む　小礫・小石含む
Ⅴb4　橙青褐色土　小礫・シルト・小石含む
Ⅴb5　淡灰褐色土　小礫・燻丸瓦片含む
Ⅴb6　暗褐橙色砂質土　粗砂主体　小礫含む
Ⅴb7　暗灰褐青色粘質土　小礫・小石・径 30 ㎝以内の河原石含む　大小の礫が層状に入る
Ⅴb8　橙黄褐色砂質土　粗砂主体　小石・小礫含む

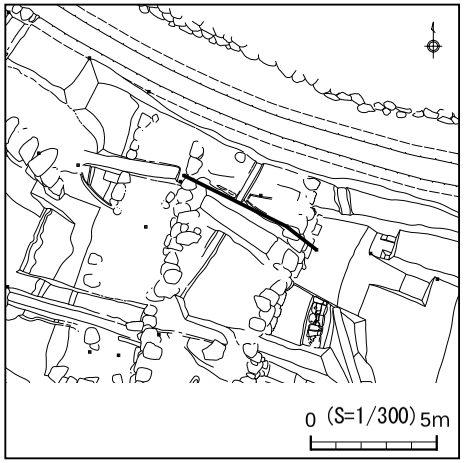
Ⅴc 層　近世初期：本丸南堀第２段階の造成土（土橋改修に伴う造成土）
Ⅴc1　褐灰橙色土　小石含む
Ⅴc2　灰褐橙色土　小礫・灰橙色粘土ブロック（径約５㎝）含む
Ⅴc3　灰褐橙色土　小礫・小石含む
Ⅴc4　橙灰褐色土　小礫・小石含む【土俵（上段）内の土】
Ⅴc5　暗褐灰色土　小礫・小石・黄色粘土ブロック（径約５㎝）少し含む【土俵（下段）内の土】
Ⅴc6　灰黄褐色土　小礫・小石・シルト・黄灰色粘土ブロック（径約５㎝）含む
Ⅴc7　黄灰褐色土　小礫・シルト含む
Ⅴc8　橙黄灰色粘質土　黄色粘土ブロック（径約７㎝）含む
Ⅴc9　灰橙色粘質土　シルトが全体を占める
Ⅴc10　明灰黄色粘質土　シルト多　黄色粘土層状に入る
Ⅴc11　灰黄色粘質土　黄色粘土ブロック（径約１㎝）含む
Ⅴc12　灰褐色粘質土　小礫含む
Ⅴc13　灰白色土
Ⅴc14　青灰色粘質土　小石含む
Ⅴc15　灰青色砂質土

Ⅵ層　本丸南堀構築以前の土層
Ⅵ1　暗青色粘質シルト【地山】



第 84 図　土橋調査区　土層断面図　SP5-6(S=1/40)





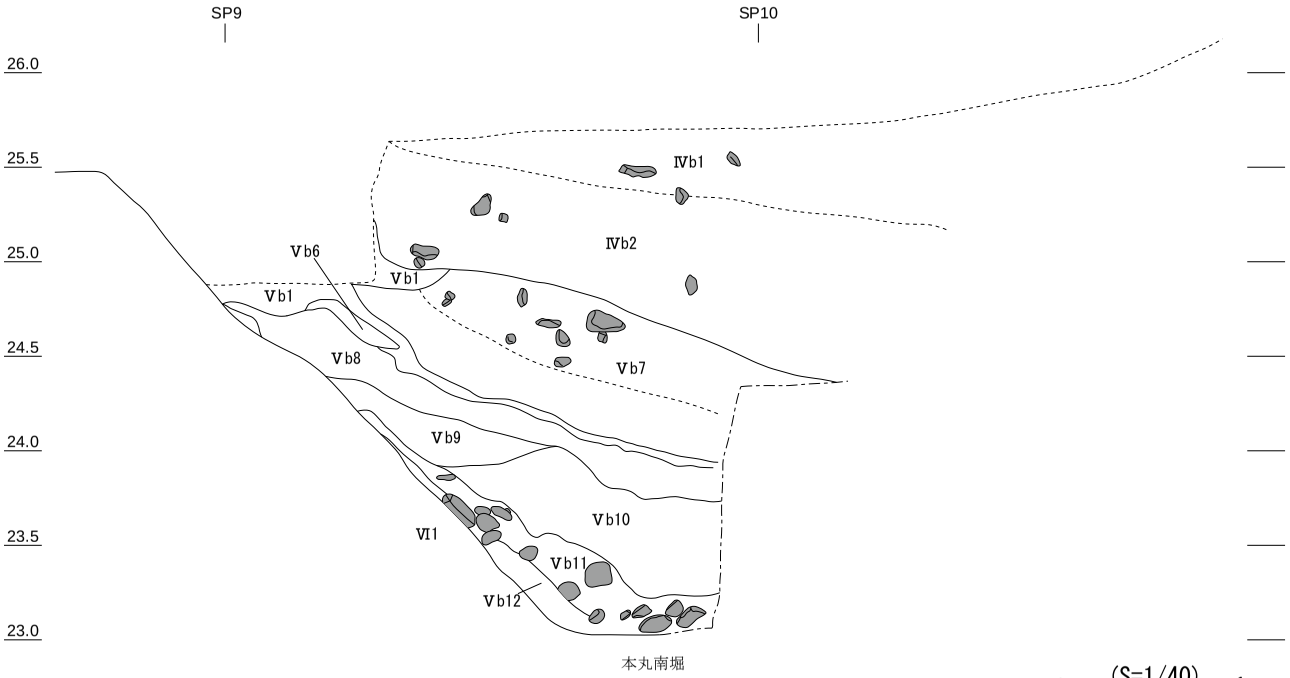
0 (S=1/40) 1m

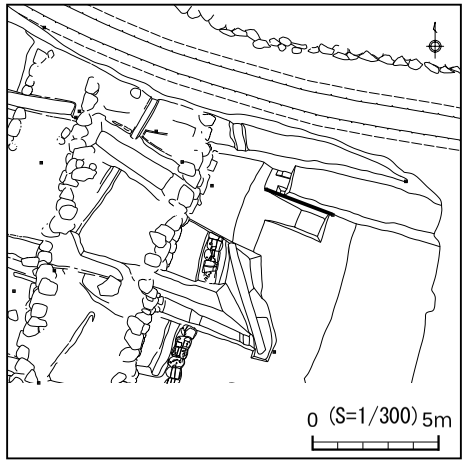
Ⅰ層　近現代層
Ⅰ1　暗褐色土　炭化物など多く入る　小礫含む【撹乱】
Ⅰ2　褐色土　土管の下・両脇に敷いた河原石・礫などが入る【土管掘方埋土】

Ｖd層　近世初期：本丸南堀第１段階の造成土（土橋石垣の裏込層）
Ｖd1　黄灰色土　小礫・瓦石・小石・灰白色粘土ブロック（径 20 cm以内）含む
Ｖd2　淡褐色土　小礫・小石含む
Ｖd3　褐橙色土　小礫・小石・炭化物含む
Ｖd4　灰褐色土　シルト含む　橙色粒点々と含む
※Ｖd1 ～ 4：1810E（現存最上部の更に上の石）を構築するための裏込土
Ｖd5　明橙灰色土　シルト・小礫・小石含む
Ｖd6　栗石層　石と石の隙間に橙褐色土が入る　栗石の径は上部径 15 cm以内、中～下部径 25 cm以内、最下部径 15 cm以内【1810E の裏込石】
Ｖd7　明灰白褐色土　シルト・河原石（径 15 cm以内）含む
Ｖd8　明橙黄灰色土　シルト・小礫・黄色粘土ブロック（径 10 cm以内）含む【整地土か】
※Ｖd5 ～ 8：東側残存最上部の石を積むための裏込土と裏込石。1810E を据えるための裏込土と栗石の１単位。Ｖd8 はＶd9･10 層を補強するためにパックした役割と東側残存最上部の石を据えるための整地土としての役割がある。Ｖd6 の栗石はＶd8 の上に乗っている石垣石と更にその上の段（現存しない）の石垣石を構築するために盛られた栗石。
Ｖd9　褐色粘質土　シルト・黄灰色粘土ブロック（径 10 cm以内）含む
Ｖd10　褐灰色土　砂含む
※Ｖd9･10：1810E を据えた後に石垣の裏込土と栗石を詰めた１単位
Ｖd11　やや暗い橙褐色土　シルト・炭化物・河原石（径 15 cm以内）含む
Ｖd12　橙灰色土　小礫・小石・粗砂含む
Ｖd13　やや暗い橙褐色土　小礫・小石・橙色粘土粒含む
Ｖd14　暗褐橙色土　小礫・小石含む
Ｖd15　明橙色粘質土　シルト含む【1810E を据えるための整地層】
Ｖd16　灰橙色土　小石含む
Ｖd17　灰橙褐色土　小礫含む
Ｖd18　褐灰黄色土　粗砂・明黄色粘土層状に入る　Ｖd19 と同類土【1810E を据えるための整地層】
Ｖd19　明黄灰色土　明黄色土・灰色粗砂が層状に入る【1810E を据えるための整地層】
Ｖd20　褐橙灰色土　小礫・小石含む
Ｖd21　やや暗い褐色土　小礫・小石含む
Ｖd22　明黄灰色粘質土
Ｖd23　褐灰色土　小礫・粗砂含む
Ｖd24　やや暗い褐橙色土　小礫・小石含む
Ｖd25　やや明るい黄灰褐色土　小礫・小石含む
Ｖd26　黒灰色土　小礫含む
Ｖd27　黄褐灰色土　小礫含む
Ｖd28　やや暗い褐橙灰色土　小礫含む
※Ｖd11 ～ 14・16・17・20 ～ 28：先に 1810W を構築するために裏込土を盛り栗石を詰める。栗石が尻上りであるため、栗石よりも盛土が先にされたと思われる。西側の裏込土を入れながら、次に 1810E の青戸室石（上）を据えるための裏込土（石垣石の土台となる整地土：Ｖd18・19）を盛る。
Ｖd29　灰褐色シルト
Ｖd30　橙灰褐色土　小礫・小石含む
Ｖd31　灰黄褐色土　小礫・灰黄色粘土ブロック（径３cm以内）含む
Ｖd32　暗橙褐色土　小礫・小石含む【整地土か】
Ｖd33　暗褐色土　小礫含む
Ｖd34　やや暗い褐灰色土　粗砂・小礫含む
Ｖd35　暗褐黄色土　小礫・粗砂含む
Ｖd36　橙灰色土　小礫・小石・粗砂・橙色粘土ブロック含む
Ｖd37　暗灰褐色砂質土　粗砂主体
Ｖd38　暗灰橙色土　粗砂含む
Ｖd39　暗褐橙色土　小礫・小石含む
Ｖd40　橙黄褐色土　小石含む
Ｖd41　暗褐橙黄灰色土　小礫・小石・粗砂含む
Ｖd42　暗橙黄褐色土　小礫・小石含む
Ｖd43　淡灰橙色土　小礫含む
Ｖd44　暗灰褐色土　小礫・小石・黄灰色粘土ブロック（径５cm以内）含む
Ｖd45　明灰白褐色粘質土　シルト・小石含む
Ｖd46　灰橙褐色土　小礫・粗砂・黄灰色粘土ブロック（径５cm以内）含む
Ｖd47　灰黄白色粘質土　小礫含む
Ｖd48　やや明るい灰橙褐色土　小礫・粗砂含む　Ｖd46 と同類土
Ｖd49　明灰黄白色シルト　粗砂含む
Ｖd50　暗灰褐色土　小礫・粗砂含む　炭化物？含む
Ｖd51　灰橙白色土　小礫・小石含む
Ｖd52　暗灰褐黄色土　小礫含む
Ｖd53　灰褐青白色粘質土　シルト・小礫・小石含む
Ｖd54　明灰白橙色粘質土　シルト含む
Ｖd55　褐橙灰色土　小礫・小石・粗砂・黄色粘土ブロック（径約１cm）含む
※Ｖd29 ～ 55：石垣最下部およびその上段の築石を積むために盛った裏込土。先に 1810E 構築のために東半分に裏込土を盛る。その後 1810W を構築するために西半分に裏込土を盛った。

Ⅵ層　本丸南堀構築以前の土層
Ⅵ1　明橙色粘質土【地山】
Ⅵ2　明灰白色粘質土【地山】

第 85 図　土橋調査区　土層断面図　SP7-8（S=1/40）



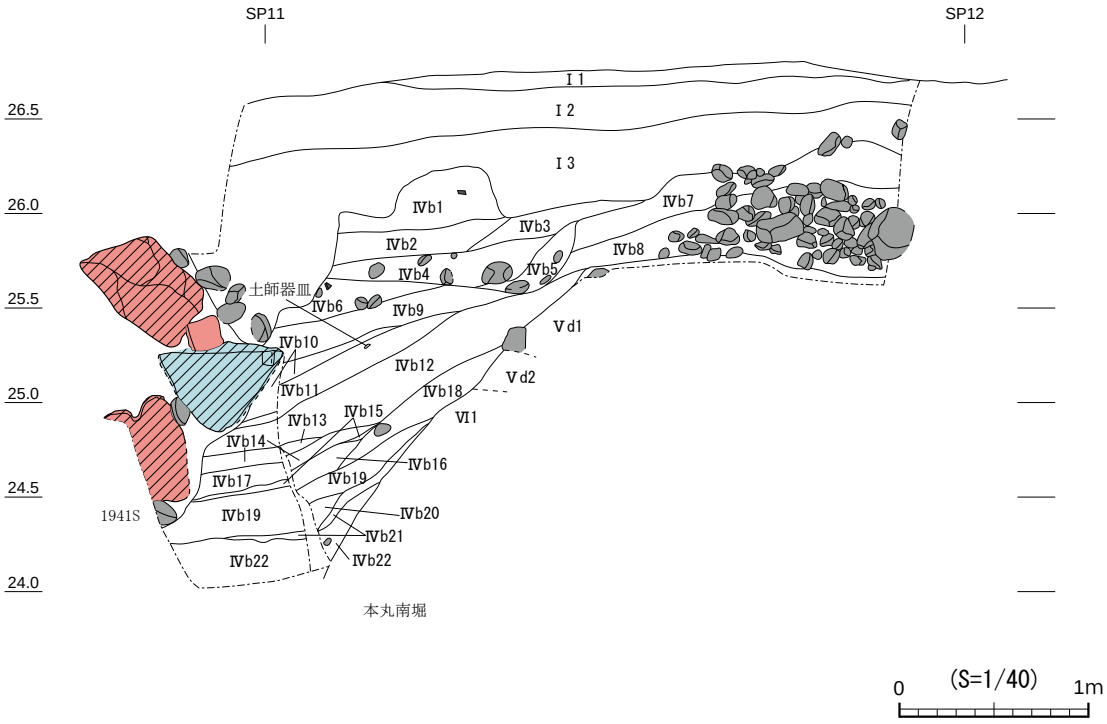


Ⅳb 層　近世初期：本丸南堀埋立土
Ⅳb1　淡褐灰色土　小礫・小石・河原石（径 20 ㎝以内）・粗砂含む
Ⅳb2　淡暗褐灰色土　小礫・小石・河原石（径 20 ㎝以内）・粗砂含む

Ⅴb 層　近世初期：本丸南堀第２段階の自然堆積土
Ⅴb1　暗灰褐色粘土
Ⅴb6　暗褐橙色砂質土　粗砂主体　小礫含む
Ⅴb7　暗灰褐青色粘質土　小礫・小石・径 30 ㎝以内の河原石含む　大小の礫が層状に入る
Ⅴb8　橙黄褐色砂質土　粗砂主体　小石・小礫含む
Ⅴb9　褐橙色砂質土　粗砂主体　小石・小礫・暗青色粘土ブロック（径 10 ㎝以内）含む
Ⅴb10　灰褐青色土　粘土と粗砂が混合　径５㎝以内の小礫・木材片などを含む　下部に行くに従って径５㎝位の河原石多く含む
Ⅴb11　橙褐色土　河原石（径 20 ㎝以内）多く含む　それ以外の土質は粗砂である
Ⅴb12　暗青褐色粘質土　地山質　しまり悪い（地山の岩盤の表面が溶けたものでは）　小礫・小石・粗砂含む

Ⅵ層　本丸南堀構築以前の土層
Ⅵ1　暗青色粘質シルト【地山】

第 86 図　土橋調査区　土層断面図　SP9-10（S=1/40）

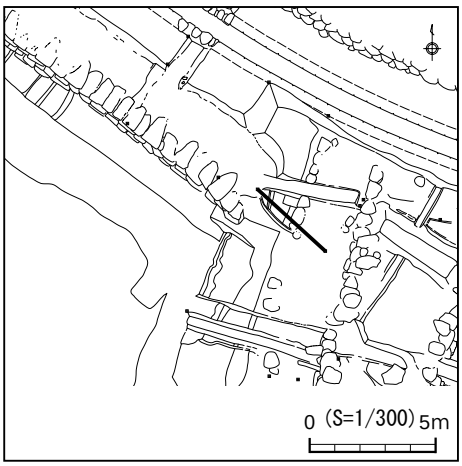


Ⅰ層　近現代層
Ⅰ1　アスファルト路盤【現園路路盤】
Ⅰ2　暗褐色土　ビニール混【直前の整地層】
Ⅰ3　暗褐色土　コンクリートブロック多混【旧陸軍建物取り壊し時の撹乱層】

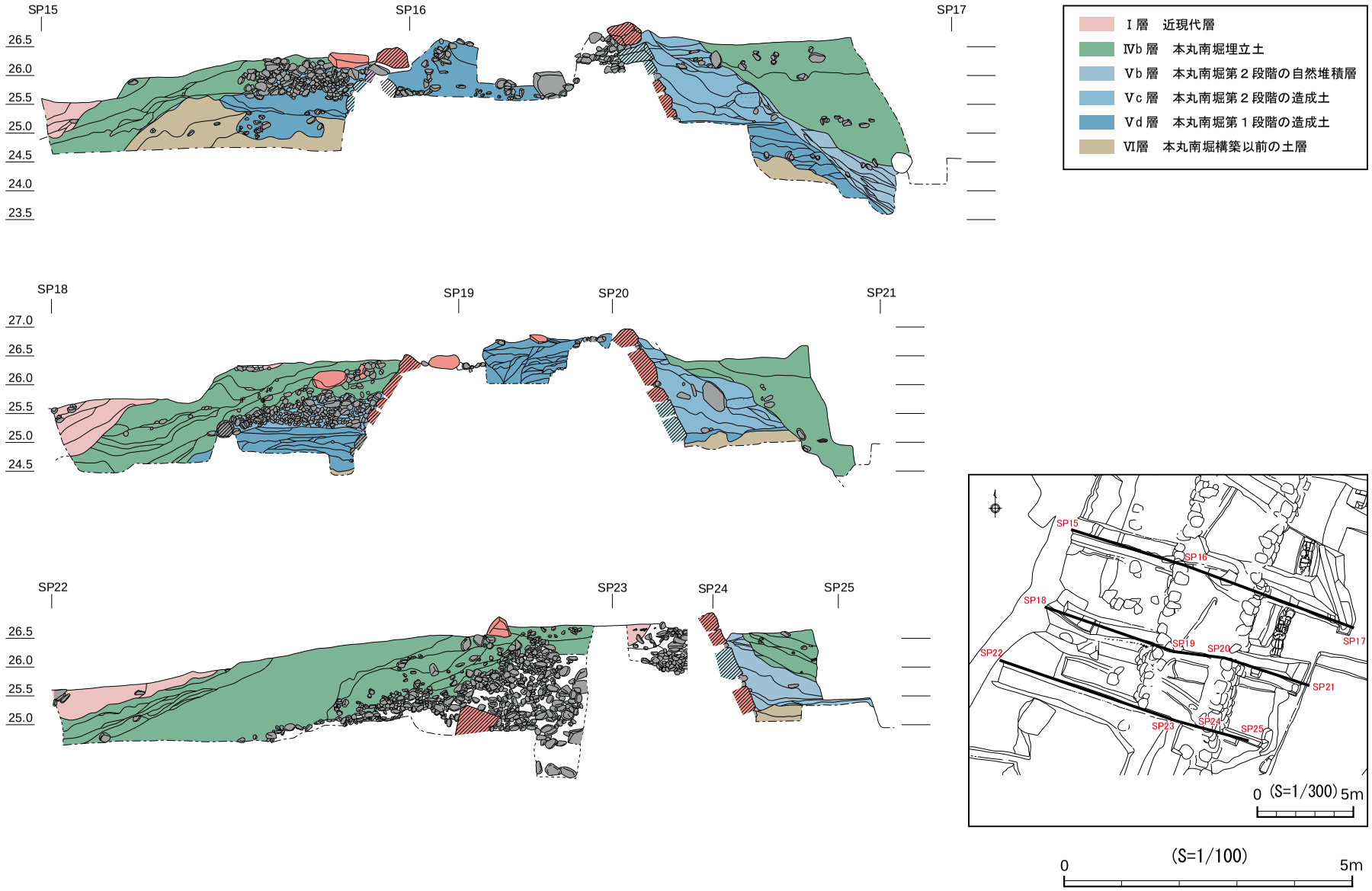
Ⅳb 層　近世初期：本丸南堀埋立土
Ⅳb1　暗黄褐色シルト　礫混　褐色・灰色粘土小粒多混　しまりあり
Ⅳb2　暗褐色土　地山粘土ブロック少混　炭粒少々　やや軟弱
Ⅳb3　黄褐色シルト　地山粘土ブロック混　地山砂岩ブロック少混
Ⅳb4　暗褐色土　円礫（径約 10 ㎝）混
Ⅳb5　灰褐色シルト　円礫（径約 10 ㎝）混
Ⅳb6　暗褐色シルト　円礫（径約 10 ㎝）混
Ⅳb7　暗黄褐色粘質土　地山粘土ブロック・砂ブロック多混　栗石を含む　栗石間の隙間が多い【土橋上部を取り壊した際の栗石か】
Ⅳb8　暗黄褐色砂質土　地山粘土ブロック少混　砂ブロック多混　暗褐色土粒混　栗石を含む　栗石間の隙間が多い【土橋上部を取り壊した際の栗石か】
Ⅳb9　暗黄褐色土　地山粘土ブロック・砂ブロック少混　暗褐色土粒多混
Ⅳb10　暗黄褐色砂質土　砂ブロック少混　暗褐色土粒多混　しまり弱い
Ⅳb11　暗黄褐色土　地山粘土ブロック・砂ブロック・灰色粘土ブロック少混　暗褐色土粒多混
Ⅳb12　暗黄褐色シルト層　地山粘土ブロック・砂ブロック・暗褐色土粒少混
Ⅳb13　黄橙褐色粘土　地山粘土ブロック多混
Ⅳb14　灰褐色シルト～砂　地山粘土ブロック少混　砂ブロック多混
Ⅳb15　黒褐色土【整地時の作業面か】
Ⅳb16　灰黄褐色シルト　地山粘土ブロック少混　砂ブロック多混
Ⅳb17　暗褐色土　地山粘土ブロック少混　地山砂ブロック（径約 10 ㎝）混在
Ⅳb18　灰黄褐色シルト　地山粘土ブロック混　砂ブロック多混
Ⅳb19　暗黄褐色土　地山粘土ブロック多混　砂ブロック・風化小円礫混
Ⅳb20　暗黄褐色シルト　地山粘土ブロック少混　砂ブロック混
Ⅳb21　黒灰褐色粘質土　地山粘土ブロック少混【整地時の作業面か】
Ⅳb22　暗黄褐色土　地山粘土ブロック・砂ブロック・風化小円礫混
※全体に暗黄褐色系シルトをベースに粘土ブロックの混入密度により細分される。部分的に作業面と思しき汚れた薄層を形成する。

Ⅴd 層　近世初期：本丸南堀第１段階の造成土（土橋構築時の盛土）
Ⅴd1　暗黄褐色粘質土　風化円礫（径１～10 ㎝）多　粘土ブロック・砂岩ブロック多混
　　しまり強【整地土】
Ⅴd2　黄橙褐色粘質土　風化小粒礫（径１㎝以下）少混　しまり強

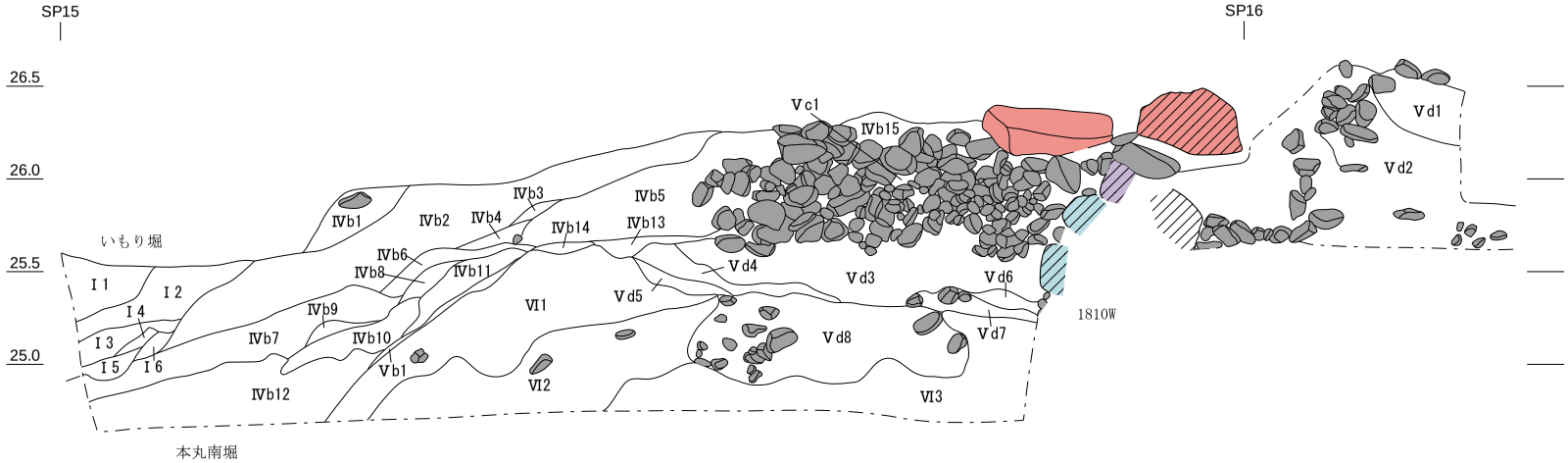
Ⅵ層　本丸南堀構築以前の土層
Ⅵ1　黄褐色～黄灰色シルト　しまり中【地山】



第 87 図　土橋調査区　土層断面図　SP11-12（S=1/40）



第 88 図　土橋調査区　土層大別図２(S=1/100)



Ⅰ層　近代層：明治40年いもり堀埋立土
Ⅰ1　橙褐色土　小礫・小石・粗砂含む
Ⅰ2　褐黄色土　小礫・小石・黄色粘土ブロック点々と含む
Ⅰ3　褐橙色土　小礫・粗砂含む
Ⅰ4　褐灰黄色土　小礫・粗砂含む
Ⅰ5　暗褐橙色土　小礫含む
Ⅰ6　褐灰白色土　粗砂・小礫含む

Ⅳb層　近世初期：本丸南堀埋立土
Ⅳb1　淡黄灰色土　小礫含む
Ⅳb2　灰黄褐色土　小礫・小石含む
Ⅳb3　灰白褐色土　小礫含む
Ⅳb4　褐灰橙色土　小礫含む
Ⅳb5　橙黄灰色土　小礫・小石・河原石（径約10㎝）含む
Ⅳb6　橙灰色土　砂・小礫含む
Ⅳb7　暗灰橙褐色土　小礫・小石含む　灰褐色砂質土が層状に多く入る
Ⅳb8　褐灰色土　小礫含む
Ⅳb9　やや暗い橙灰色土　小礫含む
Ⅳb10　やや暗い灰褐色土　小礫含む
Ⅳb11　淡灰橙白色土　小礫・黄色粘土ブロック（径約5㎝）含む
Ⅳb12　やや暗い灰白色シルト　小礫・小石含む
Ⅳb13　淡灰白色土　小礫含む
Ⅳb14　淡橙褐色砂　小石で構成
Ⅳb15　暗褐色土　小石・礫多く含む

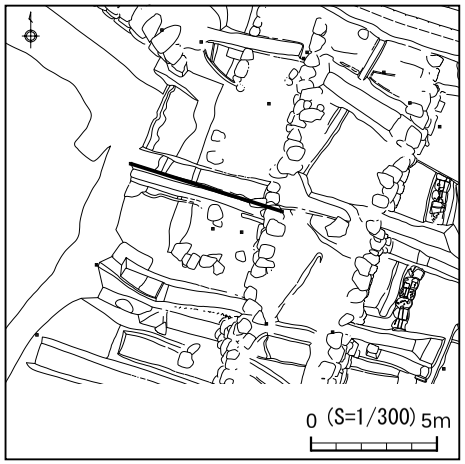
Ⅴb層　近世初期：本丸南堀第２段階の自然堆積層
Ⅴb1　暗褐色シルト

Ⅴc層　近世初期：本丸南堀第２段階の造成土（土橋改修に伴う盛土）
Ⅴc1　栗石層　暗橙褐色土　上部は径30㎝以内の河原石で構成され、石と石の隙間に橙褐色土が詰まる　下部は径15㎝以内の河原石がぎっしり詰められており、石と石の隙間に暗橙色褐色土が詰まる　上部 ～下部間には橙褐色土が入る

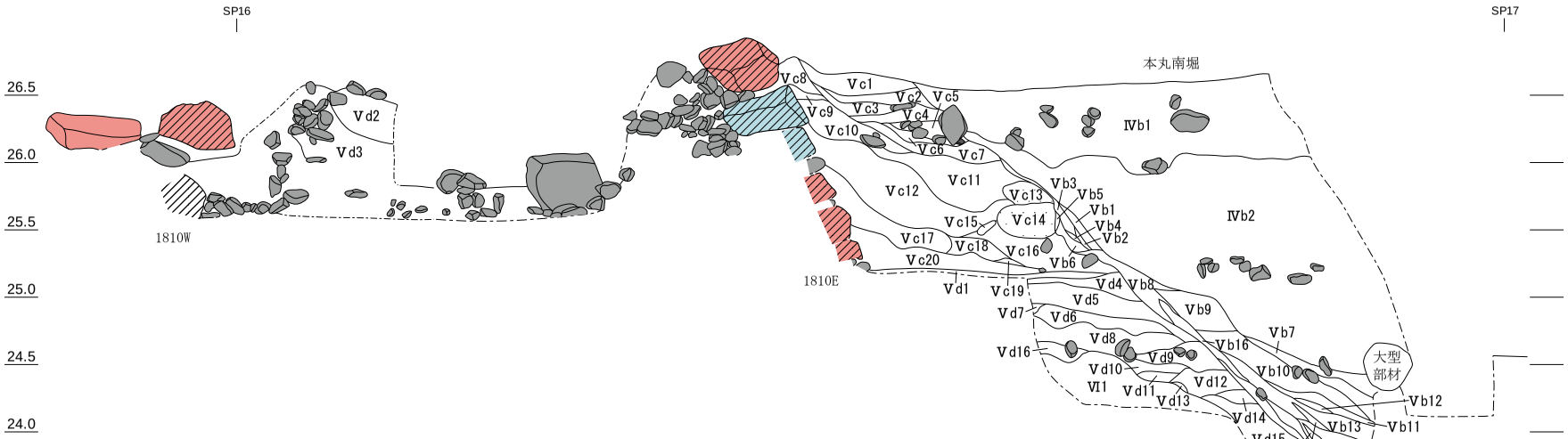
Ⅴd層　近世初期：本丸南堀第１段階の造成土（土橋構築に伴う造成土）
Ⅴd1　明橙黄灰色土　小礫・小石・河原石含む【土橋石垣の裏込層】
Ⅴd2　橙灰褐色土【土橋石垣の裏込層】
Ⅴd3　褐橙色土　小礫・小石・粗砂含む
Ⅴd4　黄灰色土　小礫・小石含む　黄色・灰色粘土ブロック多く入る
Ⅴd5　橙褐色土　小礫・小石・粗砂含む　Ⅴd3に似ている土
Ⅴd6　明橙褐色土　小礫・小石・シルト含む【根石の下に盛られた整地土】
Ⅴd7　褐灰橙色土　小礫・小石・シルト含む【根石の下に盛られた整地土】
Ⅴd8　暗褐橙色土　河原石（径20㎝以内）が集中する　小礫含む

Ⅵ層　本丸南堀構築以前の土層
Ⅵ1　黒褐色シルト　小礫・小石含む
Ⅵ2　暗褐色シルト　小礫・小石含む
Ⅵ3　明橙色シルト　小礫含む

0　(S=1/40)　1m



第89図　土橋調査区　土層断面図　SP15-16（S=1/40）



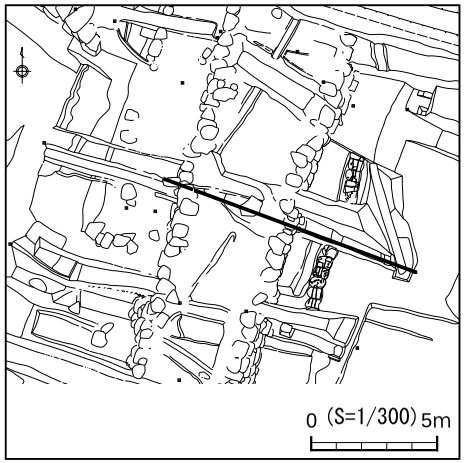
Ⅳb 層　近世初期：本丸南堀埋立土
Ⅳb1　淡褐灰橙色土　河原石（径 30 cm以内）・小礫・小石・粗砂多く含む
Ⅳb2　淡暗褐色土　小礫・小石・河原石（径 20 cm以内）・粗砂含む

Ⅴb 層　近世初期：本丸南堀第２段階の自然堆積層
Ⅴb1　やや暗い灰褐色粘質土　シルト・小礫・小石含む
Ⅴb2　やや暗い灰褐黄色粘質土　シルト・小礫・黄色粘土ブロック（径約３cm）・粗砂含む
Ⅴb3　やや暗い灰褐橙色粘質土　シルト・小礫・粗砂含む
Ⅴb4　やや暗い灰褐橙色粘質土　シルト・小礫・粗砂含む
Ⅴb5　淡灰褐色土　粗砂・小礫含む
Ⅴb6　灰黄褐色土　小礫・小石・粗砂含む
Ⅴb7　青褐橙色土　小礫　小石　粗砂
Ⅴb8　暗灰褐色粘質土　シルト含む
Ⅴb9　暗橙褐色土　小礫・粗砂・小石・河原石（径約 10 cm）含む
Ⅴb10　やや暗い青褐橙色土　小礫・小石・粗砂含む
Ⅴb11　やや暗い青褐色土　小礫・小石・粗砂含む
Ⅴb12　やや暗い青灰褐色土　小礫・小石・粗砂含む
Ⅴb13　灰青褐色土　小礫・小石・粗砂含む
Ⅴb14　灰褐青色土　小礫・小石・粗砂含む
Ⅴb15　やや暗い灰褐青色土　粗砂・小石・小礫含む
Ⅴb16　暗灰橙褐色土　粗砂・小石・小礫含む　暗青色粘土層状に入る
Ⅴb17　灰青褐色土　粗砂・小礫含む
Ⅴb18　灰褐青色土　小礫・粗砂含む
Ⅴb19　褐灰橙青色土　小礫・粗砂・小石含む

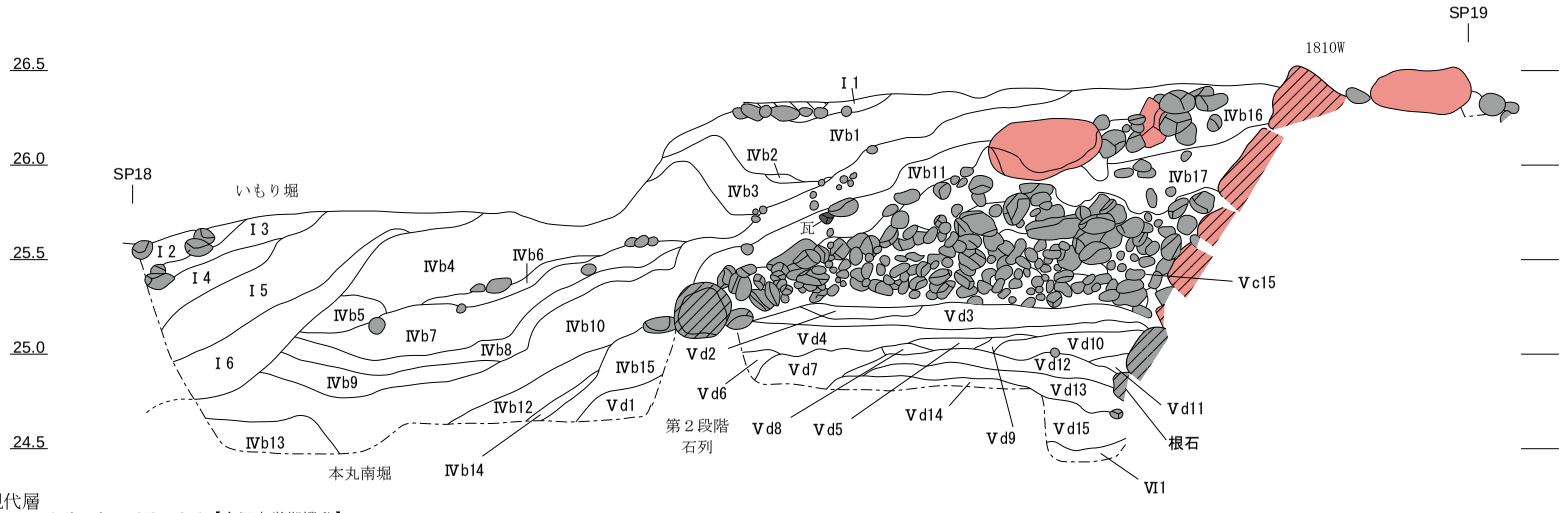
Ⅴc 層　近世初期：本丸南堀第２段階の造成土（土橋改修に伴う造成土）
Ⅴc1　明橙褐色土　小礫・粗砂含む
Ⅴc2　明橙黄褐色土　小礫・粗砂含む
Ⅴc3　明黄褐色土　小礫・小石・粗砂含む
Ⅴc4　明黄橙色土　小礫・粗砂含む
Ⅴc5　灰橙褐色土　小礫・河原石（径 15 cm以内）含む
Ⅴc6　褐橙色土　小礫・小石含む
Ⅴc7　褐灰橙色土　小礫・粗砂含む
Ⅴc8　淡灰褐色土　小礫・粗砂含む
Ⅴc9　褐黄灰色土　小礫・粗砂・黄色粘土ブロック含む
Ⅴc10　褐灰橙色土　小礫・粗砂・小石含む
Ⅴc11　暗褐灰橙色土　小礫・粗砂・小石含む
Ⅴc12　暗褐灰色土　小礫・河原石（径 10 cm以内）多く含む
Ⅴc13　褐灰黄色土　小礫・小石・黄色粘土ブロック（径約３cm）・粗砂含む【土俵（上段）内の土】
Ⅴc14　灰褐黄色土　小礫・小石・粗砂・黄色粘土ブロック（径約３cm）含む【土俵（下段）内の土】
Ⅴc15　灰褐色土　粗砂・小礫・小石含む
Ⅴc16　暗褐色土　粗砂・小礫含む
Ⅴc17　暗灰褐橙色土　粗砂・小礫・小石含む　灰色粘土薄く層状に入る
Ⅴc18　暗褐橙灰色土　小礫・粗砂・小石含む
Ⅴc19　暗褐灰色土　小礫・粗砂・小石含む
Ⅴc20　灰橙色粘質土　シルト・小礫含む

Ⅴd 層　近世初期：本丸南堀第１段階の造成土（土橋構築に伴う造成土）
Ⅴd1　灰橙色砂　暗青色粘土ブロック（径約１cm）含む
Ⅴd2　明橙黄灰色土　小礫・小石・河原石含む【土橋石垣の裏込層】
Ⅴd3　橙灰褐色土【土橋石垣の裏込層】
Ⅴd4　暗灰橙色土　小礫・粗砂含む
Ⅴd5　暗灰橙白色土　小礫・粗砂含む
Ⅴd6　暗橙灰褐色粘質土　シルト含む
Ⅴd7　灰橙白色粘質土　シルト・小礫・小石含む
Ⅴd8　暗灰橙青色粘質土　シルト・小礫・小石含む
Ⅴd9　暗褐灰白色粘質土　シルト・小礫含む
Ⅴd10　やや暗い褐灰白色粘質土　シルト・小礫含む
Ⅴd11　やや暗い灰白褐色粘質土　シルト含む
Ⅴd12　暗灰橙褐色土　粗砂・小礫含む
Ⅴd13　橙褐灰色シルト　粗砂含む
Ⅴd14　やや暗い灰橙褐色土　粗砂・小礫含む
Ⅴd15　青橙褐色粘質土　シルト・粗砂・小礫含む
Ⅴd16　橙褐灰色粘質土　シルト含む

Ⅵ層　本丸南堀構築以前の土層
Ⅵ1　橙黄褐色粘質土　シルト・雲母含む【地山】



第 90 図　土橋調査区　土層断面図　SP16-17（S=1/50）



Ⅰ層　近現代層
Ⅰ1　褐色土　コンクリート・バラス入る【金沢大学期攪乱】
Ⅰ2　橙褐灰色土　小礫・小石・炭化物・河原石含む【明治 40 年いもり堀埋立土】
Ⅰ3　灰褐橙色土　小礫・小石・炭化物含む【明治 40 年いもり堀埋立土】
Ⅰ4　暗褐灰橙色土　小礫・小石・炭化物含む　橙色土ブロック点々と入る【明治 40 年いもり堀埋立土】
Ⅰ5　黄灰褐色土　小礫・小石含む　黄色粘土ブロック点々と入る【明治 40 年いもり堀埋立土】
Ⅰ6　橙灰褐色土　小礫・小石・橙色粘土ブロック含む【明治 40 年いもり堀埋立土】

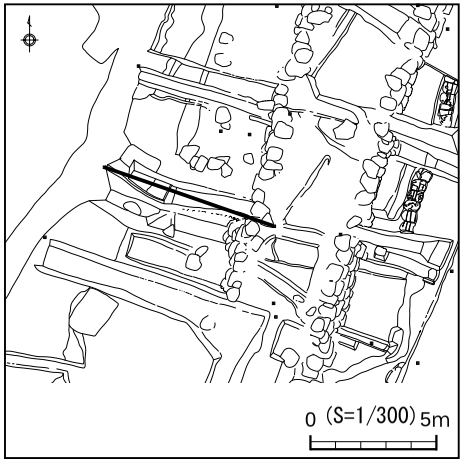
Ⅳb 層　近世初期：本丸南堀埋立土
Ⅳb1　灰黄褐色土　小礫・小石・粗砂含む　黄色粘土ブロック点々と入る
Ⅳb2　淡橙褐色土　小礫・小石・粗砂含む
Ⅳb3　黄灰色土　礫層　小礫・小石・粗砂含む
Ⅳb4　灰褐黄色土　小礫・小石・粗砂含む　黄色粘土ブロック点々と入る
Ⅳb5　橙黄灰色シルト　小石含む　やや粘質系か
Ⅳb6　灰褐橙色土　Ⅳb1 やⅣb4 に近い土　粗砂・小礫含む
Ⅳb7　橙褐色土　礫層　径８cm以内の礫で構成　粗砂含む
Ⅳb8　暗灰白色砂質土　小礫・粗砂含む
Ⅳb9　橙灰褐色土　礫層　小石で構成　粗砂含む
Ⅳb10　黄褐色土　礫層　Ⅳb7 に似ている　径 10 cm以内の礫で構成　粗砂含む　燻平瓦片入る
Ⅳb11　暗灰褐黄色土　Ⅳb1・Ⅳb4・Ⅳb6 に似ている　小礫・粗砂含む　黄色粘土ブロック点々と入る
Ⅳb12　暗橙褐色土　礫層　径７cm以内の礫で構成　粗砂含む　黄色粘土ブロックが所々に入る
Ⅳb13　暗灰褐色土　粗砂・小礫含む
Ⅳb14　橙灰褐色シルト　小礫含む
Ⅳb15　暗灰褐橙色シルト　小礫含む
Ⅳb16　褐橙色土　小礫・粗砂・河原石（径約 20 cm）含む　横約 65 cm × 縦約 25 cmの赤戸室石（石垣石か）が入る
【土橋第２段階の盛土であり、本丸南堀を埋める際に攪乱にあったものか】
Ⅳb17　淡褐橙色土　河原石（径約 10 cm）・小礫・粗砂含む
【土橋第２段階の盛土であり、本丸南堀を埋める際に攪乱にあったものか】

Ⅴc 層　近世初期：本丸南堀第２段階の造成土（土橋改修に伴う造成土）
Ⅴc15　栗石層＋暗褐色土　下半部は径 10 ～ 15 cm位の石が隙間なく敷き詰められ、隙間には暗褐色土（粘質系）が詰まっている。上半部は径 10 ～ 30 cm位の河原石が敷き詰められており、下半部より隙間が多い。隙間は空洞または暗褐色土が詰まっている。【石列の裏込め】

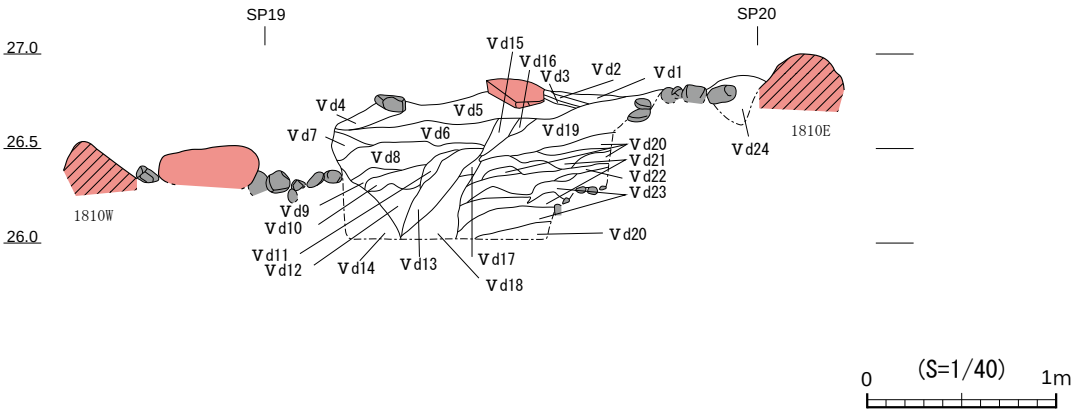
Ⅴd 層　近世初期：本丸南堀第１段階の造成土（土橋構築に伴う造成土）
Ⅴd1　橙灰色シルト　粘質系
Ⅴd2　褐灰白色シルト　小礫含む
Ⅴd3　暗褐灰白色シルト　小礫・小石含む
Ⅴd4　灰白色シルト　小礫・小石含む
Ⅴd5　やや暗い灰白色シルト　小石・小礫含む
Ⅴd6　灰橙白色シルト　小礫・小石・橙色粘土ブロック（径約 10 cm）含む
Ⅴd7　褐灰色シルト　小礫含む
Ⅴd8　暗灰褐色シルト　小礫含む
Ⅴd9　暗褐黄色土　小礫含む
Ⅴd10　褐橙灰色シルト　小礫含む
Ⅴd11　褐灰橙色シルト　小礫含む
Ⅴd12　やや暗い灰橙褐色シルト　小礫含む
Ⅴd13　暗灰青色シルト　小礫含む【根石の下に盛られた整地土】
Ⅴd14　青灰色シルト　小礫含む【根石の下に盛られた整地土】
Ⅴd15　灰青褐色粘質土　小礫・小石・河原石（径８cm以内）含む
青色粘土ブロック（径 10 cm以内）少し入る
【根石の下に盛られた整地土】

Ⅵ層　本丸南堀構築以前の土層
Ⅵ1　暗青色粘土【地山】

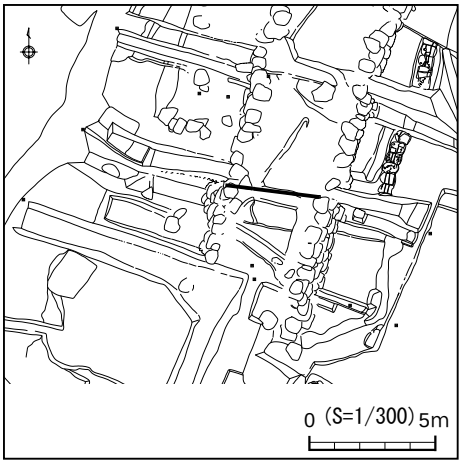
0　(S=1/40)　1m



第 91 図　土橋調査区　土層断面図　SP18-19（S=1/40）



Ｖｄ層　近世初期：本丸南堀第１段階の造成土（土橋石垣の裏込層）
Ｖd1　明黄灰褐色シルト
Ｖd2　淡黒褐色土　小礫含む
Ｖd3　褐灰色土　小礫含む
Ｖd4　やや暗い灰褐色土　小礫・小石含む
Ｖd5　やや明るい灰褐色土　小礫・小石含む
※Ｖd1 ～ 5：石垣石を据えるための１裏込土単位
Ｖd6　灰褐色土　小礫・小石含む
Ｖd7　灰橙褐色土　小礫含む
Ｖd8　灰褐橙色土　小礫含む
Ｖd9　灰橙褐色土　小礫含む
Ｖd10　灰黄褐色土　小礫・小石含む
Ｖd11　暗黄灰褐色土　小礫含む
Ｖd12　やや暗い橙灰褐色土　小礫・小石・橙色粘土含む
Ｖd13　黄灰褐色土　小礫含む
Ｖd14　灰褐橙色土　小礫・小石・シルト含む　やや粘性あり
Ｖd15　やや暗い褐灰色土　小礫含む
Ｖd16　淡灰褐色シルト
Ｖd17　暗褐灰橙色土　小礫含む
Ｖd18　灰褐橙色シルト　小礫・小石含む
Ｖd19　暗褐灰黄色土　小礫含む
Ｖd20　粗砂　シルト・小礫含む
Ｖd21　小礫
Ｖd22　シルト　粗砂・粘質土含む
Ｖd23　粘質シルト　小礫含む
Ｖd24　明橙褐色砂質土　小礫・砂含む
※Ｖd6 ～ 24：石垣石を据えるための１裏込土単位



第 92 図　土橋調査区　土層断面図　SP19-20（S=1/40）

る稲荷屋敷調査区の石垣 1941S の特徴などから、元和年間（1615 ～ 1624）頃と考えられる。また、土橋周辺では、廃絶直前の堆積層（Ｖｂ層）および堀埋立土（Ⅳｂ層）から、建築部材とみられる木製品や金箔瓦･鯱瓦を含む瓦が多数出土しており、この付近に何らかの建物が存在したと考えられる。

④いもり堀（第 76 ～ 78・88・89・91・94・95 ①・98 ②図）

調査区南端部から北西部にかけて、北西－南東方向のいもり堀が北東に屈曲し、稲荷屋敷下調査区で検出された石垣（1941S）に接する箇所の土羽面を検出している。

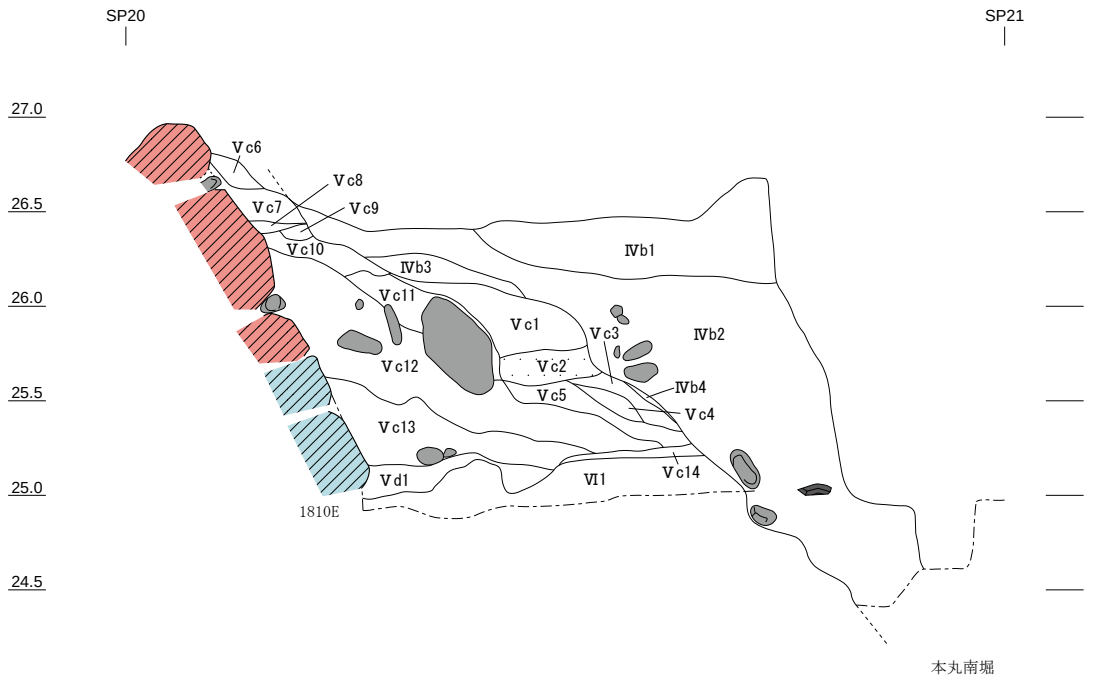
（３）小結

調査により、以下の所見を得た。

・検出した本丸南堀とそれに伴う土橋について、構築当初→改修→廃絶の３段階の変遷が見られた。

・構築当初の本丸南堀は空堀で、堀に伴う土橋は、堀に面する両側面が石垣となっていた（東面：1810E・西面：1810W）。石垣の積みの特徴などから、金沢城石垣編年１期（文禄年間（1592 ～ 1596）頃）の構築と考えられる。（第１段階）

・当初空堀であった本丸南堀は、改修時に、土橋東側では石垣の前面に盛土され、土羽面となった。その際、堀底が第１段階の堀底からさらに約 2.3 m掘削されて深さを増すとともに、水成堆積層が確認されたことから、少なくとも土橋東側では湛水していたことが明らかとなった。また、改修後の土橋東側の土羽面の一部では、当時の水際付近に、護岸目的とみられる土俵列が検出されている。（第２段階）

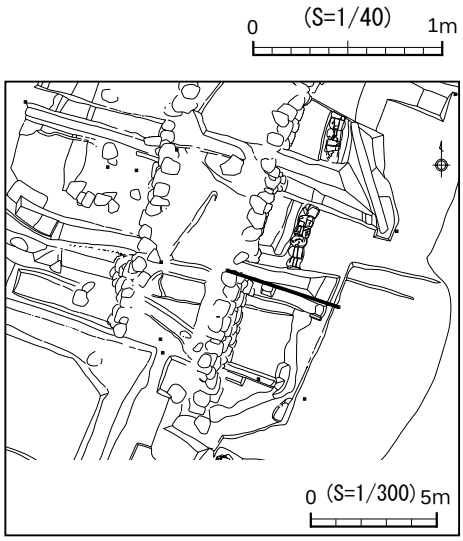


Ⅳb 層　近世初期：本丸南堀埋立土
Ⅳb1　淡灰褐色土　小礫・木片・河原石（径７～８㎝以内）含む
Ⅳb2　灰褐色土　小礫・河原石（径 20 ㎝以内）含む　木材・瓦（コビキＡ）等の遺物多く入る
Ⅳb3　灰黄褐色土　小礫・黄色粘土ブロック（径約５㎝）含む
Ⅳb4　灰黄色砂質土　粒子の細かい砂・小砂利含む

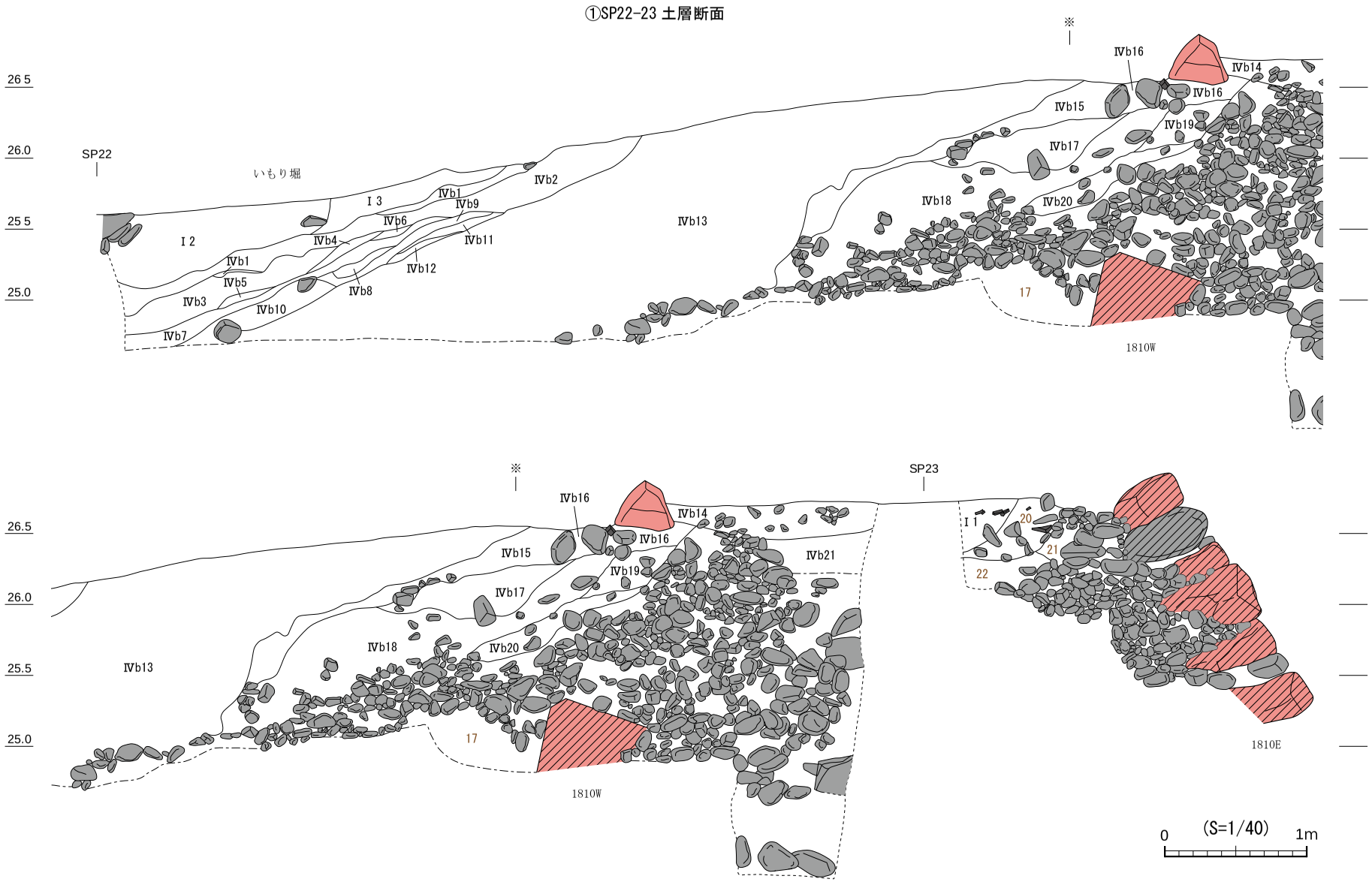
Ｖc 層　近世初期：本丸南堀第２段階の造成土（土橋改修に伴う造成土）
Ｖc1　褐灰色土　小礫・河原石（径約 10 ㎝）少量含む　やや暗い青色粘土ブロック（径５㎝以内）含む
Ｖc2　褐橙色土　小礫･小石･やや暗い青色粘土ブロック（径約５㎝）含む【土俵内の土。15（厚）×50（長）㎝。背後の石は土羽面の強度を保つためのものか】
Ｖc3　淡褐灰色土　小礫・小石含む
Ｖc4　淡褐黒色土　小礫含む　やや暗い青色粘土ブロック層状に含む
Ｖc5　やや暗い青褐色粘質土　小礫含む【地山質の盛土】
Ｖc6　やや明るい灰褐色土
Ｖc7　明灰黄色粘質土　小礫少量含む
Ｖc8　明黄灰色粘質土
Ｖc9　灰橙褐色土　小礫少し含む
Ｖc10　明橙灰褐色土　黄橙色粘土を層状に含む　小礫含む
Ｖc11　黄青褐色土　黄青色粘土ブロック含む
Ｖc12　褐橙黒色土　小礫・河原石（径 10 ㎝以内と約 25 ㎝）・黄色及び青色粘土ブロック（径約５㎝）含む
Ｖc13　暗褐橙黒色土　小礫・河原石（径５㎝以内）含む　やや暗い青色粘土ブロックが層状及びブロック状（径約 10 ㎝）に入る
Ｖc14　灰褐黄色土　砂多く含む　小礫含む

Ｖd 層　近世初期：本丸南堀第１段階の造成土（土橋構築に伴う造成土）
Ｖd1　灰青褐色土　小石含む【石垣根石掘方に入れた根固めの盛土。第２段階の盛土により沈下か】

Ⅵ層　本丸南堀構築以前の土層
Ⅵ1　やや暗い青色粘質土　やや暗い青色土ブロック含む【地山】



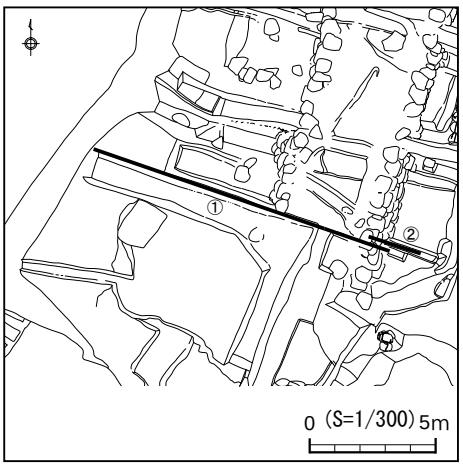
第 93 図　土橋調査区　土層断面図　SP20-21（S=1/40）



第 94 図　土橋調査区　土層断面図　SP22-23（S=1/40）

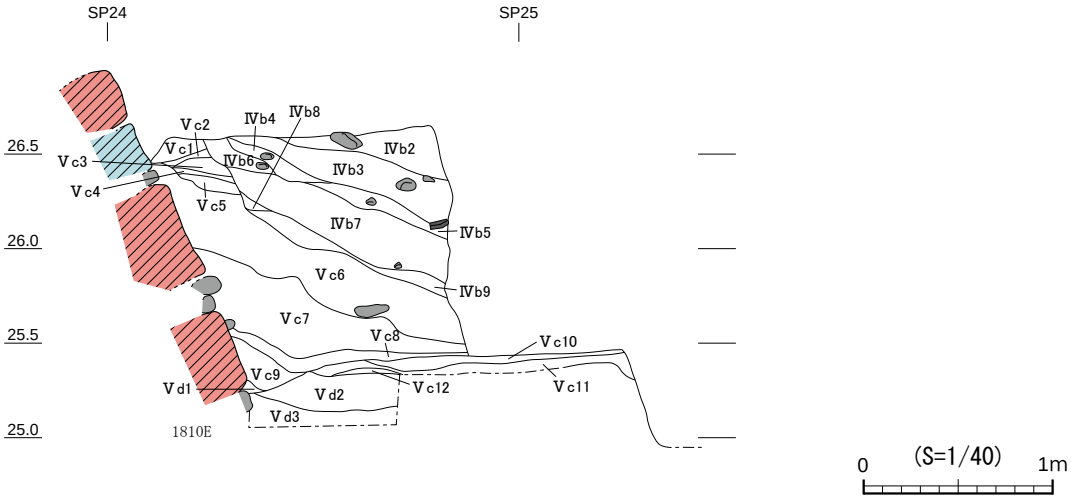
①SP22-23 土層注記

Ⅰ層　近現代層
Ⅰ1　暗褐色土　小礫・小石含む　漆喰のような小片多数入る【撹乱】
Ⅰ2　暗橙褐色土　小礫・小石・河原石（径 10 ㎝以内）含む　しまり悪い【明治 40 年いもり堀埋立土】
Ⅰ3　橙灰褐色土　小礫・小石含む【明治 40 年いもり堀埋立土】



Ⅳb 層　近世初期：本丸南堀埋立土
Ⅳb1　灰橙褐色粘質土　小礫・小石含む　褐色粘質土が層状に入る
Ⅳb2　灰褐色粘質土　小礫・小石含む
Ⅳb3　褐灰橙色粘質土　小礫・小石含む
Ⅳb4　やや暗い灰橙褐色土　小礫含む
Ⅳb5　灰黄色粘質土　小礫含む
Ⅳb6　灰橙褐色粘質土　小礫含む
Ⅳb7　灰褐橙黄色土　小礫・小石・炭化物含む
Ⅳb8　暗褐橙色粘質土
Ⅳb9　暗灰褐色粘質土　小礫・小石含む
Ⅳb10　橙黄褐色砂質土　小礫・小石・河原石（径 25 ㎝以内）含む
Ⅳb11　淡灰橙色土　小礫含む
Ⅳb12　暗褐色土　小礫含む
Ⅳb13　灰黄褐色土　小礫・小石・粗砂含む
Ⅳb14　暗橙褐色土　河原石・小礫・小石含む
Ⅳb15　明橙黄灰色砂質土　小礫・小石・粗砂含む
Ⅳb16　褐灰色土　砂気あり　Ⅳb15 に比べてしまりなし　小礫含む
Ⅳb17　濁灰褐色土　小礫含む
Ⅳb18　やや暗い灰褐色粘質土　小礫・小石含む
Ⅳb19　褐灰色土　砂気あり　Ⅳb15 に比べてしまりなし
Ⅳb20　灰褐色粘質土　Ⅳb19 に似る　灰色粘土ブロック少量含む
Ⅳb21　暗灰褐橙色粘質土　小礫・小石含む
※Ⅳb14 ～ 21 層は本丸南堀埋立時に撹乱にあった土橋盛土か

②SP24-25 土層断面

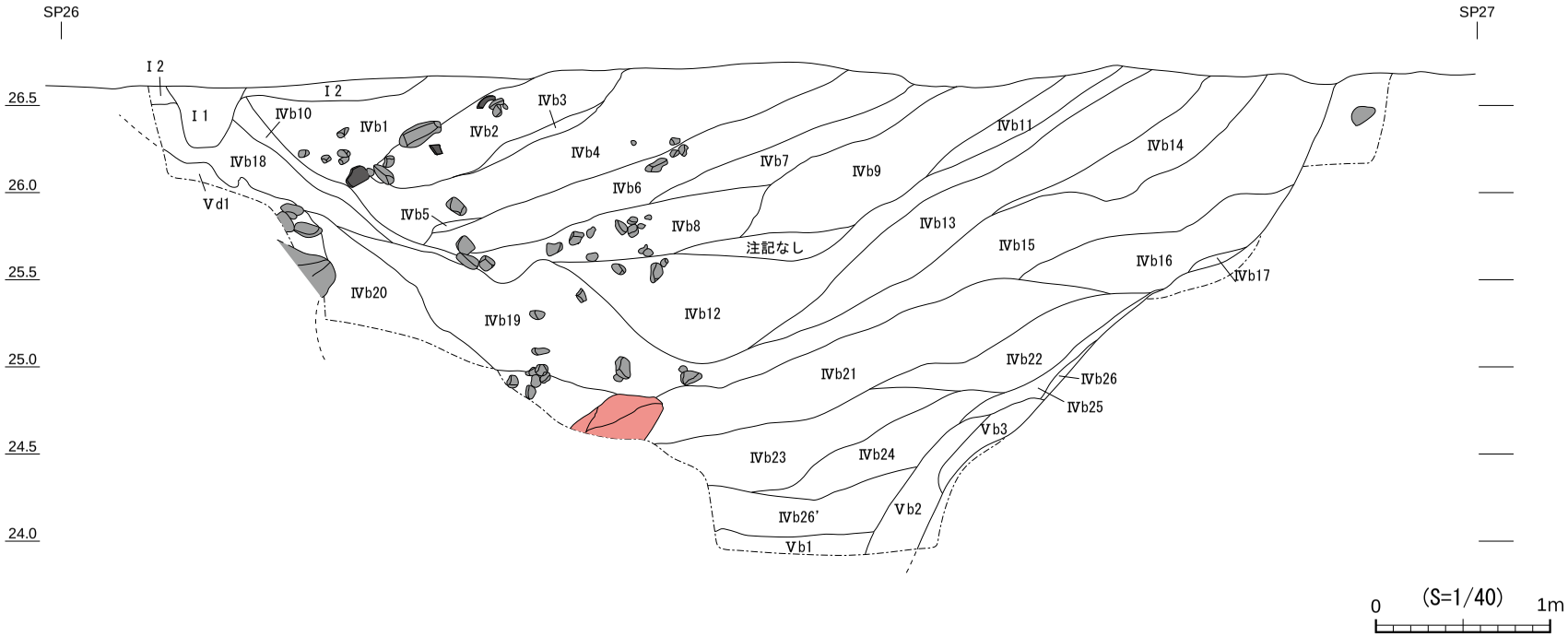


Ⅳb 層　近世初期：本丸南堀埋立土
Ⅳb2　淡灰白褐色土　小礫・河原石（径 10 ～ 15 ㎝）・黄色粘土ブロック（径 5 ㎝）含む
Ⅳb3　灰白褐色土　小礫・小石（径 5 ㎝以内）含む　河原石（径 10 ㎝以内）・黄色砂質土ブロック部分的に含む
Ⅳb4　淡灰橙褐色土　小礫・石（径 7 ㎝以内）含む　暗褐色土粒点々と入る
Ⅳb5　灰橙褐色土　砂少し入る　河原石（径 10 ㎝以内）・燻平瓦片含む
Ⅳb6　明灰白褐色土　小礫・石（径 7 ㎝以内）含む
Ⅳb7　やや暗い灰褐色土　河原石（径 10 ㎝以内）・砂少し入る　下部で褐黄色粘土層状に入る
Ⅳb8　淡褐灰色土　砂少し含む
Ⅳb9　淡褐色砂質土　小礫・小石含む　砂の堆積土

Ⅴc 層　近世初期：本丸南堀第２段階の造成土（土橋改修に伴う造成土）
Ⅴc1　明灰白色粘質土　シルト含む
Ⅴc2　暗褐色粘質土　小礫含む
Ⅴc3　褐灰橙色土　小礫・小石含む
Ⅴc4　橙白褐色土
Ⅴc5　褐橙色土
Ⅴc6　褐灰青色粘質土　シルト・やや暗い青色粘土ブロック（径 10 ㎝以内）含む　ブロックは下部ほど多量で径も大きくなる　下部に全体的に砂入る
　　下部に暗褐色粘土層状に入る
Ⅴc7　やや暗い青色粘質土　シルト含む　暗褐色粘土ブロック（径 7 ㎝以内）部分的に入る　砂やや多く含む
Ⅴc8　暗灰褐色粘質土　シルト・小礫含む
Ⅴc9　暗褐灰色粘質土　シルト・小礫含む
Ⅴc10　淡黄褐色砂質土　シルト・小礫含む
Ⅴc11　黄褐色土　小礫・小石含む
Ⅴc12　黄褐白色土　砂・小礫含む

Ⅴd 層　近世初期：本丸南堀第１段階の造成土（土橋の構築に伴う造成土）
Ⅴd1　明橙色粘質土　シルト含む
Ⅴd2　黄灰青色粘質土　シルト・小礫含む
Ⅴd3　灰橙褐色粘質土　粗砂・小礫含む

第 95 図　土橋調査区　土層注記　SP22-23、土層断面図　SP24-25（S=1/40）

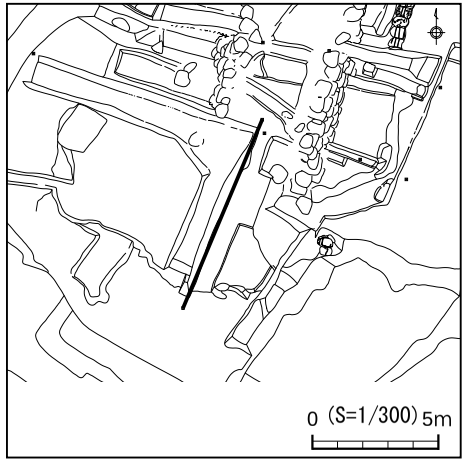


Ⅰ層　近現代層
Ⅰ1　暗褐色土　小礫・小石含む【撹乱】
Ⅰ2　暗褐橙色土　小礫・小石含む　土管片入る【旧陸軍期の撹乱か】

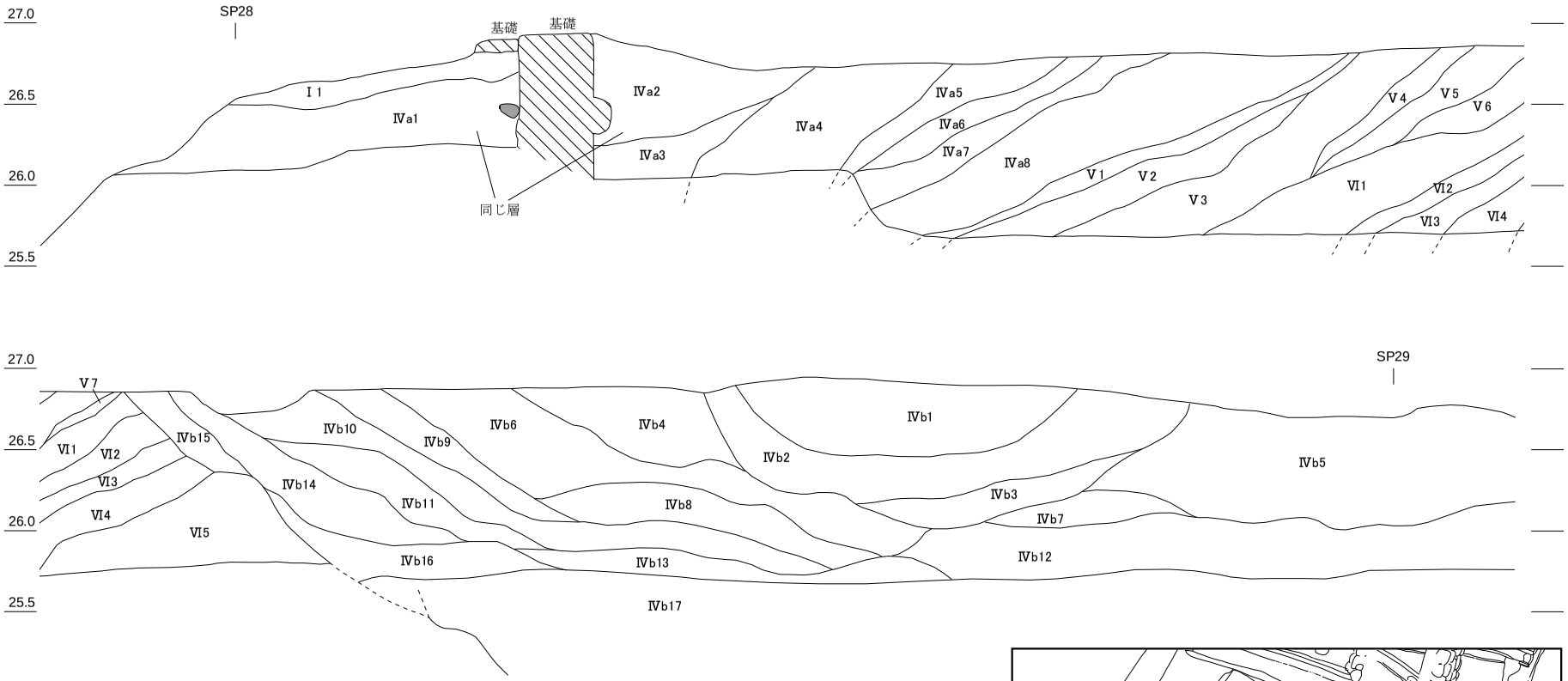
Ⅳb 層　近世初期：本丸南堀埋立土
Ⅳb1　灰褐橙色土　小礫・小石含む　燻平瓦片入る
Ⅳb2　灰橙褐色土　Ⅳb1 と同類土　河原石（径 25 cm以内）含む　丸瓦片入る
Ⅳb3　褐橙色土　小礫・小石含む
Ⅳb4　橙灰褐色土　小礫・小石・河原石（径 10 cm以内）・黄灰色粘土ブロック（径 5 cm以内）含む
Ⅳb5　やや暗い橙灰褐色土　小礫・小石含む
Ⅳb6　灰褐黄色土　小礫・小石・河原石（径 10 cm以内）含む
Ⅳb7　暗褐橙灰色土　小礫・小石含む
Ⅳb8　やや淡い灰褐色土　小礫・小石含む　河原石（径 15 cm以内）層状に含む
Ⅳb9　淡灰橙褐色土　小礫・小石含む
Ⅳb10　橙灰褐色砂質土　小石・小礫多く入る　粗砂含む
Ⅳb11　黄褐灰色土　小礫・小石含む
Ⅳb12　やや暗い灰褐白色土　小礫・粗砂・小石含む
Ⅳb13　黄灰褐色土　小礫・小石含む
Ⅳb14　黄橙褐色土　小礫・小石含む
Ⅳb15　橙黄灰褐色土　小礫・小石含む
Ⅳb16　橙褐色土
Ⅳb17　暗褐色土
Ⅳb18　暗灰褐色粘質土　砂気あり　小石・灰色粘土ブロック含む
Ⅳb19　灰褐青色粘質土　小礫・小石・河原石（径 15 cm以内）が点々と入る
Ⅳb20　暗青灰色粘質土　Ⅳb16 より少し明るい色調　灰色ブロック含む
Ⅳb21　灰褐青橙色粘質土　小礫・小石・径約 5 cmの石点々と入る　青色粘土ブロック点々と多く入る
Ⅳb22　暗青灰色粘質土　小礫　Ⅳb18 よりしまりなし
Ⅳb23　やや暗い灰褐青色粘質土　小礫・粗砂・小石・青色粘土ブロック点々と入る
Ⅳb24　暗青灰色粘質土　Ⅳb19 より暗い　小石多く粘性強い
Ⅳb25　灰橙青色土　小礫・粗砂含む
Ⅳb26　暗青灰色粘土　小石含む
Ⅳb26'　やや暗い灰褐青色粘質土　小礫・粗砂・小石多く含む

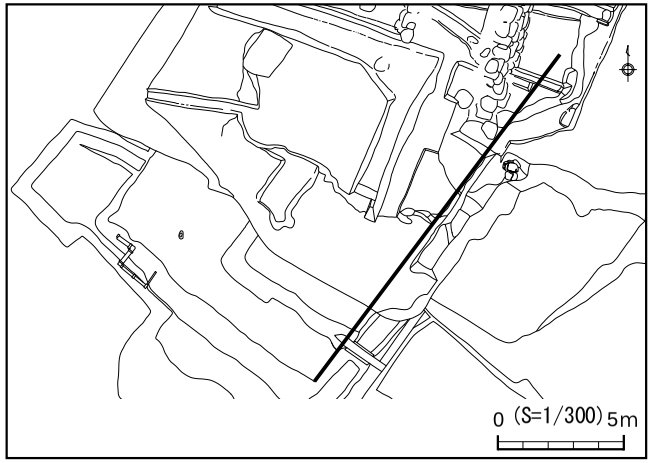
Ⅴb 層　近世初期：土橋第 2 段階の自然堆積層
Ⅴb1　灰褐青色粘質土　小礫・粗砂・小石多く含む
Ⅴb2　灰褐青色粘土　小礫・小石・粗砂含む
Ⅴb3　濁茶褐色土

Ⅴd 層　近世初期：本丸南堀第 1 段階の造成土（土橋構築に伴う造成土）
Ⅴd1　褐色土　黄灰色粘土ブロック含む【栗石の埋土】



第 96 図　土橋調査区　土層断面図　SP26-27（S=1/40）





第97図　土橋調査区　土層断面図　SP28-29（S=1/40）

①SP28-29 土層注記

Ⅰ層　近現代層
Ⅰ1　撹乱土（基礎の栗石）

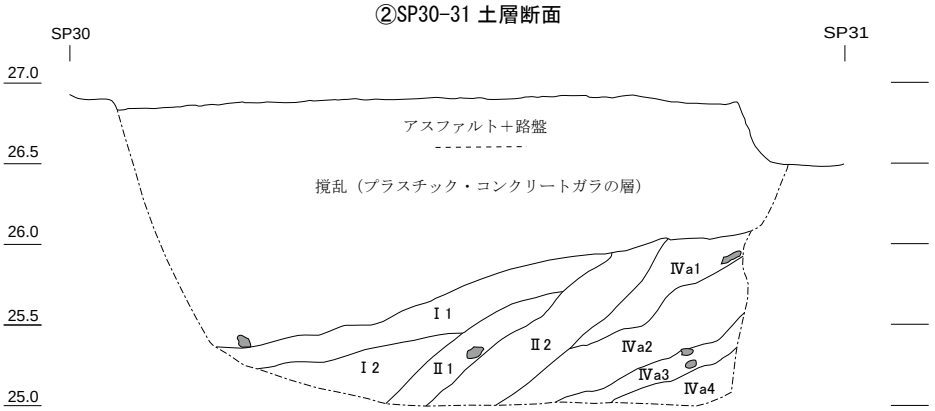
Ⅳa 層　近世初期：いもり堀構築に伴う造成土
Ⅳa1　黄褐色砂質土　粘性強い
Ⅳa2　黄褐色砂質土と灰色砂質土の混合土　黄色粘土粒含む　粘性強い
Ⅳa3　灰色砂質土　鉄分含む　粘性強い
Ⅳa4　黄灰色砂質土　鉄分含む・黄色粘土粒を含む　粘性強い
Ⅳa5　黄褐色砂質土と灰色砂質土の混合土　黄色粘土粒含む　粘性強い
Ⅳa6　黄灰色砂質土　鉄分含む・黄色粘土粒を含む　粘性強い
Ⅳa7　灰色砂質土　黄色粘土をブロック状に含む
Ⅳa8　灰褐色砂質土　黄色粘土粒・鉄分含む

Ⅳb 層　近世初期：本丸南堀埋立土
Ⅳb1　灰褐色砂質土　黄色粘土粒含む
Ⅳb2　Ⅳb4 層＋礫多
Ⅳb3　礫混砂利の層
Ⅳb4　灰褐色砂質土　鉄分多く含む
Ⅳb5　暗灰色シルト　小砂利　粘質土ブロック（径0.5cm）混
Ⅳb6　灰褐色砂質土　黄色粘土粒含む　Ⅳb9 層より鉄分多い
Ⅳb7　暗灰色砂質シルト
Ⅳb8　灰褐色砂質土　鉄分多く含む
Ⅳb9　灰褐色砂質土　黄色粘土粒・鉄分含む
Ⅳb10 黄灰色砂質土　鉄分含む・黄色粘土粒を含む　粘性強い
Ⅳb11 灰褐色砂質土　黄色粘土粒含む
Ⅳb12 暗灰色粘質シルト　径15cm大の礫も混
Ⅳb13 暗灰色シルト　小礫多く含む
Ⅳb14 灰褐色砂質土　鉄分多く含む　黄灰色粘土含む
Ⅳb15 灰褐色砂質土　黄色粘土粒含む
Ⅳb16 灰色シルト　黄色粘土粒・鉄分多く含む
Ⅳb17 暗灰色粘質土

Ⅴ層　近世初期：本丸南堀基盤層（盛土）
Ⅴ1　黄褐色粘土小礫層と黒色粘土小礫層との混合土　鉄分多く含む
Ⅴ2 黄灰色砂質土
Ⅴ3 黄灰色粘土小礫層
Ⅴ4 黄色粘質土　黒色粘質土を少量含む　Ⅴ3 層との間に鉄分沈着
Ⅴ5 灰色砂質土　小礫多く含む
Ⅴ6 黄褐色粘土小礫層と黒色粘土小礫層との混合土　鉄分多く含む
Ⅴ7 黒色粘質土　小礫含む

Ⅵ層　本丸南堀構築以前の土層：地山
Ⅵ1　Ⅴ3 層よりやや暗く、黒色粘土粒を含む
Ⅵ2　灰色砂質土　小礫含む
Ⅵ3　Ⅴ3 層よりやや暗く、黒色粘土粒を含む
Ⅵ4　灰色粘土小礫層と黒色粘土小礫層との混合土
Ⅵ5　Ⅴ3 層よりやや暗く、黒色粘土粒を含む

②SP30-31 土層断面

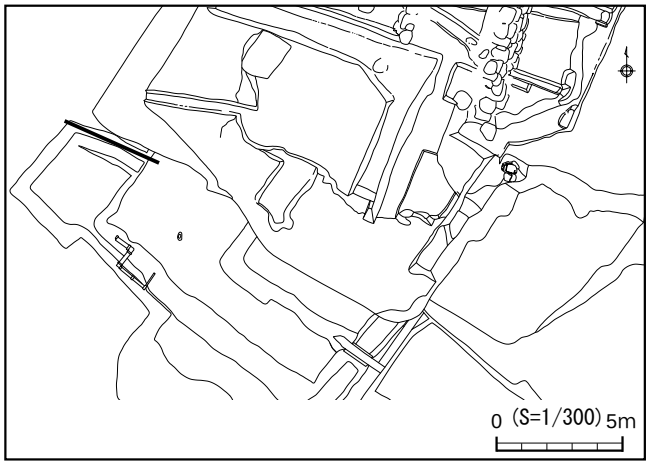


Ⅰ層　近現代層
Ⅰ1　暗灰褐色シルト　小礫（径３～４cm）・粘質土がブロック状に混
　【明治 40 年いもり堀埋立土】
Ⅰ2　暗褐色シルト　礫混　砂質【明治 40 年いもり堀埋立土】

Ⅱ層　近世後期
Ⅱ1　暗黄褐色シルト　砂質　ほぼ均質【流土的な層か】
Ⅱ2　暗褐色シルト　しまりなし　小礫も混【表土か】

Ⅳa 層　近世初期：いもり堀構築に伴う造成土
Ⅳa1　黄褐色シルト　褐灰色粘質土ブロック（径１～５cm）・礫混
Ⅳa2　暗褐灰色シルト　礫も含む　黄褐色粘質土ブロック（径約 0.5 cm）混
Ⅳa3　黄褐色シルト　小礫含む　少量の黄褐色粘質土ブロック（径約 0.5 cm）混
Ⅳa4　黄褐色シルト　黄褐色粘質土ブロック（径約５cm）中心の層　礫も含む

0　(S=1/40)　1m



第 98 図　土橋調査区　土層注記　SP28-29、土層断面図　SP30-31（S=1/100）

・改修後の土橋西側では、石垣前面に石列が確認されており、土橋の改修（拡幅）に伴う構造物と考えらえる。なお、石列前面には堀の斜面が形成されていたが、調査では堀底および水成粘土堆積層は確認できず、土橋西側が東側と同様に湛水していたかは明らかではない。（第２段階）
・本丸南堀の廃絶およびいもり堀の開設は、元和年間（1615 ～ 1624）頃と考えられる。なお、元和６年に城内本丸で火災が生じており、本丸南堀の廃絶およびいもり堀の開削が、この火災を契機としている可能性も考えられる。土橋周辺から出土（Ⅳｂ層およびⅤｂ層）した金箔瓦が、文禄期前後～元和期に使用されたこととも矛盾しない。（第３段階）

稲荷屋敷下調査区

（１）概要（第 11・12・99 ～ 101 図）

調査区は薪ノ丸の南方の近代石垣 1810S3 の南側に位置し、平成 12 年度に調査が行われた（2000-1 地点）。調査区の位置を江戸時代前期の「加賀国金沢之図」（寛文８年（1668））（金沢市立玉川図書館蔵）に照合させると、いもり堀と稲荷屋敷の境界に相当し、境界を示す部分には石垣が描かれている。寛文期の堀の様相は、基本的に幕末まで引き継がれるが、江戸時代後期の絵図では石垣前面に土羽状の表現が見られる。近代以降は、明治 40 年（1907）にいもり堀が埋め立てられ、稲荷屋敷下石垣の上半部が取り壊された。そして、その北方に新たな石垣 1810S が設置されたと考えられる。旧陸軍の建物配置図では、事務所と梱包所の一角が確認できることから、検出した石垣 1941S は、近代の取り壊しを免れた下半部が、地中に埋まっていたものと考えられる。

石垣 1941S は、東西約 30 mにわたって検出された。調査地点東端は、石垣東端部に相当する。一方、石垣西端は、調査区外へ延びており、検出できなかった。また、石垣は、ほぼ直線状に延びているが、東部付近に近づくにつれ、やや南へ張り出していた。検出高は、約 1.5 m（最深部約 2.5 m）、発掘停止面で見ると標高約 25 m（最深部約 24 m）で、さらにその下方に続いており、根石の確認には至っていない。検出した築石の総個数は、約 120 個を数える。

（２）遺構

①石垣 1941S（第 100 ～ 103・104 ①・105 ①・106 ②・107 ①図、第５表）

東西約 30 m、高さ約 1.5 m（最深部約 2.5 m）分を検出し、南に面を向けていた。根石は検出されておらず、さらに下に続くと考えられる。築石には戸室石の粗加工石が使用されているが、面はノミ加工が少なく、自然面および割面部分を残すものが多い。また、築石は規格化されておらず、寸法・面の調整等は統一されていない。石垣の積みは乱積みで、部分的に落とし積みが窺える。なお、トレンチ２の土層断面の観察より、石垣改修掘方の埋土の可能性のある層（第 106 ②図Ⅳ a1 ～ 15 層）を確認したが、平面的な広がり等詳細を明らかにできていない。間詰には戸室石片や河原石を詰めており、大きさはおよそ拳サイズのものが大半を占めるが、長径約 20 ～ 30 ㎝のものも見られた。戸室石片は色別（赤・青）に群集する傾向が見られた。石垣の勾配は、約 80°を測る。築石の幾つかには、矢穴跡が見られた。矢穴の形状は、方形・長方形ないし若干逆台形気味のものが中心で、例外的に半円形・半長円形のものが加わる。刻印は、34 種類・70 個見られた（第５表）。小型のものが主体で、殆どが正面に刻まれており、種類毎にまとまる傾向が見られた。これらの特徴から、金沢城石垣編年３期（元和年間（1615 ～ 1624）頃）の構築と考えられる。

石垣内部の構造を把握するため、石垣に直行して入れた４本のトレンチ（トレンチ１～４）の土層断面を精査したところ、調査区西部では、石垣正面から約 2.5 m～３m後方地点で、地山が掘削された状況が確認できたが、東部では地山が確認されず、地山の代わりとして、固く締めた礫層が形成されていることが確認された。また、石垣の裏込めには河原石主体の栗石が充填されたが、戸室石も少量含まれていた。栗石は、築石に接する範囲では、径が大きめの河原石や戸室石片が使用されてい

るが、それ以外の範囲では、河原石が使用されていた。土層断面の観察から、作業単位の下層に径の比較的大きい栗石、中層に比較的小さい栗石、上層に中位の栗石が配されたと考えられ、築石約２～３段分（推定）の高さまで石垣を積み上げた段階で、裏込め全体に盛土し整地したとみられる。出土遺物は、裏込め整地層などから 17 世紀初頭頃の陶磁器が出土している。

②本丸南堀（第 101・105 ②・107 図）

前述した、地山の代わりとして固く締めた礫層が形成されている範囲は、いもり堀が形成される以前に存在した、本丸南堀を埋め立てた範囲と考えられる。調査では、本丸南堀の法面を一部分確認することができた（第105②図）。検出した法面は、土橋の北西に位置し、地山を掘削して形成されていた。堀の北岸に相当すると考えられ、対岸となる南岸は、土橋調査区で検出されている。

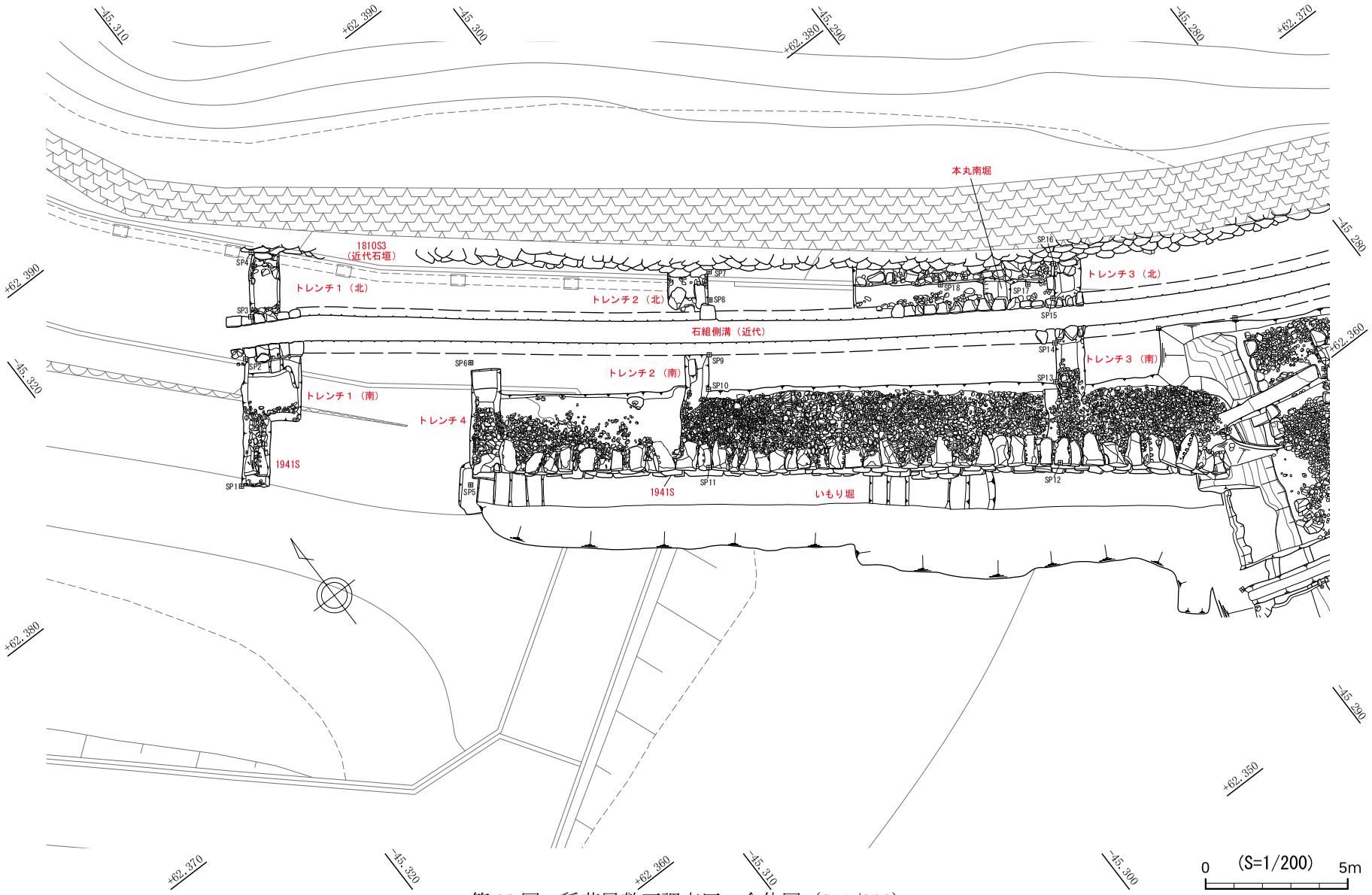
（３）小結

本調査区では、以下の所見を得た。

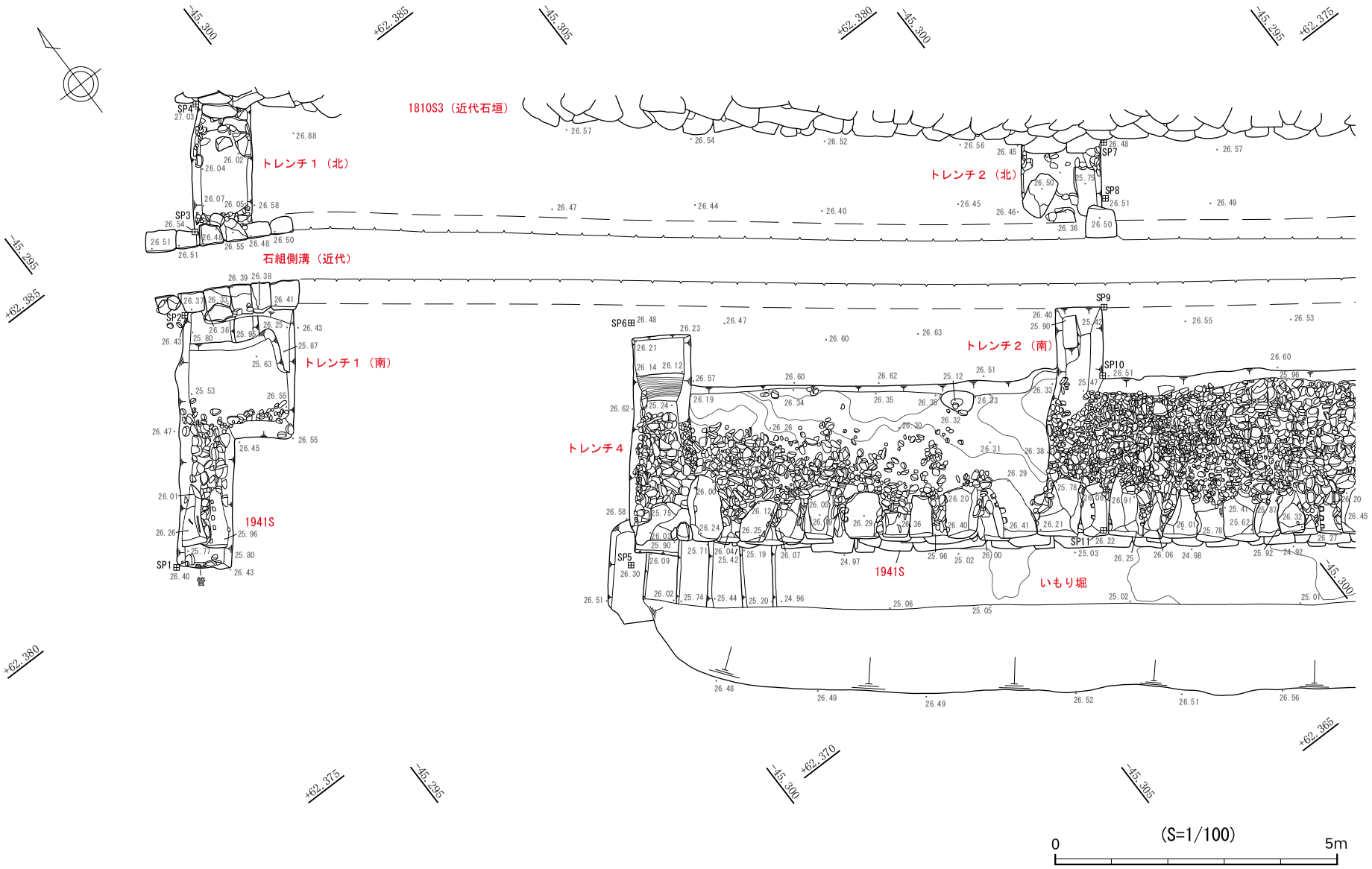
・江戸時代の絵図に描かれた、いもり堀と稲荷屋敷の境界の石垣が、発掘調査により東西約 30 mにわたって検出された（1941S）。

・石垣 1941S は、粗加工石積で、石垣の積み（乱積みで部分的に落とし積みも見られる）や石垣石の加工状態がやや未発達で、刻印が小型であることなどの特徴から、金沢城石垣編年３期（元和年間（1615 ～ 1624）頃）の構築と考えられる。いもり堀の造営時期を示す遺構である。

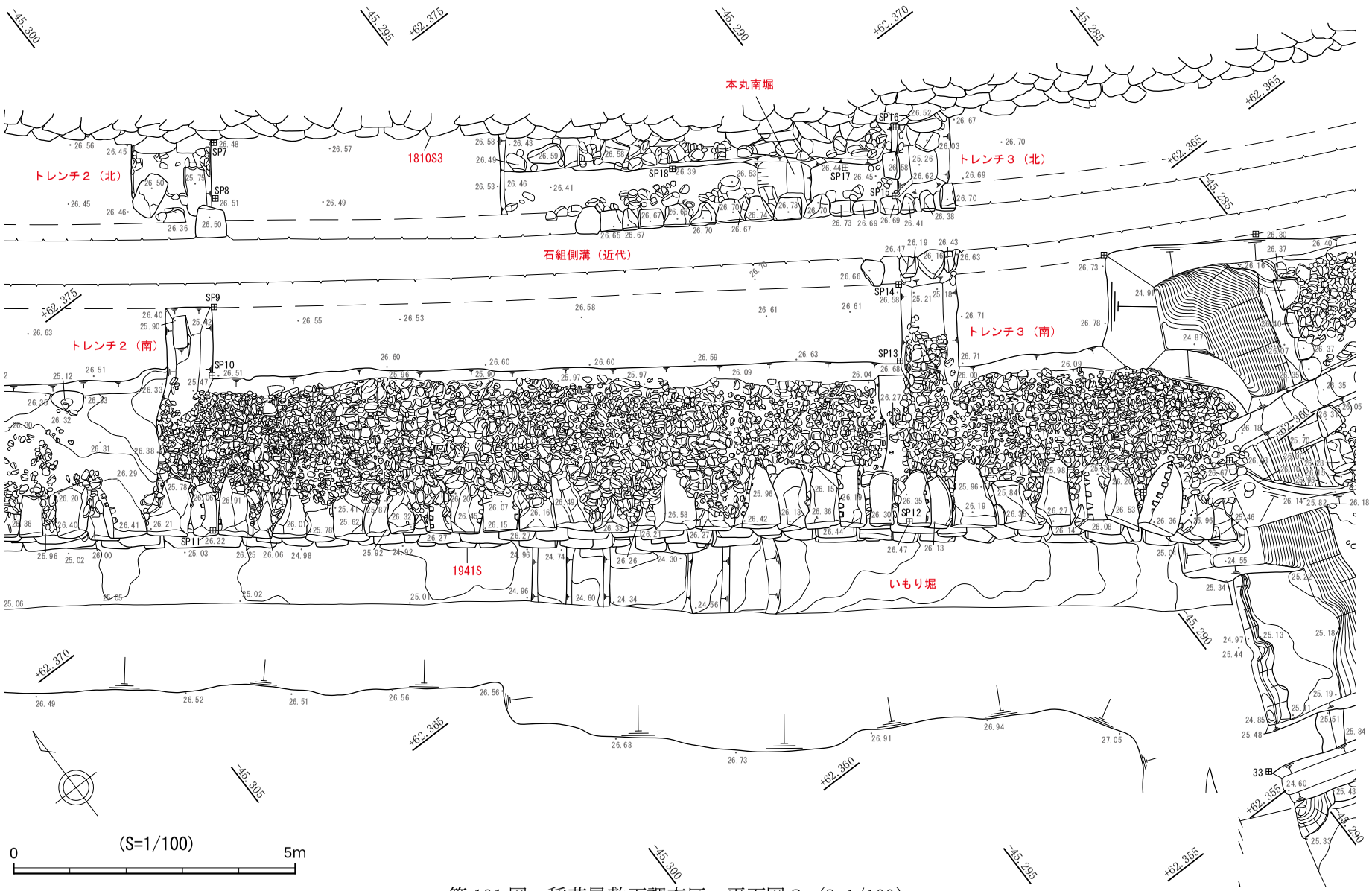
・いもり堀が掘削される以前に存在した本丸南堀の法面の一部を検出した。堀の西岸に相当すると考えられる。



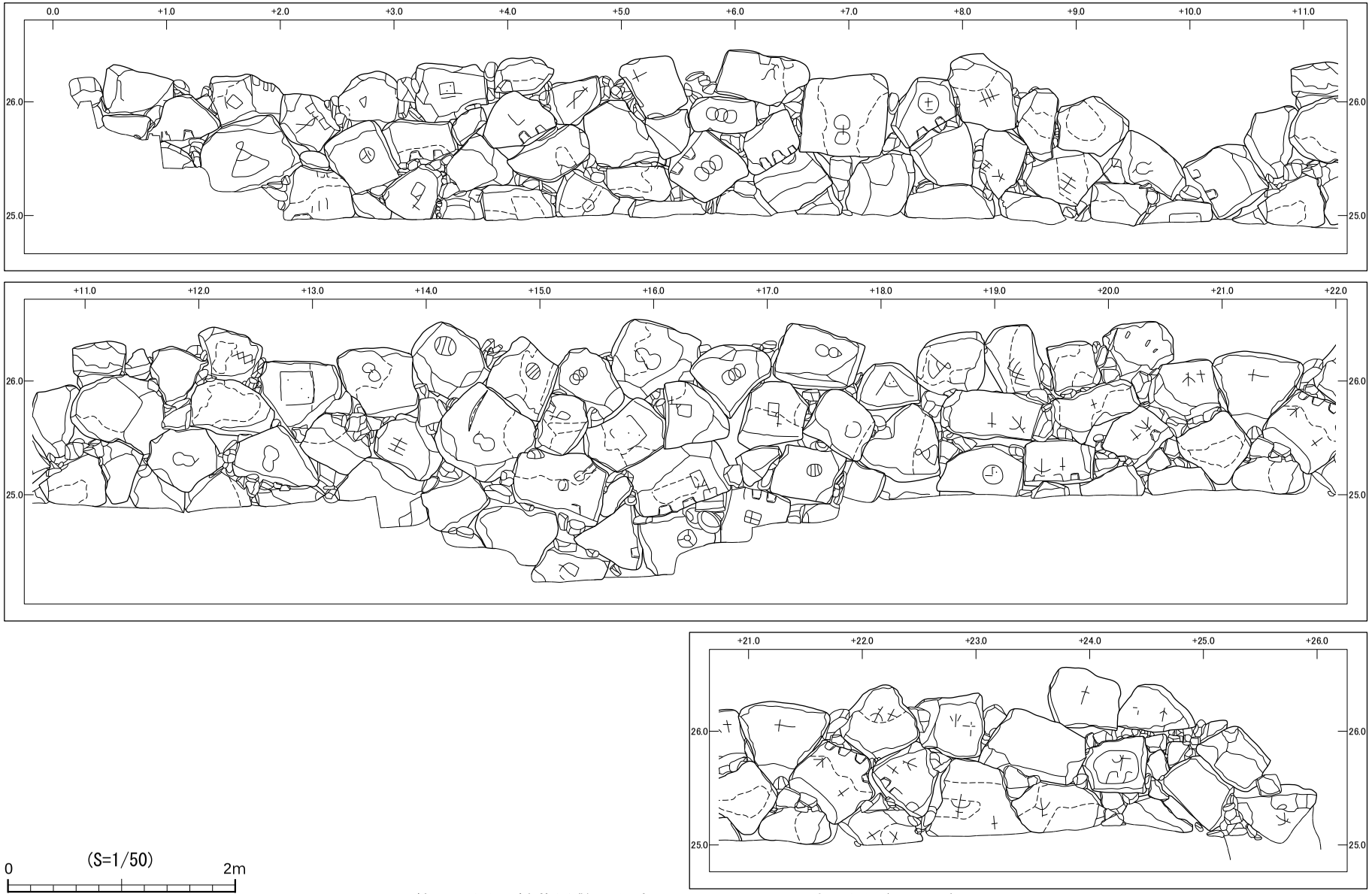
第 99 図　稲荷屋敷下調査区　全体図（S=1/200）



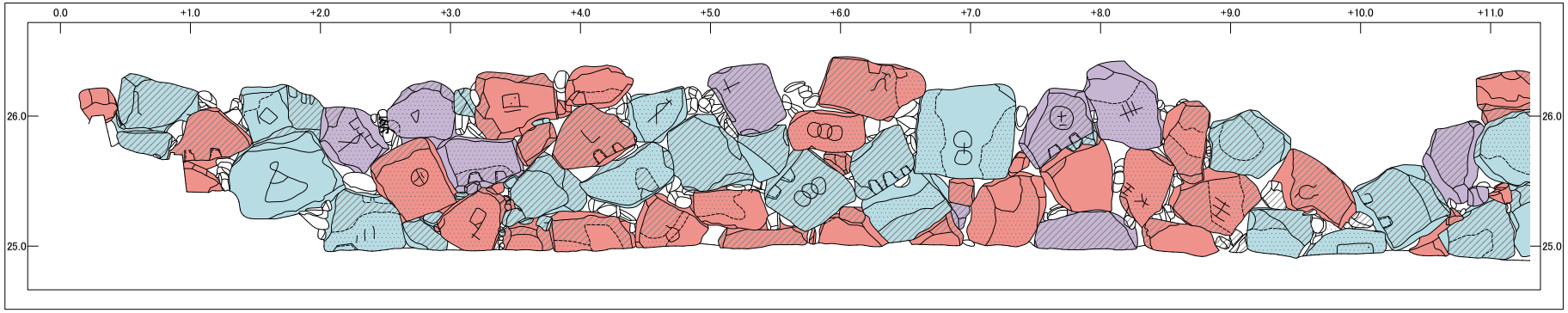
第 100 図　稲荷屋敷下調査区　平面図１（S=1/100）

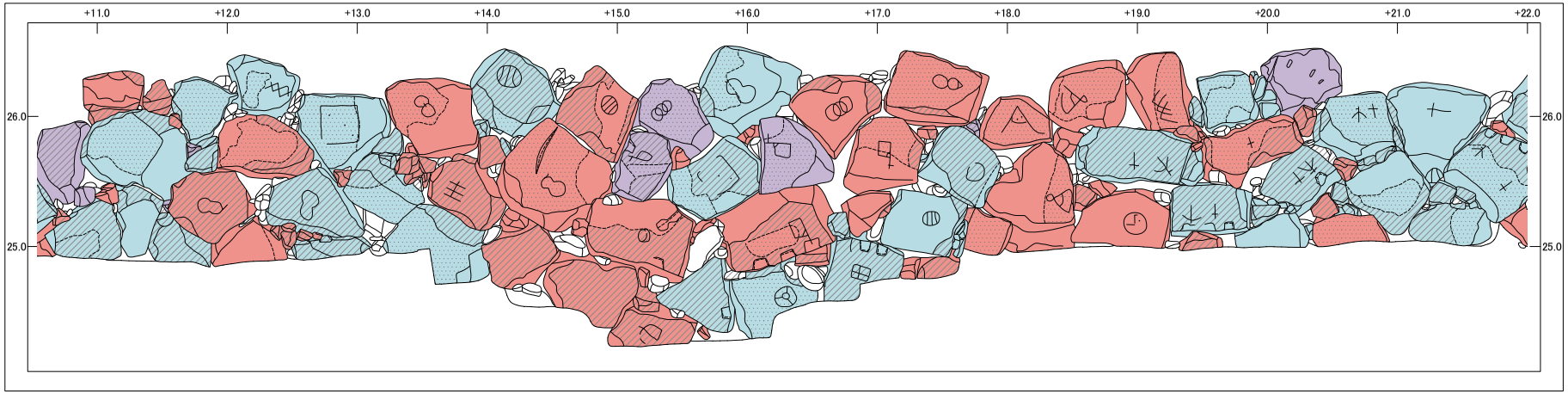


第 101 図　稲荷屋敷下調査区　平面図２（S=1/100）



第 102 図　稲荷屋敷下調査区　石垣 1941S　立面図（S=1/50）

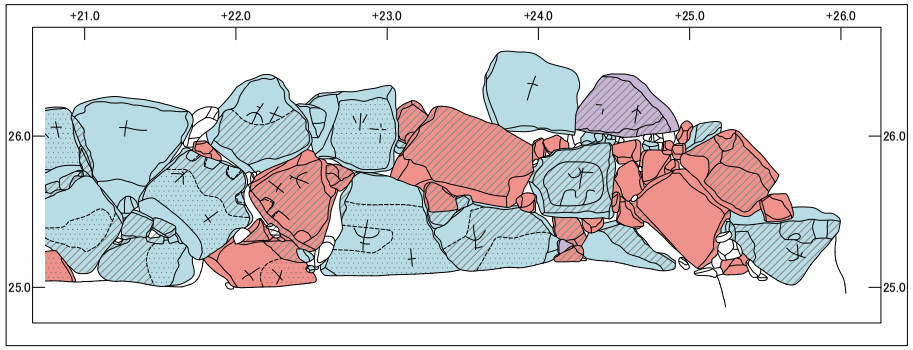




0 (S=1/50) 2m

戸室石（赤）
戸室石（青）
戸室石（中間色）

自然面
割面
ノミ加工

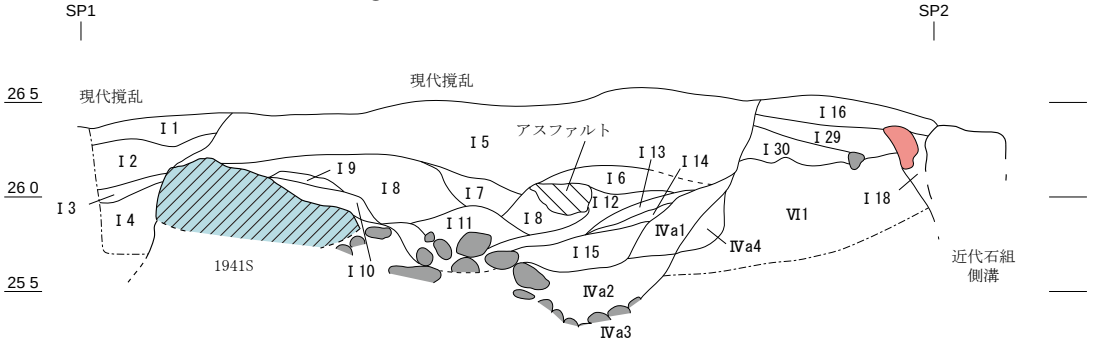


第５表　刻印の種類と数

	10		3		1		1		1
	7		2		1		1		1
	5		2		1		1		1
	5		2		1		1		1
	4		2		1		1		1
	3		1		1		1		1
	3		1		1		1		

第 103 図　稲荷屋敷下調査区　石垣 1941S　石材観察図

①トレンチ１南（SP1-2）土層断面



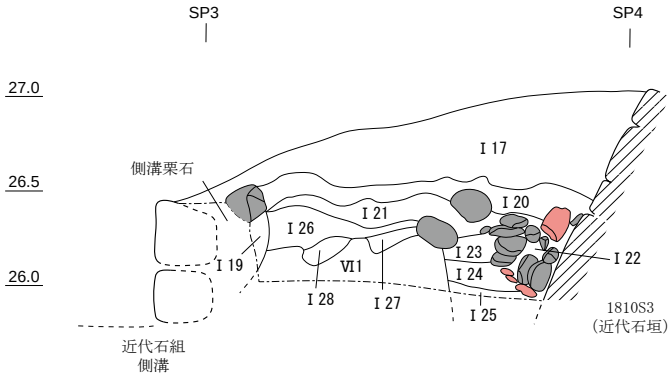
Ⅰ層　近現代層
Ⅰ1　暗褐橙色土　粗砂・小礫含む
Ⅰ2　黒褐色砂質土　河原石（径約 10 ㎝）混
Ⅰ3　暗褐黄色土　小礫混
Ⅰ4　やや暗い灰橙褐色土　小礫・アスファルト・河原石（径 10 ～ 20 ㎝）含む
Ⅰ5　灰黄褐色土　黄橙色粘土ブロック所々に入る
Ⅰ6　褐灰色土　小礫混
Ⅰ7　やや明るい褐灰橙色土　橙色土ブロック（径約１㎝）全体に含む
　灰白色粘土部分的に入る
Ⅰ8　淡褐橙色土　小礫・アスファルト混　石（径約５㎝）含む
Ⅰ9　暗橙褐色土　小礫混
Ⅰ10　灰褐色土　小礫混
Ⅰ11　やや暗い褐灰色粘質土　小礫・粗砂含む
Ⅰ12　暗灰褐色土　小礫・粗砂・礫（径約３㎝）含む
Ⅰ13　橙褐色土　小礫含む
Ⅰ14　暗褐色土　小礫含む
Ⅰ15　やや暗い褐色砂質土　タイル片含む
※Ⅰ1 ～ 15 層：現代の撹乱

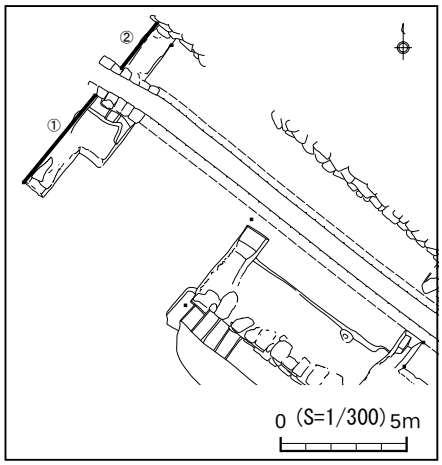
Ⅰ16　淡褐灰色土　小礫含む【近代整地土】
Ⅰ18　褐色土　小石～径約 20 ㎝の石を側溝石組の裏込として入れる
　【近代石組側溝掘方埋土】
Ⅰ29　淡褐黄色土　小礫含む【近代整地土】
Ⅰ30　暗橙褐色土　小礫・粗砂含む【近代整地土】

Ⅳa 層　近世初期：いもり堀構築に伴う造成土（石垣 1941S 裏込め）
Ⅳa1　黄灰白色土　粗砂含む　橙色土・黄色土・灰白色粘土ブロック（径１～５㎝）
　全体的に入る【整地土】
Ⅳa2　暗黄褐色粘質土　橙黄色粘土ブロック（径１～２㎝）　全体的に入る
　河原石（約５㎝）入る
Ⅳa3　河原石主体（径約 10 ～ 20 ㎝）　石と石の隙間に褐色土入る【栗石層】
Ⅳa4　明黄褐色土　小礫混　灰白色粘土ブロック（径約１㎝）部分的に含む
　【本丸南堀埋立土の可能性もあり】

Ⅵ層　本丸南堀構築以前の土層
Ⅵ1　灰白色粘質土　橙色砂質土が上層に入る【地山】

②トレンチ１北（SP3-4）土層断面





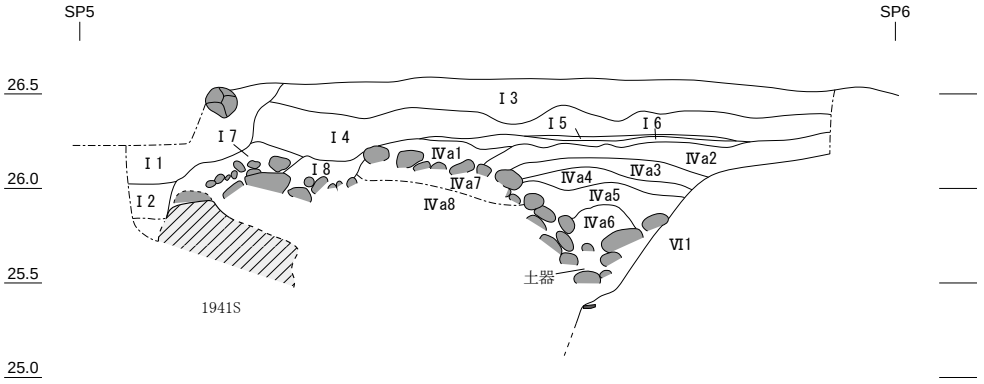
Ⅰ層　近現代層
Ⅰ17　黒褐色土　ナイロン・プラスチック・鉄の棒など新しいものが多く入る　小礫混【現代地表】＝トレンチ２北Ⅰ2 層
Ⅰ19　黄橙褐色土　粗砂混じり　橙色粘土ブロック（径１㎝）が所々に入る【近代石組側溝掘方埋土】
Ⅰ20　にぶい黄色砂質土　黒褐色土・黄橙色土ブロック少量入る　小礫混【近代整地土】＝トレンチ２北Ⅰ5 層・トレンチ３北Ⅰ10 層
Ⅰ21　淡黄褐色砂質土　粗砂・小礫混土　黄橙色粘土（径２～３㎝）・黒褐色土ブロック入る【近代整地土】
Ⅰ22　河原石（径 10 ～ 20 ㎝）主体で所々赤戸室石が入る　石と石の隙間に褐色土が入る【1810S3 掘方埋土（明治 40 年頃）】
Ⅰ23　黄褐色土　橙色粘土ブロック（径約 0.5 ㎝）少し入る【1810S3 掘方埋土（明治 40 年頃）】＝トレンチ２北Ⅰ6 層
Ⅰ24　明黄褐色土　橙色土ブロックが点々と入る　灰白色粘土部分的に混【1810S3 掘方埋土（明治 40 年頃）】＝トレンチ２北Ⅰ8 層
Ⅰ25　明黄灰色粘質土　灰色粘土（径約５㎝）所々入る【1810S3 掘方埋土（明治 40 年頃）】
Ⅰ26　にぶい黄褐色土　小礫・粗砂・河原石（径約５㎝）混　黒褐色土所々に入る　橙黄褐色砂質土（径７～８㎝の礫混じり）部分的に入る【近代整地土】
Ⅰ27　やや暗い黄褐色土　小礫混【近代整地土】
Ⅰ28　やや淡い黄褐色土　小礫混　橙灰色粘土（径約１㎝）ブロック少し入る近代整地土】
※Ⅰ23 ～ 25 と栗石の間に掘方は確認されていない。Ⅰ23 ～ 25 を盛って栗石を投入する方法で施工したとみられる（同時施工）。下方へ行くに従って灰白色粘土が混入し、地山質に近づいていく
※Ⅰ20・21・26 ～ 28 は近代石垣掘方の上面を整地し、かつ近代側溝の基盤層となっている

Ⅵ層　本丸南堀構築以前の土層
Ⅵ1　灰白色粘質土　橙色砂質土が上層に入る【地山】

0 (S=1/40) 1m

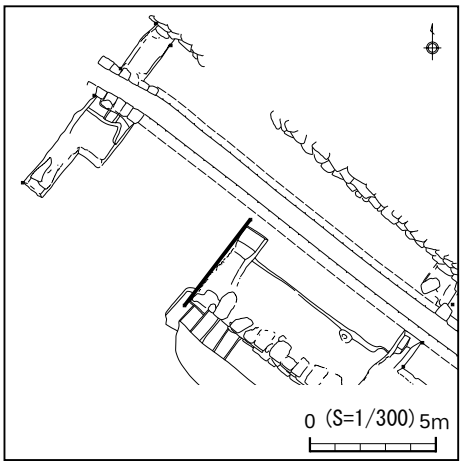
第 104 図　稲荷屋敷下調査区　土層断面図　トレンチ１（S=1/40）

①トレンチ４（SP5-6）土層断面



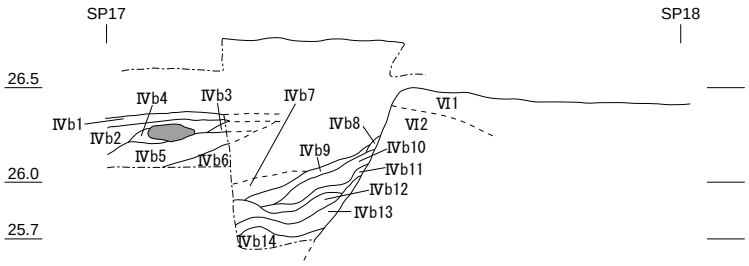
Ⅰ層　近現代層
Ⅰ1　やや暗い褐黄色土　アスファルト・小礫・小石含む【現代攪乱】
Ⅰ2　暗褐色砂質土【現代攪乱】
Ⅰ3　やや暗い黄灰褐色土　小礫・小石混
Ⅰ4　黄橙褐色土　小礫・小石混　橙黄色土ブロック（径約１㎝）全体に含む
　　灰白色粘土ブロック（径７～８㎝）所々に含む【近代整地層】
Ⅰ5　淡赤褐色土　固くしまる　小礫含む　橙色土ブロック（径約 0.5 ㎝）全体に含む
　　【石垣を解体してⅠ4 で整地する前に踏み固められてできた層】
Ⅰ6　淡黄褐色土　固くしまる　小礫含む　橙色土ブロック（径約１㎝）全体に含む
　　【石垣を解体してⅠ4 で整地する前に踏み固められてできた層】
Ⅰ7　褐灰色土　小礫・河原石（径 10 ㎝以下）含む【石垣解体時に移動した近世の層か】
Ⅰ8　褐橙色土　小礫・河原石（径 10 ㎝以下）含む【石垣解体時に移動した近世の層か】

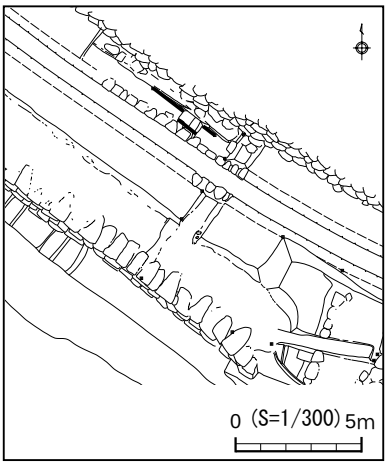
Ⅳa 層　近世初期：いもり堀構築に伴う造成土（石垣 1941S 裏込め）
Ⅳa1　褐灰色土　小礫混【整地土】
Ⅳa2　黄灰褐色砂質土　礫・粗砂含む　橙黄色土ブロック（径１～５㎝）全体に入る
Ⅳa3　橙灰褐色土　礫・粗砂混　橙黄色粘土ブロック（径７～８㎝）全体に多く入る
Ⅳa4　黄灰白色砂質土　礫・粗砂多く含む　橙黄色粘土ブロック（径約１㎝）含む
Ⅳa5　黄橙褐色粘質土　小礫・橙黄色粘土ブロック（径約２㎝）含む
Ⅳa6　橙灰褐色砂質土　粗砂・礫混　橙黄色粘土ブロック（径約１㎝）全体的に多く含む
Ⅳa7　栗石層　径約 10 ㎝の河原石主体　この範囲だけ栗石が小さめ【作業単位の可能性あり】
Ⅳa8　栗石層　径約 10 ～ 30 ㎝の河原石が主体　唐津焼、越前擂鉢が出土
※地山のカット面にはトレンチ２南で見られるように地山面に粘土を貼り付けてはいない。また、整地土は水平堆積している。これはトレンチ２南・３では斜め堆積となっている。地山のカットはいもり堀構築のため。本丸南堀埋土は未確認で、もっと前面にあるとみられる。このカット面は本丸南堀埋土すべてを含むカットであるため、本丸南堀埋土を含めて地山をカットしている可能性もある。



Ⅵ層　本丸南堀構築以前の土層
Ⅵ1　明黄灰色粘質土【地山】

②SP17-18 土層断面





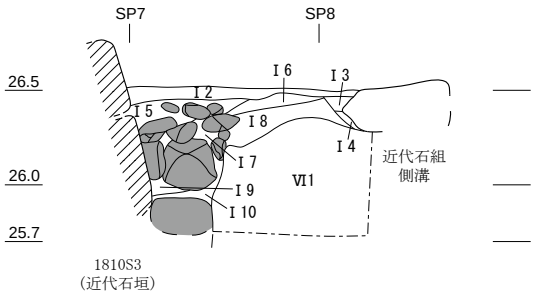
Ⅳb 層　近世初期：本丸南堀埋立土
Ⅳb1　灰黄褐色砂質土　礫（径３～５㎝）多く含む
Ⅳb2　暗赤褐色砂礫
Ⅳb3　暗赤褐色砂礫　Ⅳb2 より礫の比率がやや高い
Ⅳb4　黄灰褐色砂質土　黄褐色シルト＝地山ブロック混
Ⅳb5　黄灰褐色砂質土
Ⅳb6　暗赤褐色砂礫　Ⅳb2 と同じ
Ⅳb7　暗赤褐色砂礫　黄灰白色シルト＝地山ブロック混
Ⅳb8　黄灰白色シルト（地山）ブロック層
Ⅳb9　黄灰白色シルトブロック層　暗赤褐色砂礫混
Ⅳb10　暗赤褐色砂礫　礫（径５㎝以上）含む
Ⅳb11　Ⅳb9 と同じ
Ⅳb12　暗赤褐色砂礫　黄灰白色シルト＝地山ブロック混
Ⅳb13　Ⅳb9 と同じ
Ⅳb14　灰褐色砂質土
※Ⅳb7 ～Ⅳb14 は砂礫層と地山ブロック層の互層で、地山ブロック層は粘性がやや強い

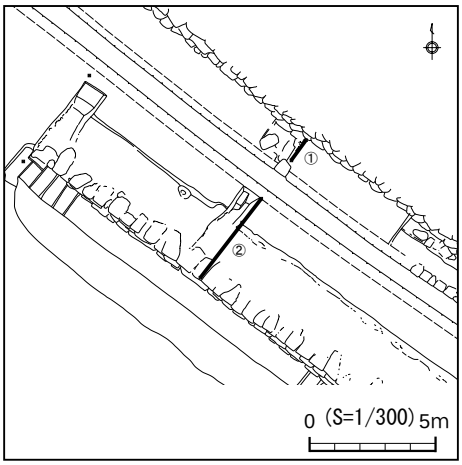
Ⅵ層　本丸南堀構築以前の土層
Ⅵ1　黄褐色砂質土【地山】
Ⅵ2　黄灰白色シルト【地山】

0 (S=1/40) 1m

第 105 図　稲荷屋敷下調査区　土層断面図　トレンチ４・SP17-18（S=1/40）

①トレンチ２北（SP7-8）土層断面

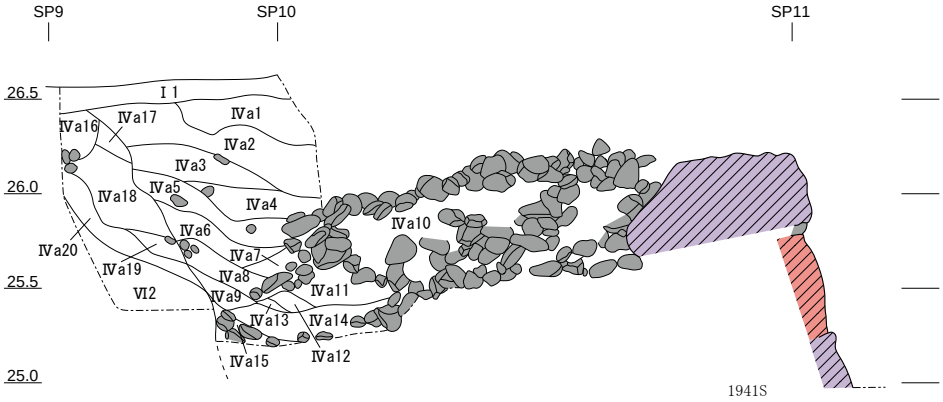




Ⅰ層　近現代層
Ⅰ2　黒褐色土　小礫混【現代地表】＝トレンチ１（北）Ⅰ17 層
Ⅰ3　やや淡い黒褐色土　小礫混　河原石（径約５cm）入る【近代側溝掘方埋土（明治 40 年頃）】
Ⅰ4　やや明るい黄褐色土　しまりなし　黒褐色土混　河原石（径２～10 cm）入る【近代側溝掘方埋土】
Ⅰ5　にぶい黄色土　小礫・粗砂混　河原石（径 15 cm以下）【近代石垣整地層】＝トレンチ１北Ⅰ20 層・トレンチ３北Ⅰ10 層
Ⅰ6　淡黄褐色粘質土　橙色土小ブロック点々と入る【近代石垣掘方埋土】＝トレンチ１北Ⅰ23 層
Ⅰ7　ソゲ石　河原石（径 10 ～ 30 cm）主体　１石のみ青戸室石が入る　石と石の隙間に褐色土入る【近代石垣掘方埋土】
Ⅰ8　明黄褐色土　黒褐色土ブロック（径約５cm）点々と入る　灰白色粘土（径約５cm）部分的に入る　橙色土ブロック（径約１cm）含む【近代石垣掘方埋土】
　　＝トレンチ１北Ⅰ24 層
Ⅰ9　褐色粘土　河原石（径約 20 ～ 30 cm）の下にある【近代石垣掘方埋土】
Ⅰ10　褐黄色粘土　河原石（径約 30 cm）入る【近代石垣掘方埋土】
※Ⅰ6・8 はトレンチ１と同じ施工方法で、Ⅰ6・8 を盛土し栗石を投入している（同時施工）

Ⅵ層　本丸南堀構築以前の土層
Ⅵ1　灰白色粘質土　橙色粘土が上層に入る【地山】

②トレンチ２南（SP9-11）土層断面



Ⅰ層　近現代層
Ⅰ1　黒褐色土　礫混　アスファルト入る

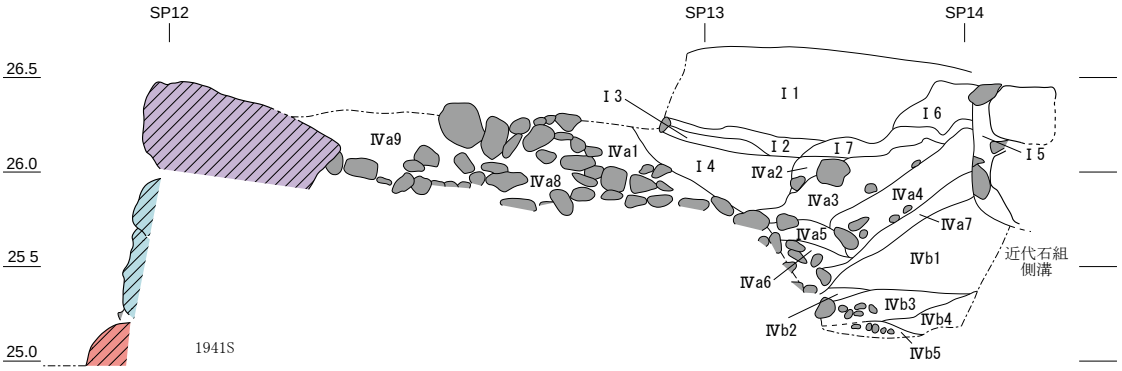
Ⅳa 層　近世初期：いもり堀構築に伴う造成土（石垣 1941S 裏込め）
Ⅳa1　暗黄褐色土　礫含む　橙色ブロック（径約 0.5 cm）点々と入る
　　Ⅳa2 と基本的に同土
Ⅳa2　黄褐色土　礫混　黄橙色粘土ブロック（径５cm以下）全体にまばらに入る
　　Ⅳa1 と基本的に同土
Ⅳa3　明黄橙褐色土　黄橙色粘土・灰白色粘土が全体に非常に多く入る
　　Ⅳa4 と基本的に同土
Ⅳa4　黄橙褐色土　黄橙色粘土・灰白色粘土（径５cm以下）が全体に入る
　　Ⅳa3 と基本的に同土
Ⅳa5　やや明るい黄橙褐色土　黄橙色粘土ブロック（径２～３cm）・灰白色粘土（径１cm以下）少し含む
Ⅳa6　灰褐色砂質土　粗砂・橙色粘土ブロック（径２～３cm）含む
Ⅳa7　暗褐黄色粘質土
Ⅳa8　褐灰色土　小礫・河原石（径約５cm）全体に含む　しまりなし
Ⅳa9　淡灰橙色粘質土
Ⅳa10　栗石層　河原石（径 10 ～ 20 cm）主体　土の部分は小礫混じりの褐橙色土
Ⅳa11　橙灰色砂質土　粗砂含む　灰白色粘土ブロック（径約２cm）全体に含む
Ⅳa12　灰褐色粘質土
Ⅳa13　黄灰色粘質土
Ⅳa14　やや暗い灰褐色粘質土
Ⅳa15　栗石層　河原石（径 10 ～ 20 cm）主体
　　Ⅳa10 との栗石の境目には径約 10 cmの石が並ぶ部分あり
Ⅳa16　淡黄褐色土　小礫・戸室石片混
Ⅳa17　明橙灰色粘質土　粗砂含む　橙色粘土と灰白色粘土で構成
Ⅳa18　橙灰褐色土　小礫・小石含む　橙色粘土・灰白色粘土ブロック（径 10 cm以下）全体に入る
Ⅳa19　淡橙灰褐色土　粗砂・小石含む
Ⅳa20　灰褐色土　小礫・小石含む　灰白色粘土ブロック（径約５cm）全体に含む
※Ⅳa1 ～ 15 層：改修掘方埋土の可能性あり

Ⅵ層　本丸南堀構築以前の土層
Ⅵ2　灰白色粘質土　上層約 15 cmは橙色粘質土【地山】

0 (S=1/40) 1m

第 106 図　稲荷屋敷下調査区　土層断面図　トレンチ２（S=1/40）

①トレンチ３南（SP12-14）土層断面

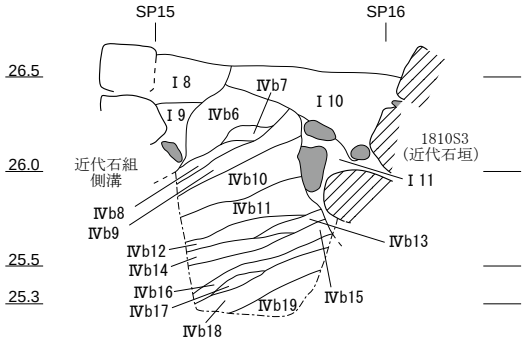


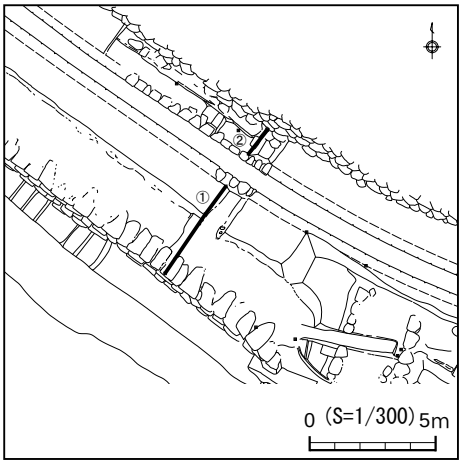
Ⅰ層　近現代層
Ⅰ1　暗褐色土　小礫・河原石（径約 10 ㎝）・戸室石片・土管片入る
　　黄橙色土（径１～５㎝）・黒色土ブロック全体に入る【現代攪乱か】
Ⅰ2　やや暗い褐色土　小礫・橙色土ブロック（径約１㎝）が全体に入る　小石混
　　【現代攪乱か】
Ⅰ3　黄灰色粘質土　シルト・小礫入る【現代攪乱か】
Ⅰ4　褐黄色粘質土　小礫・葉っぱ入る【現代攪乱か】
Ⅰ5　褐色土　戸室石・河原石（径 10 ～ 20 ㎝）入る【近代石組側構掘方埋土】
Ⅰ6　黄橙褐色土　小礫・小石混　橙黄色土ブロック（径約１㎝）全体に含む
　　灰白色粘土ブロック（径７～８㎝）所々含む【近代整地土】
　　＝トレンチ１南Ⅰ29 層に対応か
Ⅰ7　淡橙灰褐色土　小礫入る　橙黄色粘土・灰白色粘土ブロック（径２～３㎝）
　　全体に含む【近代整地土】

Ⅳa 層　近世初期：いもり堀構築に伴う造成土（石垣 1941S 裏込め）
Ⅳa1　淡黄褐色土　小礫・粗砂混　黄橙色粘土ブロック（径 0.5 ～５㎝）・小石含む
Ⅳa2　褐黄色粘質土　河原石（径約 10 ㎝）混
Ⅳa3　褐黄橙色土　小礫・粗砂含む
　　黄色土・橙色土ブロック（径 0.5 ～２㎝）全体に含む
Ⅳa4　明灰橙褐色土　小礫・灰白色粘土（幅約 30 ㎝）・橙色粘土（幅約 10 ㎝）・
　　黄橙色粘土（幅約 10 ㎝）が帯状に斜めに入る　トレンチ３北の砂層と類似
Ⅳa5　橙褐色粘質土　粗砂含む
Ⅳa6　やや暗い褐橙色粘質土　粗砂含む
Ⅳa7　灰褐色土　小礫・粗砂含む　橙黄色土（径１㎝以下）が全体に点々と入る
Ⅳa8　栗石層　河原石（径 10 ～ 30 ㎝）主体
　　石と石の隙間に多少褐色土が入るが基本的には空間
Ⅳa9　暗黄橙褐色土　小礫・粗砂・橙黄色土ブロック（径約１㎝）含む

Ⅳb 層　近世初期：本丸南堀埋立土
Ⅳb1　暗赤褐色砂礫　小礫（径１㎝以下）多く含む　暗黄褐色砂質土混
Ⅳb2　灰黄褐色シルト　やや粘性あり
Ⅳb3　暗赤褐色砂礫　礫（径約５㎝）多　Ⅳb1 より礫主体
Ⅳb4　淡褐灰色粘質土　やや砂質気味
Ⅳb5　Ⅳb3 と同じ

②トレンチ３北（SP15-16）土層断面





Ⅰ層　近現代層
Ⅰ8　淡黄褐色土　小礫・粗砂・河原石（径 10 ㎝以下）入る【近代側構掘方埋土】
Ⅰ9　褐色土　小礫・粗砂・戸室石片（径 10 ㎝以下）入る【近代側構掘方埋土】
Ⅰ10　にぶい黄色土　小礫・粗砂混　河原石（径 15 ㎝以下）入る
　　【近代石垣掘方埋土】＝トレンチ１北Ⅰ20 層・トレンチ２北Ⅰ5 層
Ⅰ11　褐黄色土　小礫･粗砂混　河原石（径 20 ～ 25 ㎝）入る【近代石垣掘方埋土】

Ⅳb 層　近世初期：本丸南堀埋立土
Ⅳb6　礫層　南側は径５～ 10 ㎝の礫、北側は径５㎝以下の礫主体　黄褐色シルト
　　ブロック・暗黄褐色砂質土混
Ⅳb7　黄褐色シルト　小礫（径約１㎝）混
Ⅳb8　橙褐色・黄灰白色シルト　小礫（径約１㎝）混
Ⅳb9　暗赤褐色砂礫　黄橙褐色砂質土混
Ⅳb10　褐灰色シルト　淡橙褐色シルト混
Ⅳb11　Ⅳb9 と同じ
Ⅳb12　暗赤褐色砂礫
Ⅳb13　淡褐灰色砂質土
Ⅳb14　Ⅳb12 と同じ
Ⅳb15　暗赤褐色砂礫　Ⅳb12･Ⅳb14 に比べ含まれる礫大きい（径約５㎝）
Ⅳb16　Ⅳb9･Ⅳb11 と同じ
Ⅳb17　Ⅳb12･Ⅳb14 と同じ
Ⅳb18　褐灰色シルト　淡橙褐色シルト・小礫混
Ⅳb19　淡褐灰色砂質土　小礫（径約１㎝）混　きめ細かい
※Ⅳb8 ～ 19：暗赤褐色系の砂礫層と地山起源の褐灰色系シルト・砂質土と互層状を呈する。シルトは SP17-18 セクションのブロック層に対し砂質気味で流土的。ブロック的ではなく、粘性もやや弱いように思われる。

0 (S=1/40) 1m

第 107 図　稲荷屋敷下調査区　土層断面図　トレンチ３（S=1/40）

第２節　いもり堀南部の調査

１．南岸調査区の概要（第 108 ～ 110 図）

いもり堀南岸の位置の確認およびいもり堀復元に伴う取水路設置に伴い、平成 18 年度～ 20 年度にかけて４箇所（2006-1・2 地点、2007 地点、2008 地点）で調査を実施した。これらを南岸調査区と総称することとしたが、調査範囲が広範にわたっているため、個別の地点ごとに報告する。

なお、大別層は共通とし、以下のように分類した。

Ⅰ層：近現代層で、明治 40 年（1907）の堀の埋立以降の土層に対応する。

Ⅱ層：近世後期（宝暦大火（宝暦９年（1759））以後）の土層に対応する。

Ⅲ層：近世前期（寛永大火（寛永８年（1631））～宝暦大火以前）の土層に対応する。

Ⅳ層：近世初期（寛永大火以前）の土層に対応する。

Ⅴ層：近世以前の土層で、古代の遺物包含層などに対応する。

２．調査の結果

2007 地点

（１）概要（第 109 ～ 111 図）

本調査地点は、南岸調査区の西端に位置し、金沢中央消防署広坂出張所跡にあたる。調査では、大別層Ⅰ～Ⅴ層を検出した。宝暦大火後のⅡ層出土遺物には、被熱や溶着痕の見られるものが確認された。Ⅴ層は古代の遺物包含層である。また、明治 40 年に埋め立てられたいもり堀の南岸を検出した。調査地点南西部は大きく撹乱を受けていたが、堀の南側で堂形や馬場の造成に関わるとみられる江戸時代前期の整地層も確認された。

（２）遺構

①石積側溝（近代）（第 112 図）

調査区中央付近で、東西方向の戸室石による３段の石積みと、その前面（南側）に接する逆Ｌ字状のコンクリート構造物で構成された近代の側溝を検出した。同様の側溝が 2006-2・2006-1 地点でも検出されている。

②いもり堀（第 111 ～ 114 図）

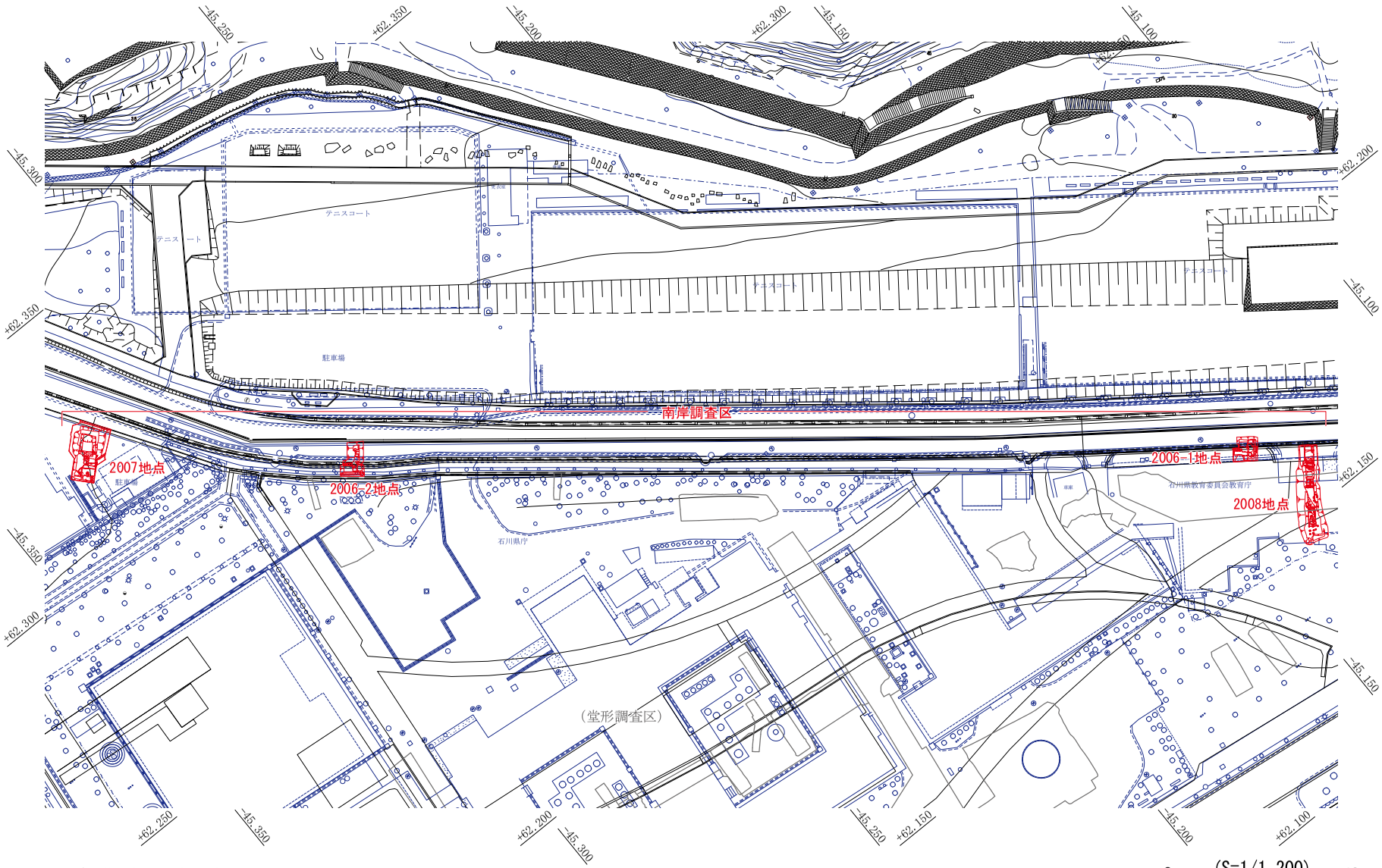
明治 40 年の堀埋立層直下で、堀南岸の法面を検出した。勾配は約 30 ～ 40°を測る。堀南岸の法面については、①明治 40 年のいもり堀埋立直前の面、②①の面の基盤となる堆積層、③堀造営当初の基盤層を確認した。②のうちⅡ 1a ～ c 層は板ガラス等近代の遺物を含むため、①以前の面としてⅡ 3a・b 層面が推定されるが明確ではない。また、③による面は、崩落している可能性もあるが、おおよそ造営当初の法面を反映しているとみられる。

③堂形馬場（第 112・113 ①・115・116 ②④～⑥図）

いもり堀南側の調査地点南西部で、均質な砂層および粘質土の層を確認した。絵図との対比から、堂形馬場の整地層と考えられる。また､SP1-2 および SP3-4 の土層断面（第 111･112 図）の観察から、堀岸の南側に現況の頂部で標高 25.0 ～ 25.1 ｍを測る高まりを確認した。絵図との対比から、堀に接する土塁の一部とみられる。なお、土塁は堂形馬場の砂による整地以降明治 40 年のいもり堀埋立ての直前まで存続したが、構築時期の上限については明らかにできなかったため、土塁盛土の構成土をⅡ’層として大別した。

④ SX01（第 112・113 図）

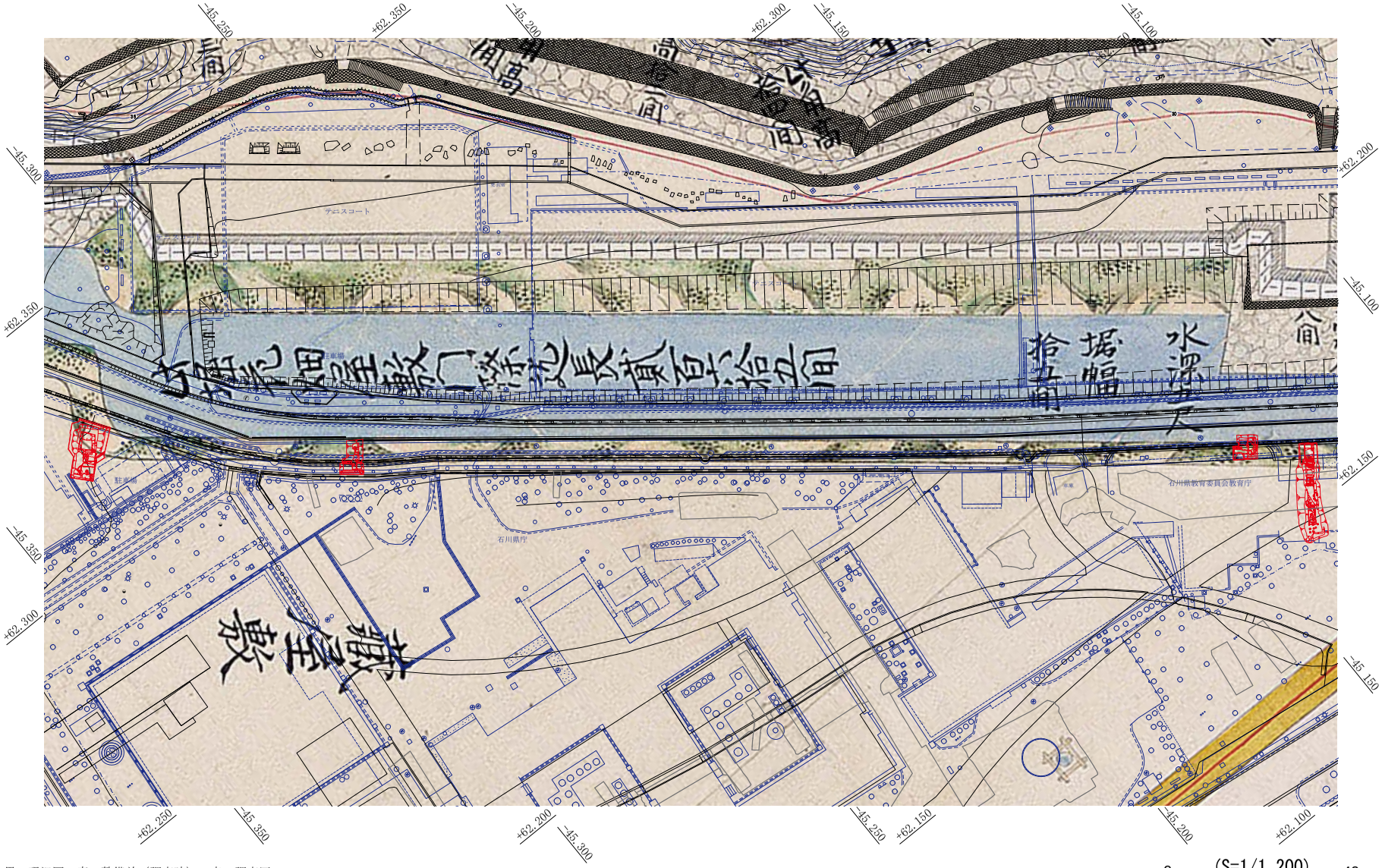
SP1-2 および SP3-4、SP8-9 の土層断面の観察により確認した遺構で、Ⅳ層を基盤とし、Ⅲ層で埋め立てられていた。部分的な検出のため、平面形など詳細は不明である。1580 ～ 1610 年代の肥前陶



黒：現況図　青：整備前（調査時）　赤：調査区
灰：既報告調査区（堂形調査区）

0　(S=1/1,200)　40m

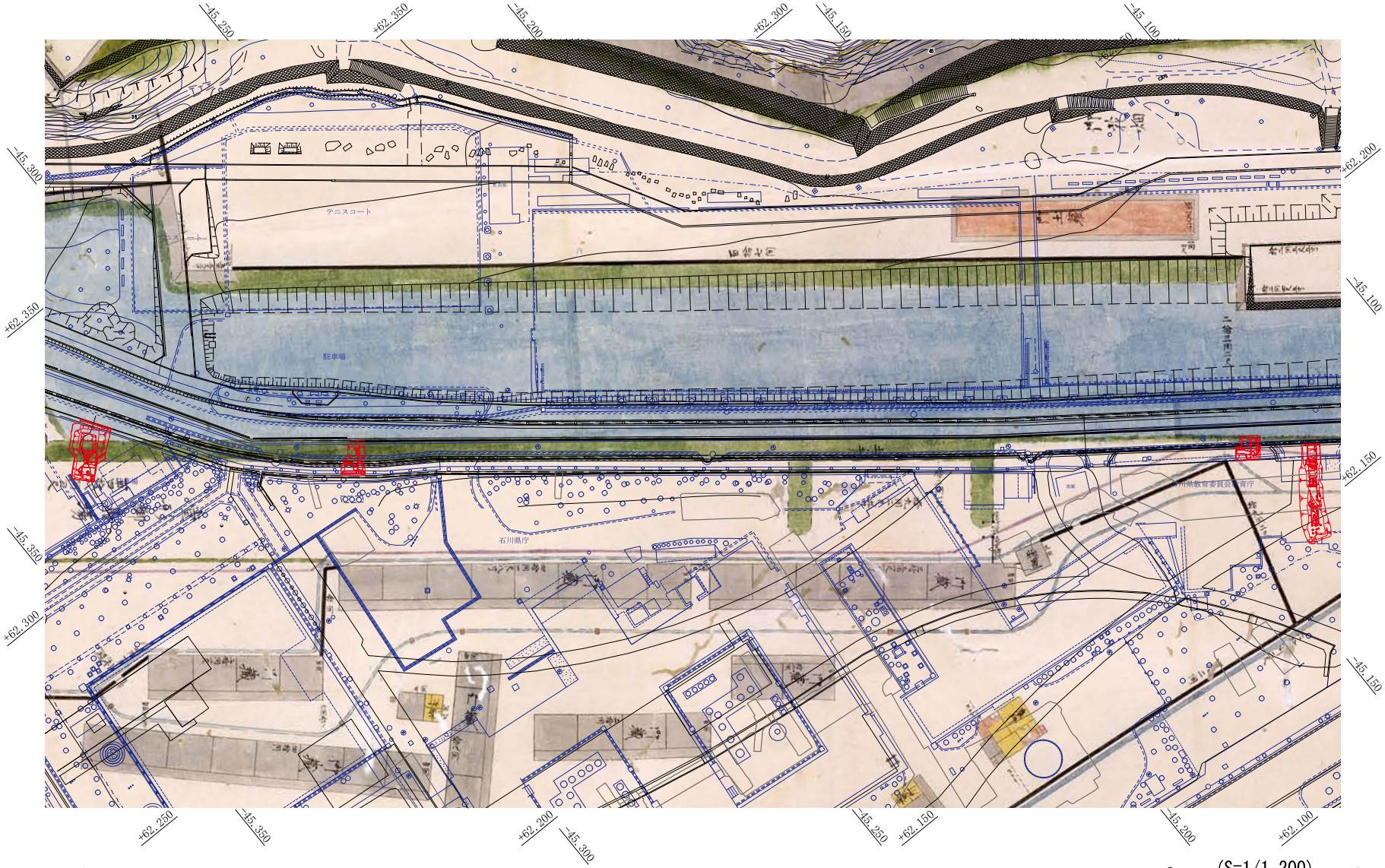
第 108 図　南岸調査区　調査区位置図（S=1/1,200）



黒：現況図　青：整備前（調査時）　赤：調査区
灰：既報告調査区（堂形調査区）
絵図：「加賀国金沢之絵図」（金沢市立玉川図書館蔵）

0　(S=1/1,200)　40m

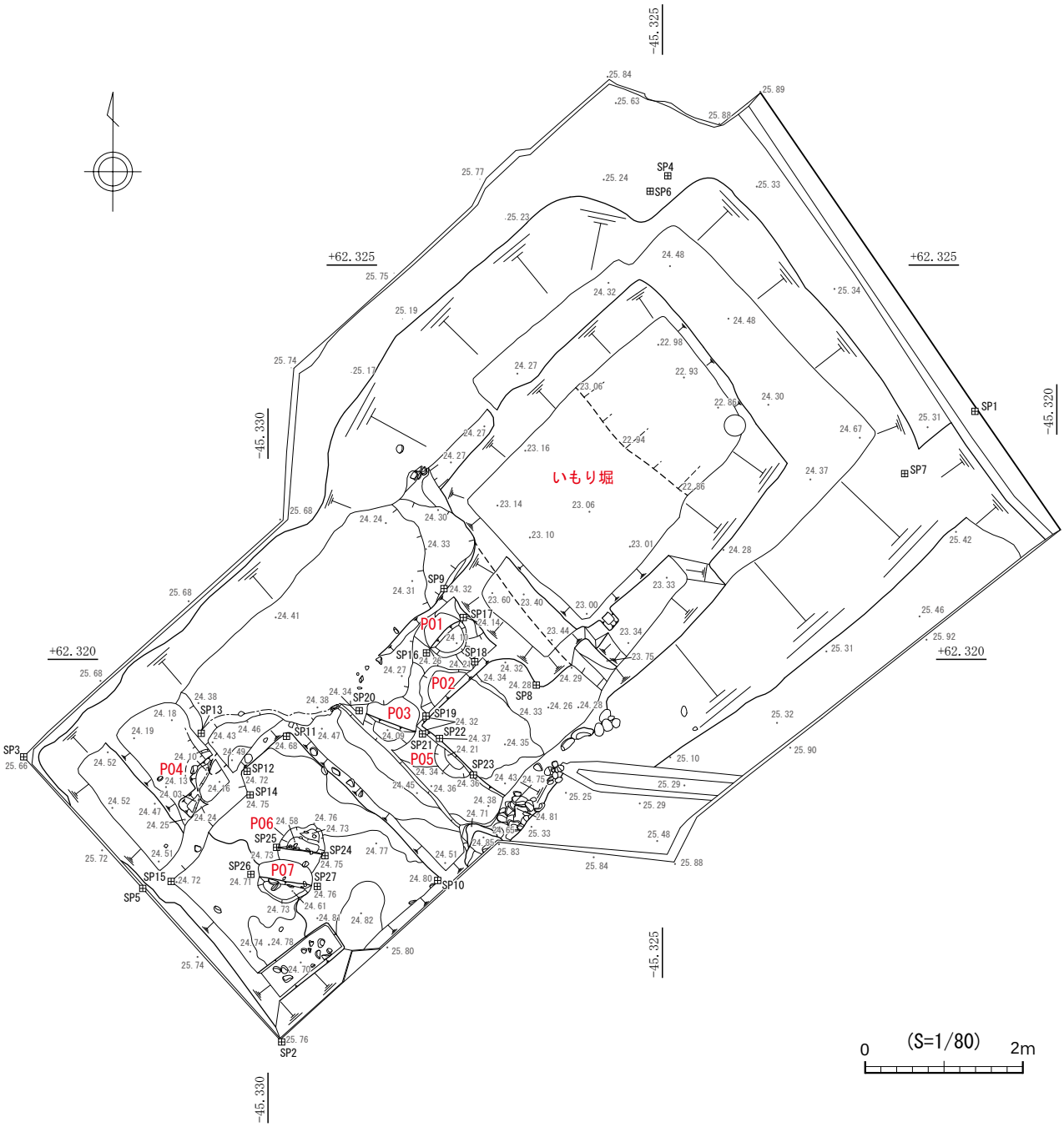
第 109 図　南岸調査区　絵図照合図（近世前期）（S=1/1,200）



黒：現況図　青：整備前（調査時）　赤：調査区
灰：既報告調査区（堂形調査区）
絵図：「御城中壱分碁絵図」（横山隆昭氏蔵）

0　(S=1/1,200)　40m

第 110 図　南岸調査区　絵図照合図（近世後期）(S=1/1,200)



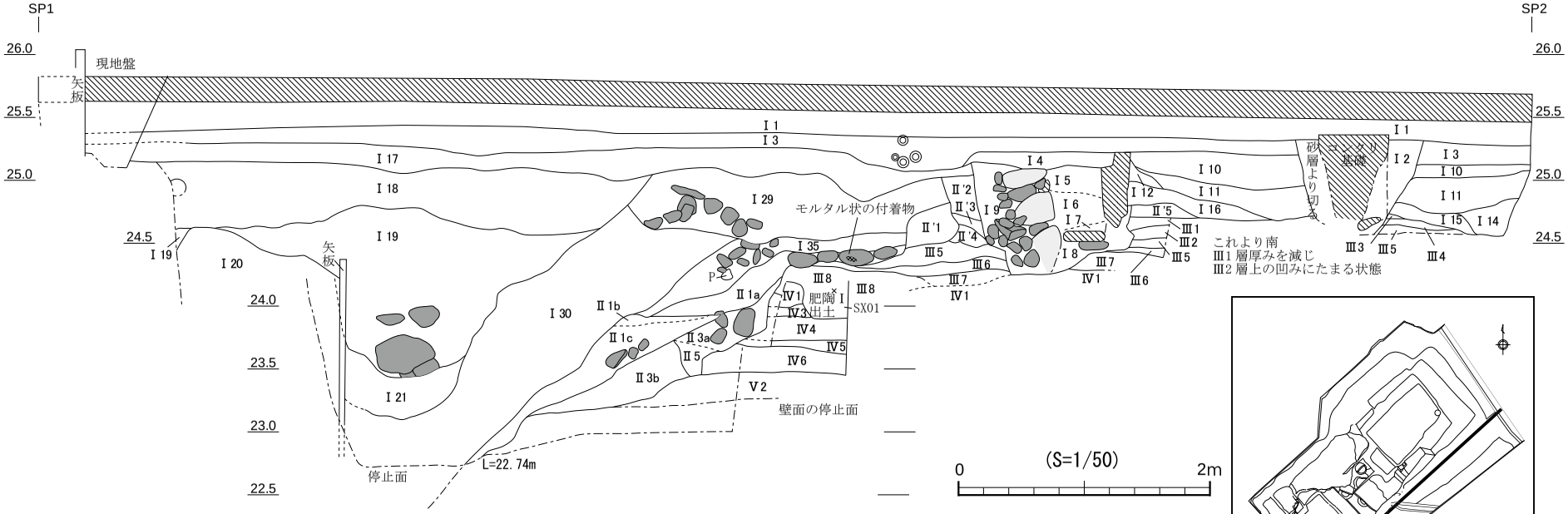
第 111 図　南岸調査区　2007 地点　平面図（S=1/80）

器が出土している。

⑤ピット（P01 ～ P07）（第 111・115 ③④・116 図）

P01 ～ 05 はⅣ層を基盤とし、Ⅲ層で埋め立てられたピットである。P01 は平面楕円形、長径 55 cm、短径 51 cm、深さ 9 cmを測る。P02 ～ 05 は部分的な検出に留まる。P02 は平面楕円形ないし略円形と推定され、長径 77 cm、短径 38 cm以上、深さ 21 cmを測る。P03 は平面略円形と推定され、径 66 cm、深さ 24 cmを測る。P04 は平面楕円形ないし略円形と推定され、長径 54 cm以上、短径 43 cm以上、深さ 10 cm以上を測る。P05 は平面楕円形ないし略円形と推定され、長径 55 cm、短径 23 cm以上、深さ 12 cmを測る。

P06・P07 はⅢ層上面で検出したが、Ⅰ層で埋め立てられている状況から、本来の掘り込み面が削



Ⅰ層　近現代層：明治40年以降の土層（堀埋立土・造成土）

Ⅰ1　砕石層
Ⅰ2　コンクリ基礎掘方埋土
Ⅰ3　砂層
Ⅰ4　暗灰色（7.5Y3/2）・暗黄褐色（2.5Y3/3）粘質土　混土層
Ⅰ5　2.5Y4/3　濁黄褐色砂質土【側溝内堆積土】
Ⅰ6　2.5Y2/1　黒褐色粘質土（腐植）【側溝内堆積土】
Ⅰ7　10YR4/1　褐灰色粘質土【側溝内堆積土】
Ⅰ8　10YR4/1～4/2　褐灰色粘質・砂質土　コンクリート底板の下には偏平な河原石を敷く　タール状の固形物【近代石積側溝の掘方埋土】
Ⅰ9　2.5Y4/1　灰褐色粘質土　褐色粘質土モザイク状に混じる【近代石積側溝の裏込層】
Ⅰ10　7.5Y3/1　暗灰褐色粘質土
Ⅰ11　7.5Y2/1　黒褐色砂質土　炭片多量に混じる　近代陶器含む
Ⅰ12　5Y5/2　淡褐灰色砂質土　コンクリートの砕片か
Ⅰ14　7.5Y2/1　黒褐色粘質土
Ⅰ15　暗黄灰褐～暗青褐灰色粘質土　色調モザイク状（7.5GY5/1（青緑部分）7.5Y4/1（灰色部分）　2.5Y4/1（黄灰部分））
Ⅰ16　2.5Y4/2　灰褐色砂質土　比較的均質　釉薬瓦片混じる
Ⅰ17　暗黄灰褐色粘質土　暗灰色（10Y3/1）部分と黄灰色（7.5Y5/2）部分が混じる　レンガ等含む
Ⅰ18　黄灰褐色粘質土　黄灰色粘土（5Y7/6）ブロックが目立つが暗灰色（10YR3/1）・褐灰色（7.5Y6/1）粘質土・砂質土の著しい混土層
Ⅰ19　黄灰色粘質土　Ⅰ18層と同じく黄灰粘質土（7.5Y7/2）の他、灰褐色粘質・砂質土（7.5Y6/1）等の混土層　Ⅰ18層よりやや褐色味うすれる
Ⅰ20　5Y3/1　暗褐色粘質土　比較的均質
Ⅰ21　黒灰褐色粘質土　木片等含む
Ⅰ29　褐色～灰褐色粘質土　褐色系統（10YR3/3）と灰褐色系統（7.5Y3/1）の粘質土の混土
Ⅰ30　暗青灰褐色粘質土　比較的均質　7.5Y5/1
Ⅰ35　5Y4/2　灰褐色粘質～砂質土　径10cm前後の礫多く含む　礫の間は灰褐色の粘り気を含む砂質土　陶磁器含む（近代印判染付等）

Ⅱ層　近世後期：宝暦大火以後～明治40年の堆積土

Ⅱ1a　5Y3/1　黒褐色粘質～砂質土　腐植質・陶磁器・釉薬瓦多く含む　釉薬瓦含む
Ⅱ1b　7.5Y4/1　灰色粘土　水性堆積か　板ガラス含む
Ⅱ1c　Ⅱ1b層と同じ　礫多く混じる　釉薬瓦・近代陶器含む
Ⅱ3a　7.5Y3/2　暗青灰褐色粘質土　径10cm大の礫多く混じる　砂質分含む
Ⅱ3b　Ⅱ3a層よりやや明るい色調で、礫も少ない　青灰色土ブロック少量含む
Ⅱ5　5Y3/2　暗灰色粘土　均質

Ⅱ’層　近世：堂形馬場整地以後～明治40年の造成土

Ⅱ'1　礫（栗石）層　径15cm大の礫主体【土塁残欠か】
Ⅱ'2　10YR4/3　暗灰黄褐色粘質土　炭片多く混じる【土塁残欠か】
Ⅱ'3　10YR4/2～4/3　暗黄灰褐色粘質土　Ⅰ1層よりわずかに灰色味強い【土塁残欠か】
Ⅱ'4　10YR5/4～4/4　灰黄褐色粘質土　黄色味強い　焼土塊・炭片顕著ではない【土塁残欠か】
Ⅱ'5　灰黄褐色砂質土（2.5Y4/2・10YR4/2）・暗灰色粘土（10YR4/1～3/1）混土層　径２cm大の礫多く混じる【土塁残欠か】

Ⅲ層　近世前期造成土・遺構埋土

Ⅲ1　2.5Y4/3　灰黄褐色砂　均質【堂形馬場砂整地層】
Ⅲ2　10YR5/1～5/2　黄褐灰色砂質土　若干粘質分混じる　比較的均質【堂形馬場砂整地層】
Ⅲ3　Ⅲ1・Ⅲ2層対応層
Ⅲ4　砂利層
Ⅲ5　10YR4/1～3/1　暗褐灰色粘質土　焼土塊・炭片・褐色粘質土塊・小礫多く混じる（モザイク状）【堂形馬場整地層】
Ⅲ6　10YR5/2～4/2　灰黄褐色粘質土　比較的均質【堂形馬場整地層】
Ⅲ7　褐色（10YR4/2～4/3）～褐灰色（10YR5/1～5/2）砂質土　やや粘性ありきわめて均質　混合物少ない【堂形馬場整地層】
Ⅲ8　5Y4/1～3/1　暗灰色粘質土　砂質混じる　青灰色粘土塊若干混じる　炭片・小礫混じる【SX01埋土】

Ⅳ層　近世初期整地層

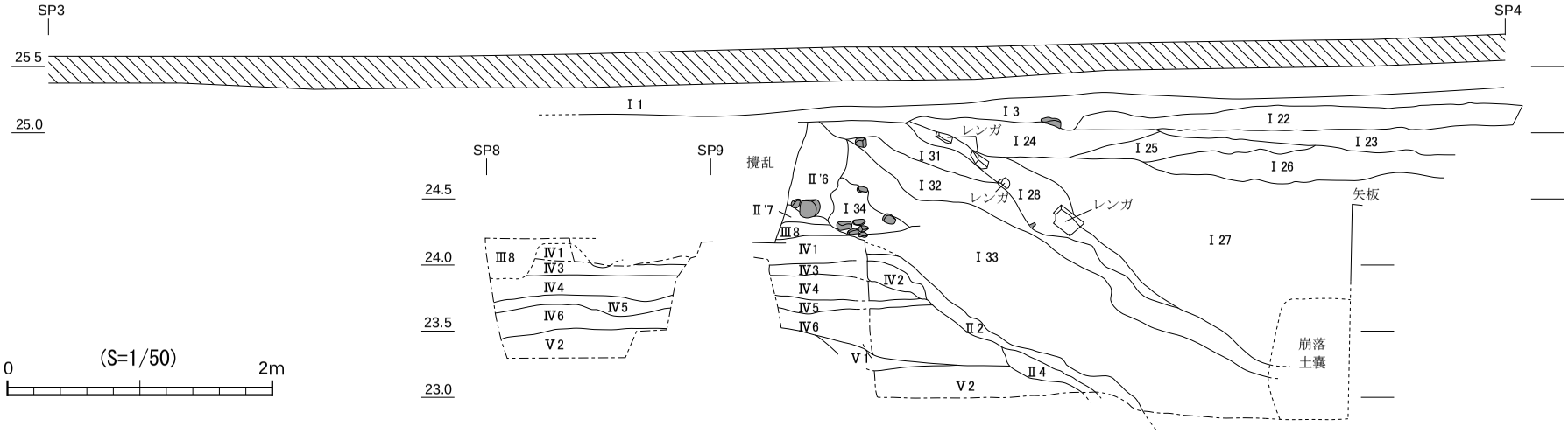
Ⅳ1　淡青灰黄色砂質土　酸化鉄含み橙色～赤色味帯びる（7.5YR4/4～10YR4/4）きわめて固い　色調モザイク状（10YR5/2（灰～黄）・2.5Y5/2（灰～黄）・7.5Y5/2（オリーブ茶））【遺構面（P01～05）】
Ⅳ3　7.5Y5/2　淡青灰黄色砂質土　Ⅳ1層との境に茶褐色に腐植土層わずかにはさむ
Ⅳ4　7.5Y5/1～4/1　淡青灰黄色砂質土　径数mm～２cm大の円礫多く混じる
Ⅳ5　7.5Y4/2・5Y4/2　淡褐灰色粘質土　上下の層より固くしまる　径数mm～２cm大の円礫若干混じる
Ⅳ6　7.5GY4/1・7.5Y4/1　暗青褐灰色粘質土　砂質気味となる部分もある　径１～３cm大の円礫若干含む　一見埋土に似てしまりは強くない

Ⅴ層　近世以前の層：古代包含層

Ⅴ2　5Y4/1～3/1　灰色粘質土　粘性強く均質　2.5Y4/1（黄灰部分）

第112図　南岸調査区　2007地点　土層断面図　SP1-2（S=1/50）

①SP3-4・②SP8-9 土層断面



Ⅰ層　近現代層：明治40年以降の土層（堀埋立土・造成土）
Ⅰ1　砕石層
Ⅰ3　砂層
Ⅰ22　2.5GY3/1　灰褐色粘質土　比較的均質　ややシルト質
Ⅰ23　7.5GY6/1　灰黄色粘質土　粘性高い
Ⅰ24　灰黄褐色粘質土　灰黄色粘土塊（7.5GY6/1）・灰褐色粘質土（2.5GY3/1）の混合土　マーブル状
Ⅰ25　黄灰褐色粘質土　Ⅰ24層に類似するが灰褐色土の比率がやや高い
Ⅰ26　暗黄灰褐色粘質土　礫混土　Ⅰ25層に類似するが径１cm程度の礫・炭片等多く混じり著しい混土層となっている
Ⅰ27　暗青灰褐色粘質土　青灰色土（7.5GY5/1）と暗灰褐色土（7.5Y4/1）の混土層であるがⅠ24～Ⅰ26層にくらべると均質
Ⅰ28　暗灰褐色粘質土　炭片・レンガ多く混じる　レンガは流れ込んだような状況を呈する
Ⅰ31　7.5Y3/1　暗青灰褐色粘質～砂質土　やや砂質気味　径２cm大の礫少量混じる
Ⅰ32　7.5Y3/1　暗青灰褐色粘質～砂質土　礫混じり土　Ⅰ31層に類似するが径２～５cm大の礫多く混じる
Ⅰ33　7.5Y3/1　暗青灰褐色粘質～砂質土　Ⅰ31層に類似するが比較的均質
Ⅰ34　7.5Y3/1　Ⅰ32層とほぼ同じ　Ⅰ33層中にラミナ状に堆積

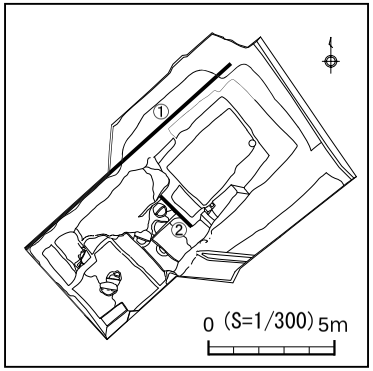
Ⅱ層　近世後期：近世後期～明治40年の堆積土
Ⅱ2　黒褐色砂質土
Ⅱ4　Ⅱ3層に類似

Ⅱ’層　近世：堂形馬場整地以後～明治40年の造成土
Ⅱ’6　灰橙褐色粘質土　淡灰褐色土に酸化鉄分多く混じり標記の色調を呈する　炭片・陶磁器含む　2.5Y4/6（主な部分）
10Y4/1（灰褐色部分）【土塁盛土か】
Ⅱ’7　灰褐色粘質土　標記色調をベースとし焼土塊・炭片・黄褐色粘質土小塊・径５cm大礫・酸化鉄分等混じる
ベース7.5Y4/1【土塁盛土か】

Ⅲ層　近世前期造成土・遺構埋土
Ⅲ8　5Y4/1～3/1　暗灰色粘質土　砂質混じる　青灰色粘土塊若干混じる　炭片・小礫混じる【SX01埋土】

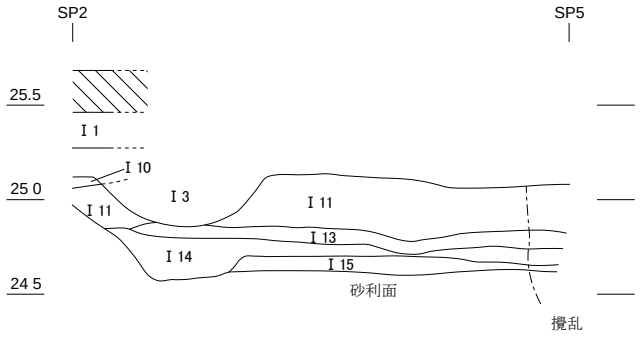
Ⅳ層　近世初期整地層
Ⅳ1　淡青灰黄色砂質土　酸化鉄含み橙色～赤色味帯びる（7.5YR4/4～10YR4/4）　きわめて固い
色調モザイク状（10YR5/2（灰～黄）・2.5Y5/2（灰～黄）・7.5Y5/2（オリーブ茶））【遺構面（P01～05）】
Ⅳ2　淡青灰色砂質土　ややもろく　径２cm大以下の礫混じる　Ⅳ4層よりもろい
Ⅳ3　7.5Y5/2　淡青灰黄色砂質土　Ⅳ1層との境に茶褐色に腐植土層わずかにはさむ
Ⅳ4　7.5Y5/1～4/1　淡青灰黄色砂質土　径数mm～２cm大の円礫多く混じる
Ⅳ5　7.5Y4/2・5Y4/2　淡褐灰色粘質土　上下の層より固くしまる　径数mm～２cm大の円礫若干混じる
Ⅳ6　7.5GY4/1・7.5Y4/1　暗青褐灰色粘質土　砂質気味となる部分もある　径１～３cm大の円礫若干含む　一見埋土に似て、しまりは強くない

Ⅴ層　近世以前の層：古代包含層
Ⅴ1　青褐色粘質土　粘性強い　Ⅴ2層上位に部分的に堆積　（7.5GY4/1）
Ⅴ2　5Y4/1～3/1　灰色粘質土　粘性強く均質　2.5Y4/1（黄灰部分）

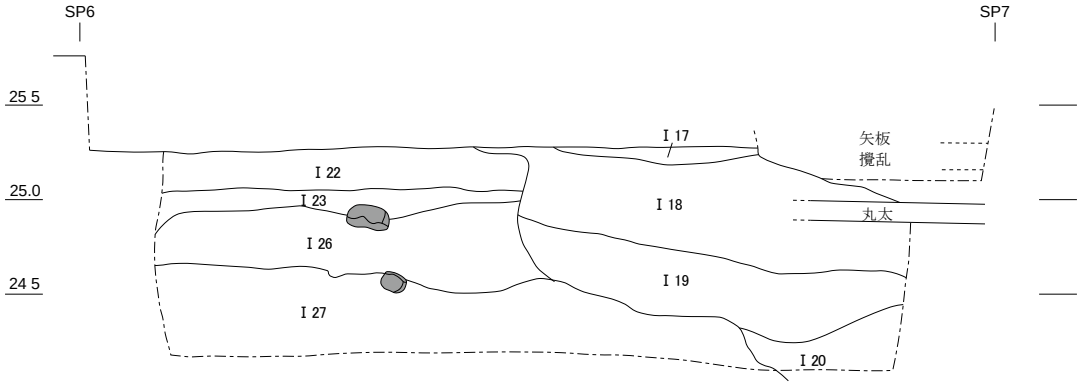


第113図　南岸調査区　2007地点　土層断面図　SP3-4・SP8-9（S=1/50）

①SP2-5 土層断面

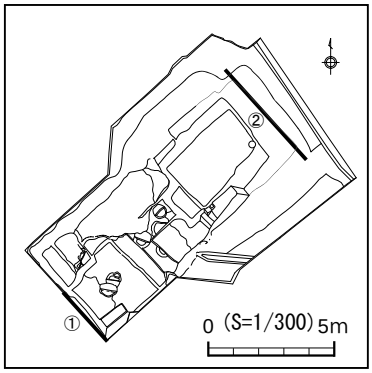


②SP6-7 土層断面

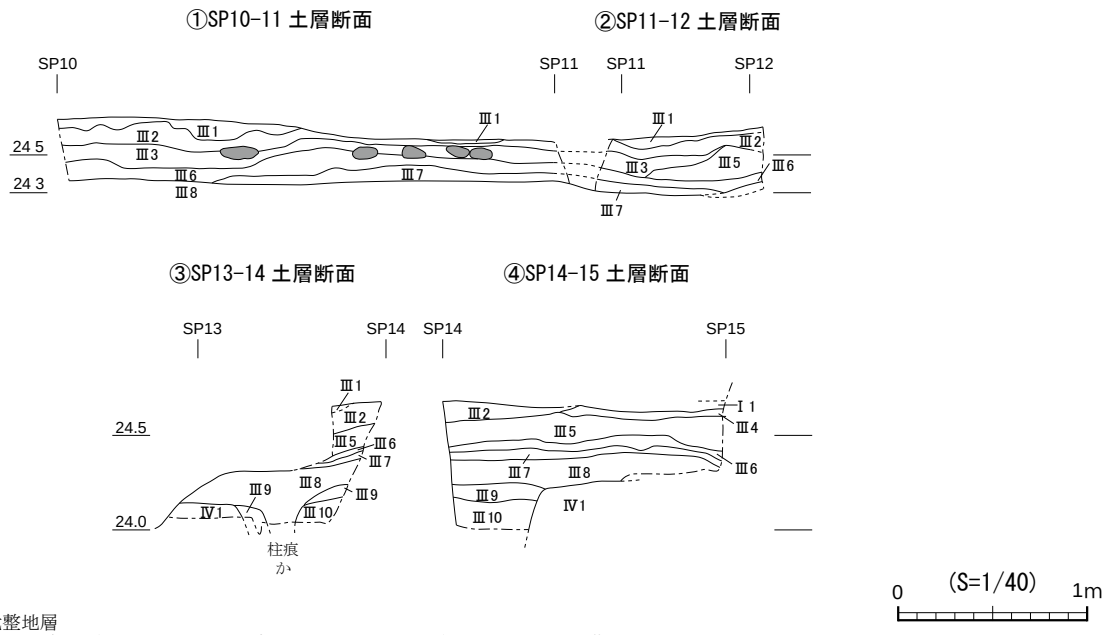


0 (S=1/40) 1m

Ⅰ層：近現代層：明治40年以降の土層（堀埋立土・造成土）
Ⅰ1　砕石層
Ⅰ3　砂層
Ⅰ10　7.5Y3/1　暗灰褐色粘質土
Ⅰ11　7.5Y2/1　黒褐色砂質土　炭片多量に混じる　近代陶器含む
Ⅰ13　7.5Y2/1　黒褐色砂質土　灰白色層（＝灰か）が入る　炭片きわめて多く混じる
Ⅰ14　7.5Y2/1　黒褐色粘質土
Ⅰ15　暗黄灰褐～暗青褐灰色粘質土　色調モザイク状（7.5GY5/1（青緑部分）　7.5Y4/1（灰色部分）　2.5Y4/1（黄灰部分））
Ⅰ17　暗黄灰褐色粘質土　暗灰色（10Y3/1）部分と黄灰色（7.5Y5/2）部分が混じる　レンガ等含む
Ⅰ18　黄灰褐色粘質土　黄灰色粘土（5Y7/6）ブロックが目立つが暗灰色（10YR3/1）・褐灰色（7.5Y6/1）粘質土・砂質土の著しい混土層
Ⅰ19　黄灰色粘質土　Ⅰ18層と同じく黄灰粘質土（7.5Y7/2）の他、灰褐色粘質・砂質土（7.5Y6/1）等の混土層　Ⅰ18層よりやや褐色味うすれる
Ⅰ20　5Y3/1　暗褐色粘質土　比較的均質
Ⅰ22　2.5GY3/1　灰褐色粘質土　比較的均質　ややシルト質
Ⅰ23　7.5GY6/1　灰黄色粘質土　粘性高い
Ⅰ26　暗黄灰褐色粘質土　礫混土　Ⅰ25層に類似するが径１㎝程度の礫・炭片等多く混じり著しい混土層となっている
Ⅰ27　暗青灰褐色粘質土　青灰色土（7.5GY5/1）と暗灰褐色土（7.5Y4/1）の混土層であるがⅠ24～Ⅰ26層にくらべると均質



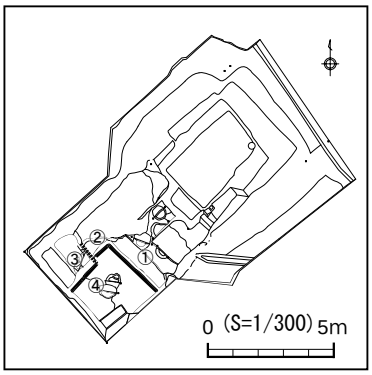
第 114 図　南岸調査区　2007 地点　土層断面図　SP2-5・SP6-7（S=1/40）



Ⅰ層：近代整地層
Ⅰ1　暗黄灰褐～暗青褐灰色粘質土　7.5GY5/1（青緑部分）　7.5Y4/1（灰色部分）　2.5Y4/1（黄灰部分）
色調モザイク状

Ⅲ層：近世前期造成土・遺構埋土
Ⅲ1　2.5Y4/3　灰黄褐色砂　均質【堂形馬場整地層】
Ⅲ2　10YR5/1～5/2　黄褐灰色砂質土　若干粘質分混じる　比較的均質【堂形馬場整地層】
Ⅲ3　10YR4/1～3/1　暗褐灰色粘質土　焼土塊・炭片・褐色粘質土塊・小礫多く混じる（モザイク状）
【堂形馬場整地層】
Ⅲ4　10YR4/2～4/3　褐灰色砂利層　径１cm以下の礫主体だが数cm大の礫も多く混じる【堂形馬場整地層】
Ⅲ5　10YR4/2～4/3　暗黄褐灰色砂質土　粘質部分含む　径２～10cm大礫多く混じる　焼土塊・炭片少ない
【堂形馬場整地層】
Ⅲ6　10YR5/2～4/2　灰黄褐色粘質土　比較的均質【堂形馬場整地層】
Ⅲ7　Ⅲ6層と同じ特徴、色調　但し礫はあまり混じらない【堂形馬場整地層】
Ⅲ8　褐色（10YR4/2～4/3）～褐灰色（10YR5/1～5/2）砂質土　やや粘性あり　きわめて均質　混合物少ない
【堂形馬場整地層】
Ⅲ9　10YR4/2～3/2　暗灰黄褐色粘質土　粘性やや強くⅢ8層に比べやや暗い【P04埋土】
Ⅲ10　褐灰（10YR4/1）・黒褐（2.5Y2/1）・黄褐色（10YR5/4～5/6）粘質土（混土）　モザイク状の混土
【P04埋土】

Ⅳ層：近世初期整地層
Ⅳ1　淡青灰黄色砂質土　酸化鉄含み橙色～赤色味帯びる（7.5YR4/4～10YR4/4）　きわめて固い
10YR5/2（灰～黄）　2.5Y5/2（灰～黄）　7.5Y5/2（オリーブ茶）【遺構面（P01～05）】



第 115 図　南岸調査区　2007 地点　土層断面図　SP10-11・SP11-12・SP13-14・SP14-15（S=1/40）

平を受けていると考えられる。また、両者は重複しており、P06 が P07 に切り込まれている。P06 は平面楕円形とみられ、長径 53 cm以上、短径 53 cm、深さ 15 cmを測る。P07 は平面楕円形で、長径 67 cm、短径 54 cm、深さ 12 cmを測る。

2006-2 地点

（１）概要（第 109・110・117 ①図）

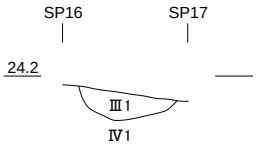
本調査地点は、現況市道となっている部分に相当する。調査では、大別層のⅠ・Ⅱ’・Ⅲ・Ⅳ層を確認した。Ⅱ’層は堂形馬場の砂整地層の造成以降明治 40 年(1907)のいもり堀埋立直前までの土層で、馬場の土塁を造成する盛土である。Ⅲ層については、堂形馬場の整地土を構成するⅢａ層、堂形馬場造成以前の地盤を形成するⅢｂ層に細別される。Ⅳ層はいもり堀構築当初の法面の基盤層である。

（２）遺構

①石積側溝（近代）（第 117 ①・118 ①③・119 図）

北西－南東方向に延びる戸室石による延長 4.25 ｍの２段の石積みと、その前面（南側）に接する逆Ｌ字状のコンクリート構造物で構成された近代側溝を検出した。石積みを構成する石材の控えは短く、青戸室石が多い。2007･2006-1 地点でも同様の側溝が確認されており、一連のものと考えられる。

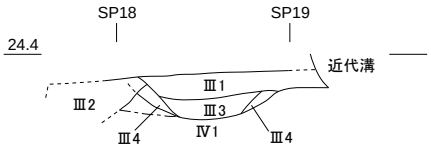
①P01 土層断面



Ⅲ層：近世前期遺構埋土
Ⅲ1　5Y3/1～7.5Y3/1　暗青褐色粘質土　粘性強い　炭片干混じる

Ⅳ層：近世初期整地層
Ⅳ1　淡青灰黄色砂質土【遺構面（P01～05）】
　　＝SP1-2・SP3-4・SP8-9断面Ⅳ1層

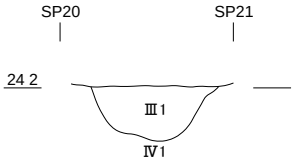
②P02 土層断面



Ⅲ層：近世前期造成土・遺構埋土
Ⅲ1　褐～褐灰色砂質土【堂形馬場整地層】＝SP1-2断面Ⅲ14層
Ⅲ2　暗灰色粘質土【SX01埋土】＝SP1-2断面Ⅲ15層
Ⅲ3　2.5YR3/1～2/1　黒褐色粘質土　灰黄褐色砂質土（10YR5/4～5/6）ラミナ状に混じる【P02埋土】
Ⅲ4　2.5YR3/1～2/1　黒褐色粘質土　比較的均質【P02埋土】

Ⅳ層：近世初期整地層
Ⅳ1　淡青灰黄色砂質土【遺構面（P01～05）】＝SP1-2・SP3-4・SP8-9断面Ⅳ1層

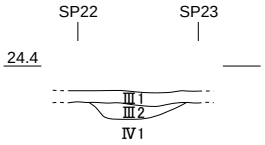
③P03 土層断面



Ⅲ層：近世前期遺構埋土
Ⅲ1　10YR4/1～7.5YR4/2　灰褐色粘質土　焼土塊・炭片若干混じる　比較的均質

Ⅳ層：近世初期整地層
Ⅳ1　淡青灰黄色砂質土【遺構面（P01～05）】＝SP1-2・SP3-4・SP8-9断面Ⅳ1層

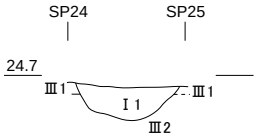
④P05 土層断面



Ⅲ層：近世前期造成土・遺構埋土
Ⅲ1　褐～褐灰色砂質土　SP1-2Ⅲ14層に対応【堂形馬場整地層】
Ⅲ2　10YR4/2～4/3　灰黄褐色粘質土　やや砂質分混じる　炭片若干混じる【P05埋土】

Ⅳ層：近世初期整地層
Ⅳ1　淡青灰黄色砂質土【遺構面（P01～05）】＝SP1-2・SP3-4・SP8-9断面Ⅳ1層

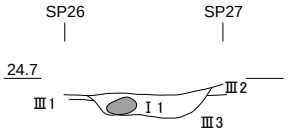
⑤P06 土層断面



Ⅰ層：近代遺構埋土
Ⅰ1　10YR4/1～4/3　灰褐色砂質土　炭片　径２～５㎝大礫多く混じる【P06埋土】

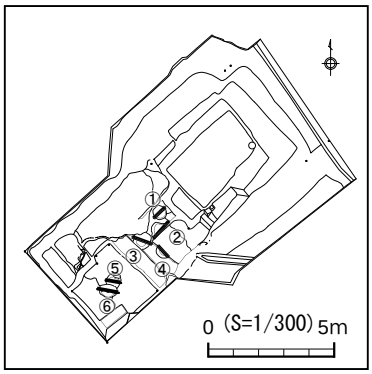
Ⅲ層：近世前期造成土
Ⅲ1　灰黄褐色砂（質土）【堂形馬場整地層】＝SP1-2断面Ⅲ1層
Ⅲ2　褐灰色砂質土【堂形馬場整地層】＝SP1-2断面Ⅲ2・Ⅲ5層に対応

⑥P07 土層断面



Ⅰ層：近代遺構埋土
Ⅰ1　10YR・2.5Y・5Y2/1　黒褐色粘質土　炭片　径２～10㎝大礫顕著に混じる【P07埋土】

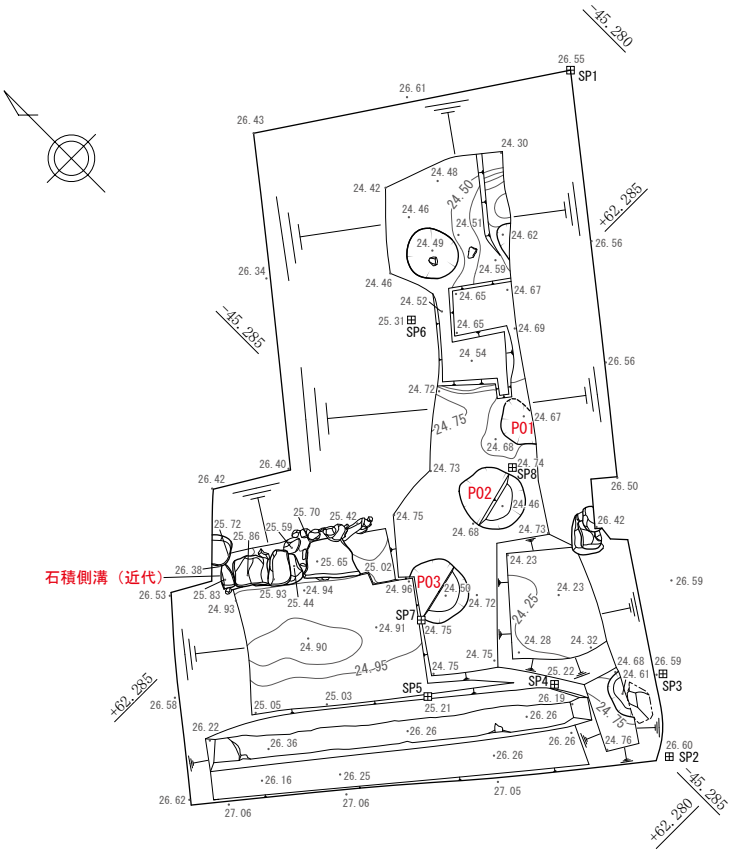
Ⅲ層：近世前期造成土
Ⅲ1　小砂利層
Ⅲ2　灰黄褐色砂（質土）【堂形馬場整地層】＝SP1-2断面Ⅲ1層に対応か
Ⅲ3　褐灰色砂質土【堂形馬場整地層】＝SP1-2断面Ⅲ2層に対応か



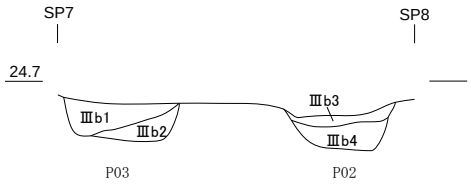
0 (S=1/40) 1m

第 116 図　南岸調査区　2007 地点　土層断面図　P01 ～ P03・P05 ～ P07（S=1/40）

①2006-2地点平面図

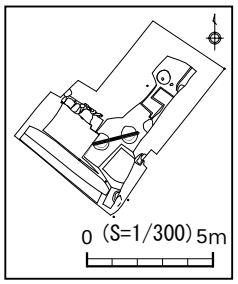


②P02・P03土層断面

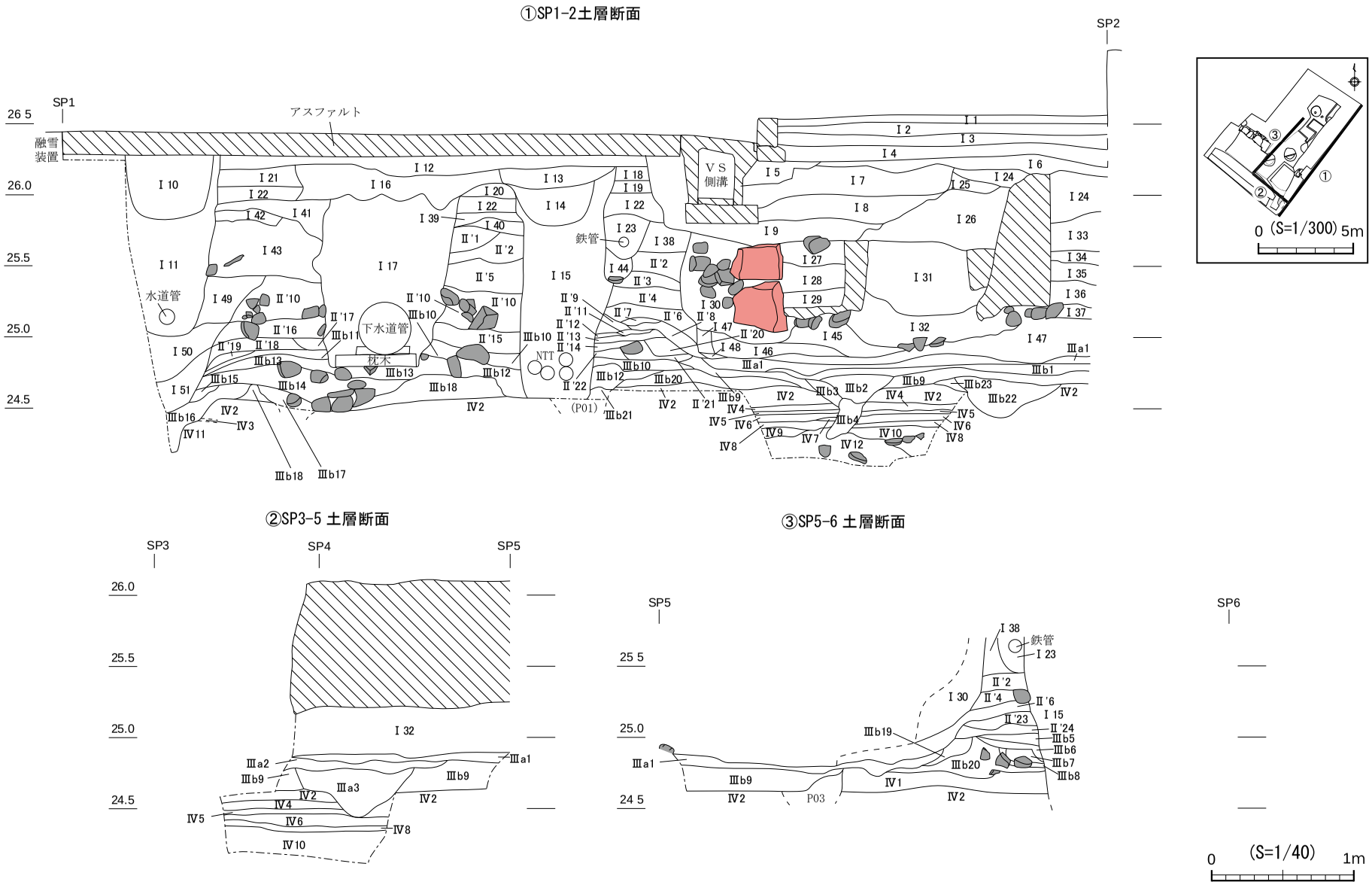


Ⅲb層：近世前期遺構埋土：堂形馬場造成以前
Ⅲb1　濁灰褐色粘砂質土【P02埋土】
Ⅲb2　濁灰褐色粘質土【P02埋土】
Ⅲb3　濁灰黄褐色細砂【P03埋土】
Ⅲb4　暗灰色粘質土　青灰色粘土ブロック混入【P03埋土】

0 (S=1/40) 1m



第 117 図　南岸調査区　2006-2 地点　平面図（S=1/80）、土層断面図　P02・P03（S=1/40）



第 118 図　南岸調査区　2006-2 地点　土層断面図　SP1-2・SP3-5・SP5-6（S=1/40）

Ⅰ層　近現代層
Ⅰ1　レンガブロック　歩道の舗装用
Ⅰ2　灰色細砂　歩道の路床
Ⅰ3　褐色砂利層　歩道の路床
Ⅰ4　海砂層　ＶＳ側溝歩道造成時盛土層
Ⅰ5　暗灰褐色粗砂　径１cm前後の砕石混入【ＶＳ側溝埋設時の整地層】
Ⅰ6　灰褐色砂質土　径１cm前後の砕石混入【ＶＳ側溝埋設時の整地層】
Ⅰ7　灰黄褐色土【ＶＳ側溝埋設時の整地層】
Ⅰ8　濁灰色砂質土　径１～10cm大の小石混入【ＶＳ側溝埋設時の整地層】
Ⅰ9　暗灰褐色石粗砂　径１cm前後の砕石混入【ＶＳ側溝埋設時の整地層】
Ⅰ10　砕石層【水道管埋設掘方埋土】
Ⅰ11　海砂層【水道管埋設掘方埋土】
Ⅰ12　砕石層【アスファルトの路床】
Ⅰ13　濁暗灰色粗砂　砕石混入【ＮＴＴケーブル埋設覆土】
Ⅰ14　細砕石層【ＮＴＴケーブル埋設覆土】
Ⅰ15　海砂層【ＮＴＴケーブル埋設覆土】
Ⅰ16　砕石層【下水道土管覆土】
Ⅰ17　海砂層【下水道土管覆土】
Ⅰ18　濁灰褐色石粗砂　径１～２cmの小石混入
Ⅰ19　暗灰色石砂質土　径１cm未満の小石混入
Ⅰ20　灰黄褐色石細砂
Ⅰ21　灰色砂質土　径１cm未満の小石混入、固くしまる
Ⅰ22　濁灰褐色石粘質土
Ⅰ23　濁褐灰色粘質土【鉄管覆土】
Ⅰ24　褐灰黄褐色細砂
Ⅰ25　海砂層
Ⅰ26　濁暗灰色砂質土　茶褐色粘質土ブロック混入
Ⅰ27　濁暗灰色砂質土　ビニール混入【側溝内堆積土】
Ⅰ28　濁灰色粘砂質土　小石混入【側溝内堆積土】
Ⅰ29　濁灰色細砂【側溝内堆積土】
Ⅰ30　濁灰色粘質土【近代石積側溝の裏込層】
Ⅰ31　灰褐色砂質土
Ⅰ32　暗灰褐色砂質土
Ⅰ33　濁灰色粘砂質土
Ⅰ34　濁灰色粘質土
Ⅰ35　暗灰色砂質土
Ⅰ36　濁褐灰色粘砂質土
Ⅰ37　灰褐色粘砂質土
Ⅰ38　明灰褐色粘土　径10cm未満の小石・戸室石片混入
Ⅰ38　濁灰色粘土　炭粒混入
Ⅰ40　濁明灰褐色粘質土　茶褐色粘質土ブロック・淡褐色粘質土ブロック混入
Ⅰ41　濁暗褐色粘質土　固くしまる　炭粒・焼土粒混入
Ⅰ42　濁黒灰色粘質土
Ⅰ43　濁灰褐色粘質土
Ⅰ44　濁暗灰色粘質土
Ⅰ45　濁灰色粘砂質土
Ⅰ46　濁灰褐色粘質土
Ⅰ47　灰色粘土
Ⅰ48　濁灰色粘質土
Ⅰ49　濁青灰色粘質土　固くしまる　径５cm前後の小石混入【明治40年堀埋立土】
Ⅰ50　灰色粘土【明治40年堀埋立土】
Ⅰ51　灰色粘砂質土【明治40年堀埋立土】

Ⅱ'層　近世造成土（堂形馬場造成～明治40年堀埋立て）：土塁盛土
Ⅱ'1　濁褐灰色粘砂質土
Ⅱ'2　濁灰褐色粘質土　炭粒混入
Ⅱ'3　濁暗灰色粘砂質土
Ⅱ'4　濁褐灰色粘質土　淡褐色粘質土ブロック混入
Ⅱ'5　濁暗灰色粘質土
Ⅱ'6　濁褐灰色粘質土　黒灰色粘質土粒・淡褐色粘質土ブロック混入
Ⅱ'7　濁灰褐色粘質土
Ⅱ'8　濁灰色粘土　淡褐色粘質土ブロック混入
Ⅱ'9　濁灰色粘土　粘土系
Ⅱ'10　濁灰色粘質土　径20～30cm大の石混入　Ⅱ'5層と近似
Ⅱ'11　濁暗灰色粘土　粘土系
Ⅱ'12　濁灰色粘質土　粘土系
Ⅱ'13　暗褐色粘土　腐植物混入　粘土系
Ⅱ'14　淡灰色粘砂質土
Ⅱ'15　暗灰色粘土　腐植物混入
Ⅱ'16　濁青灰色粘質土　径５～20cmの石混入
Ⅱ'17　濁灰色粘質土　径５cm未満の小石混入
Ⅱ'18　灰色粘土　径１～10cmの小石混入
Ⅱ'19　灰色粘質土
Ⅱ'20　茶褐色粘砂質土
Ⅱ'21　灰色粘土
Ⅱ'22　灰色粘砂質土
Ⅱ'23　濁黒灰色粘質土　青灰色粘質土ブロック混入
Ⅱ'24　濁青灰色粘土

Ⅲa層　近世前期造成土：堂形馬場整地土
Ⅲa1　灰黄褐色砂【堂形馬場砂整地層】
Ⅲa2　濁黄褐色細砂【堂形馬場砂整地層】
Ⅲa3　濁暗褐色粘砂質土【ピット埋土】

Ⅲb層　近世前期造成土：堂形馬場造成以前の地盤
Ⅲb1　濁灰褐色粘質土
Ⅲb2　濁灰色粘質土【木の根カクランか】
Ⅲb3　暗褐灰色粘砂質土【木の根カクランか】
Ⅲb4　濁灰色砂質土【木の根カクランか】
Ⅲb5　濁暗灰色粘土
Ⅲb6　濁黒灰色粘土
Ⅲb7　青灰色粘質土　径10～15cmの石混入
Ⅲb8　濁黒灰色粘土
Ⅲb9　暗褐色粘砂質土
Ⅲb10　濁青灰色粘質土
Ⅲb11　灰色粘質土　径１cm前後の小石混入
Ⅲb12　濁青灰色粘砂質土
Ⅲb13　やや暗い青灰色粘土
Ⅲb14　濁灰色粘質土
Ⅲb15　濁暗灰色粘質土
Ⅲb16　暗灰色粘砂質土
Ⅲb17　暗灰色粘質土
Ⅲb18　青灰色細砂
Ⅲb19　濁褐灰色粘質土
Ⅲb20　濁青灰色粘質土
Ⅲb21　黒灰色粘土【P01埋土】
Ⅲb22　濁暗褐色粘砂質土【ピット】
Ⅲb23　濁褐灰色砂質土

Ⅳ層　近世初期整地層：いもり堀法面を形成
Ⅳ1　暗青灰色細砂
Ⅳ2　青灰色細砂　非常に固くしまる
Ⅳ3　黒灰色細砂
Ⅳ4　灰黄色細砂　固くしまる　上面に黒層あり【ある時期の路盤か】
Ⅳ5　濁茶褐色細砂　固くしまる
Ⅳ6　灰色細砂　固くしまる
Ⅳ7　濁灰色細砂　固くしまる
Ⅳ8　濁黄褐色粘質土
Ⅳ9　濁暗褐色粘砂質土
Ⅳ10　褐灰色粘質土　径５～20cmの石多く混入
Ⅳ11　青灰色細砂　固くしまる
Ⅳ12　灰茶褐色粘質土

第 119 図　南岸調査区　2006-2 地点　土層注記　SP1-2・SP3-5・SP5-6

②いもり堀（第 117 ①・118 ①・119 図）

壁面の土層観察から、明治 40 年（1907）の埋立直前の堀法面と、構築当初の堀法面の可能性のある傾斜面を確認した。

③堂形馬場（第 118・119 図）

壁面の土層観察から、土塁の盛土直下で厚さ２～ 14 cmの均質な砂層を確認した。絵図との対比から、堂形馬場の一部と考えられ、当該砂層は整地層とみられる。同様の砂層は、近接する県埋文センター平成 16 年度調査区（２区）でも確認されている。また、いもり堀の法面際の南側で、上部から撹乱を受けているが､現況の頂部が約 25.8 m､幅 3.5 mを測る高まりを検出した。絵図との対比から、堀に接する土塁と考えられる。

④ピット（P01 ～ P03）（第 117・118 ①③・119 図）

いずれもⅢ層を基盤とし、Ⅱｂ層で埋め立てられたピットで、調査地点南半部で検出した。P01 は調査地点外に延長しており、一部の検出に留まる。平面形は楕円形ないし略円形と推定され、長径

54 ㎝、短径 36 ㎝以上を測る。P02 は平面楕円形で、長径 71 ㎝、短径 62 ㎝、深さ 24 ㎝を測る。P03 は平面略円形で、径 66 ㎝、深さ 22 ㎝を測る。

2006-1 地点

（１）概要（第 109・110・120 ①図）

本調査地点は、現況市道となっている部分にあたる。調査では、大別層Ⅰ～Ⅳ層を検出した。明治 40 年（1907）の堀埋立直前および近世前期のいもり堀南岸の法面を確認し、堀北岸の調査と合わせて、堀幅の推定が可能となった。また、土層断面の精査から、近世後期の辰巳用水を確認した。

（２）遺構

①石積側溝（近代）（第 120・121 ③図）

調査区中央で北西－南東方向に延びる戸室石による石積みを延長 4.9 ｍ分検出した。石積みは最大で２段で、裏込めには土および河原石が使用されていた。また、石材の控えは短く、青戸室石が多い。石積みの前面には逆Ｌ字状のコンクリートの構造物が２段重なって確認されており、近代の側溝と考えられる。調査地点壁面の土層観察から、もとは石積みの１段目下端付近が溝底面であったが、のちにⅠ 12 層の位置までかさ上げされたと考えられる。同様の構造をもつ側溝が 2007・2006-2 地点でも確認されており、一連のものと考えられるが、それらには底面のかさ上げは見られなかった。

②いもり堀（第 120・121 ②③図）

近世後期の造成土を挟んで、上下２面の法面を確認した。上面は、明治 40 年（1907）の堀埋立てにより埋没した面、下面は近世前期の面とみられる。

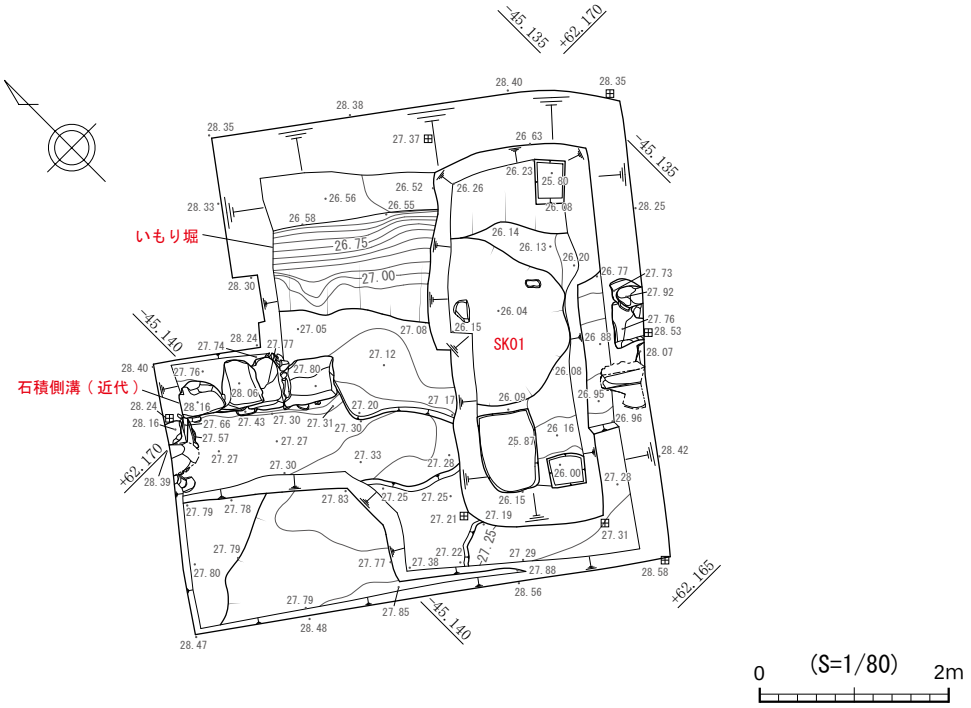
③辰巳用水（石管）（第 120 ②・121 図）

壁面の土層観察から、溝状の掘方とその上面を覆った整地土と見られる層を確認した。断面形を見ると、上部で幅 1.2 ｍ以上（南西肩は未確認）、深さ 40 ㎝程度を掘削した後、さらに幅 0.8 ｍ以上（南西肩は未確認）、深さ１ｍ以上（底は未確認）の一段低い掘方が掘られていた。絵図との対比から、石管を導水管とする辰巳用水の掘方と考えられるが、石管本体および敷石等の支持部材については検出されていない。

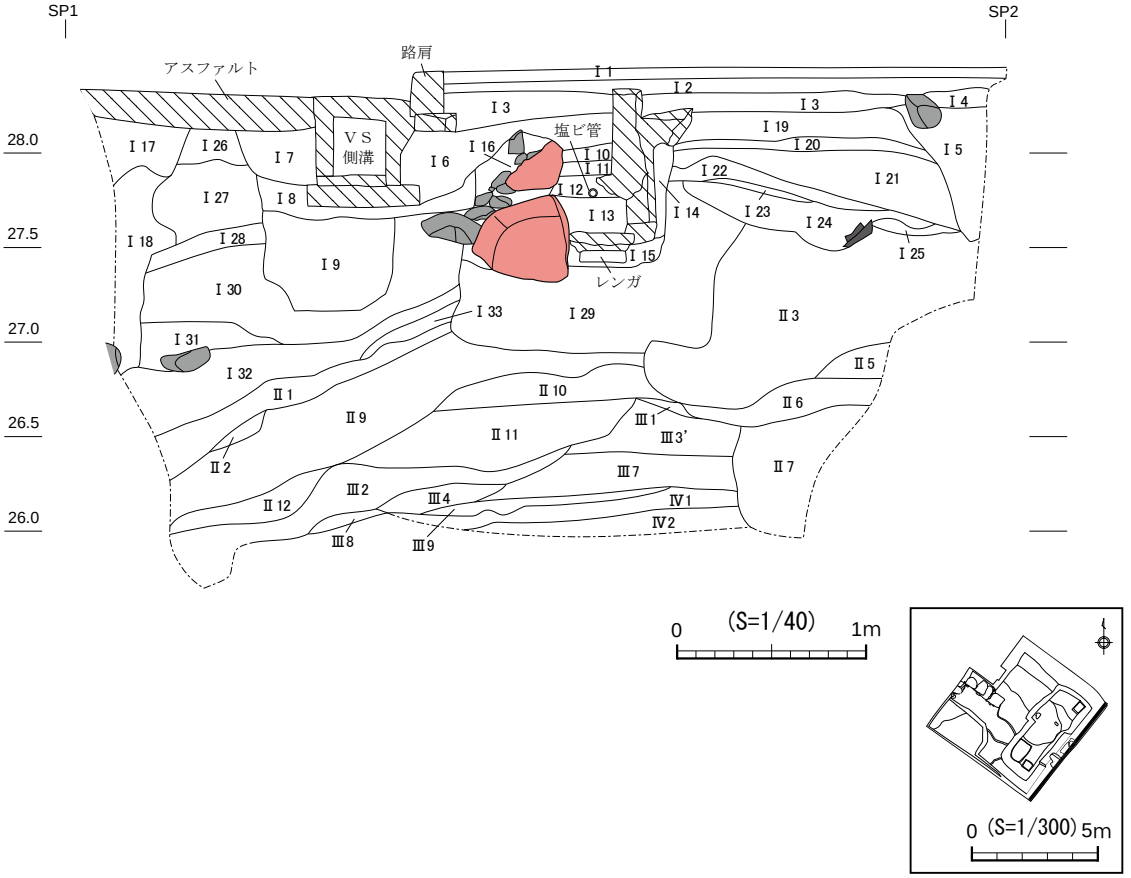
④土坑 SK01（第 120 ①・121 ②③図）

平面楕円形とみられる土坑状の遺構の一部を検出した。径 120 ㎝以上× 176 ㎝、深さ 57 ㎝以上を測る。土層断面の精査から、近世後期の盛土（Ⅱ層）を切り込んで掘削されているが、一気に埋め立てられた後、導水管石管の辰巳用水 SD01 が設置されたと考えられる。

①2006-1 地点平面図

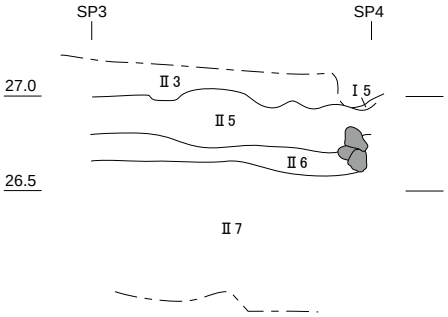


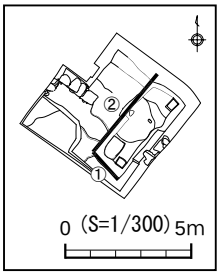
②SP1-2土層断面



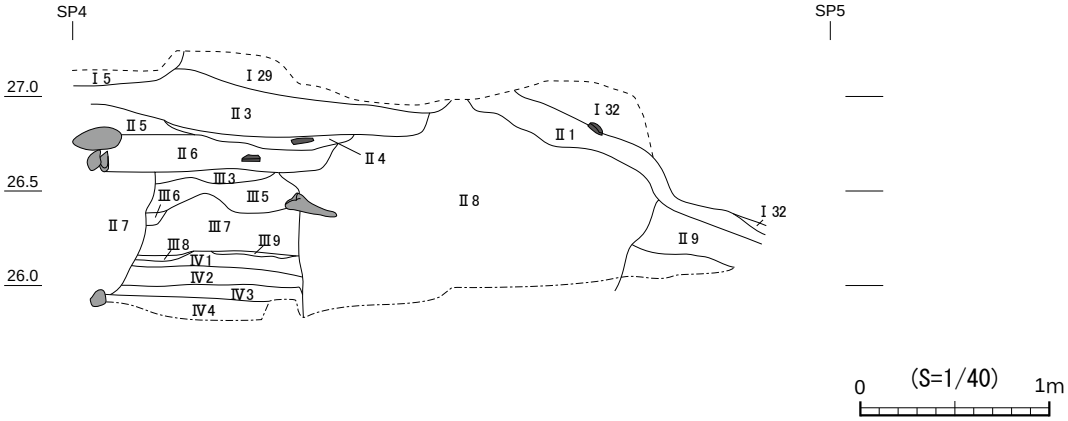
第 120 図　南岸調査区　2006-1 地点　平面図（S=1/80）、土層断面図　SP1-2（S=1/40）

①SP3-4土層断面





②SP4-5土層断面



③SP1-2・SP3-4・SP4-5土層注記

Ⅰ層　近現代層
Ⅰ1　レンガブロック【歩道の舗装用】
Ⅰ2　灰色細砂【歩道の路床】
Ⅰ3　褐色砂利層【歩道の路床】
Ⅰ4　コンクリート砕石層【歩道縁石の基礎】
Ⅰ5　灰褐色粘質土【建物基礎、解体後埋土】
Ⅰ6　海砂層【VS側溝、歩道造成時盛土層】
Ⅰ7　暗褐色砕石層【VS側溝埋設堀り方】
Ⅰ8　砕石層【VS側溝根固め】
Ⅰ9　海砂層【NTT埋設ケーブル掘り方】
Ⅰ10　濁黄褐色粘質土【戸室石積側溝内堆積土】
Ⅰ11　暗灰色粘砂質土【戸室石積側溝内堆積土】
Ⅰ12　コンクリート【戸室石積側溝内堆積土】
Ⅰ13　濁暗灰色砂質土【戸室石積側溝内堆積土】
Ⅰ14　濁褐色粘質土【コンクリート堀方埋土】
Ⅰ15　灰褐色粘質土【コンクリート堀方埋土】
Ⅰ16　濁褐灰色粘質土【戸室石積隙間、背後に入る層】
Ⅰ17　淡灰色砕石層【アスファルト舗装の路床（下水道敷設後）】
Ⅰ18　海砂層【下水道埋設掘り方埋土】
Ⅰ19　濁黄褐色粘質土
Ⅰ20　灰色細砂　径10cm未満の円礫含む
Ⅰ21　濁灰褐色粘土　淡褐色粘土ブロック混入
Ⅰ22　濁灰褐色粘土　径５mm前後の小石多く混入
Ⅰ23　褐灰色粘質土
Ⅰ24　濁灰色粘土　釉薬瓦・小石混入
Ⅰ25　灰色粘砂質土
Ⅰ26　砕石層【海砂混じり】
Ⅰ27　濁黄褐色粘質土
Ⅰ28　濁褐灰色粘質土　淡灰褐色粘質土ブロック混入
Ⅰ29　濁灰色粘土　淡褐灰色粘土ブロック・径10cm未満の礫・釉薬瓦混入
Ⅰ30　濁灰色粘質土　釉薬瓦多く混入
Ⅰ31　青灰色細砂　径５mm未満の小石多く混入
Ⅰ32　青灰色粗砂【明治40年いもり堀埋立土か】
Ⅰ33　灰色粘土【明治40年いもり堀埋立土か】

Ⅱ層　近世後期造成土
Ⅱ1　暗灰褐色粘質土　腐植物多く混入【明治40年埋立直前いもり堀表土層】
Ⅱ2　濁暗灰色砂質土
Ⅱ3　濁青灰色粘土【辰巳用水石管上面整地土】
Ⅱ4　濁灰色粘質土　釉薬瓦含む【辰巳用水石管掘方埋土か】
Ⅱ5　濁灰色粘砂質土【辰巳用水石管掘方埋土か】
Ⅱ6　青灰色粘質土　径５～20cm程度の石・釉薬瓦含む【辰巳用水石管掘方埋土か】
Ⅱ7　濁灰色粗砂（灰色粘土ブロック・径５～20cm大の石・木片（底部から）・燻瓦含む【辰巳用水石管掘方埋土か】
Ⅱ8　濁青灰色粘質土　径１～20cm大の石混入【SK01埋土】
Ⅱ9　濁灰色粘砂質土
Ⅱ10　暗灰色粘砂質土　粗砂・焼土粒・植物腐植質混入
Ⅱ11　濁灰色粘砂質土　径５～10cm大の小石多く混入
Ⅱ12　褐灰色粘質土

Ⅲ層　近世前期造成土
Ⅲ1　灰色粘砂質土
Ⅲ2　暗灰褐色粘質土　植物腐植質多く混入
【Ⅱ1層より古い時期のいもり堀表土層】
Ⅲ3　灰色細砂
Ⅲ3’灰色細砂　径10cm程度の小石含む
Ⅲ4　濁褐灰色粘質土
Ⅲ5　濁灰色粘質土
Ⅲ6　青灰色粗砂　径１cm大の小石含む
Ⅲ7　褐灰色粘土
Ⅲ8　褐灰色粘砂質土　植物腐植質含む
Ⅲ9　暗灰色粘質土　植物腐植質含む

Ⅳ層：近世初期造成土
Ⅳ1　青灰色細砂
Ⅳ2　濁青灰色粗砂　非常に硬くしまる　径２cm大の小石多く混入　Ⅳ1層との境目に薄く暗灰色粘質土層あり
Ⅳ3　灰色細砂　硬くしまる　粘土ブロック・粗砂混入
Ⅳ4　灰色粗砂　やや硬くしまる

第121図　南岸調査区　2006-1地点　土層断面図　SP3-4・SP4-5（S=1/40）、土層注記　SP1-2・SP3-4・SP4-5

2008 地点

（１）概要（第 109・110・122 ～ 125 図）

本調査地点は、南岸調査区の東端に位置し、調査地点を北端からＡ～Ｈ（Ａ区:延長 3.2 ｍ、Ｂ区:延長 2.2 ｍ、Ｃ区：延長 1.3 ｍ、Ｄ区：延長 2.0 ｍ、Ｅ区：延長 1.0 ｍ、Ｆ区：延長 2.1 ｍ、Ｇ区：延長 1.2 ｍ、Ｈ区：延長 4.0 ｍ）区に区分し、調査を実施した。いもり堀南側では、本報告の南岸調査区のほか、平成 15・16・19・20・24 年度に県埋文センターによる堂形調査区の発掘調査が行われた［石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター 2010・2012、石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター 2014c］。本地点のＤ区南部～Ｈ区北端は県埋文センター平成 15 年度Ｉ区のＢＣ１・２区と重複している。また、堂形調査区の調査成果から、戦国時代末期～江戸時代初期に存在した屋敷地区画溝・畠地・堀などの遺構が、慶長～元和年間（1595 ～ 1624）の堂形造成、および寛永８（1631）年の大火を契機とした堂形地区の改変により廃絶したことが判明している。

調査地点北部は遺構の残りが良く、近世初期～後期の遺構を検出した。南部は削平を受けている部分が多く、主に近世前期以前の遺構を検出した。調査地点全体では、大別層Ｉ～Ｖ層を確認した。また、近世層を近世初期（～寛永大火（寛永８年（1631））（Ⅳ層）、寛永大火後～宝暦大火（宝暦９年（1759））（Ⅲ層）、宝暦大火後（Ⅱ層）の３段階に分類したが、各段階で複数の遺構面が検出されており、近世後期（宝暦大火後）のⅡ層について、Ⅱａ～Ⅱｄ層をそれぞれ基盤とする４面（1a ～ 1d 面）、近世前期（寛永大火～宝暦大火）のⅢ層について、Ⅲａ層・Ⅲｂ層をそれぞれ基盤とする２面（2a・2b 面）、近世初期（～寛永大火）のⅣ層について、Ⅳａ層～Ⅳｄ層をそれぞれ基盤とする４面（3a ～ 3d 面）を確認した。

（２）遺構

①1a 面（Ⅱａ層上面）の遺構

いもり堀　（第 124 ①・126・127・135 図）

Ａ区北側で、明治 40 年に埋め立てられたいもり堀の南岸を検出した。瓦および陶磁器の出土が見られた。

②1b 面（Ⅱｂ層上面）の遺構

SD01（第 124 ①・126・127・135 図）

Ｂ区で検出した北西－南東方向に延びる溝状遺構。幅 96 ～ 116 ㎝、深さ約 45 ㎝を測る。掘方内部から凝灰岩製の石管を３本分検出しており、辰巳用水の導水管と判断される。石管の断面形は方形で、全体を検出できた中心の石管の計測値は、１辺 40 ㎝、長さ 114 ㎝を測る。また、確認できた石管上面及び側面には、細長く深い斜め方向のノミ加工と、それに直行したまばらに細い線状のノミ加工が施されており、各石管の上面端部（小口から４～９㎝の中央部）に、石管の連結を強固にする締め合せのための長辺３～４㎝、短辺３㎝、深さ約３㎝の平面長方形の穴があけられていた。石管の継目は松脂状のもので接着されていた。また、継目の下には沈下防止の敷石が置かれていた。敷石の計測値は、北西側で検出したものが長さ 60 ㎝、幅（北側）38 ㎝、幅（南側）43 ㎝、厚さ 17 ㎝、南東側で検出したものが長さ 67 ㎝、幅（北側）43 ㎝、幅（南側）31 ㎝、厚さ（北側）18 ㎝、厚さ（南側）20 ㎝以上を測る。石管・敷石の下から玉石敷を検出した。当初、石管に伴うものと考えたが、壁面の土層断面の精査から、掘方に含まれておらず、その下の SK03 の一部であることが判明した。

なお、辰巳用水の導水管については、当初木製だったものが、天保 12（1841）頃以降、金屋石（凝灰岩）製石管に替えられていることから［石川県金沢城調査研究所 2016b］、この石管も当該期に設置されたと考えられる。

P01（第 124 ①・137 ①図）

Ａ区北側で確認したピット。掘方の北側はいもり堀に切り込まれていた。平面楕円形と推定され、

長径 34 cm以上、短径 25 cm、深さ４cmを測る。

③1c 面（Ⅱｃ層上面）形成以後の遺構

P02（第 124 ②・126・127・135・137 ②図）

Ｂ区で北半部を検出したピットで、平面楕円形ないし略円形と推定され、長径 68 cm、短径 26 cm以上、深さ 23 cmを測る。周辺および埋土の状況から上部が削平されているとみられ、1c 面の形成以後に本遺構が掘り込まれたと判断した。

④1c 面（Ⅱｃ層上面）の遺構

SD02（第 124 ②・126・127・135・137 ②図）

Ａ区北側で検出した北西－南東方向に延びる溝状遺構で、SD03 と平行する。幅 27 ～ 52 cm、深さは深いところで 20 cm程度を測り、東から西にかけて浅くなる。埋土中に宝暦大火（宝暦９年（1759））由来とみられる焼土・焼けた鉛が付着する石を多く含むが、基盤となるⅡｃ・ｄ層中の遺物が混入したものと考えられる。

SD03（第 124 ②・126・127・135 図）

Ａ区南側で検出した北西－南東方向に延びる溝状遺構で、SD02 に平行する。幅 50 ～ 60 cm、深さ 30 ～ 40 cmを測る。掘方北壁付近で棒状の木材を検出した。木材のほとんどは腐っており、原形をとどめていないが、近世後期の絵図との対比から、木樋を導水管とする辰巳用水掘方と考えられ、当該木材が木樋の一部である可能性がある。また、溝底面に長径 24 cm以上、短径 18 cmの平らな河原石が見られた。木樋の沈下防止のための敷石の可能性がある。磁器染付壺（P137）や鉄製品などが出土している。

⑤1d 面（Ⅱｄ層上面）形成以後の遺構

SK03（第 122・126・127・135 図）

Ａ区南端～Ｂ区にかけて検出した。調査当初はＡ区 SK05 とＢ区 SK03 の別遺構としてとらえていたが、その後の検討により同一遺構であることが判明した。本遺構は、辰巳用水石管掘方（SD01）の下で検出され、Ａ区側からＢ区側の石管南側へと展開する。SD01 石管の下にある栗石集中部分が石管掘方に含まれないことから、本遺構の一部と考えられる。また、辰巳用水（木樋）SD03 との関係から、SK03 → SD03 → SD01 という順で変遷したと考えられる。出土遺物には、19 世紀以降のものが含まれる。遺構は 2a 面で確認したが、上部が上面遺構により撹乱されているとみられること、および出土遺物の様相から、Ⅱｄ層の堆積以後に本遺構が掘り込まれたと考えられる。

⑥2a 面（Ⅲａ層上面）の遺構

SD05（第 122・126 ～ 128・135・136 図）

Ａ区中央部で検出した北西－南東方向に延びる溝状の遺構。幅は 160 ～ 190 cm、深さは 23 ～ 53 cmを測る。埋土には 18 世紀中頃以前の遺物を含み、焼土や炭化物の混じりは著しくないものの、宝暦大火を契機として埋め立てられたと判断した（Ⅱｄ層）。また、遺構確認面は、南から北にむかって傾斜していた。

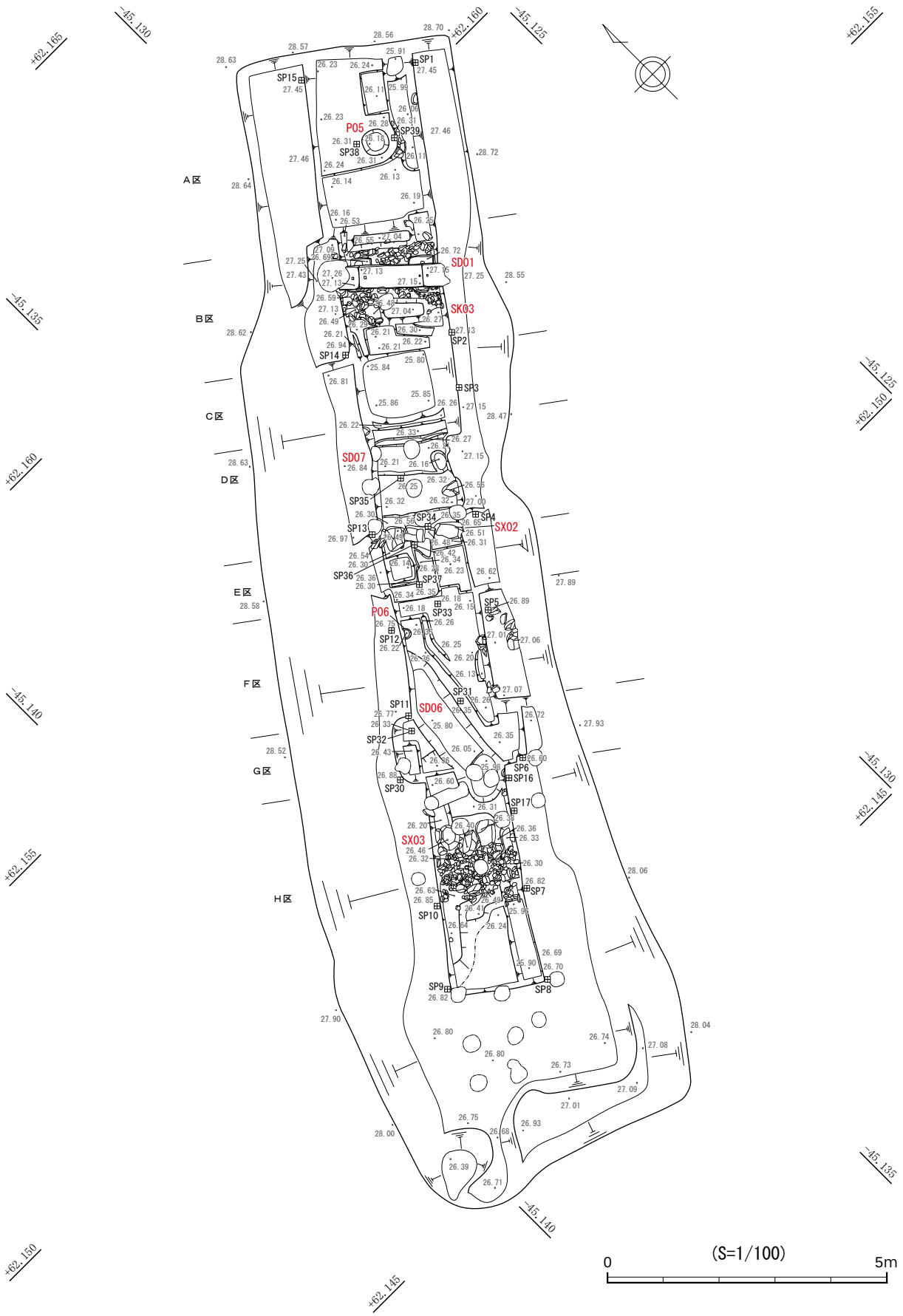
SD08（第 122・126 ～ 128・135・136 図）

Ａ区北端で北西－南東方向の溝状の遺構とみられる遺構の南肩部を検出したが、その大半は調査区外に延びているため、詳細は不明である。遺構埋土は粘性が非常に強い黒褐色粘質土で、出土遺物には木片が見られた。近世前期段階のいもり堀の可能性がある。

SK04（第 122・126・135・136 図）

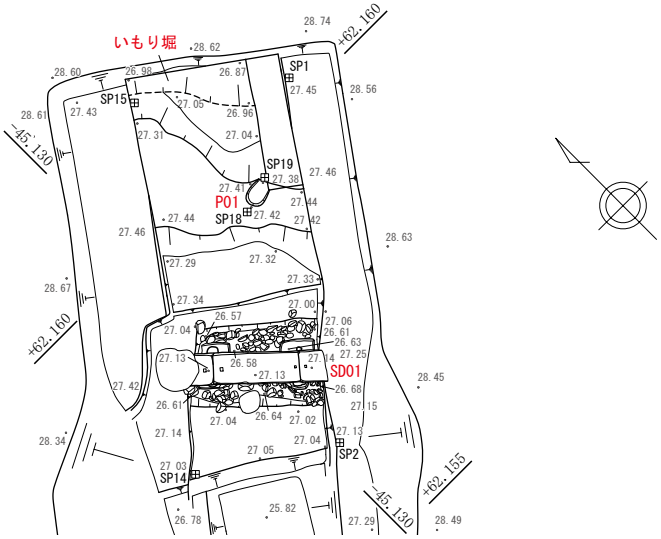
Ａ区南側で検出した土坑だが、調査区壁面とＡ・Ｂ区境のアゼに重複しており、部分的な検出にとどまる。長径 46 cm以上、短径 32 cm以上、深さ 18 cmを測る。SK03 に切られる。

第 122 図　南岸調査区　2008 地点　平面図 1（2a ～ 3b 面）(S=1/100)

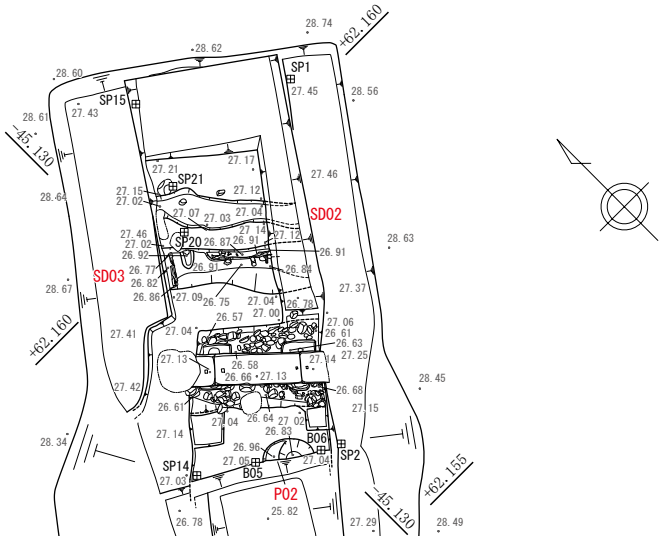


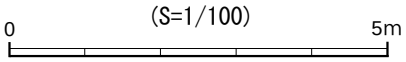
第 123 図　南岸調査区　2008 地点　平面図２（3c・3d 面）（S=1/100）

①A・B 区 1b 面　遺構図



②A・B 区 1c 面　遺構図





第 124 図　南岸調査区　2008 地点　平面図３（A･B 区 1b･1c 面）(S=1/100)

⑦ 2b 面（Ⅲ b 層上面）の遺構

SD04（第 125 ①・126・131 図）

Ｈ区を南北方向に貫く溝状の遺構。幅 11 ～ 29 cm、深さ５～９cmを測る。周辺の状況から掘り込み面が削平されている可能性も否定できないが、ここでは 2b 面の遺構として報告する。

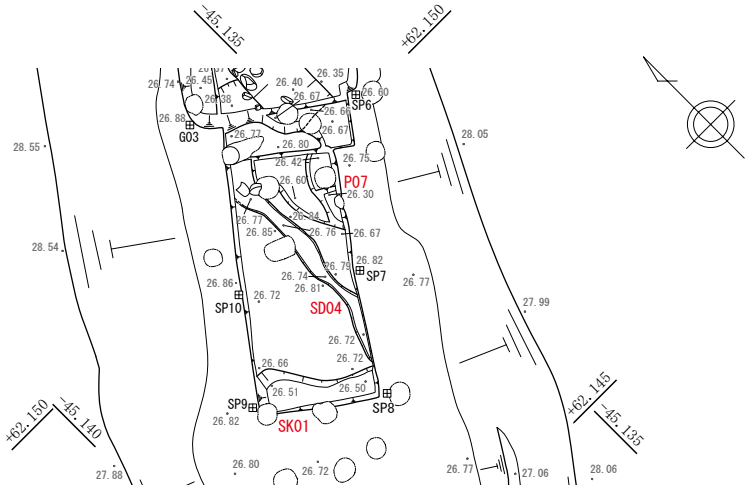
SK01（第 122・125 ①・126・131 ～ 133 図）

Ｈ区南端で北側の肩を確認した。周辺の状況から掘り込み面が削平されている可能性も否定できないが、ここでは 2b 面の遺構として報告する。調査範囲外に延びており、詳細は明らかでないが、長径 154 cm以上、短径 57 cm以上、深さ 30 cm以上を測る。

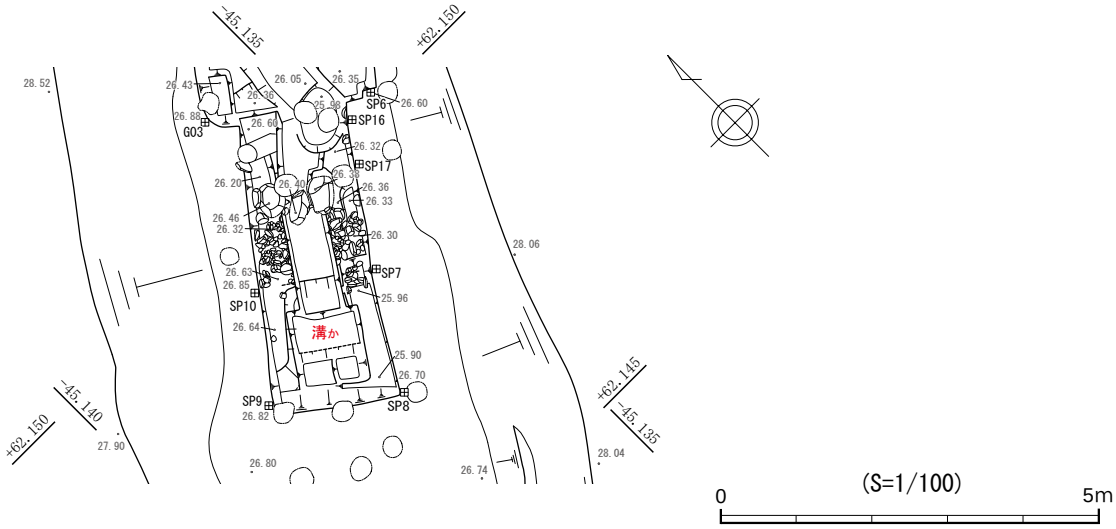
SX01（第 122・126・129・130・134 図）

Ｄ～Ｈ区にかけて検出した。周辺の状況から掘り込み面が削平されている可能性も否定できないが、

①H 区 2b 面　遺構図



②H 区4面　遺構図



第 125 図　南岸調査区　2008 地点　平面図４（H 区 2b･４面）(S=1/100)

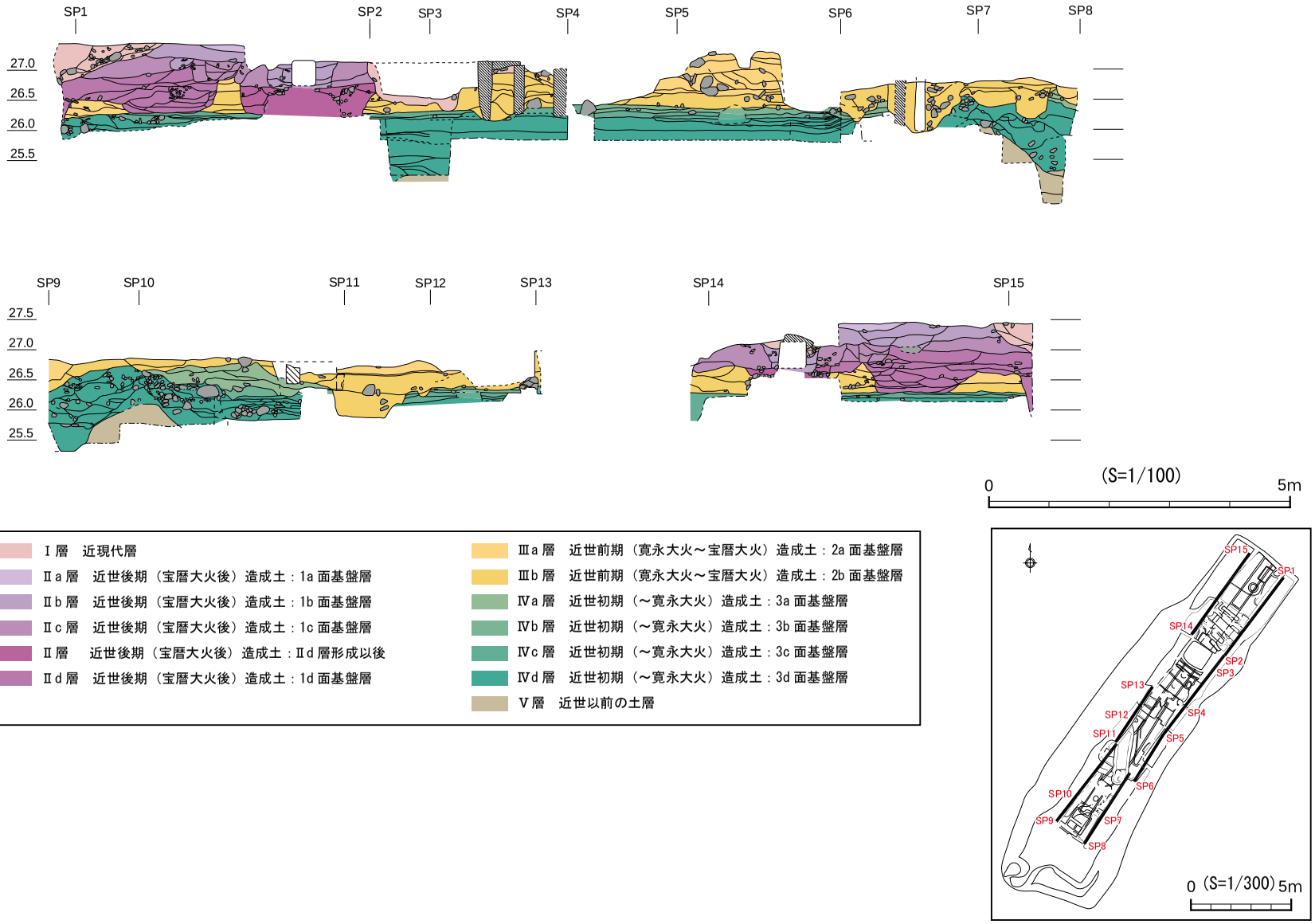
ここでは 2b 面の遺構として報告する。平成 15 年度に県埋文センターが調査した池状遺構 SX01 と同一の遺構である。平面楕円形の落込み状を呈し、長径 5.2 m、短径４～５m、深さ 40 ～ 50 cmを測る。北肩に礫が集中して検出されている。下～最下層にかけて、粘土化した木質および腐植土、木片・木屑が集中して検出されている。木製品が多く出土したほか、被熱した陶器皿（P141）なども出土している。

P03（第 122 図）

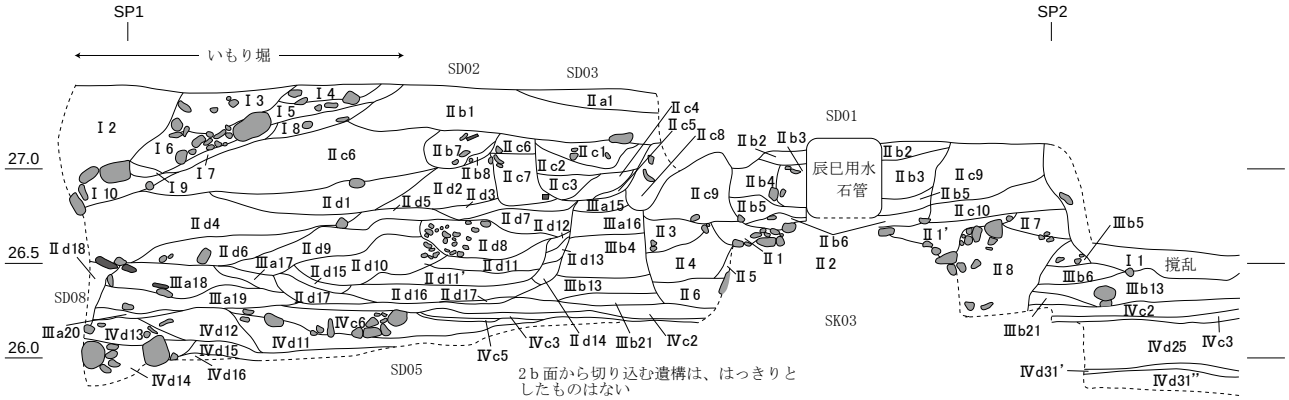
Ｄ区北側で一部を検出した。平面形は略円形ないし楕円形と推定される。径 25 cm以上、深さ 30 cmを測る。上部で径 20 cm程度の礫を複数検出した。

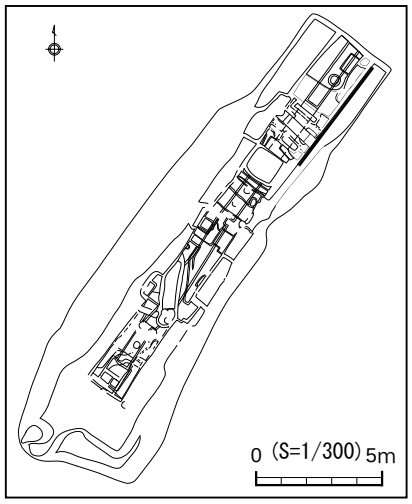
P07（第 122・125 ①・126・131 図）

Ｈ区北側の東壁際で遺構の西部を検出した。周辺の状況から掘り込み面が削平されている可能性も否定できないが、ここでは 2b 面の遺構として報告する。東壁土層で確認した径は 130 cm、深さは 85 cm以上を測る。掘方内の土は礫などがランダムに入り、遺構の掘削土をそのまま埋め戻したものとみられる。また、掘方内で杭あるいは柱とみられる断面円形の径 14 ～ 17 cmの丸太状の材を検出した。



第 126 図　南岸調査区　2008 地点　土層大別図（S=1/100）





0 (S=1/40) 1m

Ⅰ層　近現代

Ⅰ1　撹乱埋土

Ⅰ2　10YR4/6　褐色（やや黄色が強い）砂質土　径２～５cm礫含む　しまりやや強　粘性なし
【明治40年いもり堀埋立土】

Ⅰ3　2.5Y3/2　黒褐色粘質～砂質土　径３～５cm礫少量含む　しまり強　粘性ややあり
【明治40年いもり堀埋立土】＝西壁Ⅰ3層

Ⅰ4　10YR4/2　灰黄褐色粘質～砂質土　やや粘性強い　鉄分を斑紋状に含む　炭化物粗粒・白色粒子・黄白色粒子少量含む　しまり強　粘性あり【明治40年いもり堀埋立土】＝西壁Ⅰ4層

Ⅰ5　10YR3/1　黒褐色土　径３cm礫・白色粒子少量含む　しまりやや強　粘性あり
【明治40年いもり堀埋立土】

Ⅰ6　10YR3/1　黒褐色粘質土　腐植物を少量含む　径0.2cm程の砂利を斑紋状に含む　しまりやや強　粘性やや強【明治40年いもり堀埋立土】＝西壁Ⅰ5層

Ⅰ7　10YR3/2　黒褐色粘質～砂質土　木片（腐植物）を少量含む　径0.2cm程の砂利を中量含む（Ⅰ6層より多）　しまりやや強　粘性あり【明治40年いもり堀埋立土】＝西壁Ⅰ6層

Ⅰ8　10YR3/3　暗褐色粘質～砂質土　腐植物をわずかに含む　径0.5cm礫少量含む　しまり強　粘性あり
【明治40年いもり堀埋立土】

Ⅰ9　2.5Y3/2　黒褐色粘質土　径0.2cm小礫・炭化物粗粒少量含む　しまりあり　粘性強
【明治40年いもり堀埋立土】

Ⅰ10　2.5Y3/2　黒褐色粘質土　暗灰黄色粘土ブロック（2.5Y4/2）を少量含む　炭化物粗粒少量含む　砂質土を微量ながら斑紋状に含む　しまりあり　粘性強【明治40年いもり堀埋立土】

※Ⅰ6層～Ⅰ10層　粘性が増し腐植物が多い

Ⅱa層　近世後期（宝暦大火後）造成土

Ⅱa1　10YR4/4　褐色土　径１cm礫・焼土粒子・炭化物粒子少量含む　黄白色粘土を部分的に含む　しまり強　粘性なし＝西壁Ⅱa1層

Ⅱb層　近世後期（宝暦大火後）造成土・遺構埋土

Ⅱb1　10YR3/3　暗褐色粘質～砂質土　砂質強　径0.3～１cm礫中量含む　炭化物粗粒・焼土粗粒中量含む　径0.5cm礫多量含む　しまり強　粘性なし＝西壁Ⅱb1層

Ⅱb2　10YR4/3　にぶい黄褐色粘質～砂質土　砂質強　焼土粒子少量含む　炭化物微量含む　しまり強　粘性あり【SD01辰巳用水石管掘方埋土】

Ⅱb3　10YR4/2　灰黄褐色粘質土　粘質土主体　褐色土が部分的に混じる　しまりやや弱　粘性極強【SD01辰巳用水石管掘方埋土】

Ⅱb4　10TR3/4　暗褐色粘質～砂質土　砂質強　径３cm前後の礫少量　炭化物粒子・焼土粒子少量含む　しまりやや強　粘性なし【SD01辰巳用水石管掘方埋土】

Ⅱb5　10YR3/1　黒褐色粘質～砂質土　砂質強　径３cm礫・焼土粒子・炭化物粒子少量含む　灰黄褐色と灰色をそれぞれ呈した粘質土・砂質土がマーブル状に混ざる　しまり強　粘性やや強【SD01辰巳用水石管掘方埋土】

Ⅱb6　2.5Y3/2　黒褐色砂質土　径0.2～0.3cm礫含む　しまり強　粘性なし【SD01辰巳用水石管掘方埋土】

Ⅱb7　10YR3/3　暗褐色土　径0.5～１cm橙色土ブロック（7.5YR6/6）を少量含む（焼土か？）　径0.5cm小礫・炭化物粒子・焼土粒子中量含む　しまりやや弱　粘性なし
【SD02埋土】＝西壁Ⅱb9層

Ⅱb8　10YR3/2　黒褐色土　上層で見られた橙色土ブロックの粒子を少量含む　焼土粒子・炭化物粒子中量含む　しまりやや弱　粘性あり【SD02埋土】

Ⅱc層　近世後期（宝暦大火後）造成土・遺構埋土

Ⅱc1　10YR3/2　黒褐色粘質土　径0.5～１cm炭化物ブロック・炭化物粒子少量含む　しまりやや強　粘性あり【SD03辰巳用水木樋掘方埋土】＝西壁Ⅱc1層

Ⅱc2　10YR3/1　黒褐色粘質～砂質土　径0.5cm礫中量含む　径２cm礫少量含む　焼土粗粒少量含む　炭化物粒子微量含む　しまりやや強　粘性なし
【SD03辰巳用水木樋掘方埋土】＝西壁Ⅱc2層

Ⅱc3　10YR3/2　黒褐色粘質土　褐色砂（10YR4/6）を少量含む　しまりやや強　粘性強【SD03辰巳用水木樋掘方埋土】＝西壁Ⅱc4層

Ⅱc4　10YR3/4　暗褐色粘質～砂質土　暗灰黄色砂（2.5Y4/2）を斑紋状に含む　しまり強　粘性あり【SD03辰巳用水木樋掘方埋土】＝西壁Ⅱc3層

Ⅱc5　2.5Y3/3　暗オリーブ褐色粘質～砂質土　焼土粒子・炭化物粒子少量含む　しまりやや強　粘性なし【SD03辰巳用水木樋掘方埋土】

Ⅱc6　10YR3/1　黒褐色粘質～砂質土　砂質強　径0.5cmほど礫少量含む　しまりやや強　粘性あり＝西壁Ⅱc5層

Ⅱc7　10YR3/3　暗褐色粘質～砂質土　黒褐色（10YR3/2）粘土を主体とする　褐色粘土（10YR4/4）を径３cm程のブロック状に中量含む　灰黄褐色粘土ブロック（径1cm）少量含む　鉛付着石含む　しまり強　粘性あり　遺構か

Ⅱc8　10YR3/4　暗褐色粘質～砂質土　径２cm礫少量含む　径0.2cm礫多量含む　鉄分を斑紋状に含む　しまり強　粘性あり

Ⅱc9　10YR4/2　灰黄褐色粘質～砂質土　粘質強　径２cm礫少量含む　径0.5cm礫中量含む　焼土粒子少量含む　炭化物粒子微量含む　しまり強　粘性ややあり
＝西壁Ⅱc6層

Ⅱc10　にぶい黄褐～褐色粘質～砂質土　10YR4/3～4/6　酸化鉄分強く褐色がかる　Ⅱc9層より粘性強い

Ⅱ層　近世後期（宝暦大火後）遺構埋土

Ⅱ1　2.5Y3/1　黒褐色粘質～砂質土　Ⅱb6層よりやや粘性が増す　径10cm程の礫を含む　礫の周りには暗灰色の粘土が多い　しまり強　粘性あり【SK03埋土】
＝西壁Ⅱ1層

Ⅱ1’　Ⅱ1層より砂質強め　褐色がかる【SK03埋土】

Ⅱ2　2.5Y2/1　黒色粘質～砂質土（粘質が強い）　白色粒子少量含む　しまり弱　粘性極強【SK03埋土】＝西壁Ⅱ2層

Ⅱ3　2.5Y3/3　暗オリーブ褐色粘質～砂質土　砂質強　鉄分を斑紋状に含む　径２cmの礫少量含む　しまり強　粘性なし【SK03埋土】

Ⅱ4　2.5Y3/3　暗オリーブ褐色粘質～砂質土　砂質強　上層と比べて礫が少なく密　鉄分もあまりない　しまり強　粘性あり【SK03埋土】

Ⅱ5　2.5Y4/1　黄灰～2.5Y5/2　暗灰黄色粘質～砂質土　暗灰褐～灰褐色粘土を斑紋状に含む　しまりあり　粘性強【SK03埋土】

Ⅱ6　2.5Y3/2　黒褐色粘質～砂質土　粘性強　径３cm礫少量含む　砂粒を斑紋状に含み粗く堆積　しまりやや弱　粘性あり【SK03埋土】

Ⅱ7　暗灰黄色（2.5Y4/2）・（暗）褐灰色（10YR4/1やや暗）砂質土（混土）　径１cm以下の小礫多く混じる　木片混じる【SK03埋土】

Ⅱ8　暗灰黄色（2.5Y4/2）・（暗）褐灰色（10YR4/1やや暗）粘質・砂質土　径１～５cm小礫混じる（Ⅱ7層よりやや少ない）　木片混じる　黄褐色砂礫ブロック（2.5Y5/4）特徴的混じる　A区側の埋土とはあまり似ていないが、底部付近では粘性の強い砂礫になる点が少し似ている【SK03埋土】

第127図　南岸調査区　2008地点　土層断面図　SP1-2（S=1/40）

Ⅱd層　近世後期（宝暦大火後）造成土・遺構埋土
Ⅱd1　10YR3/3　暗褐色粘質～砂質土　炭化物粒子・焼土粒子少量含む　径0.5cm小礫中量含む　しまりあり　粘性強
Ⅱd2　10YR4/2　灰黄褐色粘質土　径0.5cm礫少量含む　黄褐色（2.5Y5/3）粘土ブロック（径１cm）多量含む　焼土粒子中量含む　炭化物粒子少量含む　しまり極強　粘性あり＝西壁Ⅱd1層
Ⅱd3　10YR3/4　暗褐色粘質～砂質土　砂質強　焼土粗粒少量・焼土粒子中量・炭化物粒子少量・径１cm小礫少量含む　しまり強　粘性なし＝西壁Ⅱd3層
Ⅱd4　2.5Y3/1　黒褐色粘質～砂質土　粘性強　径0.5cm礫中量・径３cm礫少量・オリーブ褐色土（2.5Y4/3）を斑紋状に含む　炭化物粒子・焼土粒子少量含む　しまりあり　粘性やや強い＝西壁Ⅱd4層
Ⅱd5　10YR3/3　暗褐色粘質土　径0.5cm小礫少量含む　しまりやや強　粘性強＝西壁Ⅱd6層
Ⅱd6　10YR4/2　灰黄褐色粘質～砂質土　砂質土強　Ⅱd9層と同じだが礫が少なく粘性が増す　しまり弱　粘性強＝西壁Ⅱd8層
Ⅱd7　10YR3/2　黒褐色粘質土　焼土粒子・炭化物粒子少量含む　しまりやや強　粘性強【SD05埋土】＝西壁Ⅱd10層
Ⅱd8　10YR4/2　灰黄褐色砂質土　径２cm礫・径0.5cm礫多量含む　多様な色調の砂粒と斑紋状に含む　しまり強　粘性なし【SD05埋土】＝西壁Ⅱd12層
Ⅱd9　10YR4/2　灰黄褐色粘質～砂質土　砂質土強　径２～５cm礫多量に含む　褐灰色粘土（10YR4/1）やにぶい黄褐色砂質土（10YR5/4）を部分的に含む　しまりやや弱　粘性なし【SD05埋土】＝西壁Ⅱd13層
Ⅱd10　10YR4/4　褐色砂質土　西壁Ⅱd15層に対応　鉄分を斑紋状に含む　径１cm礫多量に含む　褐色の砂質土主体　しまりやや弱　粘性なし【SD05埋土】
Ⅱd11　2.5Y4/2　暗灰黄色砂質土　径２cm礫中量　多様な色調の砂を主体とする　径0.5cm小礫多量　しまりやや強　粘性なし【SD05埋土】＝西壁Ⅱd17層
Ⅱd11’2.5Y4/2　暗灰黄色砂質土　Ⅱd11層より礫が少なく砂質土主体　しまりあり　粘性なし【SD05埋土】
Ⅱd12　2.5Y4/2　暗灰黄色砂質土　（2.5Y5/4）の黄褐色砂を斑紋状に含む　焼土粒子微量含む　しまりやや強　粘性なし【SD05埋土】＝西壁Ⅱd11層
Ⅱd13　10YR4/1　褐灰色粘質～砂質土　（2.5Y4/1）の黄灰色砂を部分的に含む　炭化物粒子・焼土粒子中量含む　しまり強　粘性やや強【SD05埋土】
Ⅱd14　2.5Y3/2　黒褐色粘質土　2.5Y4/1の黄灰色粘土を部分的に含む　径0.2cm小礫微量含む　しまりやや強　粘性強【SD05埋土】
Ⅱd15　2.5Y4/2　暗灰黄色砂質土　しまりやや弱　粘性なし【SD05埋土】
Ⅱd16　2.5Y4/2　暗灰黄色砂質土　シルトが強い　鉄分を斑紋状に含む　褐色（10YR4/4）砂を斑紋状に含む　Ⅱd15層より砂が密に堆積　しまりやや強　粘性なし【SD05埋土】＝西壁Ⅱd19層
Ⅱd17　10YR3/3　暗褐色砂質土　径0.5cm礫多量に含む　鉄分を斑紋状に含む　しまり強　粘性なし【SD05埋土】＝西壁Ⅱd20層
Ⅱd18　2.5Y3/2　黒褐色粘質土　2.5Y4/2の暗灰黄粘質土を斑紋状に含む　木片などの腐植物を含む　しまりあり　粘性極強【SD08埋土】＝西壁Ⅱd21層

Ⅲa層　近世前期（寛永大火後～宝暦大火）造成土
Ⅲa15　2.5Y4/2　暗灰黄色粘質～砂質土　径0.2～0.5cm礫中量含む　炭化物・焼土粒子微量含む　しまりやや強　粘性ややあり＝西壁Ⅲa4層
Ⅲa16　2.5Y4/2　暗灰黄色粘質～砂質土　やや砂質が強い　上層に比べて灰白色粒子が斑紋状に広がりしまりが強い　炭化物粒微量含む　しまり強　粘性なし＝西壁Ⅲa5層
Ⅲa17　2.5Y3/2　黒褐色粘質～砂質土　焼土粒子・炭化物粒子微量含む　径0.2～0.5cm礫少量含む　しまりやや弱　粘性あり
Ⅲa18　2.5Y4/3　オリーブ褐色土～2.5Y3/2　黒褐色粘質土　オリーブ褐と黒褐が斑紋状に堆積　木片などを含む　しまりあり　粘性やや強＝西壁Ⅲa6層
Ⅲa19　2.5Y4/2　暗灰黄色粘質土　炭化物粒子微量に含む　しまりやや強　粘性強
Ⅲa20　2.5Y3/2　黒褐色粘質～砂質土　砂質強　灰黄褐色（10YR4/2）砂質土を部分的に含む　しまりやや弱　粘性あり

Ⅲb層　近世前期（寛永大火後～宝暦大火）造成土
Ⅲb4　10YR3/2　黒褐色粘質～砂質土　径0.5cm礫多量含む　焼土粒子中量含む　炭化物粒子少量含む　しまりあり　粘性強＝西壁Ⅲb10層
Ⅲb5　10YR5/1～5/2　褐灰～灰黄褐色粘質土
Ⅲb6　10Y4/1　灰（暗青灰）色砂質土　全体的には灰色　青灰色の粒子（5BG6/1等）混じり青灰色がかる
Ⅲb13　2.5Y3/2　黒褐色粘質土～2.5Y4/2　暗灰黄色粘質土　黒褐色粘土と暗灰黄色粘土がマーブル状に混ざり合う　焼土粒子微量含む　しまりあり　粘性極強＝西壁Ⅲb11層
Ⅲb21　2.5Y4/2　暗灰黄色粘質土　径0.2cm礫少量含む　しまりあり　粘性極強＝西壁Ⅲb12層

Ⅳc層　近世初期（～寛永大火）造成土
Ⅳc2　2.5Y4/2　暗灰黄色砂質土　砂質土主体　きわめて細かく密に堆積　しまり強　粘性なし＝西壁Ⅳc3層
Ⅳc3　2.5Y4/3　オリーブ褐色砂礫土　粗い砂質土主体　径２cm礫少量含む　全体的に鉄分を多く含み赤く変色している　しまり強　粘性なし＝西壁Ⅳc5層
Ⅳc5　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　しまり強　粘性あり
Ⅳc6　2.5Y4/4　オリーブ褐色砂礫土　径５～10cm礫含む　径0.5cm礫・砂を主体とする　鉄分を斑紋状に含む　しまり強　粘性あり

Ⅳd層　近世初期（～寛永大火）造成土
Ⅳd11　2.5Y4/2　暗灰黄色砂質土　鉄分を斑紋状に含む　非常に硬くしまっている　Ⅳc2層に比べると砂がやや粗い部分と密な部分とに分かれる　しまり極強　粘性なし＝西壁Ⅳd25層
Ⅳd12　2.5Y3/2　黒褐色粘質～砂質土　径0.2～0.5cm礫中量含む　白色粒子少量含む　炭化物粒子・焼土粒子微量含む　しまりやや弱　粘性強
Ⅳd13　2.5Y4/2　暗灰黄色粘質～砂質土　焼土粒子～炭化物粒子少量含む　しまりあり　粘性やや強
Ⅳd14　2.5Y4/2　暗灰黄色粘質～砂質土　上層と類似するが上層より密　しまりあり　粘性やや強
Ⅳd15　2.5Y4/1　黄灰色粘質～砂質土　粘質強　黄灰色砂（2.5Y6/1）を部分的に含む　炭化物粒子少量含む　しまりやや強　粘性強
Ⅳd16　2.5Y4/2　暗灰黄色砂質土　しまり強　粘性なし
Ⅳd25　砂利・腐植土
Ⅳd31’10YR5/1～4/1　灰色砂～シルト　均質硬化面　3c面構成層よりやや灰色味強い　粒子細かい
Ⅳd31”礫混じり層　7.5GY4/1　暗緑灰色

第 128 図　南岸調査区　2008 地点　土層注記　SP1-2

出土遺物は遺構の掘削土（寛永大火（寛永８年（1631））片付層）からの瓦が殆どを占める。

⑧ 3a 面（Ⅳ a 層上面）の遺構

SK02（第 122・126・131・137 ④図）

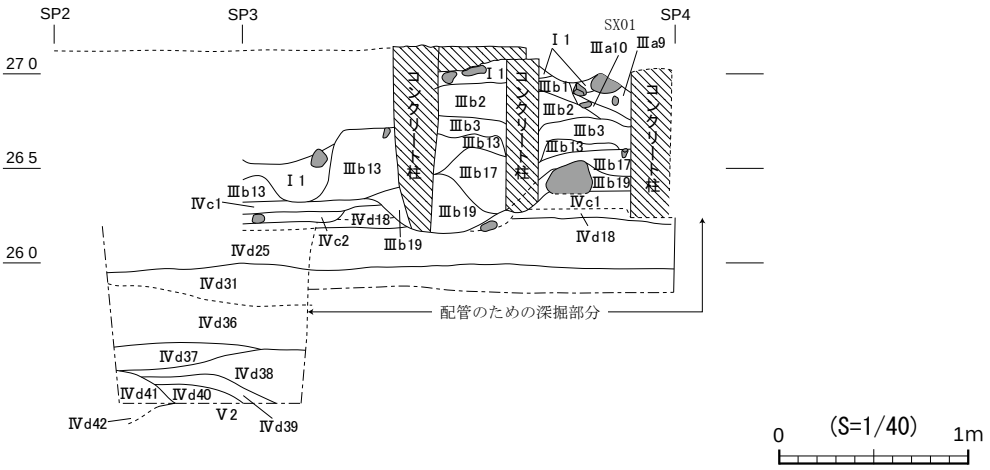
Ｈ区南側で検出した。遺構南東部が調査範囲外に延びているため、全形は明らかでないが、北東部は平面角丸長方形状を呈する。長軸 156 cm、短軸 125 cm以上、深さ 46 cmを測る。SK01 および P04 に切られる。植栽痕とみられる。

P04（第 122・126・131 図）

Ｈ区南側で検出した。調査範囲外に延びているため、遺構平面形は明確ではないが、楕円形か。長径 55 cm以上、短径 50 cm、深さ 54 cmを測る。壁面の土層観察から、SK02 が黒褐色土で埋められた後に掘削されたとみられる。

⑨ 3b 面（Ⅳ b 層上面）の遺構

SD06（第 122・123・126・131・134 ①・138 ①②図）



Ⅰ層　近現代層
Ⅰ1　撹乱

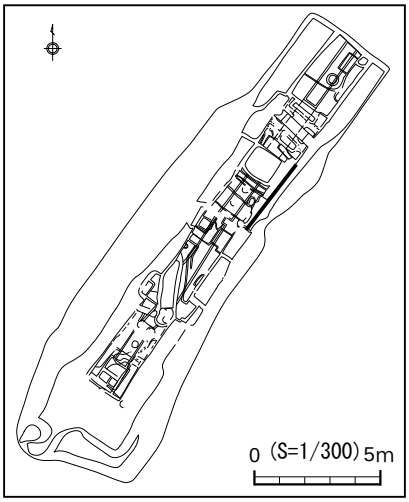
Ⅲa層　近世前期（寛永大火後～宝暦大火）遺構埋土
Ⅲa9　5Y3/2　オリーブ黒色（暗青灰褐～黒褐）砂質土【SX01埋土】
Ⅲa10　2.5Y3/2　暗褐～黒褐色粘質土　暗黄灰色・暗灰色砂質土ブロック混じりモザイク状　主体は木片起源の腐植質土【SX01埋土】

Ⅲb層　近世前期（寛永大火後～宝暦大火）遺構埋土・造成土
Ⅲb1　2.5Y4/1　黄灰～青灰褐色砂質土　わずかに青白色をおびる
Ⅲb2　10YR3/2　黒褐色砂礫土　炭片・赤色粒多量に混じる　径0.1～0.2cmの小礫が主体
Ⅲb3　10YR3/2～2/2　黒褐色粘質～砂質土　炭片・赤色粒多量に混じる　Ⅲb2層に比べ粘性強い
Ⅲb13　10YR5/1～5/2・5/3　褐灰～灰黄褐色粘質土　鈍い黄褐色土しみ状に混じる
Ⅲb17　2.5Y4/2　暗灰黄色砂質土　礫少量混じる
Ⅲb19　5Y5/2～4/2　灰オリーブ色粘質土　酸化すると暗灰黄色（2.5Y4/2）に近くなる　均質

Ⅳc層　近世初期（～寛永大火）造成土
Ⅳc1　砂層
Ⅳc2　礫層・暗褐色土層

Ⅳd層　近世初期（～寛永大火）造成土
Ⅳd18　青灰色砂質土　しまり強　3d上部にある
Ⅳd25　2.5GY4/1　暗オリーブ灰色砂質土　（3d面構成層下部）　硬くしまった部分ともろい部分がラミナ状に構成される　明瞭な線は引きがたいが均等ではない
Ⅳd31　10Y4/1　灰色砂　礫層上部にはもろい砂質土が堆積し、その下に礫が集中している【礫層】
Ⅳd36　2.5Y4/2～3/2　暗灰黄～黒褐色砂質土　腐植質土混じる　径10～15cm大の礫混【礫層】
Ⅳd37　5Y3/2　オリーブ黒色粘土　腐植質系の粘土　粘性強
Ⅳd38　5Y4/1　灰色砂礫　径２cm大までの砂礫主体
Ⅳd39　5Y3/2　オリーブ黒色粘土　腐植質系の粘土　粘性強＝Ⅳd37層
Ⅳd40　5Y4/1　灰色粘質～砂質土　礫が混じり　やや硬い
Ⅳd41　10YR3/2　黒褐色粘土　褐色がかる　腐植質土系粘土
Ⅳd42　5Y4/1　灰色砂質土　きめ細かく均質な砂質土　径５～10cm大の礫混じる

Ⅴ層　古代包含層
Ⅴ2　10YR4/1～2.5Y4/1　褐灰～黄灰色粘土　均質



第 129 図　南岸調査区　2008 地点　土層断面図　SP2-4（S=1/40）

Ｆ～Ｈ区北部にかけて検出された、南北方向に延びる溝状の遺構。幅約 80 cm、深さ約 60 cmを測る。埋土中に焼けた瓦や壁が含まれる。溝底レベルを見ると、南から北へ緩く下っていたようである。燻瓦のほか、漳州窯産とみられる磁器染付皿（P140）が出土している。

P06（第 123・126・134 ①図）

Ｆ区の西壁際で検出したが、調査範囲外に延びており、平面形は楕円形ないし略円形と推定される。長径 19 cm、短径 14 cm以上、深さ 12 cmを測る。

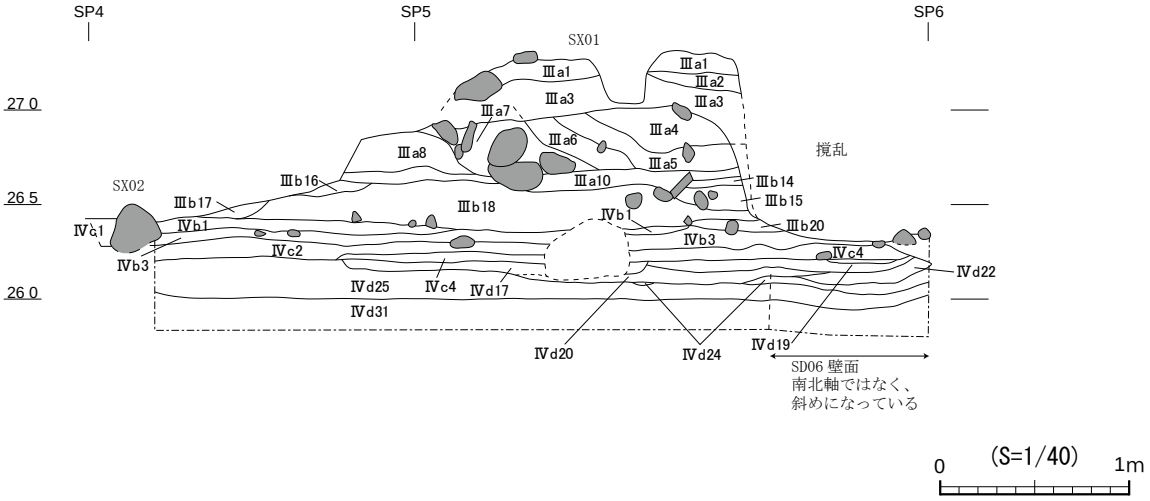
⑩ 3c 面（Ⅳｃ層上面）の遺構

SD07（第 123 図）

Ｄ区で検出した北西－南東方向の溝状の遺構。幅 59 ～ 75 cm、深さ 10 cm内外を測る。

SX02（第 123・126・130・134 ①・138 ③④図）

Ｄ区南端～Ｅ区北端にかけて、北西－南東方向に延長約 1.4 m（４石）を検出した石列で、戸室石の割石および自然石と河原石から構成されていた。面はいもり堀側を向く。前面掘方はⅣｃ層上面から掘り込まれていた。



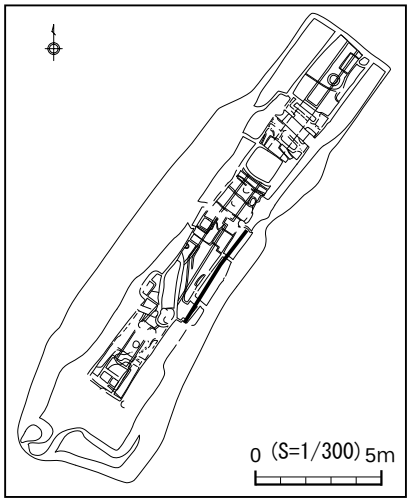
Ⅲa層　近世前期（寛永大火後～宝暦大火）遺構埋土・造成土
Ⅲa1　10YR4/2　灰黄褐色粘質～砂質土　県埋文センター平成15年度調査Ⅰ区SX01中央アゼ１層に対応か
Ⅲa2　10YR4/1～4/2　褐灰～灰黄褐色粘質・砂質土　Ⅲa1層より均質　県埋文センター平成15年度調査Ⅰ区SX01中央アゼ２層に対応か
Ⅲa3　黄褐～オリーブ褐色粘質・砂質土　下段のⅢa5層に対応　粘性強くなる　県埋文センター平成15年度調査Ⅰ区SX01中央アゼ６層に対応か【整地層か】
Ⅲa4　2.5Y4/3　オリーブ褐色粘質～砂質土　暗褐色土混じるがこの箇所では砂質味強く明るい色調　径２～５㎝大礫多く混じる【SX01埋土】
Ⅲa5　2.5Y5/4～4/4　黄褐～オリーブ褐色砂質土　Ⅲa4層に比べ砂質味強い　この箇所では粘性低い【SX01埋土】
Ⅲa6　10YR3/3～2.5Y4/2　暗褐～暗灰黄色粘質土　Ⅲa4層と類似するが砂質味弱い　色調暗い　径２～５㎝大の礫多く混じる【SX01埋土】
Ⅲa7　2.5Y5/4～4/4　黄褐～オリーブ褐色砂質土　基本構成はⅢa5層と同じだが、径10～20㎝大の大型礫(県埋文センター平成15年度調査Ⅰ区SX01東端の配石か）混じる【SX01埋土】
Ⅲa8　10YR4/2～4/3　灰黄褐～にぶい黄褐色粘質土　Ⅲa4・Ⅲa6層と類似するが赤色粒・炭片若干混じる【SX01埋土】
Ⅲa10　木片層　黒褐色（10YR3/2）腐植質土・板片・木屑で構成される　西壁Ⅲa2層に対応【SX01最下層】

Ⅲb層　近世前期（寛永大火後～宝暦大火）造成土
Ⅲb14　10YR5/4　黄褐色粘質～砂質土
Ⅲb15　2.5Y4/1　黄灰色粘質～砂質土
Ⅲb16　緑灰・暗灰黄色粘質土　若干小礫混じる　D区以北Ⅲb層下部に対応する可能性があるが砂礫の混じり具合など異和感もあり確定できない
Ⅲb17　7.5GY4/1　暗緑灰色砂質土
Ⅲb18　7.5YGY5/1・2.5Y5/2　灰～暗青灰色粘質・砂質土　赤色粒・炭片若干混じる（あまり多くない）　全体としては灰色（5Y4/1）であるが、明青灰色粒（5BG7/1）が混じり部分的には青灰～暗青灰色（5BG5/1～4/1）を呈する
Ⅲb20　5G4/1　暗緑灰色砂質・粘質土主体　径２～５㎝大の礫多く混じる　砂・粘質土ブロック状に混じる

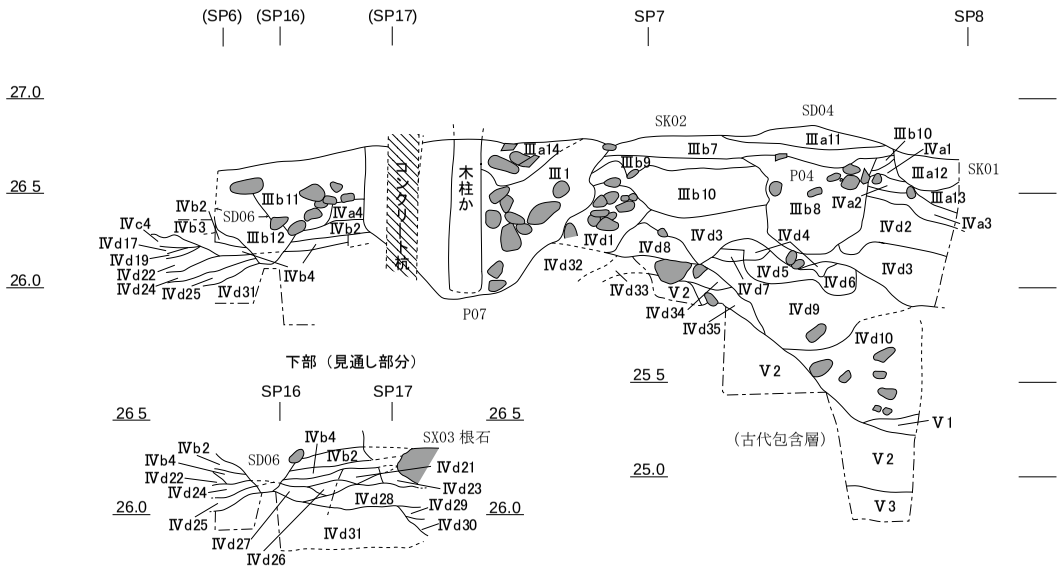
Ⅳb層　近世初期（～寛永大火）造成土
Ⅳb1　N4/　灰色砂　比較的均質
Ⅳb3　N4/　灰色砂　オリーブ黒色粘質土　2.5Y3/1　混土

Ⅳc層　近世初期（～寛永大火）造成土
Ⅳc1　5Y4/1　灰色粘質～砂質土　炭片少量混じる　明青灰色粒（5BG7/1）少量混じる【SX02前面掘方埋土】
Ⅳc2　5G4/1　暗緑灰～5BG6/1～5/1　青灰色砂
Ⅳc4　小礫・5Y4/1　灰色砂・2.5Y3/1　オリーブ黒色粘砂質土混土【礫腐植土】

Ⅳd層　近世初期（～寛永大火）造成土
Ⅳd17　10Y5/1～4/1　灰色砂～シルト　やや青味強い【硬化面】
Ⅳd19　2.5Y4/2　暗灰黄色砂質土　しまりが強く均質な砂質土　オリーブ褐色（2.5Y4/6）砂質土が薄く層状に堆積　北側に向かって薄くなりなくなる
Ⅳd20　青灰色砂質土【硬化面】
Ⅳd22　2.5Y4/1　黄灰色砂質土　Ⅳd17層の礫混りの青灰色砂を部分的に含む
Ⅳd24　腐植物層　G区あたりから見られ、北に向かって薄くなりなくなる
Ⅳd25　3d面構成層
Ⅳd31　礫層上部のもろい砂質土　南に行くと粘質土が含まれる



第 130 図　南岸調査区　2008 地点　土層断面図　SP4-6（S=1/40）



Ⅲa層　近世前期（寛永大火後～宝暦大火）造成土・遺構埋土
Ⅲa11　灰黄色土　鉄分混【SD04埋土】
Ⅲa12　10YR4/2　灰黄褐色砂質土　比較的均質　南壁Ⅲa1層・西壁Ⅲa1層に対応【SK01埋土】
Ⅲa13　10YR4/2　灰黄褐色砂質土　径５cm大の礫多く混じる　南壁Ⅲa1層・西壁Ⅲa1層に対応【SK01埋土】
Ⅲa14　SK01下層と同じ土　径５～10cm大礫混じる

Ⅲ層　近世前期（寛永大火後～宝暦大火）遺構埋土
Ⅲ1　寛永大火後のⅢb層上部とほとんど同じ（瓦片など多い）　長軸10cm以上の礫目立つ【P07埋土】

Ⅲb層　近世前期（寛永大火後～宝暦大火）造成土・遺構埋土
Ⅲb7　黄灰色土　黄褐色土ブロック・灰色小ブロック混　焼土粒少・炭粒混
Ⅲb8　黒褐色（2.5Y3/2）・灰色（5Y4/1）・灰黄褐色（10YR4/2）粘質・砂質土モザイク状に混じる　径３～10cm大の礫多く混じる　瓦片・赤色粒混じる【P04埋土】
Ⅲb9　暗灰色土　黒褐色土混【SK02 埋土（上層）】
Ⅲb10　黒褐色土【SK02 埋土】
Ⅲb11　褐灰色土　焼土粒・角粒少混　径５～15 cm大の礫多く混じる
Ⅲb12　暗灰色土　焼土粒・炭粒少混【SD06 埋土】

Ⅳa層　近世初期（～寛永大火）造成土
Ⅳa1　2.5Y4/3　オリーブ褐色砂質土
Ⅳa2　10YR2/2　黒褐色粘質土　比較的均質
Ⅳa3　オリーブ褐色砂質・粘質土（2.5Y4/3）・黒褐色粘質土（10YR2/2）混土　径３～５cm大の礫多く混じる
Ⅳa4　7.5Y4/1　暗青灰色粘質・砂質土　黄褐色砂質土（2.5Y5/4）ブロック混じる　径１cm以下の小礫多く混じる
＝SPG04･03間土層断面Ⅳb2層・西壁Ⅳa4層【SD06基盤層】

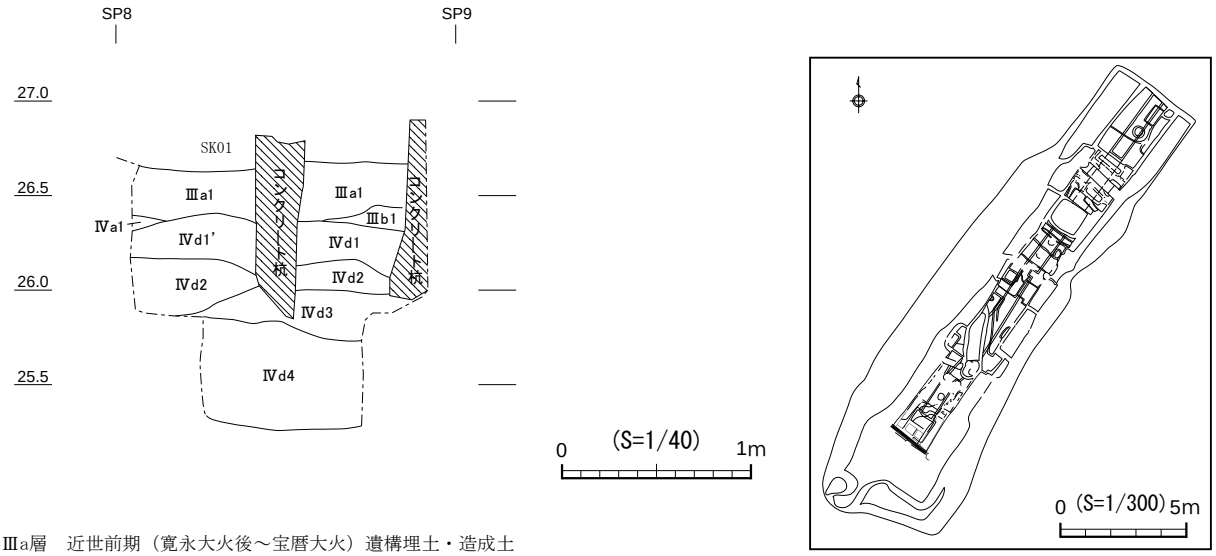
Ⅳb層　近世初期（～寛永大火）造成土
Ⅳb2　灰（N4/）～暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）砂　粒子粗い
Ⅳb3　灰色砂（N4/）　オリーブ黒色粘質土（2.5Y3/1）　混土
Ⅳb4　オリーブ黒色（5Y3/1）・灰黄褐色粘質土（10YR4/3）　混土　灰黄褐色粘質土は腐植質系

Ⅳc層　近世初期（～寛永大火）造成土
Ⅳc4　小礫・5Y4/1　灰色砂・2.5Y3/1　オリーブ黒色粘質・砂質土混土【礫腐植土】

Ⅳd層　近世初期（～寛永大火）造成土
Ⅳd1　黄灰色粘土　オリーブ褐色砂質土（2.5Y4/3）礫の間に入る
Ⅳd2　オリーブ灰色粘質土（2.5GY5/1）・灰色粘質土（7.5Y4/1）　径３～５cm大の礫多く混じる＝西壁Ⅳd6層
Ⅳd3　7.5Y4/1　灰色砂質土　径３～５cm大の礫多く混じる＝西壁Ⅳd12層
Ⅳd4　灰色粘土
Ⅳd5　褐灰～黄灰色粘土（10YR4/1～2.5Y4/1）・オリーブ灰色砂質土（5GY5/1）混土　レンズ状に混じり合う　径１cm以下の小礫・径２～３cm大の礫混じる
Ⅳd6　灰黄色砂質土
Ⅳd7　オリーブ灰色砂
Ⅳd8　2.5Y4/3　オリーブ褐色砂質土　径３cm大の礫混じる
Ⅳd9　黄灰色粘土
Ⅳd10　7.5Y4/1　灰色砂礫　径３～５cm大の礫多く混じる　主体は粗い砂・小礫　灰色・暗褐灰色粘土・粘土質ブロック混じる＝西壁Ⅳd17層
Ⅳd17　10Y5/1～4/1　灰色砂～シルト　やや青味強い　【硬化面】
Ⅳd19　2.5Y4/2　暗灰黄色砂質土　しまりが強く均質な砂質土　オリーブ褐色（2.5Y4/6）砂質土が薄く層状に堆積
Ⅳd21　N4/　灰色砂　粒子粗い　Ⅳd17 層に類似
Ⅳd22　2.5Y4/1　黄灰色砂質土　礫混りの青灰色砂を部分的に含む
Ⅳd23　灰色粘土【SX03 根固】
Ⅳd24　黒褐色粘質土
Ⅳd25　N4/　灰色砂　Ⅳd27 層との上下関係不明
Ⅳd26　2.5Y4/1　黄灰色粘土　径３～５cm大の礫混じる
Ⅳd27　2.5GY4/1　オリーブ灰色粘質・砂質土
Ⅳd28　5Y5/1～2.5GY4/1　灰色～暗オリーブ灰色砂質土　色調は一様ではないが、径４～５cm大の礫多く混じる　上部の方が砂質気味で、下部に粘性の強い部分がある　＝西壁Ⅳd22層
Ⅳd29　オリーブ灰色粘質土（2.5GY・5GY4/1）・灰色砂（7.5Y4/1）・黒褐色粘質土（10YR3/1）混土＝西壁Ⅳd33層
Ⅳd30　10YR3/1 黒褐色粘質土　腐植質系　粘性強い＝西壁Ⅳd34 層
Ⅳd31　礫層　下部（見通し部分）では灰～青灰色粘土混
Ⅳd32　黄灰色粘質土＋礫
Ⅳd33　7.5Y4/1　灰色砂・砂質土　粒子は比較的粗い　径３～10cm大の礫混じる
Ⅳd34　5GY5/1　オリーブ灰色粘質・砂質土　径１～２cm大の小礫多く混じる
Ⅳd35　灰色粘質土　径１cm以下の小礫多く混じる

Ⅴ層　近世以前の土層
Ⅴ1　上層＋灰色粘土【古代包含層】
Ⅴ2　10YR4/1 ～ 2.5Y4/1　褐灰～黄灰色粘土　均質＝西壁Ⅴ1 層【古代包含層】
Ⅴ3　褐灰色粘土＋砂質土＋礫・砂利（礫・砂利主体）【古代包含層】

第 131 図　南岸調査区　2008 地点　土層断面図　SP6-8・SP16-17（S=1/40）



Ⅲa層　近世前期（寛永大火後～宝暦大火）遺構埋土・造成土
Ⅲa1　10YR4/2　灰黄褐色砂質土　比較的均質＝東壁Ⅲa12・Ⅲa13 層、西壁Ⅲa1 層　【SK01 埋土】

Ⅲb層　近世前期（寛永大火後～宝暦大火）遺構埋土・造成土
Ⅲb1　褐灰～暗褐灰色粘質・砂質土　炭片・焼土少量混じる　（10YR4/1より少し暗い）＝西壁Ⅲb3層

Ⅳa層　近世初期（～寛永大火）造成土
Ⅳa1　オリーブ褐色砂質・粘質土（2.5Y4/3）・黒褐色粘質土（10YR2/2）混土　径３～５㎝大の礫多く混じる＝東壁Ⅳa3層

Ⅳd層　近世初期（～寛永大火）造成土
Ⅳd1　灰（7.5Y4/1）・オリーブ灰（2.5GY5/1）・黒褐色粘土（2.5Y3/1）混土　径２～５㎝大の礫混じる＝西壁Ⅳd6層
Ⅳd1'　オリーブ灰色粘質土（2.5GY5/1）・灰色粘質土（7.5Y4/1）　径３～５㎝大の礫多く混じる　西壁Ⅳd6層に対応＝東壁Ⅳd2層
Ⅳd2　灰色砂質土（7.5Y4/1）　径３～５㎝大の礫多く混じる＝西壁Ⅳd12層、東壁Ⅳd3層
Ⅳd3　10YR4/1　（暗）褐灰色粘質土　径５～10㎝大の礫　同系色砂質土混じる＝西壁Ⅳd14層
Ⅳd4　7.5Y4/1　灰色砂礫　径３～５㎝大の礫多く混じる　主体は粗い砂・小礫　灰色・暗褐灰色粘土・粘土質ブロック混じる＝西壁Ⅳd17層、東壁Ⅳd10層

第 132 図　南岸調査区　2008 地点　土層断面図　SP8-9（S=1/40）

P05（第 123・138 ⑤図）

Ａ区中央部で検出したピット。Ⅲｂ層で埋め立てられている。平面略円形で、径 47 ㎝、深さ 13 ㎝を測る。遺物の出土は見られなかった。

⑪ 3d 面（Ⅳｄ層上面）の遺構か

SX03（第 123・131・133 図）

3d 面で確認したが、上部における造成などで周辺の 3c 面が失われた可能性があり、遺構が 3d 面から掘り込まれたと断定できないが、ここでは 3d 面の遺構として報告する。

Ｈ区北側で石垣の根石３石と裏込めの栗石層を確認した。根石には自然石が使用されていたが、合端調整のためか、側面に打割が見られる石もあった。面はいもり堀側に向いており、栗石は径４～27 ㎝で、灰色粘土で被覆されていた。

⑫４面（Ｖ層上面）の遺構（第 125 ②・126・131・133 図）

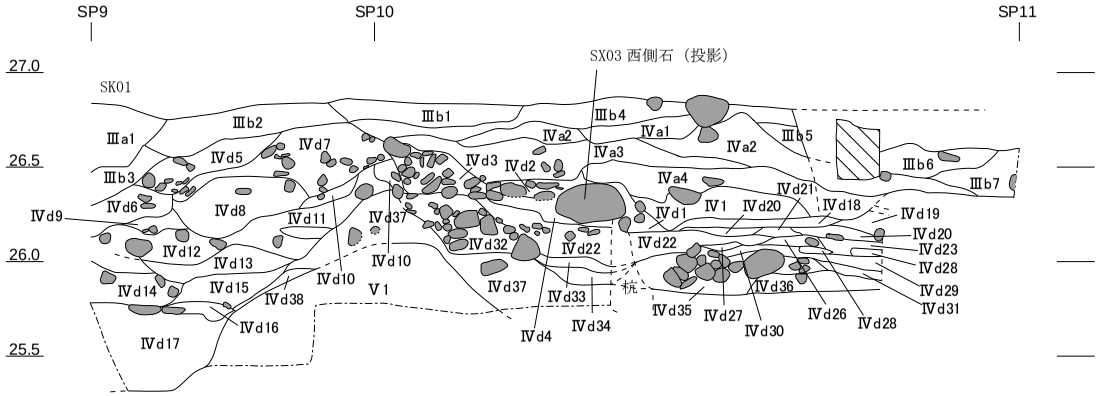
調査区南端の近世初期遺構面の下層で、古代の土器を含む灰褐色粘土層と、これを基盤とする溝状の掘り込みを確認した。現地表下約４ｍまで掘り下げたが、地山は確認できなかった。

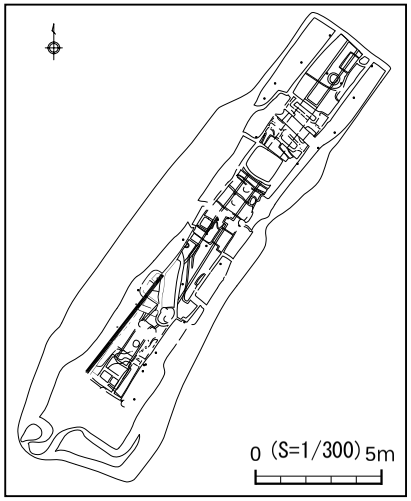
３．小結

・いもり堀南岸の法面を検出し、いもり堀直線部分の南岸ラインを確定できた。従前の堀北岸の調査成果とあわせ、いもり堀全体の断面形状を復元する手掛かりが得られた。

・いもり堀南岸の法面について、明治 40 年（1907）の堀埋立てにより埋没した面と、部分的に構築当初および近世前期の面を確認した。

・いもり堀上層について、北岸の調査成果と合わせると、堀幅は 30 ｍ以上、広いところで約 40 ｍに達すると推定され､江戸時代後期の「御城中壱分碁絵図」（文政 13 年（1830））中の「二拾三間二尺（約





Ⅲa層　近世前期（寛永大火後～宝暦大火）遺構埋土
Ⅲa1　10YR4/2　灰黄褐色砂質土　比較的均質　東壁Ⅲa12・Ⅲa13層に対応
＝南壁Ⅲa1層【SK01埋土】

Ⅲb層　近世前期（寛永大火後～宝暦大火）遺構埋土・造成土
Ⅲb1　10YR5/4　にぶい黄褐色砂質土　赤色粒・炭片混じる
Ⅲb2　褐灰色土　焼土粒少量・炭片混じる　鉄分少量混
Ⅲb3　褐灰～暗褐灰色粘質・砂質土　炭片・焼土少量混じる（10YR4/1より少し暗い）
Ⅲb2層に近いか？
Ⅲb4　2.5Y4/2～3/2　暗灰黄～黒褐色粘質～砂質土　焼土片（瓦・壁など）・炭片多く混じる＝SP6-30間土層断面Ⅲb1層【SX01基盤】
Ⅲb5　10YR4/3～2.5Y4/2　濁黄褐～暗灰黄色砂質土　３cm大の礫多く混じる
全体に砂利質＝SP6-30間土層断面Ⅲb2層
Ⅲb6　オリーブ灰色粘質・砂質土（2.5GY5/1）・暗灰黄色粘土（2.5Y5/2）混土
焼土片若干混じる
Ⅲb7　灰～暗青灰色粘質・砂質土　5Y4/1ベース　5BG7/1・5BG5/1～4/1混じる
＝東壁Ⅲb18層

Ⅳa層　近世初期（～寛永大火）造成土
Ⅳa1　2.5Y5/3　（濁）黄褐色粘質・砂質土
Ⅳa2　黒褐色（2.5Y3/1）・暗褐色（10YR3/3）・黒色（2.5Y2/1）粘質土混土
＝SP6-30間土層断面Ⅲb8層
Ⅳa3　2.5Y4/2　暗灰黄色砂質土・粘質土　黒褐色粘土塊（10YR3/1）若干混じる
炭片混じる　灰色粘土塊（7.5Y4/1）混じる
Ⅳa4　7.5Y4/1　暗青灰色粘質・砂質土　黄褐色砂質土（2.5Y5/4）ブロック混じる
径１cm以下の小礫多く混じる＝SP6-30間土層断面Ⅳb2層・東壁Ⅳa4層
【SD06基盤層】

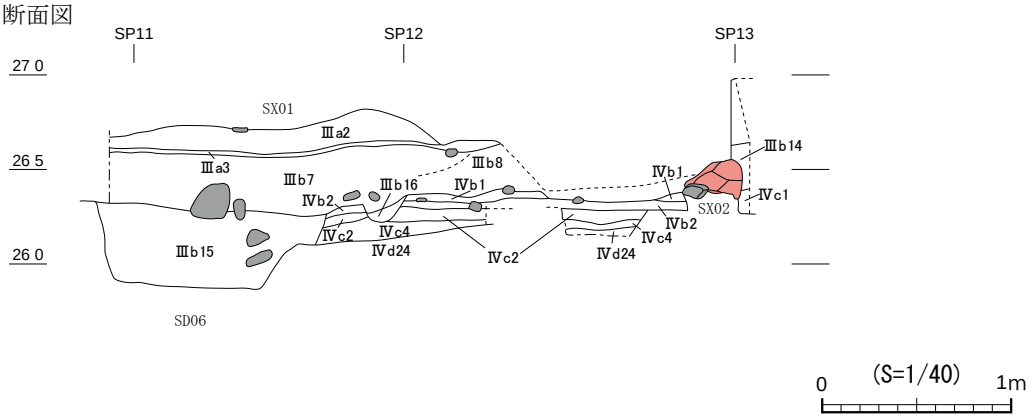
Ⅳ層　近世初期（～寛永大火）造成土：ⅣbまたはⅣc層相当
Ⅳ1　灰（5Y4/1）～暗（黄）オリーブ色（5Y4/2～4/3）砂質土　暗灰黄色粘土塊
混じる　黒褐色粘質土塊混じる

Ⅳd層　近世初期（～寛永大火）造成土
Ⅳd1　2.5Y4/1　黄灰色粘土　径３～10cm大の礫混じる
【SX03栗石間上部の隙間に入る】
Ⅳd2　暗灰黄色粘質土　均質　粘性強い
Ⅳd3　2.5Y4/2　暗灰黄色砂質土　５～10cm大礫（SX03栗石）多く混じる
Ⅳd4　2.5Y4/1～4/2　灰～暗灰黄色砂質土　やや粘性あり　径３～５cm大の平たい礫混じる
Ⅳd5　10YR4/2　灰黄褐色粘質・砂質土　２～５cm大の礫多く混じる　褐灰色粘土小塊（10YR4/1）混じる（赤色粒・炭片なし）
Ⅳd6　灰（7.5Y4/1）・オリーブ灰（2.5GY5/1）・黒褐色粘土（2.5Y3/1）・灰色粘土（7.5Y4/1）混土　２～５cm大礫混じる
Ⅳd7　2.5Y5/2～5/4　暗灰黄～黄褐色砂礫　径１cm以下～５cm大の礫多く混じり主体をなす
Ⅳd8　7.5Y4/1　灰色砂質土　砂質味強い　径３～５cm大の礫多く混じる
Ⅳd9　5GY5/1　オリーブ灰色粘質土　同系色の砂質土混じる
Ⅳd10　2.5Y4/2　暗灰黄色砂質土　径１～２cm大の礫若干混じる
Ⅳd11　10YR4/1　（暗）褐灰色粘土　灰色粘土（7.5Y4/1）等やや明るい色調
の粘土小塊混じる　褐灰色砂質土層状に混じる
Ⅳd12　7.5Y4/1　灰色砂質土　色調はⅣd8層に類似　粘性はⅣd8層より強い
やや青味がかる　東壁Ⅳd3層に対応か
Ⅳd13　2.5GY5/1　オリーブ灰色粘質・シルト質・砂質土　粘質・シルト質・
砂質土がランダムに混じる
Ⅳd14　10YR4/1　（暗）褐灰色粘質土　径５～10cm大の礫　同系色砂質土混じる
Ⅳd15　2.5GY5/1　オリーブ灰色砂質土　径２～５cm大の礫混じる
Ⅳd16　暗褐灰色（10YR4/1やや暗）・オリーブ灰色粘土（2.5GY5/1）　モザイク
状に混じる
Ⅳd17　7.5Y4/1　灰色砂礫　径３～５cm大の礫多く混じる　主体は粗い砂・小礫
灰色・暗褐灰色粘土・粘土質ブロック混じる
Ⅳd18　灰色粘質土・砂質土（10YR4/1オリーブがかる）・灰色砂（7.5Y4/1）
・灰黄褐色粘質土（10YR4/2）混土　モザイク状の混土　Ⅳ1層との境
は明瞭　ややしまる　灰色系統が主体
Ⅳd19　灰色砂質・粘質土　径２cm大の礫多く混じる
Ⅳd20　10YR3/1～2/2　黒褐色粘質土　オリーブ灰色粘土ブロック層状に混
じる（2.5G5/1）【G区下の黒層】
Ⅳd21　2.5GY4/1　暗オリーブ灰色砂　粒子は粗い
Ⅳd22　5Y5/1～2.5GY4/1　灰色～暗オリーブ灰色砂質土　色調は一様では
ないが、径４～５cm大の礫多く混じる　上部の方が砂質気味で、下
部に粘性の強い部分がある
Ⅳd23　2.5GY4/1　暗オリーブ灰色砂・シルト
Ⅳd21層より粒子が細かく均質
Ⅳd26　5GY5/1　オリーブ灰色粘質土　径２～５cm大の礫混じる　基本部分
は均質
Ⅳd27　5Y4/1　灰色粘土　均質
Ⅳd28　5GY5/1　オリーブ灰色粘質土　Ⅳd26層と類似するがより粘性強い
Ⅳd29　暗オリーブ灰色砂　Ⅳd21層と類似
Ⅳd30　5GY4/1　暗オリーブ灰色シルト　粒子細かく極めて均質
Ⅳd31　5Y4/1灰色粘質・砂質土
Ⅳd32　2.5Y4/1　黄灰色粘土・礫　きわめて粘性の強い粘土が礫の隙間に
入る　礫は１～３cm大の小さなものが多いが径10cm大のものも若干
混じる
Ⅳd33　オリーブ灰色粘質土（2.5GY・5GY4/1）・灰色砂（7.5Y4/1）・黒褐
色粘質土（10YR3/1）混土
Ⅳd34　10YR3/1　黒褐色粘質土　腐植質系　粘性強い
Ⅳd35　2.5Y4/1　黄灰色粘土・礫　礫の粒径は径10cm大のものが多くを占める
Ⅳd36　オリーブ灰色（2.5GY5/1）・灰色粘質土（5Y4/1）混土　径３～５cm
大の礫多く、主体をなす
Ⅳd37　7.5Y4/1　灰色砂・砂質土　径３～10cm大の礫混じる　粒子は粗い
＝東壁Ⅳd33層
Ⅳd38　5Y3/1～3/2　オリーブ黒色粘質～砂質土　北側では径５～10cm大の
礫多く混じる

Ⅴ層　近世以前の土層
Ⅴ1　10YR4/1～2.5Y4/1　褐灰～黄灰色粘土　均質【古代包含層】

第133図　南岸調査区　2008地点　土層断面図　SP9-11（S=1/40）

①SP11-13 土層断面図



Ⅲa層　近世前期（寛永大火後～宝暦大火）遺構埋土
Ⅲa2　木片層　東壁Ⅲa10層に対応する【SX01】
Ⅲa3　10YR4/1～2.5Y4/1　褐灰～黄灰色粘土　粘性強い　木質の粘土化したもの　東壁では顕著ではない【SX01】

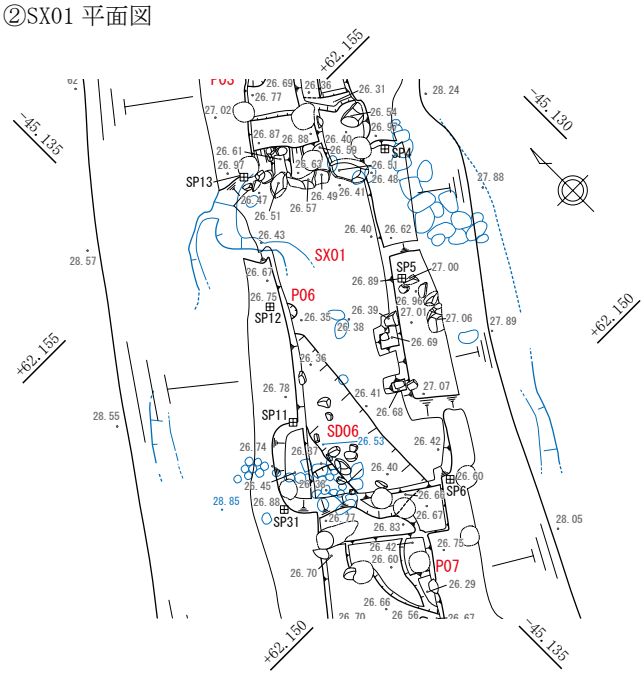
Ⅲb層　近世前期（寛永大火後～宝暦大火）遺構埋土・造成土
Ⅲb7　灰～暗青灰色粘質・砂質土　東壁Ⅲb18層に対応する
Ⅲb8　Ⅲb7層中で炭小片顕著に含む部分
Ⅲb14　灰オリーブ色粘質土　D区以北Ⅲb層下部に対応
Ⅲb15　黒褐色（10YR3/2～3/3）～暗褐色（2.5Y3/2）粘質・砂質土　Ⅲb7層に比べ粘質土部分多い【SD06主体埋土】
Ⅲb16　7.5Y4/1　灰色砂質土　上部はⅢb7層と区別しがたい【P06下部埋土】

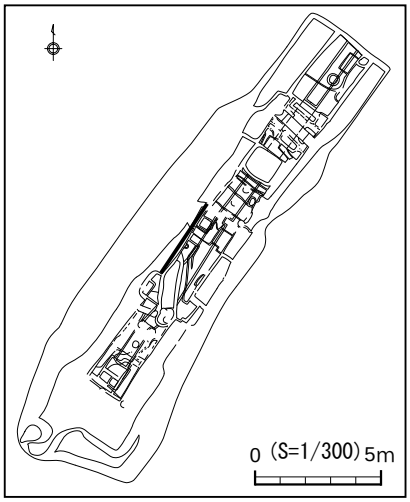
Ⅳb層　近世初期（～寛永大火）造成土
Ⅳb1　N4/1　灰色砂　比較的均質
Ⅳb2　N4/　暗灰～灰色砂　オリーブ黒色（暗灰色）粘質土ブロック（2.5Y3/1）礫多く混じる

Ⅳc層　近世初期（～寛永大火）造成土
Ⅳc1　5Y4/1　灰色粘質～砂質土　炭片少量混じる　明青灰色粒（5BG7/1）少量混じる【石組SX02構築の掘方埋土】
Ⅳc2　暗緑灰～青灰色砂　全体5G4/1　青灰色系（5BG6/1～5/1）砂粒も目立つ　青ないし緑がかった砂層　均質
Ⅳc4　5Y4/1～2.5Y3/1　灰色砂～オリーブ黒色粘質・砂質土・小礫混土　小礫が主体をなす【3c・3d面間の礫混じり土層】

Ⅳd層　近世初期（～寛永大火）造成土
Ⅳd24 10Y5/1～4/1　灰色砂～シルト　粒子細かい　3b・3c面構成層の砂層よりやや灰色味強い

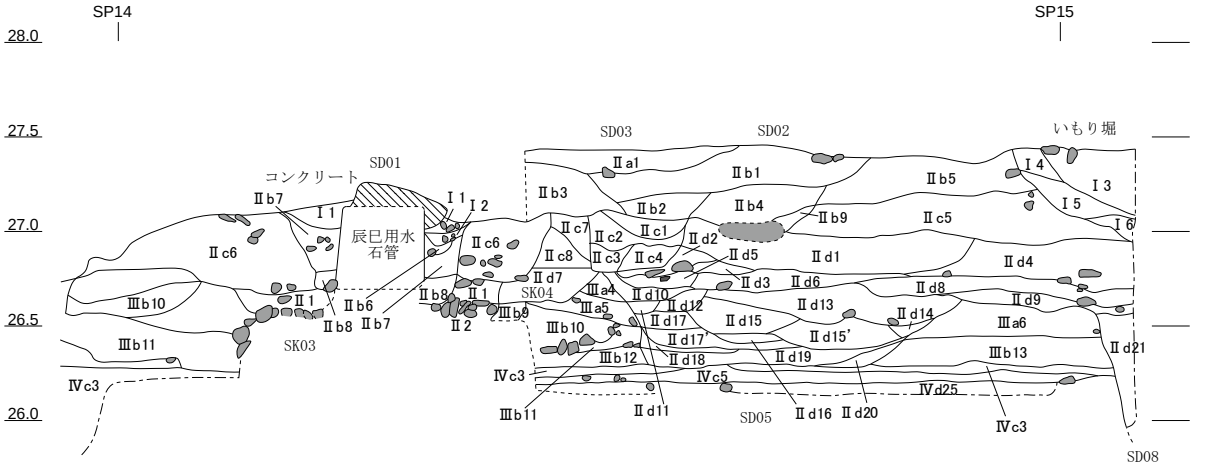
②SX01 平面図

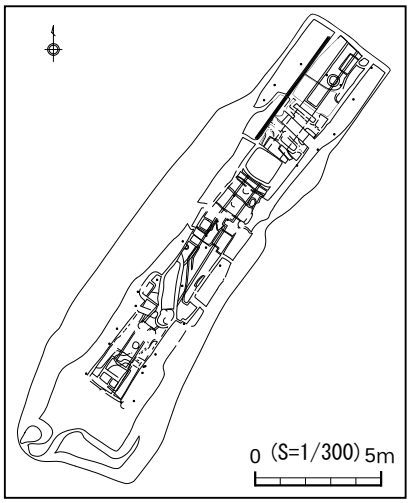




黒：平成 20 年度調査
青：平成 15 年度埋文センター調査

第 134 図　南岸調査区　2008 地点　土層断面図　SP11-13（S=1/40）、SX01 平面図（S=1/100）





Ⅰ層　近現代層

Ⅰ1　10YR3/2　黒褐色土　コンクリート片などを含む　石管上にあるコンクリートに伴うものか

Ⅰ2　2.5Y4/2　暗灰黄色粘質～砂質土（砂強）　（10YR4/6）褐色砂を主体的に含む　しまり極強　粘性なし　コンクリート埋設に伴うものか。南や東壁でこのような土が見られないのでコンクリート埋設の影響とも考えられる

Ⅰ3　2.5Y3/2　黒褐色粘質～砂質土　径３～５cm大の礫少量含む　しまり強　粘性ややあり　【明治40年いもり堀埋立土】＝東壁Ⅰ3層

Ⅰ4　10YR4/2　灰黄褐色粘質～砂質土　やや粘性強い　鉄分を斑紋状に含む　炭化物粗粒・白色粒子・黄白色粒子少量含む　しまり強　粘性あり【明治40年いもり堀埋立土】＝東壁Ⅰ4層

Ⅰ5　10YR3/1　黒褐色粘質土　腐植物少量含む　径0.2cm程の砂利を斑紋状に含む　しまりやや強　粘性やや強　【明治40年いもり堀埋立土】＝東壁Ⅰ6層

Ⅰ6　10YR3/2　黒褐色粘質～砂質土　木片（腐植物）を少量含む　径0.2cm程の砂利を中量含む（Ⅰ5層より多）　しまりやや強　粘性ありり　粘性強【明治40年いもり堀埋立土】＝東壁Ⅰ7層

Ⅱa層　近世後期（宝暦大火後）造成土

Ⅱa1　10YR4/4　褐色土　径１cm大の礫・焼土粒子・炭化物粒子少量含む　黄白色粘土を部分的に含む　しまり強　粘性なし＝東壁Ⅱa1層

Ⅱb層　近世後期（宝暦大火後）造成土・遺構埋土

Ⅱb1　10YR3/3　暗褐色粘質～砂質土（砂質強）　径0.3～１cm大の礫中量含む　炭化物粗粒・焼土粗粒中量含む　径0.5cm大の礫多量含む　しまり強　粘性なし　＝東壁Ⅱb1層

Ⅱb2　10YR4/4　褐色粘質～砂質土（砂質強）　Ⅱb1層より礫が少なくしまりが弱い　径0.5cm大の礫中量　焼土粒子・炭化物粒子中量含む　しまり強い　粘性なし

Ⅱb3　10YR3/2　黒褐色粘質～砂質土（砂質強）　径0.3cm大の礫中量含む　炭化物・焼土粒子中量含み鉄分を斑紋状に含む　しまり極強　粘性なし

Ⅱb4　10YR3/3　暗褐色粘質～砂質土（砂質強）　7.5YR4/6の褐色ブロック（径１cm大）少量　径0.1cm大の礫少量　径0.5cm大の礫中量　炭化物粒子・焼土粒子中量含む　上層のⅡb1層より径0.5cm大の礫少なく、橙色ブロック・焼土粒子が多い　しまりもある　しまり極強　粘性なし

Ⅱb5　10YR4/3　にぶい黄褐色粘質～砂質土（砂質強）　鉄分を斑紋状に含む　径３～５cm大の礫中量含む　径0.5cm大の礫中量　焼土粒子・炭化物粒子少量含む　Ⅱb1層より径0.5cm大の礫が少なく、しまっている　しまり極強　粘性なし

Ⅱb6　10YR3/1　黒褐色砂質～粘質土　やや砂質強　白色粒子少量　炭化物粒子・焼土粒子微量含む　しまり強　粘性あり　東壁Ⅱb2層に類似するが、より粘性強い【SD01掘方埋土】

Ⅱb7　東壁Ⅱb3層に類似【SD01掘方埋土】

Ⅱb8　東壁Ⅱb6層に類似　東壁よりやや灰色をおびる【SD01掘方埋土】

Ⅱb9　10YR3/3　暗褐色土　径0.5～１cm大の橙色土ブロック（7.5YR6/6）を少量含む（焼土か？）　径0.5cm大の小礫・炭化物粒子・焼土粒子中量含む　しまりやや弱　粘性なし【SD02埋土】＝東壁Ⅱb7層

Ⅱc層　近世後期（宝暦大火後）造成土・遺構埋土

Ⅱc1　10YR3/2　黒褐色粘質土　径0.5～１cm大の炭化物ブロック・炭化物粒子少量含む　しまりやや強　粘性あり【SD03辰巳用水木樋掘方埋土】＝東壁Ⅱc1層

Ⅱc2　10YR3/1　黒褐色粘質～砂質土　径0.5cm大の礫中量含む　径２cm大の礫少量含む　焼土粗粒少量含む　炭化物粒子微量含む　しまりやや強　粘性なし　【SD03辰巳用水木樋掘方埋土】＝東壁Ⅱc2層

Ⅱc3　10YR3/4　暗褐色粘質～砂質土　暗灰黄色砂（2.5Y4/2）を斑紋状に含む　粘性あり　主体となる土は東壁と同じだが東壁より混じりが少なく粘質が増す。また、しまりが弱い【SD03辰巳用水木樋掘方埋土】＝東壁Ⅱc4層

Ⅱc4　10YR3/2　黒褐色粘質土　褐色砂（10YR4/6）を少量含む　しまりやや強　粘性強【SD03辰巳用水木樋掘方埋土】＝東壁Ⅱc3層

Ⅱc5　10YR3/1　黒褐色粘質～砂質土（砂質強）　径0.5cm程の礫少量含む　しまりやや強　粘性あり＝東壁Ⅱc6層

Ⅱc6　10YR4/2　灰黄褐色粘質～砂質土（砂質強）　径２cm大の礫少量含む　径0.5cm大の礫中量含む　焼土粒子少量含む　炭化物粒子微量含む　しまり強　粘性ややあり　＝東壁Ⅱc9層

Ⅱc7　10YR4/2　灰黄褐色粘質～砂質土（砂質強）　Ⅱc6層に類似　焼土粒子・炭化物粒子中量含む　径0.5cm礫少量含む　しまり強　粘性なし

Ⅱc8　2.5Y5/2　暗灰黄色粘質～砂質土（砂質強）　鉄分を斑紋状に含む　径0.3～1cm大の礫中量含む　しまり強　粘性なし

Ⅱ層　近世後期（宝暦大火後）遺構埋土

Ⅱ1　2.5Y3/1　黒褐色粘質～砂質土　Ⅱb6層よりやや粘性が増す　径10cm程の礫を含む　礫の周りには暗灰色の粘土が多い　しまり強　粘性あり　東壁よりやや褐色が強い　石の周りは粘質が強い【SK03埋土】＝東壁Ⅱ1層

Ⅱ2　2.5Y2/1　黒色粘質～砂質土（粘質が強）　白色粒子少量含む　しまり弱　粘性極強【SK03埋土】＝東壁Ⅱ2層

Ⅱd層　近世後期（宝暦大火後）造成土・遺構埋土

Ⅱd1　10YR4/2　灰黄褐色粘質土　径0.5cm大の礫少量含む　黄褐色（2.5Y5/3）粘土ブロック（径１cm大）多量含む　焼土粒子中量含む　炭化物粒子少量含む　しまり極強　粘性あり＝東壁Ⅱd2層

第135図　南岸調査区　2008地点　土層断面図　SP14-15（S=1/40）

Ⅱd層　近世後期（宝暦大火後）造成土・遺構埋土
Ⅱd2　10YR4/3　にぶい黄褐色粘質～砂質土（粘性強）　黄褐色砂（10YR5/6）を微量含む　しまりあり　粘性あり
Ⅱd3　10YR3/4　暗褐色粘質～砂質土（砂質強）　焼土粗粒少量・焼土粒子中量・炭化物粒子少量・径１cm小礫少量含む　しまり強　粘性なし＝東壁Ⅱd3層
Ⅱd4　2.5Y3/1　黒褐色粘質～砂質土（砂質強）　径0.5cm礫中量・径３cm礫少量・オリーブ褐色土（2.5Y4/3）を斑紋状に含む　炭化物粒子・焼土粒子少量含む　しまりあり　粘性やや強い＝東壁Ⅱd4層
Ⅱd5　10YR3/2　黒褐色粘質～砂質土（粘性強）　暗灰黄（2.5Y4/2）の砂質土、暗オリーブ褐（2.5Y3/3）の粘質土を斑紋状に含む　炭化物粒子・焼土粒子少量含む　しまりやや強　粘性あり
Ⅱd6　10YR3/3　暗褐色粘質土　径0.5cm小礫少量含む　しまりやや強　粘性強＝東壁Ⅱd5層
Ⅱd7　2.5Y5/2　暗灰黄色粘質～砂質土（砂質強）　2.5Y5/1　黄灰（青灰か？）色の砂と鉄分を斑紋状に含む　しまり強　粘性あり【SK04埋土】
Ⅱd8　10YR4/2　灰黄褐色粘質～砂質土（砂質強）　Ⅱd13層と同じだが礫が少なく粘性が増す　東壁より粘性弱くしまりあり＝東壁Ⅱd6層
Ⅱd9　2.5Y3/2　黒褐色粘質～砂質土（砂質強）　焼土粒子・炭化物粒子中量　径0.2cm礫少量含む　しまりやや強　粘性あり
Ⅱd10　10YR3/2　黒褐色粘質土　焼土粒子・炭化物粒子少量含む　しまりやや強　粘性強【SD05埋土】＝東壁Ⅱd7層
Ⅱd11　2.5Y4/2　暗灰黄色砂質土　（2.5Y5/4）の黄褐色砂を斑紋状に含む　焼土粒子微量含む　しまりやや強　粘性なし　東壁よりやや粗く色調も黒褐に近い【SD05埋土】＝東壁Ⅱd11層
Ⅱd12　10YR4/2　灰黄褐色砂質土　径２cm礫・径0.5cm礫多量含む　多様な色調の砂粒と斑紋状に含む　しまり強　粘性なし【SD05埋土】＝東壁Ⅱd8層
Ⅱd13　10YR4/2　灰黄褐色粘質～砂質土（砂質強）　径２～５cm礫多量に含む　褐灰色粘土（10YR4/1）やにぶい黄褐色砂質土（10YR5/4）を部分的に含む　しまりやや弱　粘性なし【SD05埋土】＝東壁Ⅱd9層
Ⅱd14　2.5Y3/1　黒褐色粘質～砂質土（粘質強）　（2.5Y4/2）暗灰黄の砂質土を斑紋状に含む　しまりあり　粘性やや強【SD05埋土】
Ⅱd15　東壁Ⅱd10層と対応　砂礫土　径２～３cm礫多量　しまり強　粘性なし【SD05埋土】
Ⅱd15’Ⅱd15層より礫少ない　砂礫土　径２～３cm礫少量　しまり強い　粘性なし【SD05埋土】
Ⅱd16　2.5Y3/3　暗オリーブ褐色砂質土　やや粗い　細い砂粒から径0.1cm程の粗い砂粒なども含む　鉄分によるものか？　やや赤味をおびる　しまりあり　粘性なし【SD05埋土】
Ⅱd17　2.5Y4/2　暗灰黄色砂質土　径２cm礫中量多様な色調の砂を主体とする　径0.5cm小礫多量　しまりやや強　粘性なし【SD05埋土】＝東壁Ⅱd11層
Ⅱd17’2.5Y4/2　暗灰黄色砂質土　Ⅱd17層より径２cm礫が少なく砂質土主体　しまりあり　粘性なし【SD05埋土】
Ⅱd18　2.5Y3/2　黒褐色砂質土　上層と色調などは類似するがきめ細かい　しまりあり　粘性なし【SD05埋土】
Ⅱd19　2.5Y4/2　暗灰黄色砂質土　シルトが強い　鉄分を斑紋状に含む　褐色（10YR4/4）砂を斑紋状に含む　砂が密に堆積　しまりやや強　粘性なし【SD05埋土】＝東壁Ⅱd16層
Ⅱd20　10YR3/3　暗褐色砂質土　径0.５cm礫多量に含む　鉄分を斑紋状に含む　しまり強　粘性なし【SD05埋土】＝東壁Ⅱd17層
Ⅱd21　2.5Y3/2　黒褐色粘質土　2.5Y4/2の暗灰黄粘質土を斑紋状に含む　木片などの腐植物を含む　しまりやや強　粘性あるが東壁より弱い【SD08埋土】＝東壁2d18層

Ⅲa層　近世前期（寛永大火後～宝暦大火）造成土(2a面を構成)
Ⅲa4　2.5Y4/2　暗灰黄色粘質～砂質土　径0.2～0.5cm礫中量含む　炭化物・焼土粒子微量含む　しまりやや強　粘性あり　東壁Ⅲa16層から砂質土をなくした感じ
Ⅲa5　2.5Y4/2　暗灰黄色粘質～砂質土　やや砂質が強い　上層に比べて灰白色粒子が斑紋状に広がりしまりが強い　炭化物粒微量含む　しまり強　粘性なし＝東壁Ⅲa17層
Ⅲa6　2.5Y4/3　オリーブ褐色土～2.5Y3/2　黒褐色粘質土　斑紋状に堆積　木片などを含む　しまりあり　粘性やや強＝東壁Ⅲa19層

Ⅲb層　近世前期（寛永大火後～宝暦大火）造成土(2b面を構成)
Ⅲb9　10YR3/2　黒褐色粘質～砂質土（砂質強）　炭化物粒子・焼土粒子中量含む　しまりやや強い　粘性ややあり
Ⅲb10　10YR3/2　黒褐色粘質～砂質土　径0.5cm礫多量含む　焼土粒子中量含む　炭化物粒子少量含む　しまりあり　粘性強＝東壁Ⅲb4層
Ⅲb11　2.5Y3/2　黒褐色粘質土～2.5Y4/2　暗灰黄色粘質土　黒褐色粘土と暗灰黄色粘土がマーブル状にまざりあう　焼土粒子微量含む　しまりあり　粘性極強＝東壁Ⅲb13層
Ⅲb12　2.5Y4/2　暗灰黄色粘質土　径0.2cm礫少量含む　しまりあり　粘性極強＝東壁Ⅲb22層
Ⅲb13　2.5Y4/2　暗灰黄色粘質土　炭化物粒子微量に含む　しまりやや強　粘性強

Ⅳc層　近世初期（～寛永大火）造成土(3c面を構成)
Ⅳc3　2.5Y4/2　暗灰黄色砂質土　きわめて細かく密に堆積　しまり強　粘性なし＝東壁Ⅳc1層
Ⅳc5　2.5Y4/3　オリーブ褐色砂礫土　粗い砂質土主体　径２cm礫少量含む　全体的に鉄分を多く含み赤く変色している　しまり強　粘性なし＝東壁Ⅳc2層

Ⅳd層　近世初期（～寛永大火）造成土(3d面を構成)
Ⅳd25　2.5Y4/2　暗灰黄色砂質土　鉄分を斑紋状に含む　非常に硬くしまっている　Ⅳc3層に比べると砂がやや粗い部分と密な部分とに分かれる　しまり極強　粘性なし＝東壁Ⅳd11層

第 136 図　南岸調査区　2008 地点　土層注記　SP14-15

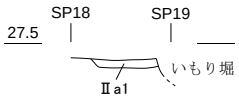
42.4 m)」という記載と概ね一致する。

・2006-1・2008 地点において、近世後期～末にかけての絵図に描かれた辰巳用水に対応するとみられる溝状遺構を確認した。2006-1 地点検出のものからは、導水管および敷石等の支持部材は検出できていないが、絵図との対比により、導水管は石管であったと考えられる。なお、2008 地点では、導水管を石管および木樋とする辰巳用水に対応する２条の溝状遺構（石管：SD01、木樋：SD03）を検出した。

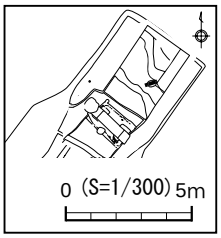
・2008 地点Ａ～Ｄ区では、北西－南東方向の溝状遺構が数条検出された（SD01・02・03・05・07)。これらが辰巳用水（石管）掘方の SD01 とほぼ平行していることから、辰巳用水に関連するものも含まれている可能性があるが、SD03 以外から導水管およびその支持部材など辰巳用水に関連するものは確認されなかった。

・戦国時代末期～近世初期、堂形には屋敷地や堀等の遺構が展開していたが、元和年間（1615～1624）～寛永大火（1631）以前の堂形造成および寛永８年（1631）の大火を契機とした改変により、これらの遺構が廃棄され、新たに米蔵や馬場等の施設が配置された事が判明している。また、2008 地点南部のＥ～Ｈ区では、近世初期～前期の遺構（石列・石垣・溝等）が検出された。詳細は不明であるが、堂形成立前後の屋敷区画の一部である可能性も考えられる。

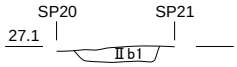
①A 区 1b 面　P01 土層断面



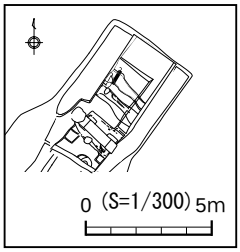
Ⅱa層　近世後期（宝暦大火後）遺構埋土
Ⅱa1　10YR4/3　にぶい黄褐色粘質～砂質土　径0.3cm大の小礫中量含む
焼土粒子・炭化物粒子微量含む　黄色土を所々に含む　しまりやや強
粘性なし【P01埋土】



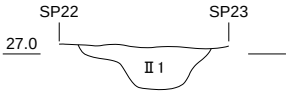
②A 区 1c 面　SD02 土層断面



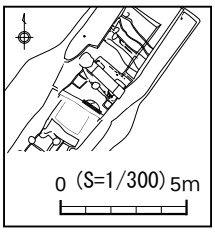
Ⅱb層　近世後期（宝暦大火後）遺構埋土
Ⅱb1　10YR4/3　10YR3/4　暗褐色砂質～粘質土　焼土粒子多量
焼土ブロック中量　炭化物粒子少量　焼けた鉛石含む
しまりやや強　粘性なし【SD02埋土】



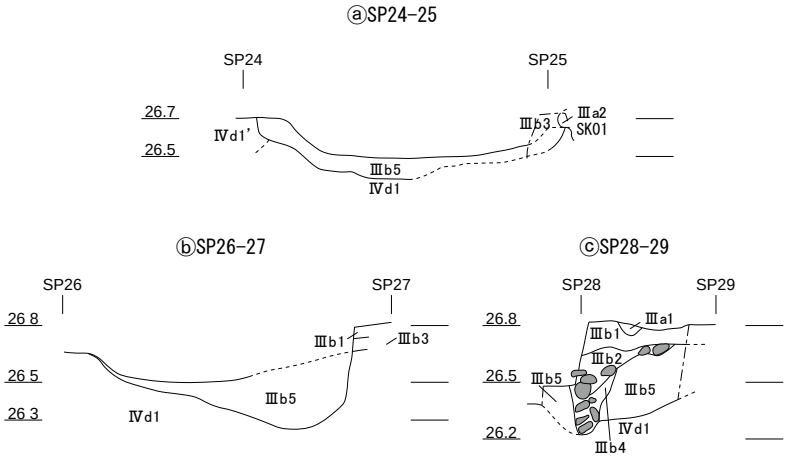
③B 区 1c 面形成以後　P02 土層断面

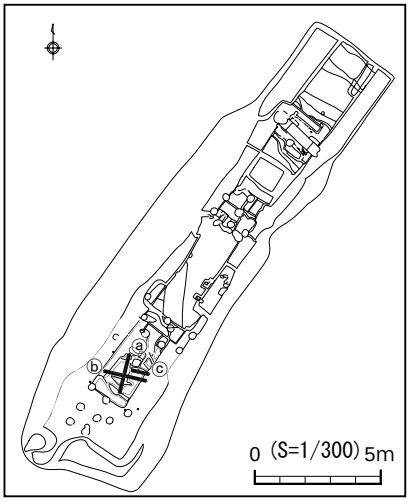


Ⅱ層　近世後期（宝暦大火後）遺構埋土：Ⅱc層堆積後
Ⅱ1　灰黄褐色（10YR4/2）～黄灰色砂質土（2.5Y4/1）　径２～５cm大の礫多
径５～10cm大礫少し混じる　黄褐色粘土小塊（2.5Y7/4～7/6）混じる
【P02埋土】



④H 区 3a 面　SK02 土層断面





Ⅲa層　近世前期（寛永大火後～宝暦大火）遺構埋土
Ⅲa1　黄褐色シルト質土（2.5Y5/3～6/4）【SD04埋土】
Ⅲa2　黄灰色砂質土（2.5Y6/4～5/1）【SK01埋土】

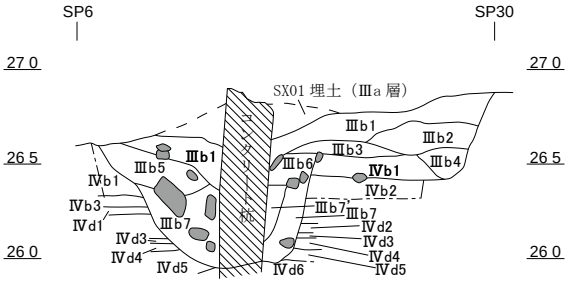
Ⅲb層　近世前期（寛永大火後～宝暦大火）遺構埋土・造成土
Ⅲb1　灰黄褐色粘～砂質土（10YR4/2）　小礫・焼土（瓦片？）多く混じる
Ⅲb2　黒褐色粘質土（10YR4/2～2/2）　径３～10cm大の礫極めて多く混じる
【SK02上面ピット埋土】
Ⅲb3　黒色粘質土・灰色粘～砂質土混土（10YR2/1・7.5Y5/1）
モザイク状に混じる【SK02上面ピット埋土】
Ⅲb4　黒色粘～シルト質土（10YR2/1）　径３～５cm大の礫多く混じる
【SK02上面ピット埋土】
Ⅲb5　黒色粘～シルト質土（10YR2/1）　径１～３cm大の礫少量混じる【SK02埋土】

Ⅳd層　近世初期（～寛永大火）造成土
Ⅳd1　黄灰色粘土　砂質土が礫の間に入る　東壁ⅣdⅠ層に類似した感じ
Ⅳd1'　礫が多い

0 (S=1/40) 1m

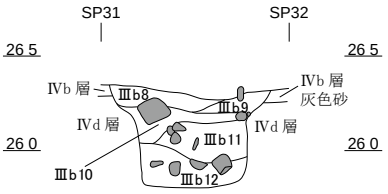
第 137 図　南岸調査区　2008 地点　土層断面図　P01・SD02・P02・SK02（S=1/40）

①G 区 3b 面　SD06 土層断面　SP6-30



SD06 は壁面に斜交する

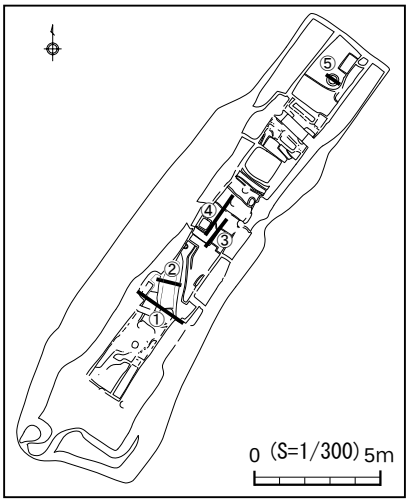
②G 区 3b 面　SD06 土層断面　SP31-32



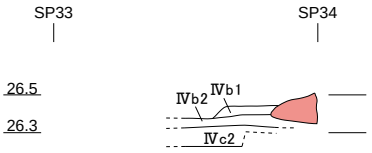
Ⅲb層　近世前期（寛永大火後～宝暦大火）造成土
Ⅲb1　2.5Y4/2～3/2　暗灰黄～黒褐色粘質～砂質土　焼土片（瓦・壁など）・炭片多く混じる【SX01基盤】
Ⅲb2　濁黄褐（10YR4/3）～暗灰黄色砂質土（2.5Y4/2）　径３cm大の礫多く混じる　全体に砂利質
Ⅲb3　10YR4/2～4/3　暗灰黄褐色粘質土　灰黄色粘土小塊混じる
Ⅲb4　5Y4/1　暗灰色粘質～砂質土　炭片混じる　F区ではSD06を覆うと推定される
Ⅲb5　5Y4/1～3/1　暗灰色砂質土　焼土片（瓦・壁など）・炭片混じる【SD06埋土】
Ⅲb6　2.5Y3/2　暗褐～黒褐色砂質土　Ⅲb7層に類似するが砂質味強い【SD06埋土】
Ⅲb7　2.5Y3/2　暗褐～黒褐色粘質～砂質土　焼土片（瓦・壁など）・炭片・径３～10cm大の礫混じる【SD06埋土】
Ⅲb7'　Ⅲb7層+灰オリーブ色粘土塊（5Y5/2）混じる【SD06埋土】
Ⅲb8　5Y4/1　褐灰色粘質～砂質土【SD06埋土】
Ⅲb9　7.5Y4/1　灰色砂質土　【SD06埋土】
Ⅲb10　10YR3/2～3/3　黒褐～暗褐色粘質（腐植質）土　灰色砂質土多く混じる（7.5Y4/1主体）【SD06埋土】
Ⅲb11　7.5Y4/1　灰色砂質土・砂礫（砂利）土　径１～３cm大の礫・小礫混じる　砂利が主体
　　Ⅲb10層の主体ブロック状に混じる【SD06埋土】
Ⅲb12　10YR3/2～3/3　Ⅲb10層と同質　径５～10cm大の礫目立つ【SD06埋土】

Ⅳb層　近世初期（～寛永大火）造成土
Ⅳb1　黒褐色（2.5Y3/1）・暗褐色（10YR3/3）・黒色（2.5Y2/1）粘質土　混土【SD06基盤】
Ⅳb2　7.5Y4/1　暗青灰色粘質・砂質土　黄褐色砂質土（2.5Y5/4）ブロック混じる【SD06基盤】
Ⅳb3　N4/　灰色砂　やや青味がかった砂でオリーブ黒（暗灰）色粘質土ブロック（2.5Y3/1）など混じる

Ⅳd層　近世初期（～寛永大火）造成土
Ⅳd1　小礫・灰色砂（5Y4/1）　北側では3d面の基盤をなすが、3d面上部の硬化した面がここでは見られない
Ⅳd2　5GY4/1　暗オリーブ灰色砂
Ⅳd3　10YR3/1　黒褐色粘質土　腐植質
Ⅳd4　10GY4/1　暗緑灰色砂
Ⅳd5　7.5Y4/1　灰色砂質土　径３cm大の礫多く混じる
Ⅳd6　N4/　灰色粗砂　もろい粗砂



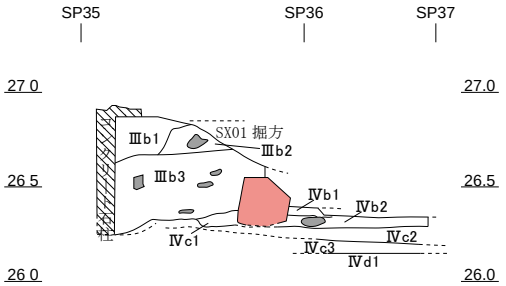
③D･E 区 3c 面　SX02 土層断面　SP33-34



Ⅲb層　近世前期（寛永大火後～宝暦大火）造成土
Ⅲb1　10YR3/4　暗褐色土　しまりやや強い　粘性なし
　　焼土・炭化物・砂利多く混じる
Ⅲb2　10YR4/4　褐色土　しまり強い　粘性ややあり
　　焼土・炭化物・砂利少量混じる　灰色粘土多く混じる
Ⅲb3　10YR4/3　にぶい黄褐色土　しまりやや弱い　粘性ややあり
　　粘質土が緻密に堆積　礫少量混じる

Ⅳb層　近世初期（～寛永大火）造成土
Ⅳb1　N4/　灰色砂　比較的均質
Ⅳb2　N4/　暗灰～灰色砂
　　オリーブ黒（暗灰）色粘質土ブロック（2.5Y3/1）等多く混じる

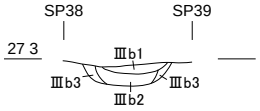
④D･E 区 3c 面　SX02 土層断面　SP35-37



Ⅳc層　近世初期（～寛永大火）造成土
Ⅳc1　5Y4/1　灰色粘質～砂質土　しまりやや弱い　小石～礫多く含む砂層
　　炭片少量混じる　明青灰色粒（5BG7/1）少量混じる　西壁Ⅳe1層に対応
　　【SX02掘方埋土】
Ⅳc2　暗緑灰～青灰色砂　青ないし緑がかった砂層　均質　全体としては暗緑灰
　　（5G4/1）に近いが青灰色系（5BG6/1～5/1）の砂粒も目立つ
Ⅳc3　小礫・灰色砂・オリーブ黒色　5Y4/1・2.5Y3/1　砂質土　混土

Ⅳd層　近世初期（～寛永大火）造成土
Ⅳd1　10Y5/1～4/1　灰色砂～シルト　粒子細かい　Ⅳb1・Ⅳc2層より灰色味強い

⑤A 区 3c 面　P05 土層断面



Ⅲb層　近世前期（寛永大火後～宝暦大火）遺構埋土
Ⅲb1　7.5YR4/1　褐灰色砂質土　灰黄色砂質土を斑紋状に含む　しまり強　粘性なし【P05埋土】
Ⅲb2　10YR4/1　褐灰色粘質土　しまりなし　粘性極強　平面の外側（外周）に見られる【P05埋土】
Ⅲb3　10YR2/2　黒褐色粘質土　平面では木片などが見られる　しまりなし　粘性極強【P05埋土】

0 (S=1/40) 1m

第 138 図　南岸調査区　2008 地点　土層断面図　SD06・SX02・P05（S=1/40）